

下伊田遺跡群

福岡県田川市下伊田所在集落跡の調査

田川市文化財調査報告書

第 4 集

1988

田川市教育委員会

下伊田遺跡群

1988

田川市教育委員会

卷頭図版



青銅製鋤先

本文目次

	頁
I. 調査の経過	1
II. 位置と環境	3
III. 調査の内容	5
1. 調査の概要	5
2. 遺構	5
(1) 貯蔵穴	5
(2) 住居跡	24
(3) 土壙	36
(4) 溝状遺構	37
(5) 掘立状遺構	39
3. 遺物	41
(1) 土器	41
(2) 石製品、土製品	83
(3) 装身具	105
(4) 出土須恵器	105
(5) 青銅製鋤先	106
IV. おわりに	108

図版目次

図版1	1. 遺跡遠景(西から) 2. 遺跡全景
図版2	1. 掘立状遺構全景(西より) 2. 掘立状遺構(北西より)
図版3	1. 28号貯蔵穴 2. 41号貯蔵穴 3. 44号貯蔵穴 4. 50号貯蔵穴
図版4	1. 3号貯蔵穴 2. 5号貯蔵穴 3. 21号貯蔵穴 4. 23号貯蔵穴

- 図版 5 1. 8号貯蔵穴 2. 30号貯蔵穴 3. 40号貯蔵穴 4. 47号貯蔵穴
- 図版 6 1. 26号貯蔵穴 2. 39号貯蔵穴 3. 青銅製鋤先出土状態 4. 青銅製鋤先と器台
- 図版 7 1. 1号住居跡 2. 2号住居跡 3. 3号住居跡 4. 4号住居跡
- 図版 8 1. 5号住居跡 2. 6号住居跡 3. 7号住居跡 4. 8号住居跡
- 図版 9 1. 10号住居跡 2. 11号住居跡 3. 12号住居跡 4. 13、14号住居跡
- 図版10 貯蔵穴出土土器 1 (2~22)
- 図版11 貯蔵穴出土土器 2 (26~39)
- 図版12 貯蔵穴出土土器 3 (46~72)
- 図版13 貯蔵穴出土土器 4 (73~96)
- 図版14 貯蔵穴出土土器 5 (97~127)
- 図版15 貯蔵穴出土土器 6 (135~154)
- 図版16 貯蔵穴出土土器 7 (161~170)
- 図版17 貯蔵穴、溝状遺構、土壤出土土器 (171~182)
- 図版18 土壤、住居跡出土土器 (183~216) 鋤先共伴土器 須恵器
- 図版19 1. 石鎌、石匙 2. 石戈、石剣、石槍 3. 紡錘車、石鎌 4. 石庖丁
- 図版20 1. 石庖丁 2. 石庖丁 3. 石庖丁 4. 挿入、柱状、扁平片刃石斧
- 図版21 1. 磨製石斧 2. 磨製石斧 3. 打製石斧 4. 打製石斧、スクレイパー
- 図版22 1. 敲打器(磨石)、石錘 2. 砥石 3. 装身具 4. 青銅製鋤先

挿 図 目 次

頁

第1図	周辺遺跡分布図 (1/25,000)	2
第2図	周辺地形図 (1/5,000)	4
第3図	遺構配置図 (1/300)	折り込み
第4図	貯蔵穴実測図 1 (1/60)	8
第5図	貯蔵穴実測図 2 (1/60)	10
第6図	貯蔵穴実測図 3 (1/60)	12
第7図	貯蔵穴実測図 4 (1/60)	14
第8図	貯蔵穴実測図 5 (1/60)	16

第9図	貯蔵穴実測図6 (1/60)	18
第10図	貯蔵穴実測図7 (1/60)	20
第11図	貯蔵穴実測図8 (1/60)	21
第12図	貯蔵穴実測図9 (1/60)	22
第13図	貯蔵穴実測図10 (1/60)	23
第14図	1、2号住居跡実測図 (1/60)	26
第15図	3号住居跡実測図 (1/60)	28
第16図	4、5号住居跡実測図 (1/60)	30
第17図	6、7号住居跡実測図 (1/60)	31
第18図	8、9、11号住居跡実測図 (1/60)	32
第19図	10号住居跡実測図 (1/60)	33
第20図	12号住居跡実測図 (1/60)	34
第21図	13、14号住居跡実測図 (1/60)	35
第22図	土壤、溝状遺構実測図 (1/60)	38
第23図	掘立状遺構実測図 (1/200)	39
第24図	掘立状遺構土層図 (1/40)	40
第25図	貯蔵穴出土土器実測図1 (1/4)	42
第26図	貯蔵穴出土土器実測図2 (1/4)	44
第27図	貯蔵穴出土土器実測図3 (1/4)	46
第28図	貯蔵穴出土土器実測図4 (1/4)	48
第29図	貯蔵穴出土土器実測図5 (1/4)	50
第30図	貯蔵穴出土土器実測図6 (1/4)	52
第31図	貯蔵穴出土土器実測図7 (1/4)	54
第32図	貯蔵穴出土土器実測図8 (1/4)	56
第33図	貯蔵穴出土土器実測図9 (1/4)	58
第34図	貯蔵穴出土土器実測図10 (1/4)	60
第35図	貯蔵穴出土土器実測図11 (1/4)	62
第36図	貯蔵穴出土土器実測図12 (1/4)	64
第37図	貯蔵穴出土土器実測図13 (1/4)	66
第38図	貯蔵穴出土土器実測図14 (1/4)	67
第39図	貯蔵穴出土土器実測図15 (1/4)	68
第40図	貯蔵穴出土土器実測図16 (1/4)	69
第41図	貯蔵穴出土土器実測図17 (1/4)	70

第42図	貯蔵穴出土土器実測図18 (1/4)	71
第43図	貯蔵穴出土土器実測図19 (1/4)	72
第44図	貯蔵穴出土土器実測図20 (1/4)	73
第45図	貯蔵穴出土土器実測図21 (1/4)	74
第46図	溝状遺構 土壙出土土器実測図 (1/4)	76
第47図	土壙出土土器実測図 (1/4)	77
第48図	住居跡出土土器実測図 1 (1/4)	79
第49図	住居跡出土土器実測図 2 (1/4)	81
第50図	住居跡出土土器実測図 3 (1/4)	82
第51図	石製品実測図 1 (1/2)	84
第52図	石製品、土製品実測図 2 (1/3)	86
第53図	石製品実測図 3 (1/3)	90
第54図	石製品実測図 4 (1/3)	92
第55図	石製品実測図 5 (1/3)	96
第56図	石製品実測図 6 (1/3)	98
第57図	石製品実測図 7 (1/3)	100
第58図	石製品実測図 8 (1/3)	102
第59図	石製品実測図 9 (1/3)	104
第60図	装身具実測図 (1/1)	105
第61図	須恵器実測図 (1/3)	106
第62図	青銅製鋤先出土状態 (1/40)	107
第63図	青銅製鋤先及び共伴土器	107

表 目 次

第1表	貯蔵穴一覧表.....	6~7
第2表	住居跡一覧表.....	24
第3表	土壙一覧表.....	36~37

- 図版5 1. 8号貯蔵穴 2. 30号貯蔵穴 3. 40号貯蔵穴 4. 47号貯蔵穴
- 図版6 1. 26号貯蔵穴 2. 39号貯蔵穴 3. 青銅製鋤先出土状態 4. 青銅製鋤先と器台
- 図版7 1. 1号住居跡 2. 2号住居跡 3. 3号住居跡 4. 4号住居跡
- 図版8 1. 5号住居跡 2. 6号住居跡 3. 7号住居跡 4. 8号住居跡
- 図版9 1. 10号住居跡 2. 11号住居跡 3. 12号住居跡 4. 13、14号住居跡
- 図版10 貯蔵穴出土土器1 (2~22)
- 図版11 貯蔵穴出土土器2 (26~39)
- 図版12 貯蔵穴出土土器3 (46~72)
- 図版13 貯蔵穴出土土器4 (73~96)
- 図版14 貯蔵穴出土土器5 (97~127)
- 図版15 貯蔵穴出土土器6 (135~154)
- 図版16 貯蔵穴出土土器7 (161~170)
- 図版17 貯蔵穴、溝状遺構、土壤出土土器 (171~182)
- 図版18 土壤、住居跡出土土器 (183~216) 鋤先共伴土器 須恵器
- 図版19 1. 石鎌、石匙 2. 石戈、石劍、石槍 3. 紡錘車、石鎌 4. 石庖丁
- 図版20 1. 石庖丁 2. 石庖丁 3. 石庖丁 4. 扱入、柱状、扁平片刃石斧
- 図版21 1. 磨製石斧 2. 磨製石斧 3. 打製石斧 4. 打製石斧、スクレイパー
- 図版22 1. 敲打器(磨石)、石錘 2. 砥石 3. 装身具 4. 青銅製鋤先

挿 図 目 次

	頁
第1図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)	2
第2図 周辺地形図 (1/5,000)	4
第3図 遺構配置図 (1/300)	折り込み
第4図 貯蔵穴実測図1 (1/60)	8
第5図 貯蔵穴実測図2 (1/60)	10
第6図 貯蔵穴実測図3 (1/60)	12
第7図 貯蔵穴実測図4 (1/60)	14
第8図 貯蔵穴実測図5 (1/60)	16

序

この報告書は、下伊田の鉱害復旧事業区域に所在した、下伊田遺跡の発掘調査の記録です。

市民の文化財保護への理解と気運が高まっている時、この報告書が古代史研究の一資料として大いに活用され、文化向上に役立つとともに、次々と失われていく埋蔵文化財の保存、活用への契機となれば幸いです。

この遺跡より出土した遺物は、本市石炭資料館に保存し、市民に公開していきたいと考えております。

この調査にあたりご尽力いただきました福岡県教育庁筑豊教育事務所、石炭鉱害事業団九州支部ならびに関係者各位のご理解とご協力に対し、深く感謝の意を表します。

昭和63年3月31日

田川市教育委員会

教育長 角 銅 圓

例　　言

1. 本書は、福岡県田川市大字伊田56-1、57-1、58、59-1、160番地に所在する下伊田遺跡群の緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は当該地区の鉱害復旧事業に伴うもので、田川市教育委員会が事業主体となり、石炭鉱害事業団の委託を受けて実施したが、一部国庫補助を受けた。
3. 遺構の実測は新原正典、上野智裕、森本弘行、花村究があたり、遺構写真は新原が撮影した。
4. 出土遺物の整理は、岩瀬正信の指導のもとに九州歴史資料館で行った。また青銅製鋤先の処理は横田義章氏にお願いした。
5. 報告書の作成に際し、土器実測は主として原富子・近藤暢子があたり、その他は上野が行った。また、製図は豊福弥生・鶴田佳子が担当した。遺物写真は九州歴史資料館石丸洋氏指導のもと須原悦子が主に撮影した。
6. 本書の執筆は、Iを新原がそれ以外は上野が担当した。
7. 本書の編集は、新原指導のもとに上野が行った。

I. 調査の経過

近年来田川市域内において、石炭産業により困憊した土地の活性化をはかるために鉱害復旧事業が進められているが、今回発掘調査を行った下伊田遺跡もそうした事業に起因する。

昭和61年3月末、下伊田遺跡が壊されているとの連絡が福岡県教育庁筑豊教育事務所へあった。現地確認を行ったところ、丘陵西半を離壇に造成する工事がほぼ完了しており、あとは付帯工事としての擁壁を残すのみで、既に削られた崖面には貯蔵穴の断面が数個露出していたがとうてい調査できる状況ではなかった。

県および田川市教育委員会では直ちに事業者である石炭鉱害事業団と協議を行い、当該事業の説明を受けるとともに、文化財保護との調整を図った。その結果、残っている丘陵東半については工事を1年延期して昭和62年度に行い、工事の前に発掘調査を行うことで合意に達した。

発掘調査は田川市教育委員会が事業主体となり、調査費については石炭鉱害事業団の負担によるものであるが、一部国庫補助を受けた。現地での調査は昭和62年5月15日から10月27日にかけて行い、その後、県立九州歴史資料館にて出土遺物の整理と報告書の作成を行った。

調査関係者は下記のとおりである。

総括・庶務	田川市教育委員会	教育長	角 銅 圓
同		教育次長	森 脇 晃 治
同		文化体育課長	西 村 勝
同		同 係長	平 賢 一
同		同 //	矢 野 勝 美 (前任)
同		同 //	清 水 弘 子 (後任)
同		学 芸 員	森 本 弘 行
調査担当	同	臨時職員	上 野 智 裕
福岡県教育庁筑豊教育事務所		技術主査	新 原 正 典
調査補助員	田川市教育委員会	臨時職員	花 村 実

なお調査中には、「下伊田遺跡」を初めて学界に紹介された前九州産業大学教授森貞次郎先生をはじめ、小田富士雄北九州市立考古博物館長などの諸先生方には現地で有益な指導・助言を賜わった。また、福岡県文化財保護指導委員の水上薩摩氏や地元在住の植木忠氏は何度も現地へおいでいただき、助言を預いた。このほか、県文化課栗原和彦氏を始め、石炭鉱害事業団田川事業所農地第一課中田政之・田中次男両氏には調査に至るまでに大変な御尽力を頂き、土地所有者の中野樺蔵氏には調査期間中何かと御世話になった。また、上記の方以外にも下伊田水利組合や発掘作業に従事された田川高齢者事業団、地元の方々の御協力を得た。記して感謝の意を表します。



- 1. 上の原 A 遺跡
- 2. 上の原 B 遺跡
- 3. 下伊田 遺跡
- 4. 九州商業高校校庭遺跡
- 5. 夫 婦 塚
- 6. セストドノ古墳
- 7. 豊前天台寺跡
- 8. 鎮西公園内遺跡
- 9. 経塚横穴群

第1図 周辺遺跡分布図(1/25,000)

II. 位置と環境

福岡県の東寄りに位置する田川地方は、北を除く三方を山に囲まれた盆地帯である。東は、仲哀峠により京都郡と、西は金国山地を境に嘉穂郡と、南は英彦山を境に大分県と接している。盆地中央を北流する彦山川と中元寺川は、筑豊第一級河川である遠賀川に合流し、玄海灘へと注いでいる。

下伊田遺跡群は、この彦山川右岸を臨む、田川市櫛（金川小学校付近）から南東へ延びる標高40m程の低丘陵（通称下伊田丘陵）上に位置する。今回、調査を実施した遺跡は、田川市大字伊田56-1、57-1、58、59-1、160番地に所在する弥生時代の集落遺跡である。下伊田遺跡の発見は、昭和12年頃で、森貞次郎氏の研究により遠賀川系土器の一型式として「下伊田式」^{註1}が位置付けられ、広く知られるようになったのである。該当地は、『福岡県遺跡分布地図（田川市、田川郡編）1977』によると、「下伊田横手木遺跡」（一部「下伊田難題坊遺跡」を含む）として、登録されているが、現状では、開墾や土木工事等のため、場所の確認がしにくい状態である。また出土遺物も散逸している。

周辺の遺跡では、櫛の上ノ原遺跡から、縄文時代の遺物も発見されており、当丘陵では、縄文時代より生活が開始されたことを裏付けている。また弥生時代に入ると、石棺から細形銅劍も発見されており、周囲に石棺群の存在が確認されている。しかし、本格的な調査が行われたものではなく、未調査のまま破壊されたものがほとんどで、早急な実態把握調査が望まれる。この他にも弥生時代の遺跡は、付近の低丘陵上に点在しているが、範囲を確定することは難しい。

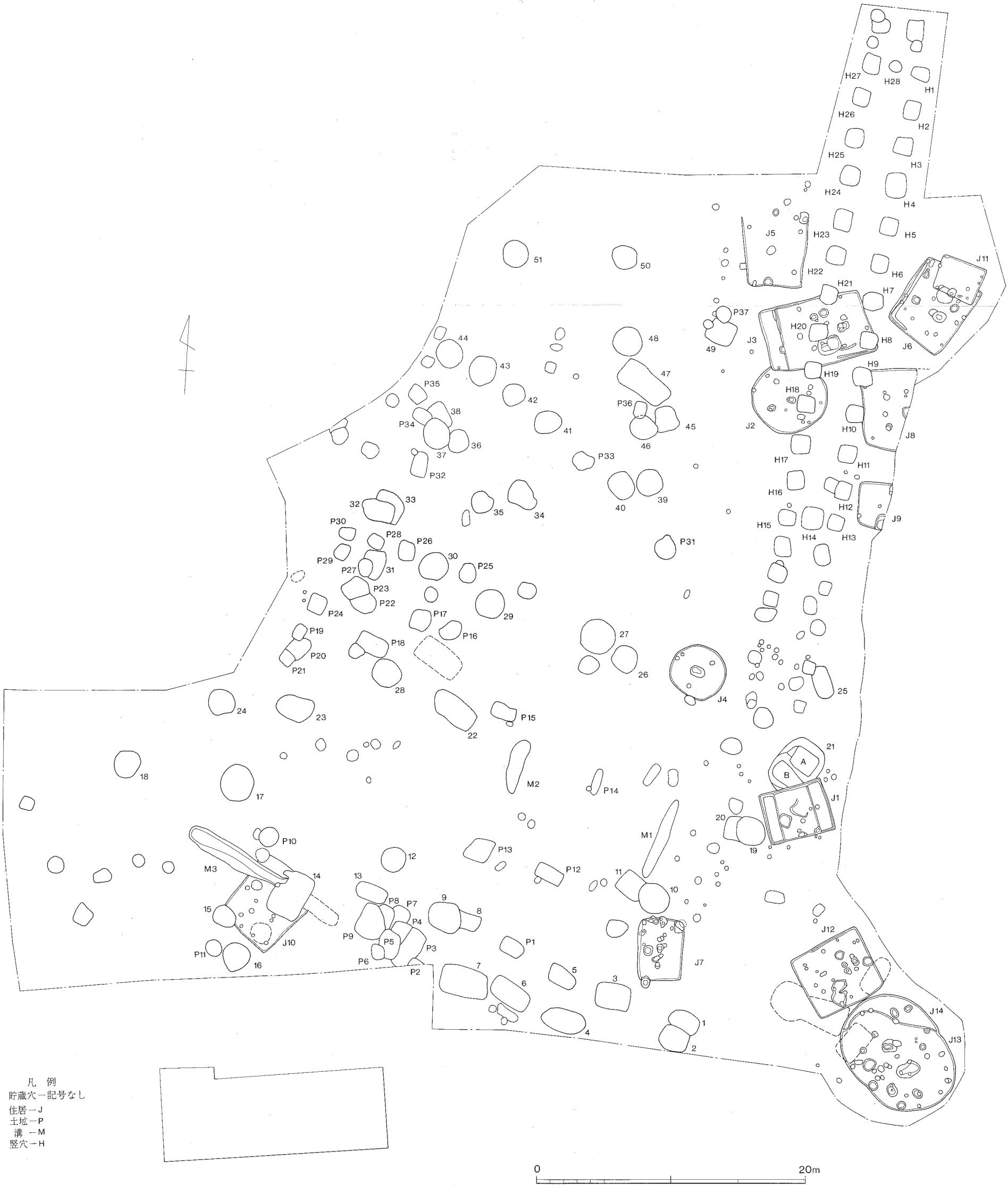
古墳時代に入ると、遺跡数は増加する。大形円墳として知られるセスドノ古墳は、下伊田遺跡より南東方向1.4kmの所に位置しており古式の横穴式石室を主体部としている。この他にも数多くの横穴や円墳が、彦山川沿いの丘陵上に散在している。

歴史時代の遺跡としては天台寺跡が下伊田遺跡より南東方向2.5kmの所にあり、均整のとれた新羅系軒瓦の出土で知られており、昭和60年度より継続調査中である。

以上、彦山川右岸に位置する遺跡を連記したが、河川沿いの丘陵上には、他にも数多くの遺跡の存在が考えられるが、実態が十分に把握されていないのが現状である。



第2図 周辺地形図(1/5,000)



第3図 遺構配置図(1/300)

III. 調査の内容

1. 調査の概要

遺跡は、彦山川右岸に広がる沖積平野に西面して突出する標高約38mの舌状丘陵上に位置する。付近の水田との比高差は約13mである。

今回、調査を行ったのは、丘陵先端付近の北側部分で、調査対象面積11,000m²のうちの約6,000m²である。遺跡の現状は丘陵南側は国道201号線、東側は田川・直方バイパスにより切断されており工事中に様々な遺物が出土したというが、詳細は不明である。東側の調査区横は調査が行われないまま破壊されて絶壁となっており、表土下約40~50cmの所に遺構が露出していた。調査前はブドウ畠であったが、調査時にはすでにブドウの木の伐採は終了しており、重機による表土除去を開始した。遺構面は北へ緩やかに傾斜しており、遺構は赤褐色の火山灰土より掘り込まれていた。遺構面には、ブドウ施肥の際の溝が縦断しており、遺構は、一部攪乱を受けていたが、調査により貯蔵穴51基、土壙37基、住居跡14基、溝状遺構3及び、南北に並ぶ幾つかの方形の竪穴を検出した。調査は、貯蔵穴より開始したが、方形の竪穴は、ほぼ等間隔で並ぶことが判明し、調査区北側を拡長した。北側はすぐ谷となっており、竪穴は拡長区よりさらに伸びることはないことを確認した。最後に平板測量を行い調査を終了した。

2. 遺構

(1) 貯蔵穴

貯蔵穴として扱ったものは、全部で51基である。口辺は削平を受けており、本来の形状を知ることができない。底面の形状によると大きく円形と長方形に分類できる。そのうち、円形状（不整橢円形を除く）を呈するものは28基と約5割強である。断面形態による分類では、袋状（口辺径が床面径より小さいもの）、円筒形（口辺径が床面径にはほぼ等しいもの）、逆台形状（口辺径が底面径より大きいもの）の3種に大別できる。そのうち袋状を呈すものは22基で、円径のものの大部分は袋状を呈している。

各貯蔵穴の計測値は第1表の通りである。

第1表 貯蔵穴一覧表

番号	底面				断面		出土遺物		備考	旧番号
	形状	計測値(cm)	柱穴	周溝	形態	深さ(cm)	土器	石器・その他		
1	不整長方形	156×116			逆台形状	70	1、2	57	貯2より古	P-109
2	隅丸長方形	173×132			逆台形状	70	1、2	57	貯1より新	P-110
3	隅丸長方形	211×163			逆台形状	94	3~5			P-9
4	不整橢円形	244×122			逆台形状	44	6	8		P-81
5	長方形?	178×90			袋状?	175		25		P-80
6	長方形	272×127			逆台形状	50	7~11	27		P-82
7	隅丸長方形	294×141			逆台形状	113	12~16	69,102,117		P-100
8	橢円形	212×199			袋状	122	17~22	19	貯9より新	P-64
9	長方形	×104			逆台形状	47			貯8より古	P-77
10	円形	240×232			袋状	165	23~32	63,95	貯11より新	P-99
11	不定形	(184)×124			逆台形状	105	33~36		貯10より古	P-98
12	円形	178×176			袋状	90				P-63
13	隅丸長方形	184×105			逆台形状	62				P-69
14	長方形	319×231			逆台形状	71	37~45	21,85 管玉	住10より新	P-112
15	橢円形	174×142			袋状	58			住10より古	P-111
16	(橢円形)	(272)×(253)			袋状	224	46~61	23,52,53,94,115	半掘	P-113
17	円形	245×235			円筒状	125		33,37,86,99,105		P-67
18	円形	175×170			逆台形状	117	62~64	30		P-73
19	円形	255×238	○	○	袋状	269	65~73	44,70,78,95,111,113	貯20より新	P-103
20	胸張り長方形	×170			逆台形状	38			貯19より古	P-104
21(A)	不整長方形	158×153			逆台形状	152		62,93,98	住1より古	P-108A
(B)	不整長方形	(210)×100			逆台形状	123	74		住1より古	P-108B
22	長方形	260×120			逆台形状	108	75~79	40		P-41
23	橢円形	256×147			逆台形状	76	80~88	48,50,83		P-57
24	橢円形	186×146			逆台形状	52	89			P-50
25	長方形	196×108			逆台形状	68		32		P-115
26	円形	212×204			袋状	169	90~102	81,100,103,110		P-2
27	円形	274×270		○	袋状	199	103~106			P-88
28	円形	238×217		○	袋状	186	107~113	75,106		P-30
29	円形	264×248		○	袋状	206	114~120	66		P-31
30	円形	203×188			袋状	178	121~136	47,65,66		P-32
31	長方形	184×143	○?		逆台形状	55			P27より古	P-35
32	長方形	210×127			逆台形状	65	137		貯33より新	P-53

33	不整長方形	(241)×(236)			逆台形状	53			貯32より古	P-52
34	不整楕円形	208×160			逆台形状	78	138			P-40
35	円形	214×202			袋状	114				P-101
36	円形	170×166			袋状	67				P-27
37	楕円形	231×212			袋状	153	139～141	45、54	貯38より新	P-90
38	隅丸長方形	(206)×133			逆台形状	44			貯37P34より古	P-93
39	円形	222×204			袋状	185	142～144	108、		P-8
40	円形	220×212			袋状	188	145～148	41、77、96	床面に炭化物	P-7
41	円形	198×193	○		袋状	59	149、150	55		P-28
42	円形	170×165			円筒状	63				P-12
43	円形	240×237		○	袋状	191	151～159	61、64		P-44
44	楕円形	224×190			袋状	173	160～165	49	二段掘り	P-20
45	台形	162×143			逆台形状	103		20、	東西に溝？	P-92
46	長円形	176×165			袋状	145	166～168	93		P-96
47	長方形	370×174			逆台形状	68	169～173	109		P-94
48	円形	217×203			逆台形状	41				P-23
49	胴張り長方形	197×153			逆台形状	87			P37より古	P-107
50	円形	194×185			袋状	139	174～176			P-91
51	円形	180×174			逆台形状	135		58、88		P-11

() 内は復原値

1号貯蔵穴（第4図）

口辺は、胴張り長方形を呈す。断面は逆台形状で、底面は若干西側へ傾斜する。2号貯蔵穴に切られる。長軸方向はN-78°-Wである。

2号貯蔵穴（第4図）

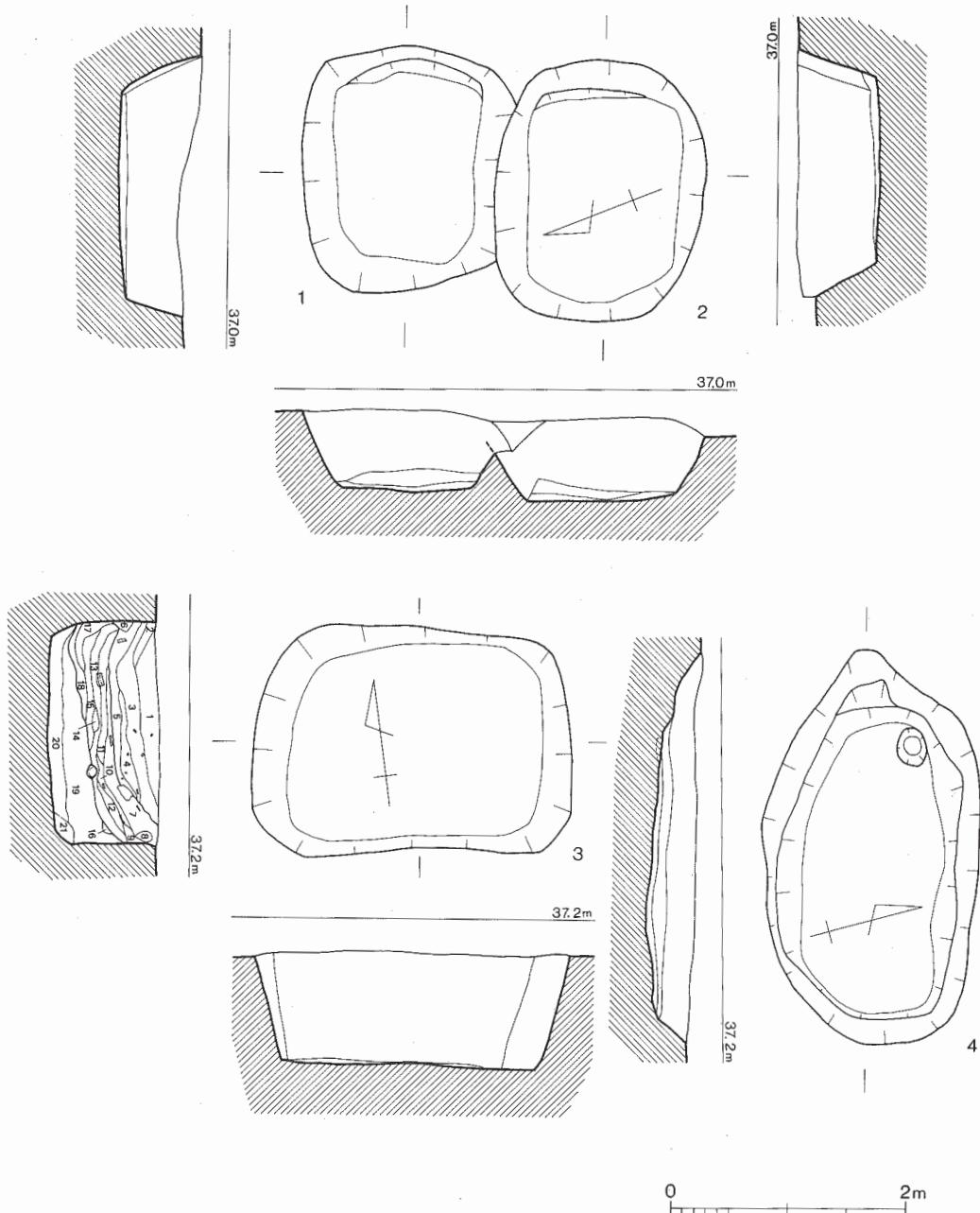
1号貯蔵穴と一部重複する。口辺は胴張り長方形を呈し、底面はほぼ平らである。出土する土器片の量は1号より多い。長軸方向はN-78°-Wである。

3号貯蔵穴（図版4-1、第4図）

平面形は底面同様隅丸長方形を呈し、底面は西へ傾斜している。埋土は、炭層及び焼土の面で大きく3分できる。土器片は炭層の上下より多く出土した。底面付近は粘質の黄白色層で遺物は少ない。長軸方向は、N-84°-Wである。

4号貯蔵穴（第4図）

口辺は、東西に長い楕円状を呈し、底面は不整形である。底面北西隅には30cm×20cm、深さ3cmのピットがある。土器片は上方から多く出土した。長軸方向は、N-76°-Wである。



1. 暗褐色土(砂質)若干の炭粒、焼土、土器片含む
 2. 黄褐色土+暗褐色土 焼土含む
 3. 暗褐色土+明黄褐色土(砂質)炭粒、焼土、土器片含む
 4. 暗褐色土 炭粒、焼土、土器片含む
 5. 暗黒褐色土 炭粒、焼土、土器片含む
 6. 黄褐色土 炭粒含む
 7. 暗褐色土 上下に炭層、焼土、大きな土器片
 8. 茶褐色土 焼土を多く含む
 9. 褐色土 焼土含む、上に炭層
 10. 明白褐色土 焼土含む、土器器片
 11. 赤褐色土 多くの焼土炭、土器片含む
 12. 赤黄褐色土(焼土) 上下に炭層
 13. 灰褐色土(炭層) 上に炭層
 14. 暗黑灰褐色土 焼土、炭含む
 15. 赤褐色土(焼土)粘質
 16. 暗黄褐色土
 17. 黄褐色土+黒灰色土(炭層)
 18. 暗灰色土 (炭層)土器片含む
 19. 黄褐色土+白黄色土(粘質)若干の炭粒
 20. 黄褐色土+白黄色土(粘質)
 21. 地山

第4図 貯蔵穴実測図 1 (1/60)

5号貯蔵穴（図版4-2、第5図）

口辺は、1.92m×0.88mの長方形である。東西の側壁は上面より約3/4の所までほぼ垂直で、それより下は逆台形状を呈す。北壁は垂直だが、南壁はやや袋状を呈す。最大径は底面より60cm付近にあり、1.0mを測る。底面は胴幅り長方形で西側から約40cmの所で斜めに立ち上がっている。埋土は焼土粒混じりで、底へ行くにつれ粘質土となる。長軸方向はN-60°-Wである。

6号貯蔵穴（第5図）

口辺形は長方形をなし、底面は西へ低くなっていた。浅く、ほぼ底付近より完形品を含めて多くの土器片及び石剣片が出土した。長軸方向は、N-62°-Wである。

7号貯蔵穴（第5図）

口辺は、3.6m×2.2m程の隅丸長方形である。底面はやや東へ低くなっていた。埋土は炭や焼土粒混じりで、完形品を含む多くの土器片が出土した。底面より約30cm上付近は、白灰色の微細な粘質土で、土器片等を含まない。長軸方向はN-80°-Wである。

8号貯蔵穴（図版5-1、第5図）

口辺は、2.3m×1.8m程の東西に長い楕円形を呈す。底面は北側へ傾斜しており、南側で弧を描くが、北側は丸味をもたない。北西隅には径40cm×60cm、深さ20cm程のピットを有す。南北壁は袋状をなしており、東西壁も本来は袋状をなしていたと思われる。土器片は中央付近に堆積しており、底面より20cm程上方の南西壁際より完形の壺が出土した。貯蔵穴は一部、9号貯蔵穴を切っている。

9号貯蔵穴（第5図）

西側は8号貯蔵穴に切られており、大きさは不明である。埋土は層状になっており、土器片の出土は多いが、8号貯蔵穴の様な堆積は見られない。長軸方向は、N-81°-Wである。

10号貯蔵穴（第6図）

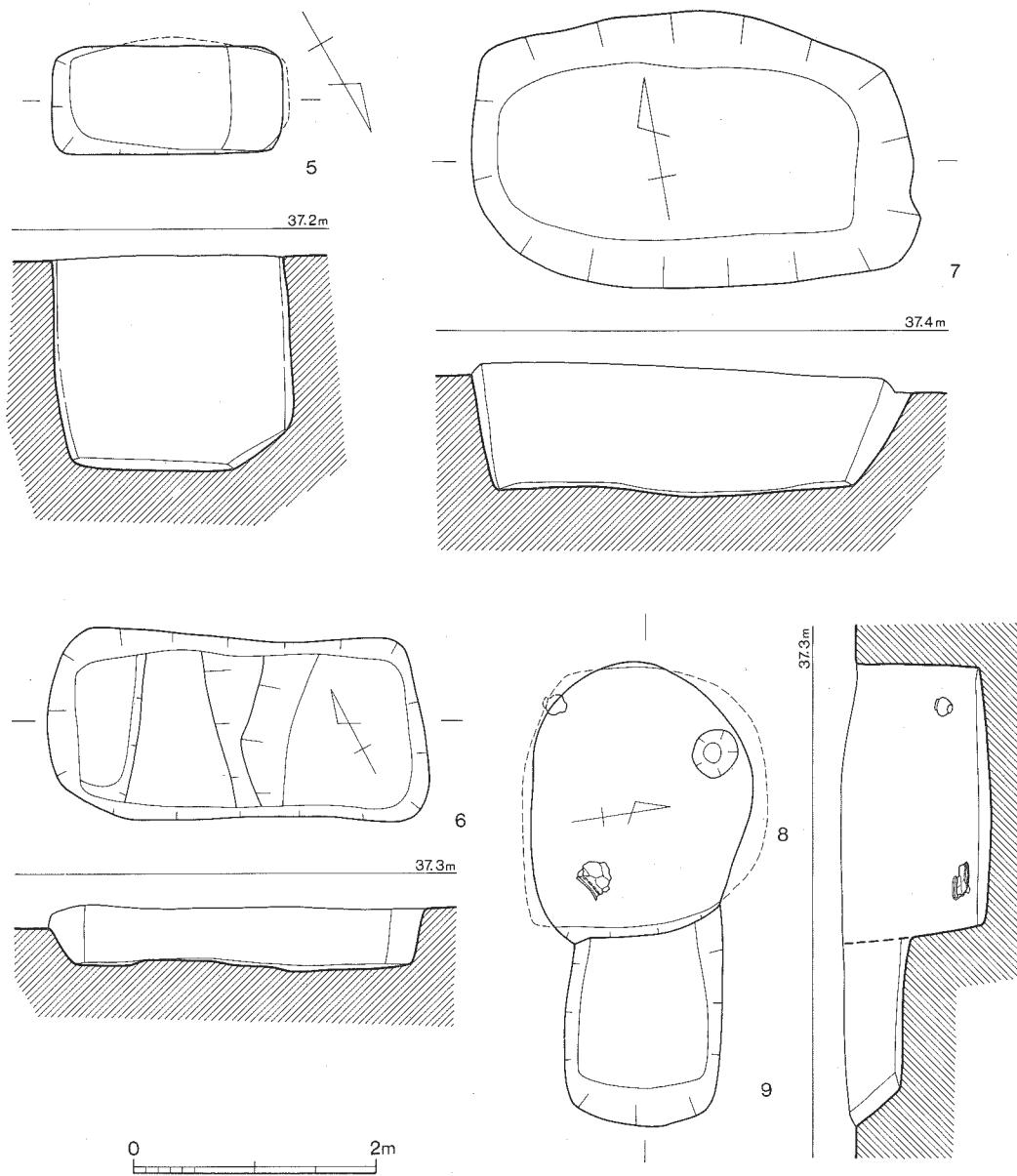
口辺は、1.7m×1.3m程の楕円形状である。底面は、ほぼ正円を呈し、平らである。壁は残りが良く、南北壁は上面から約40cm付近まではほぼ垂直で、そこから徐々に台形状を呈しており、底面より約60cm上より丸味をもちらがら広がっていく。最大径は底面にあり、2.4mを測る。埋土より完形の大形石包丁が出土している。石斧片は、19号貯蔵穴出土の石斧片と同一個体である。

11号貯蔵穴（第6図）

10号貯蔵穴に東壁の一部を切られる。口辺は、2.4m×1.6m程の長方形を呈する。長軸方向はN-59°-Wである。

12号貯蔵穴（第6図）

円形で口辺径約1.7mを測る。深さ90cmと円形にしては浅く、上面をかなり削平されているらしい。壁面は北側ではほぼ垂直だが、南側では袋状を呈している。最大径は底面より20cmのと



第5図 貯蔵穴実測図2 (1/60)

ころにあり、約1.8mを測る。

13号貯蔵穴（第6図）

口辺は、2.2m×1.2mの長方形である。底面はほぼ平らで、長軸方向はN-74°-Wである。

14号貯蔵穴（第6図）

口辺は、ほぼ長方形を呈し、3.5m×2.5mを測る。検出面直下より弥生土器片に混じって須恵器小片が出土した。炭粒混じりの埋土からは、多くの土器片及び管玉1コが出土したが、底面付近は白褐色土で土器片の出土は少ない。

15号貯蔵穴（第7図）

口辺は楕円形で、1.7m×1.4mを測る。断面はやや袋状を呈しており、最大径は底面にある。土器片は底面より出土した。10号住居跡より古い。

16号貯蔵穴（第7図）

口辺は、2.3m×1.7mの卵形を呈する。底面は半分未掘だが2.7m×2.5m程の楕円形を呈するものと思われる。底面中央からやや東よりの底面は、一段高くなっている。この段は北東壁際より弧状に南東壁際まで伸びるものと思われる。壁面は崩壊の部分が多い。西壁は地表より90cmまでほぼ垂直でそこから台形状をなしていた。最大径は底面にある。埋土は炭層混じりでやわらかく、完形品を含む多量の土器片が出土した。また土器片に混じって石斧丁、石剣、石斧等の破損品が出土した。

17号貯蔵穴（第7図）

口辺は径2.3mの円形を呈し、断面はほぼ円筒形を示す。本来は袋状を呈していたのかもしれない。遺物は中央付近からの出土は少なく、主に壁際から出土した。

18号貯蔵穴（第7図）

口辺は、径2.0m程の円形を呈する。壁は袋状ではなく逆台形状を呈しており、最大径は口辺部にある。土器片に混じって、様々な形の川原石が数点出土した。

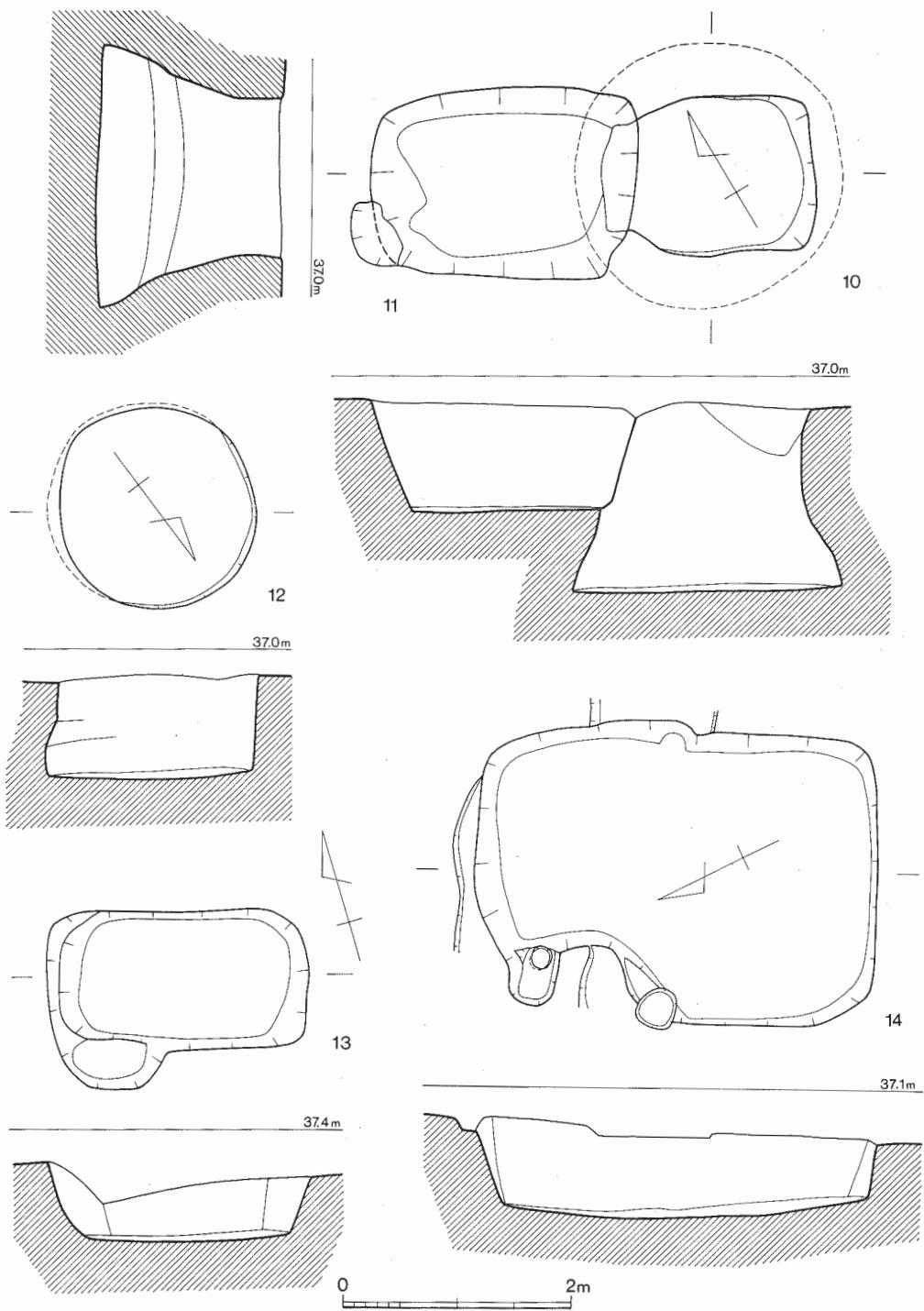
19号貯蔵穴（第8図）

口辺は、径2.3m程の不整円形を呈する。底面は東側へ傾斜しており、北壁寄りには径40cm、深さ30cm程の楕円形ピットを有する。壁際には、幅約10cm、深さ6cm程の溝が巡るが、北東側では途絶えている。壁面はかなり崩壊しているが、底面付近では、若干袋状を呈していた。最大径は底面にある。埋土は炭や焼土粒を若干含んでいた。出土した石斧片と10号貯蔵穴出土の石斧片は、同一個体である。20号貯蔵穴を切る。

20号貯蔵穴（第8図）

19号貯蔵穴に東半分を切られている。大きさは不明だが、長方形を呈するものと考えられる。貯蔵穴とするより土壙とすべきであるかもしれない。

21号貯蔵穴（図版4-3、第8図）



第6図 貯蔵穴実測図 3 (1/60)

口辺は4.3m×3.2m程の隈丸長方形を呈すが、2区に分かれる。東側をA区、西側をB区とした。A区は、外郭との間に幅40cm～50cmの平坦面をつくる。内郭は2.0m×1.5mの長方形で深さ約90cmを測る。埋土は炭や焼土を伴う。底面北西側では、2～3cm程の厚さで炭や焼土が検出され、一部焼壁化していた。B区南東壁は1号住居跡に切られる。A区の様な平坦面は作らず、外郭と内郭との境は不明瞭である。傾斜変換点からを内郭とすると、2.1m×1.0m、深さ50cmを測る。A区の様な焼土や炭の堆積は見られない。出土する土器片はA区より多く大きい。またA区より出土した石斧片は46号貯蔵穴出土の石斧片と同一個体である。この遺構は貯蔵穴とするより土壙とすべきかもしれない。長軸方向は、A区N-56°-W、B区N-59°-Wである。

22号貯蔵穴（第8図）

口辺は、2.5m×1.7m程の長方形を呈する。土器の出土は中位から下が多く、土器片に混じって様々な形の川原石が出土した。長軸方向はN-57°-Wである。

23号貯蔵穴（図版4-4、第8図）

口辺は、2.7m×1.7m程の楕円形を呈し、底面は若干中央へ傾斜していた。中位から底面付近にかけて、ほぼ同じ高さで多くの土器片が堆積していた。長軸方向はN-60°-Wである。

24号貯蔵穴（第9図）

口辺は、2.2m×1.8m程の楕円形で、浅いものである。土壙とすべきかもしれない。長軸方向はN-78°-Wである。

25号貯蔵穴（第9図）

口辺は、2.2m×1.5m程の長方形を呈し、北西隅は土壙により切られている。底面は北側へ傾斜している。上面より20cmくらいの所より土器片に混じり石槍が出土した。底面付近からは大きめの土器片が出土した。長軸方向はN-28°-Wである。

26号貯蔵穴（図版6-1、第9図）

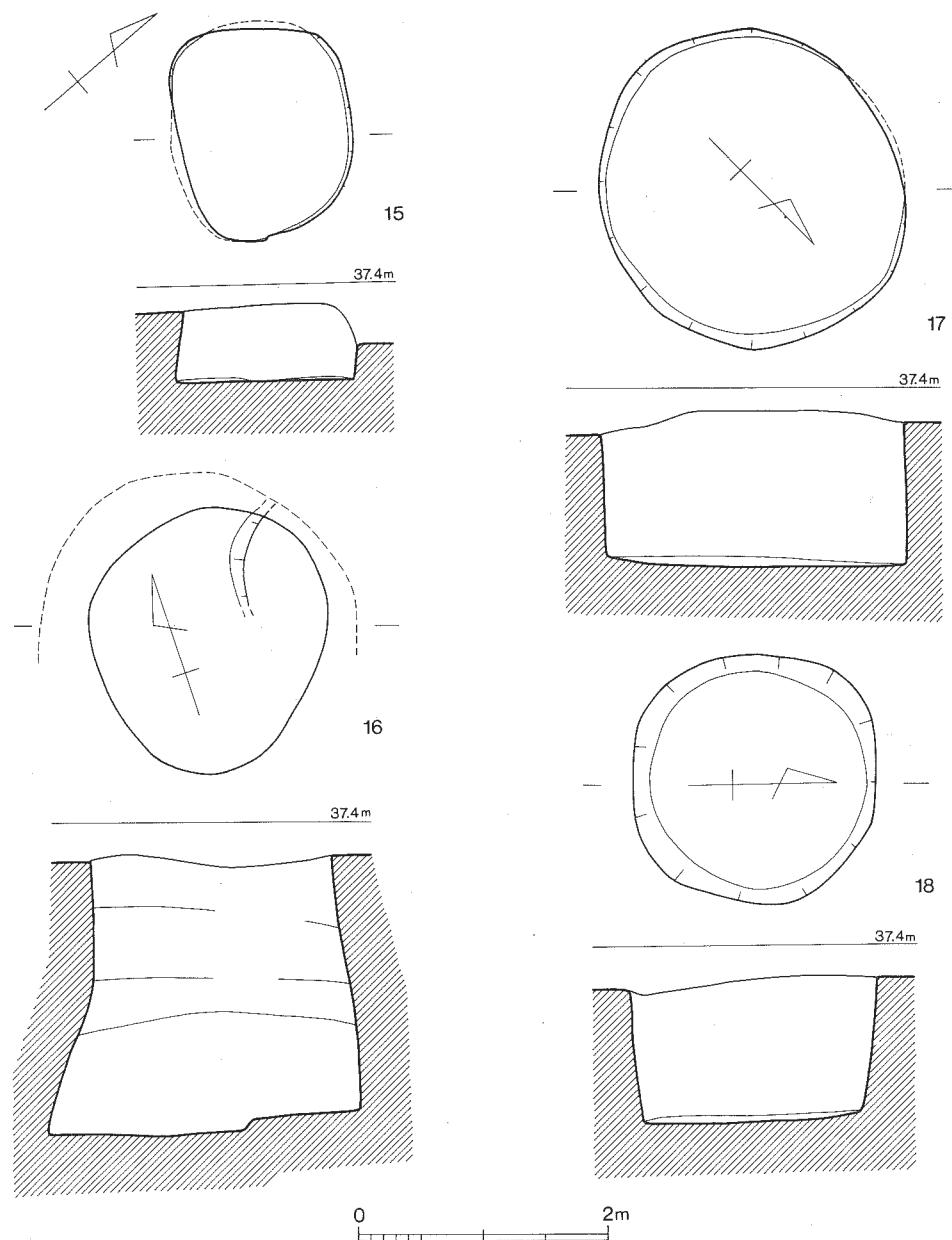
口辺は、径2.1m程の不整円形を呈する。壁面は崩壊が著しく直立に近くなっているが、一部で僅かだが袋状を留めていた。最大径は底面より70cm上の所にあり、2.3cmを測る。土器片の堆積は厚く、上面下30cmくらいから2/3付近まで一面に見られ、それ以下ではまばらに出土した。しかし石器類の出土は僅か数点であった。

27号貯蔵穴（第9図）

口辺は、2.2m×2.0m程の楕円形を呈する。底面は平坦で、壁際には幅12cm、深さ3cmの溝が巡る。壁面はかなり崩壊しているが弱い袋状をなしている。最大径は底面にある。

28号貯蔵穴（図版3-1、第10図）

口辺は、1.9m×1.7mの楕円形を呈する。底面は中央部が若干低く西壁際には径44cm×40cm、深さ20cm程の楕円状ピットを有する。壁際には幅20cm前後、深さ2cm～6cm程の溝が巡って



第7図 貯藏穴実測図4(1/60)

いた。壁面はかなり崩壊しているが、弱い袋状をなす。上面から50cm上付近には、厚い焼土の堆積が見られた。土器片は底面付近の壁際より集中して出土した。

29号貯蔵穴（第10図）

口辺は1.9m×1.7mの楕円形を呈する。底面は西へ傾斜しており、壁際には幅16cm、深さ4cmの溝が巡る。壁面はかなり崩壊しているが、残りの良い北側の壁面は弱い袋状を呈している。最大径は底面より20cm上にあり、2.7mを測る。土器片は底面付近より主に出土した。石包丁片は30号貯蔵穴と同一個体である。

30号貯蔵穴（図版5-2、第10図）

口辺、2.0m×1.9mの不整円形を呈する。壁面はほぼ直立に近いが、底面付近で弱い袋状を呈する。最大径は底面にある。土器片は上面より約80cm下より多量に出土した。土器片に混じって石庖丁の破損品が出土した。この石庖丁片は29号貯蔵穴出土の破損品と同一個体である。

31号貯蔵穴（第10図）

口辺は、2.1m×1.7mの長方形を呈し、浅い。底面の東壁際には径40cm、深さ14cmのピットがある。土器片はほとんど出土しなかった。27号土壌に切られる。長軸方向はN-9°-Eである。

32号貯蔵穴（第11図）

口辺は、2.0m×1.5mの長方形を呈し、33号貯蔵穴を切る。長軸方向はN-81°-Wである。

33号貯蔵穴（第11図）

大きく32号貯蔵穴に切られる。土器片の出土は、32号貯蔵穴より多い。埋土は炭粒を含む。

34号貯蔵穴（第11図）

口辺は、2.4m×1.9mの卵形を呈する。土器片は検出面直下から集中して出土した。弥生土器片に混じって完形の須恵器が1点出土した。長軸方向はN-53°-Wである。

35号貯蔵穴（第11図）

口辺は、径1.5mの不整円形を呈する。壁面は全体的に残りが良く、断面は袋状をなす。最大径は底面にある。

36号貯蔵穴（第11図）

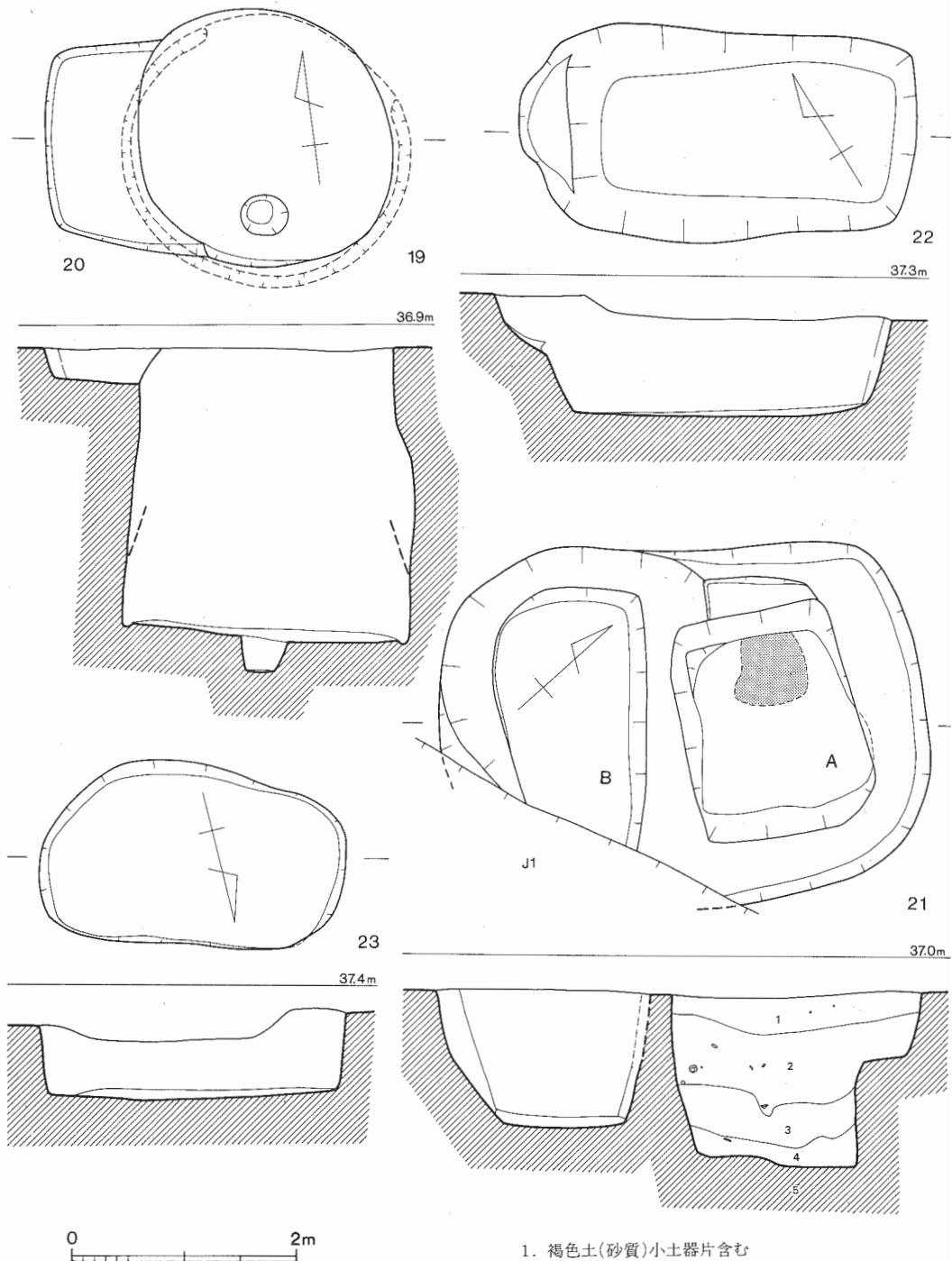
37号貯蔵穴と隣接する。口辺は径80cm程の円形で、壁面は若干袋状を呈する。浅く、かなり削平を受けているようである。土器片は底面の壁際より集中して出土した。

37号貯蔵穴（第11図）

口辺は、径1.9m程の不整円形を呈する。北側壁面は崩壊がはげしい。断面は袋状をなす。最大径は床面付近にあり、2.3mを測る。38号貯蔵穴を切る。

38号貯蔵穴（第11図）

南西隅は37号貯蔵穴に切られる。浅く、土壌とすべきかもしれない。長軸方向はN-27°-Wである。



1. 褐色土(砂質)小土器片含む
2. 褐色土(砂質)若干の炭、焼土を含む
3. 白黄緑色土(粘質)
4. 暗黒褐色土炭、焼土を多く含む、土器片を含む
5. (赤)黄白色土(地山)

第8図 貯藏穴実測図 5 (1/60)

39号貯蔵穴（図版6-2、第12図）

西側壁面は崩壊している。口辺は径1.7m程の円形を呈していたものと思われる。壁は袋状を呈し、最大径は底面にある。土器片は上方からの出土は少なく、底面より60cm上付近から底面までの壁際より主に出土した。出土した半割の石は、40号貯蔵穴から出土した半割の石と同一個体であった。

40号貯蔵穴（図版5-3、第12図）

39号貯蔵穴と隣接しており、東壁は大きく崩壊している。口辺は径1.7m程の楕円形と考えられる。南壁は残りが良く、袋状を留めていた。土器片は主に壁際より出土した。また底面中央付近より、長さ1.8m×0.6m、厚さ南側で3cm、北側で8cmの板材と思われる炭化物が出土した。

41号貯蔵穴（図版3-2、第12図）

口辺は、1.8m×1.5mの楕円形を呈する。底面は平坦で、中心よりやや東側に径20cm、深さ30cm程の円形ピットを有する。壁面は崩壊しほぼ直立に近くなっているが、残りの良い北壁側は強い袋状を呈する。最大径は底面より20cm上にあり、1.9mを測る。土器片は中位付近から底面にかけて多く出土した。

42号貯蔵穴（第12図）

口辺は、1.7m程の円形を呈する。壁面は直立だが、一部袋状の名残を留めていた。土器片は底面の壁際から多く出土した。

43号貯蔵穴（第12図）

口辺は、2.3m×1.9m程の不整円形を呈する。底面の壁際には幅14cm、深さ4cm前後の溝が巡る。壁面は南西壁を除いて崩壊がはげしく直立に近い。土器片は底面より50cm程上の炭層下より多く出土した。

44号貯蔵穴（図版3-3、第12図）

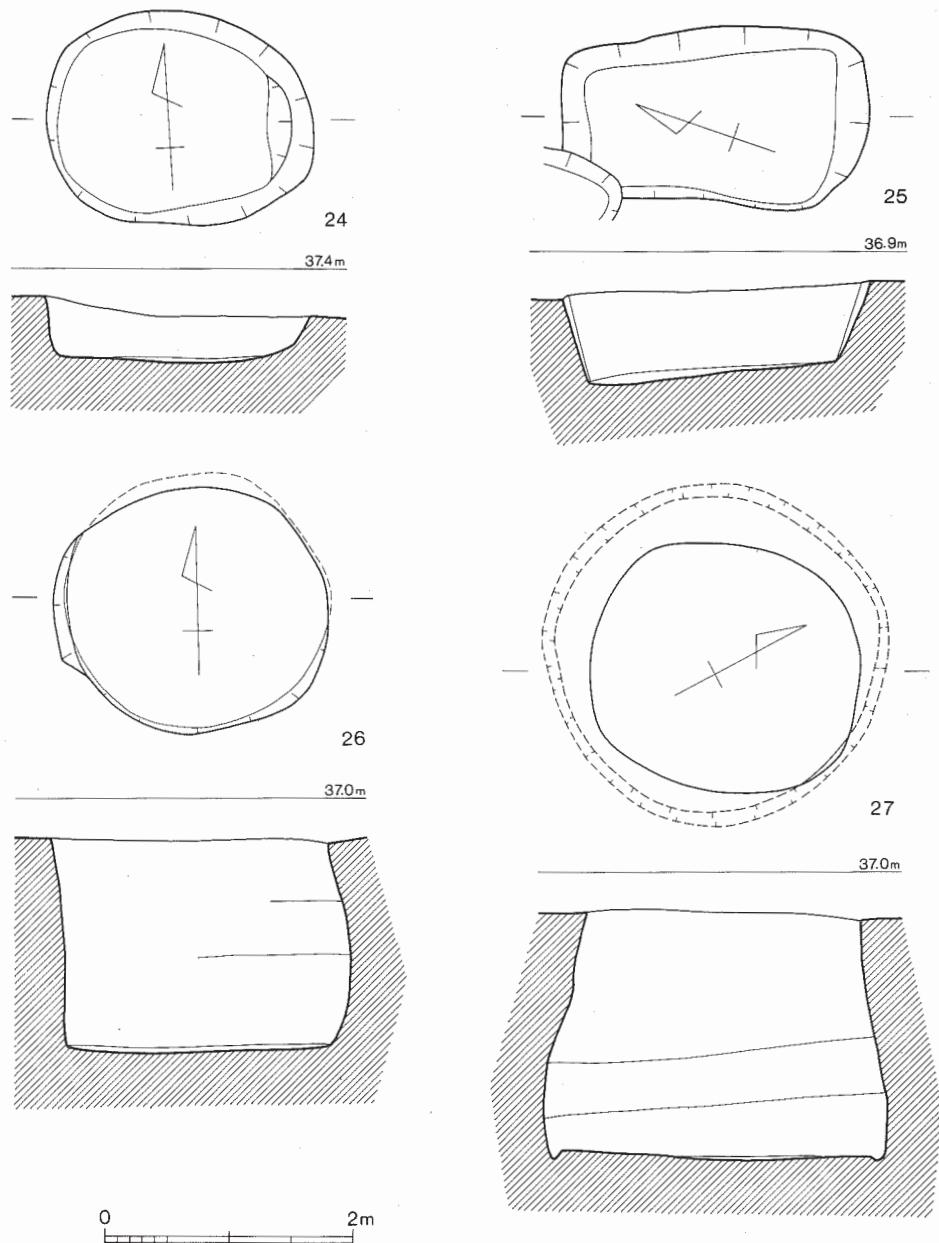
口辺は、1.9m×1.7m程の楕円形を呈し、壁面は弱い袋状をなす。最大径は底面より20cm上にあり、2.2mを測る。底面西寄りの壁際には弱い袋状を呈す掘り込みがあり、口辺1.2m×0.8m、底面1.3m×0.9m、深さ60cmを測る。貯蔵穴の最大径は底面にあり90cmを測る。土器片は底面付近の壁際から出土し、掘り込みからは出土しなかった。

45号貯蔵穴（第13図）

口辺は、1.6m×1.5mの台形状を呈する。底面はほぼ平らで、南北壁際には溝状の掘り込みがある。南壁側のは東寄りにあり、90cm×30cm、深さ4cm、北壁際のは、100cm×20cm深さ4cmを測る。貯蔵穴とするより土壙とすべきかもしれない。長軸方向はN-16°-Wである。

46号貯蔵穴（第13図）

口辺は、1.9m×1.6m程の楕円形を呈する。壁面は上面より40cm下まで直立し、そこから弧状をなす。最大径は底面より50cm上の所にあり、1.9mを測る。36号土壙を一部切る。



第9図 貯蔵穴実測図 6 (1/60)

47号貯蔵穴（図版5-4、第13図）

口辺は、4.0m×1.8m程の長方形を呈する。底面は中央付近で一段低くなり、底面より10cm上の所で大形壺が口を斜めにして出土し、その他にも埋土より土器片が多く出土した。長軸方向はN-54°-Wである。

48号貯蔵穴（第13図）

口辺は円形で、径2.2mを測る。かなり削平を受けており深さ約40cmと浅い。土器片は底面より多く出土した。

49号貯蔵穴（第13図）

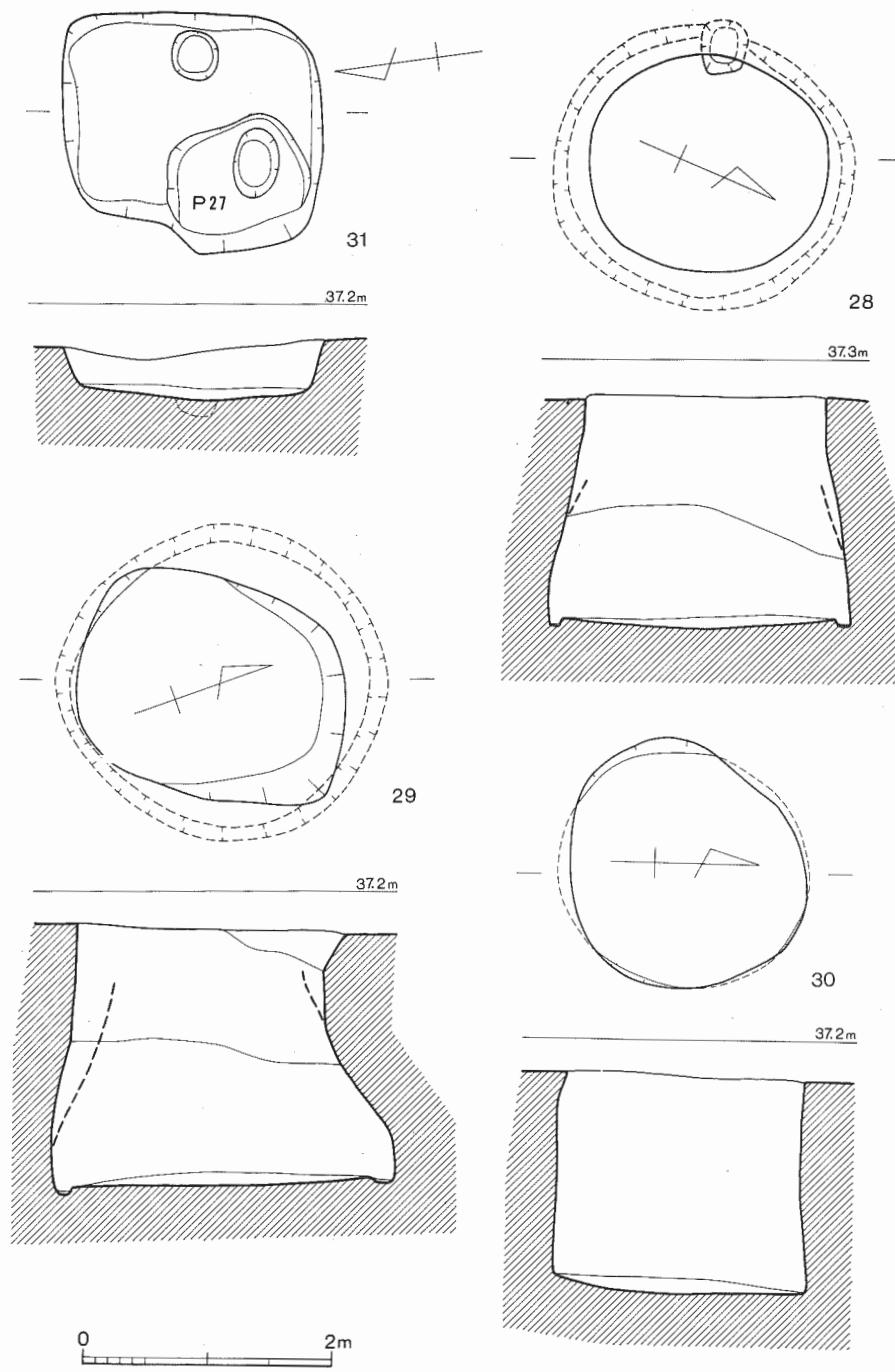
口辺は、2.0m×1.8mを測る長方形で、37号土壙に切られる。壁面は、ほぼ直立する。長軸方向はN-76°-Wである。

50号貯蔵穴（図版3-4、第13図）

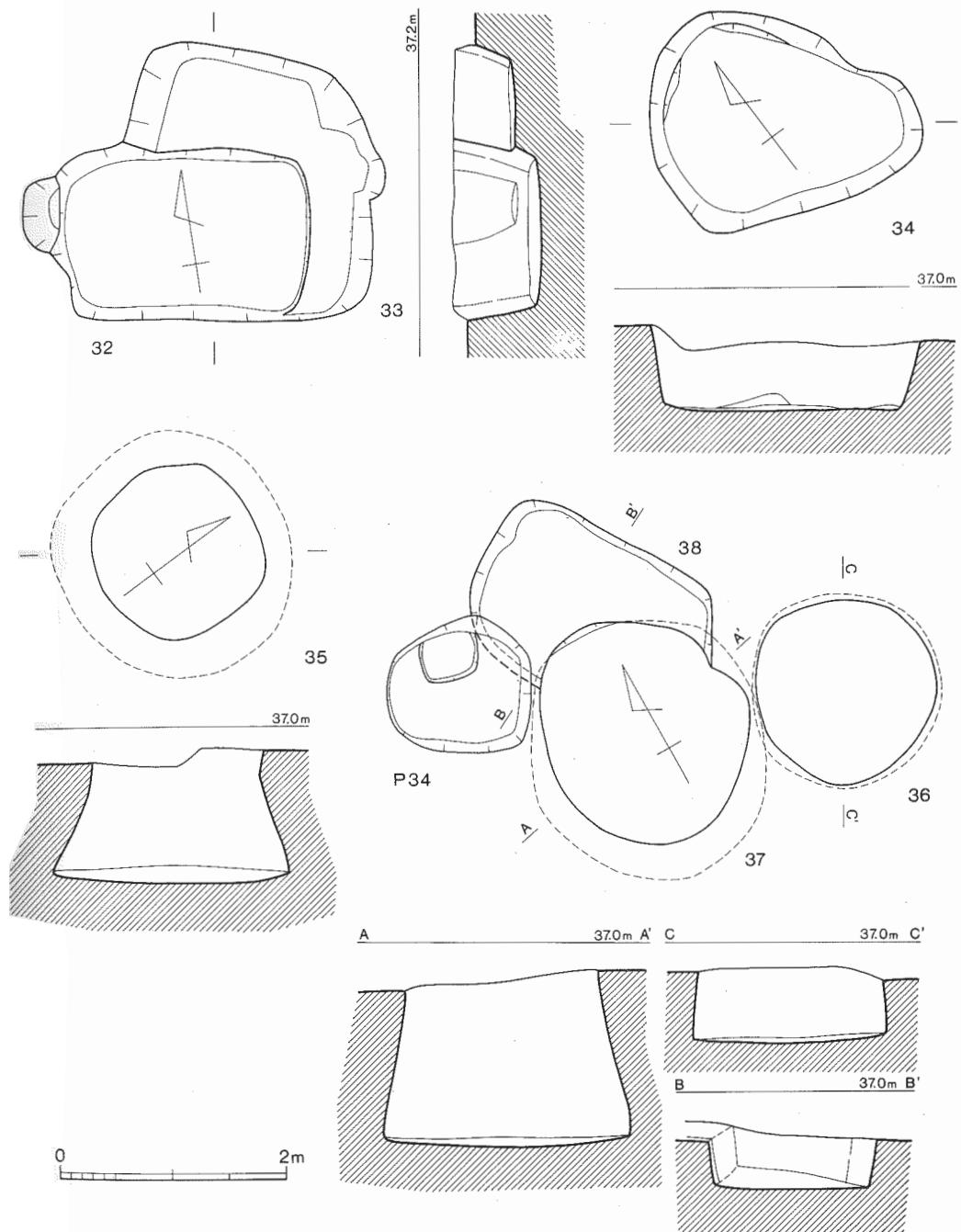
口辺は橢円形で、2.3m×1.8mを測る。底面はやや北へ傾斜する。壁は袋状を呈し、最大径は底面より30cm上の所にあり、約2.0mを測る。

51号貯蔵穴（第13図）

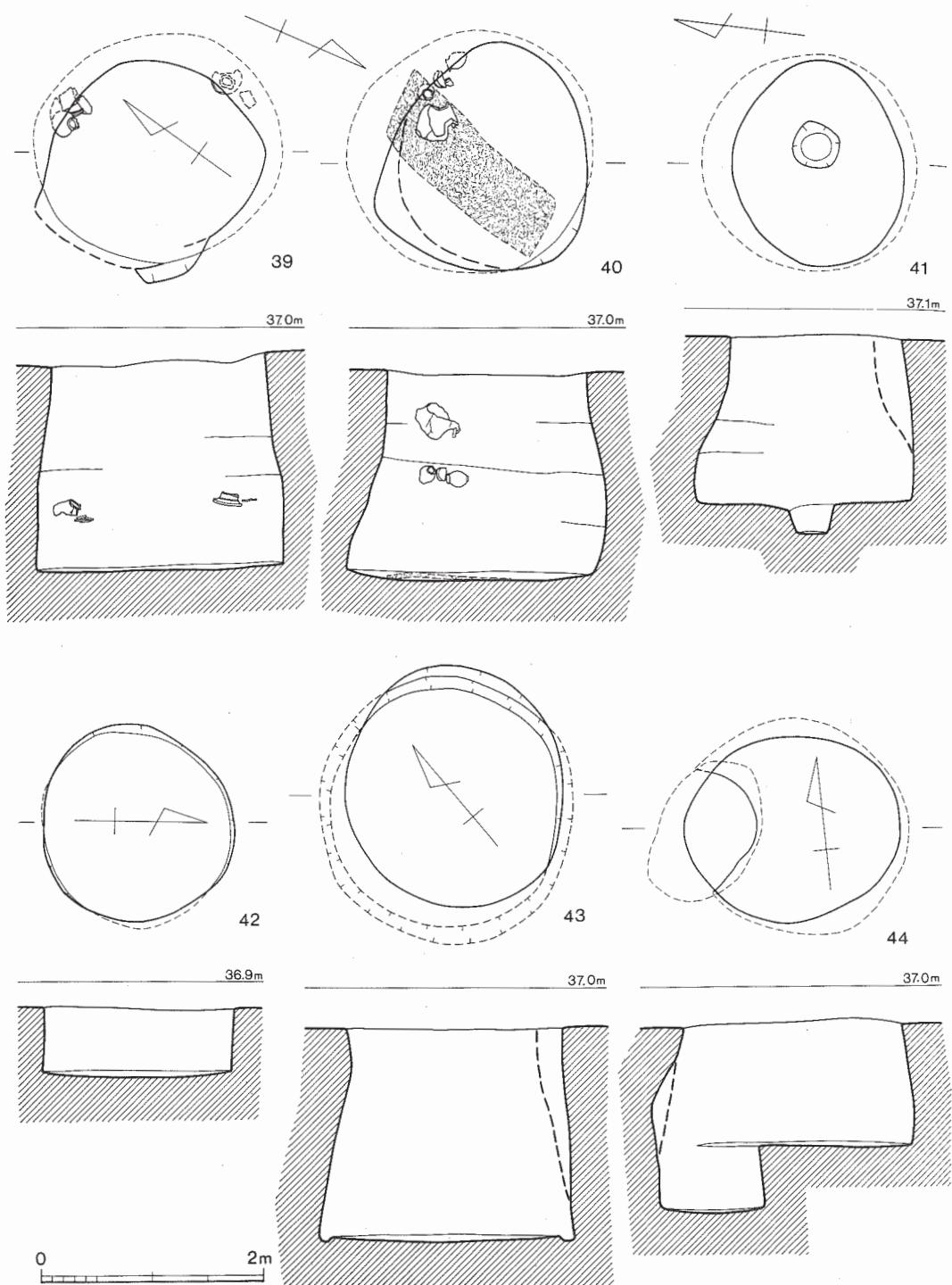
口辺は、円形で径1.7mを測る。壁面は逆台形状を呈すが、中位には壁面と同じ土が厚く堆積しており崩壊したものと思われる。本来は袋状を呈していたのであろう。土器片は底面付近より多く出土した。



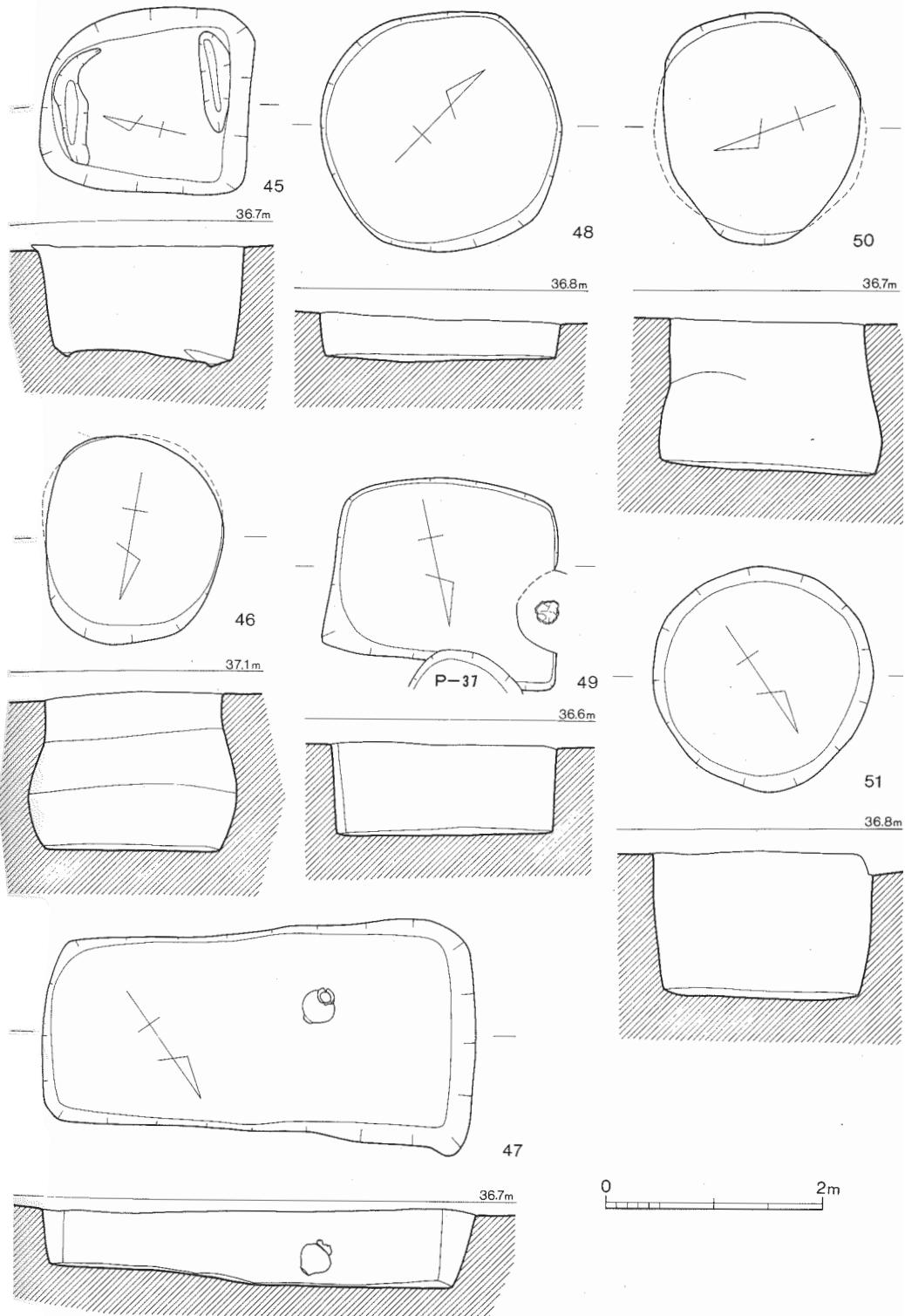
第10図 貯蔵穴実測図 7 (1/60)



第II図 貯蔵穴実測図 8 (1/60)



第12図 貯蔵穴実測図 9 (1/60)



第13図 貯蔵穴実測図 10 (1/60)

(2) 住居跡

調査により、14軒の住居跡を検出した。10号住居跡を除く13軒は、調査区の東側に集中しており、さらに東側へ広がるものと考えられる。計測値等は一覧表とした。

第2表 住居跡一覧表

番号	長軸方向	平面形	長辺×短辺 (cm)	深さ (cm)	主柱穴	炉	焼土	周溝	ベット状 遺構	出土遺物		備考
										土器	石器・その他	
1	N-73°-E	長方形	490×390	35		○	○	○(両側)	184	51、管王2	貯21を切る	
2		円形	554×536	8	4	○	○	○		185~192	15、56、107	住3に切られる
3	N-68°-E	長方形	810~750×480~440	27	2			○	○(片側)	193~197	43、46、74、79、116、120	
4		円形	421×390	13	3	○	○			198、199	67	
5	N-6°-W	長方形	(560)×(5.54)	8	3	○	○			200		
6	N-33°-E	長方形	600~570×480~460	24		○	○			201、202	24、28	住11に切られる
7	N-2°-W	長方形	470~440×320	42	2	○				203~208	16、34、60、72	
8	N-84°-E	長方形?	(620)×(560)	13	4					209		半分未掘
9	-	長方形?	×354	10								半分未掘
10	N-37°-E	長方形	560×480	29						210	42、73	貯14に切られ 貯15、溝3を切る
11	N-75°-W	長方形	320~340×270	20	4					211~215	13	住6を切る
12	N-56°-E	長方形	550×500	16				○		216~218	1、26	
13		円形	(760)×(700)	13	4	○		○		219~222	3、35、59、84、118	切り合い不明
14		円形	(680)×(660)	14	12						3、35、59、84、118	

() 内は復原値

1号住居跡(図版7-1、第14図)

4号と12号住居跡との間に位置する長辺4.90m、短辺3.90mの長方形竪穴式住居跡で、北壁は21号貯蔵穴を切る。長軸方向はN-73°-Eである。壁は全体的に残りが良く、壁高は30cm前後を測る。両短辺には、削り出しによるベット状遺構が設けられており、東側で幅1.1m、高さ18cm、西側で幅84cm、高さ17cmを測る。ベット状遺構のある両周壁及び北壁沿いには、幅6~14cmの浅い溝が巡る。柱穴らしきピットは、南壁側に集中しており、西側ベット状遺構付近では検出できなかった。ピットには規格性は見られないが、東側ベット状遺構上及びその下のピットは特に深く、主柱穴かもしれない。床面中央部は周囲より凹気味で、焼土や炭を伴っており、炉跡かもしれない。西側ベット状遺構下やや南寄りには、一辺80cm、深さ26cm程の屋内土壙が設けられている。床面の大部分は、厚さ1~2cm程の炭や焼土で覆われ、両ベット状遺構

の立ち上がり部分は、一部焼壁化していた。出土遺物としては、床面及び覆土より弥生土器片、砥石が各一点、覆土より石庖丁片及び黒曜石小剝片各1点がある。また東側ベット状遺構北側床面付近より、管玉2点が出土した。

2号住居跡（図版7-2、第14図）

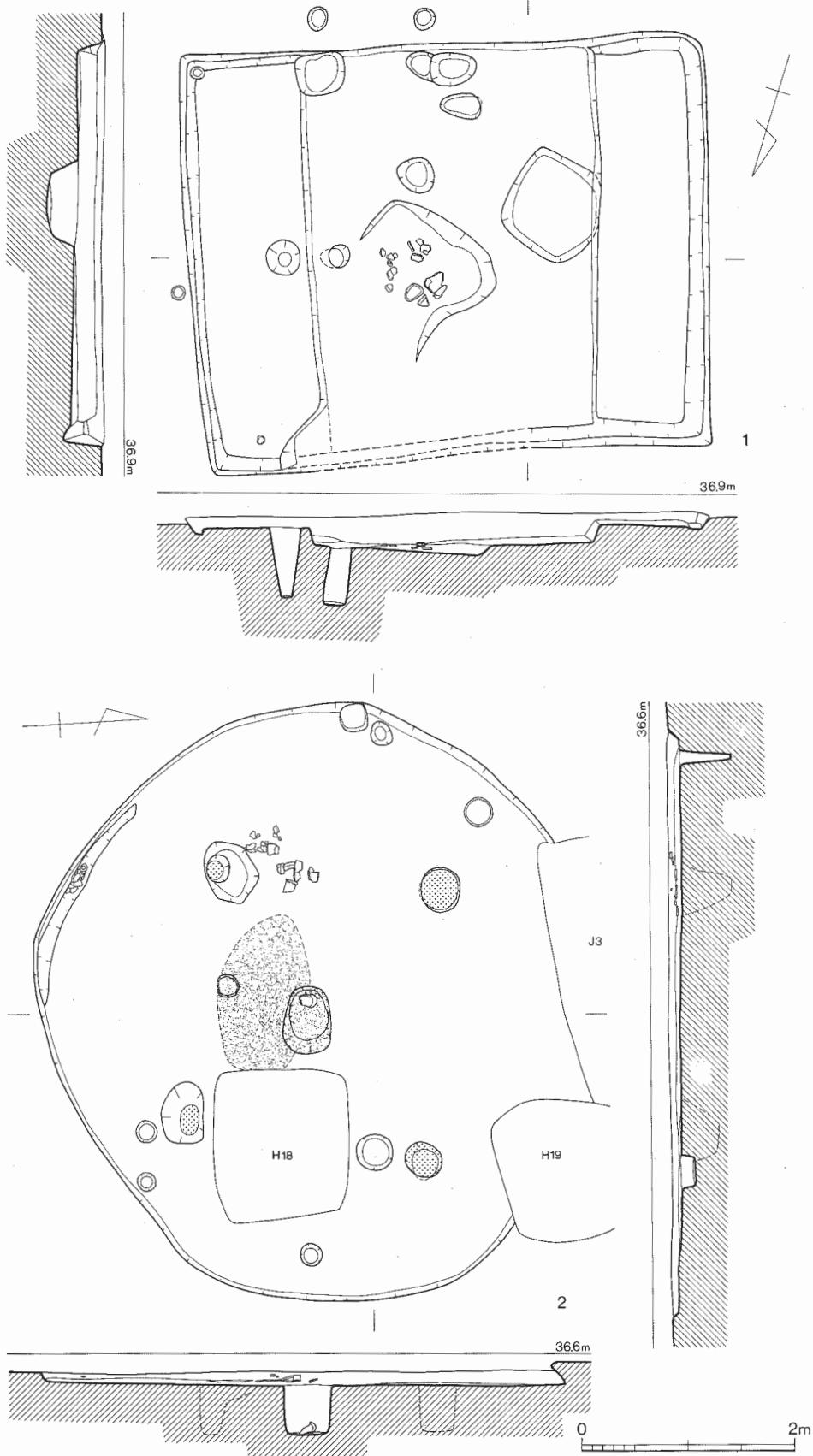
6軒の住居跡が集中する調査区北東側に位置する長径5.54m、短径5.36mの不整円形竪穴式住居跡である。北側壁の1部は3号住居跡に切られ、東側は掘立状遺構と重複し切られる。壁高は6cm前後である。南壁下を西に向い幅12cm前後の浅い溝が全体の1/6程巡る。床面は若干、北へ傾斜している。主柱穴は四角形に並ぶ4本と考えられる。柱穴間距離及び柱穴の深さは一定ではなく、前者は2.2~2.6m、後者は37~53cmを測る。床面ほぼ中央には60cm×40cm、深さ45cm程の楕円形土壙があり、底面付近の炭上より丹塗り高杯片を検出した。同一個体の破片は床面でも検出された。土壙南側では炭や焼土が1.4m×0.9mの範囲で楕円形状に広がり、床面は良く焼けており、炉跡と考えられる。遺物は床面及び覆土より弥生土器片、南西側の床面付近より磨製石鏃1点、炉跡直上よりスクリレイバー1点、床面より石庖丁片1点が出土した。

3号住居跡（図版7-3、第15図）

2号住居跡の北側に位置する不整長方形竪穴式住居跡である。長辺となる北壁で7.5m、南側で8.1m、短辺となる東壁で4.8m、西壁で4.4mを測る。住居跡は2号住居跡を切り、1部掘立状遺構と重複し切られる。長軸方向はN-68°-Eで、1号住居跡の長軸方向に近い。壁高は遺存の良い南壁で27cmを測る。西側短辺には幅1.2m、高さ20cmの削り出しによるベット状遺構が設けられている。東壁を除く三壁沿い及びベット状遺構壁下には、幅7~15cmの浅い溝が検出された。ベット状遺構壁下及び南壁沿いの溝は、途中で止絶える。南壁側の溝の隣にはさらに2本の短い溝がある。床面上のピットにはまとまりがみられない。主柱穴と思われる東西の2本は、深さ50cm前後で、柱間距離は3.2mを測る。床面中央より南東寄りには、1.7m×1.0m、深さ40cm程の不整長方形土壙があり、南壁沿いにある三本の溝のうち、北側の1本が傾斜しながら接続している。床面は北東方向へ傾斜している。貼り床が行われていたらしく、部分的だが黄白色粘土が地山の上に1~2cmの厚さで検出された。遺物は、床面及び覆土より弥生土器片、東壁側の床面付近より完形の石庖丁1点、覆土より石斧片2点、石庖丁片1点及び未製品1点、砥石2点が出土した。

4号住居跡（図版7-4、第16図）

1号住居跡の北西側に位置する長径4.21m、短径3.9mの東西に間伸びした不整円形竪穴住居跡である。壁高は5cm前後と著しい削平を受けているが、東壁の1部では13cmを測る。周溝は検出されなかった。北へゆるやかに傾斜する床面には、4つの柱穴らしきピットがある。主柱穴と思われる3本は、径24~30cm、深さは北東の柱穴で71cm、他の2つは53cm前後である。柱穴間距離はほぼ等しく、2.4mを測る。主柱穴は4本であろうが、南東側では検出でき



第14図 1,2号住居跡実測図 (1/60)

なかった。床面中央には炭や焼土を伴う $1.1\text{m} \times 0.7\text{m}$ 、深さ18cmの楕円形土壙があり、炉跡と考えられる。出土遺物は少なく、若干の弥生土器片と石庖丁片1点が出土した。

5号住居跡（図版8-1、第16図）

3号住居跡の北側に位置する竪穴式住居跡である。南壁を除き著しい削平を受けており、北側では床面にまで達していた。北壁は不明であるが、推定で長辺5.6m、短辺5.54m程のハの字に開く長方形プランと思われる。長軸方向はN-6°-Wで、ほぼ真北を示す。壁高は南壁で8cmを測る。周溝は検出されていない。主柱穴と思われる3本は、東西壁から等距離の位置にあり、径20~30cm、深さ30~60cmで、柱穴間距離は東西で3.8m、南北で、3.0mを測る。主柱穴は4本と思われるが、南西側では検出できなかった。床面の中央に位置すると思われる70cm×60cm、深さ7cm程のすり鉢状土壙は、炭や焼土を伴っており、炉跡であろう。出土遺物は少なく、若干の弥生土器片のみであった。

6号住居跡（図版8-2、第17図）

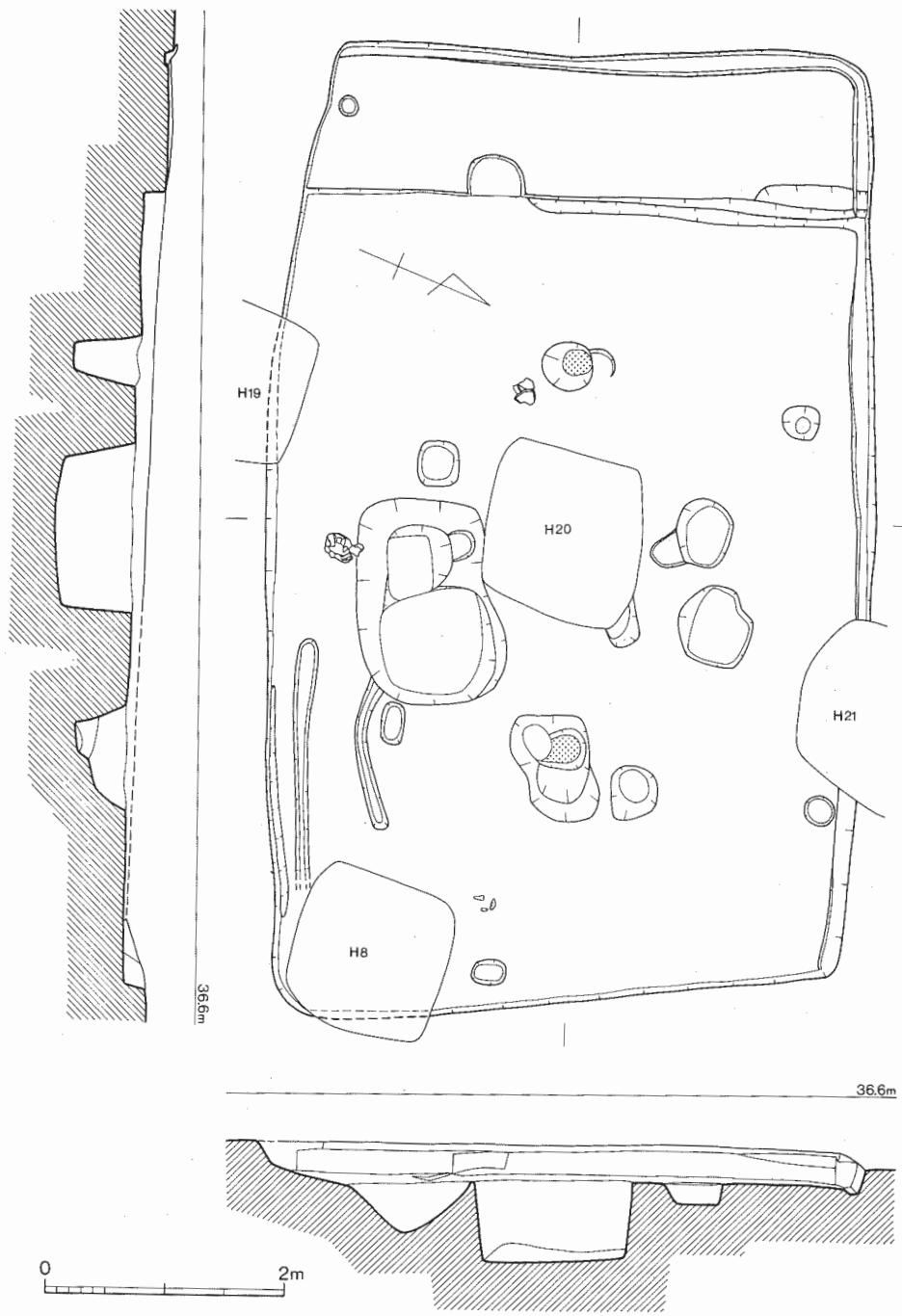
3号住居跡の東側に位置する、長辺5.7m~6.0m、短辺4.6m~4.8mの不整長方形竪穴式住居跡で、北壁は11号住居跡に切られる。長軸方向はN-33°-Eである。壁高は20cm前後を測る。西壁から南壁にかけて、幅10cm前後の浅い溝が巡る。柱穴と思われる大小のピットが数多く検出されたが、判然とせず主柱穴は不明である。床面中央より北東寄りには、炭や焼土を伴う径1.2m、深さ10cm程の不整円形土壙があり、炉跡かもしれない。床面中央より南寄りにも90cm×80cm、深さ37cm程の楕円形土壙が見られるが、炭や焼土等は検出されなかった。出土遺物としては、床面及び覆土より弥生土器片、覆土より石剣片2点が出土した。

7号住居跡（図版8-3、第17図）

1号住居跡の南西側に位置する、長辺4.4m~4.7m、短辺3.2mの隅丸長方形を呈す竪穴式住居跡である。長軸方向はN-2°-Wで、ほぼ磁北を示す。壁高は35~42cmと遺存状態は良い。周溝はみられない。柱穴らしきピットは、中軸線上及びそれより西側に集中しており、東壁側ではほとんど検出されなかった。主柱穴は中軸線上に相対する2本と考えられ、径30cm×24cm、深さ32cm、53cmを測る。柱穴の間には60cm×44cm、深さ30cm程の楕円形土壙があるが、炭や焼土は検出されていない。主柱穴と思われる南側ピット西傾の床面には若干の炭が広がっていた。西壁中央付近には、80cm×60cm、深さ42cmの楕円形土壙がある。周壁北東隅及び南西隅には、壁より外側に掘り込まれた屋内土壙が設けられている。北東側のは80cm×60cm、床面より深さ26cmの楕円形で、南西側のは、1.1m×0.9m、床面より深さ45cmを測る。遺物としては覆土及び、ピット内より弥生土器片、南西側土壙より紡錘車1点、覆土より石庖丁片2点、磨製石鎌1点、黒曜石小剝片1点が出土した。

8号住居跡（図版8-4、第18図）

3号住居跡の東側に位置する竪穴式住居跡である。東半分は調査区外のため不明であるが、



第15図 3号住居跡実測図 (1/60)

推定で長辺約6.2m、短辺約5.6m程の長方形プランと思われる。周壁の北西隅は、掘立状遺構に切られる。長軸方向はN-84°-Eである。壁高は13cm前後を測る。周溝は検出されなかった。中央付近の4つのピットは主柱穴の1部と思われる。大きさは径30~40cm、深さは北壁側の2つが約60cm、他は40cm、52cmを測る。主柱穴は未掘部分を加えると8本であろうと思われる。遺物としては覆土より、若干の弥生土器片及び黒曜石小剝片8点が検出された。

9号住居跡（第18図）

8号住居跡の南側に位置する竪穴式住居跡で、8号と同様、東半分は未掘である。規模は明確ではないが、西壁で3.54mを測り、南北の壁はハの字状に開いている。長軸方向は、8号住居跡と大差はないものと思われる。壁高は、北壁で10cm、他の二壁は5cm前後と残りが悪い。周溝は検出されていない。柱穴らしきピットは4つあるが、主柱穴かどうかは不明である。南東隅に見えている土壙は西側で1.1m、深さ1.0mを測り、住居に伴うものかどうかは判然としない。あるいは掘立状遺構に伴うものかもしれない。出土遺物は、ほとんどない。

10号住居跡（図版9-1、第19図）

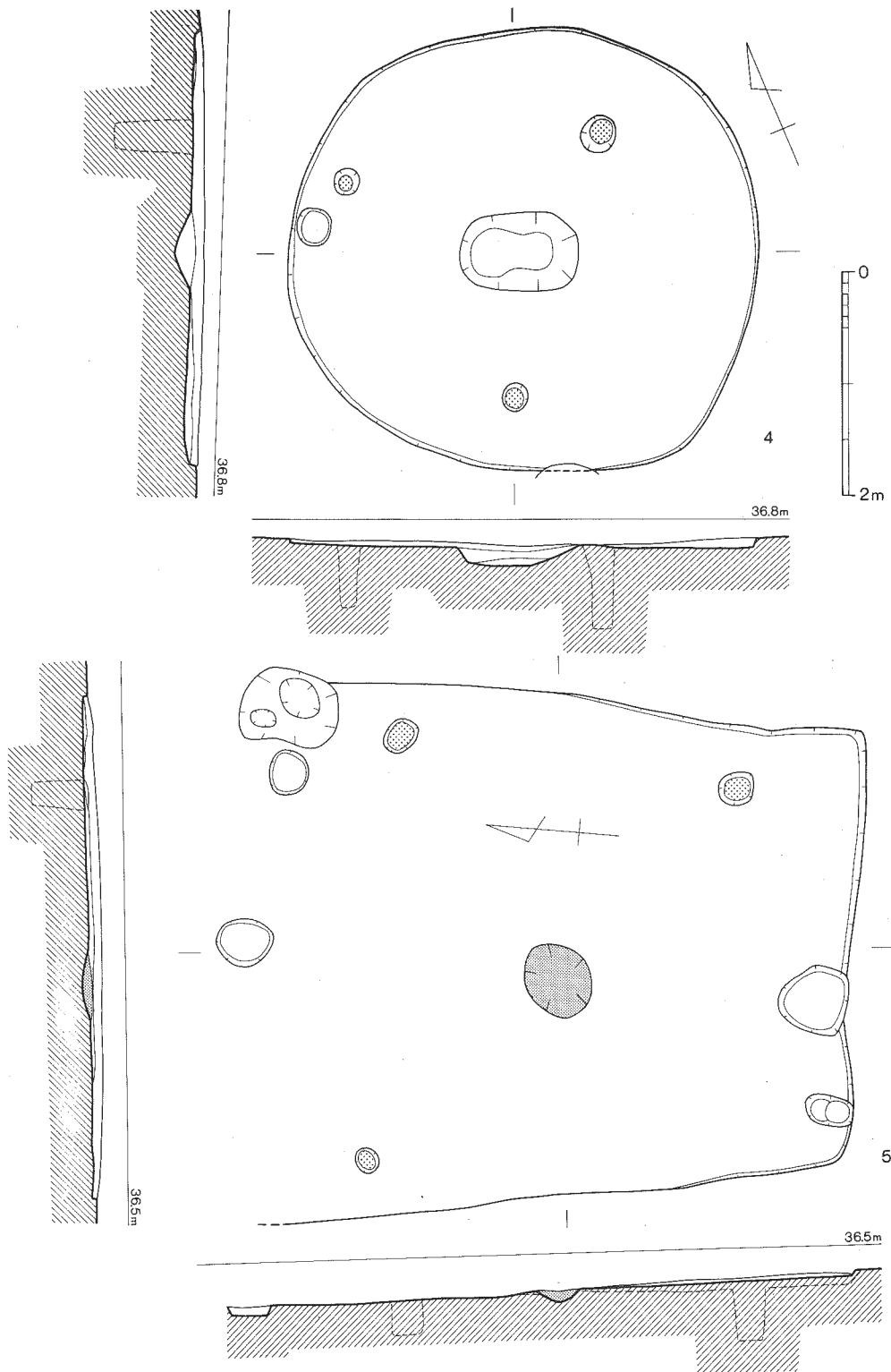
調査区の南西側に単独で位置する竪穴式住居跡である。北壁は明確ではないが、規模は長辺約5.6m、短辺約4.8m程の長方形プランと思われる。住居跡は3号溝及び15号貯蔵穴を切り、14号貯蔵穴に切られる。長軸方向はN-37°-Eである。壁高は15cm前後、残りの良い西壁で29cmを測る。周溝は検出されていない。柱穴は多く検出されたが、判然としない。床面上では炭や焼土は検出されていない。出土遺物としては、若干の弥生土器片及び石庖丁未製品1点、石鏸片1点が出土した。

11号住居跡（図版9-2、第18図）

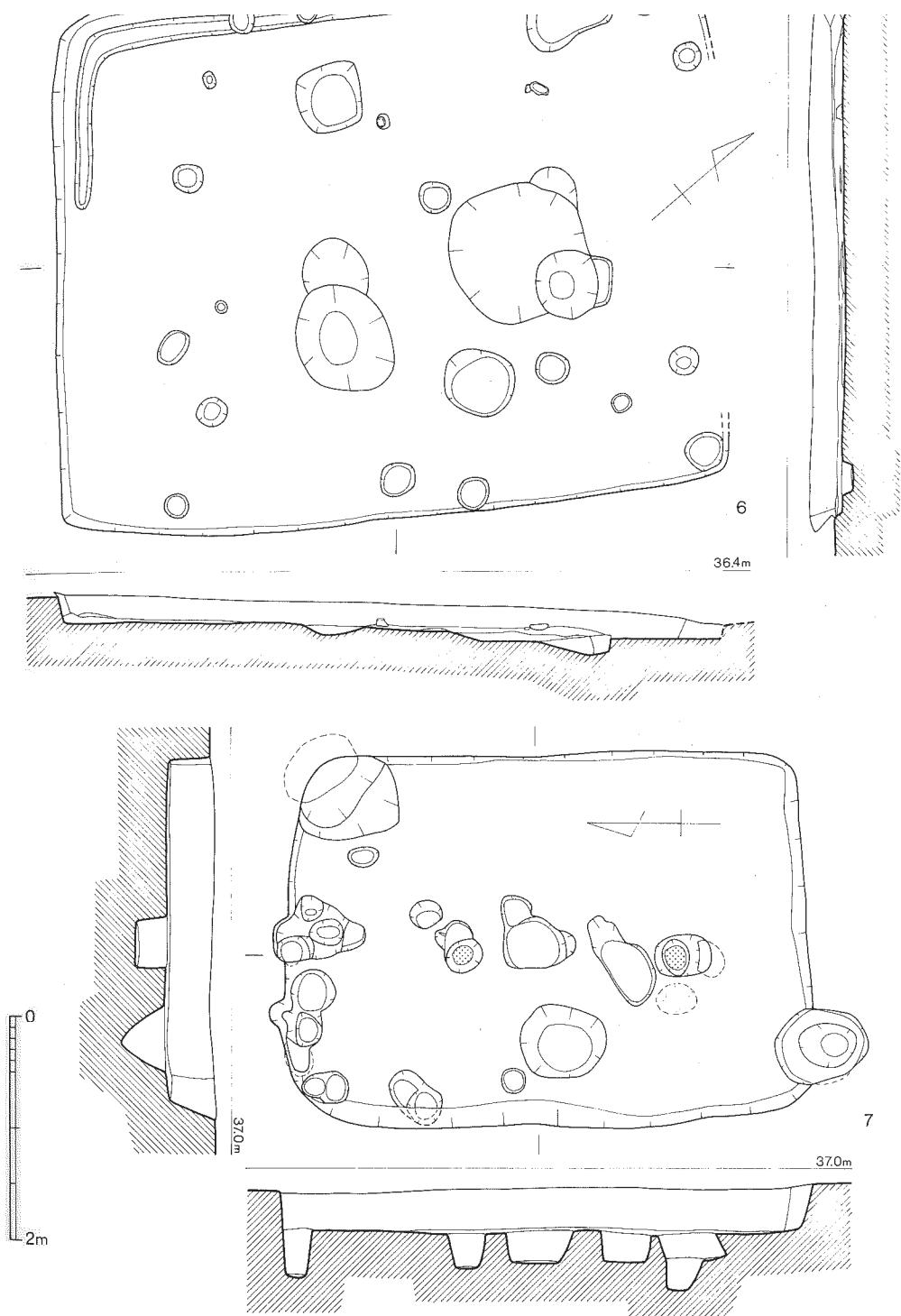
6号住居跡調査中に検出した長辺3.4m、短辺2.7mの長方形竪穴式住居跡で、南壁は6号住居跡を切る。長軸方向はN-75°-Wである。壁高は13cm前後だが、南壁では20cmを測る。主柱穴は四隅にある4本と考えられる。柱穴は径20cm、深さ9cmで、柱穴間距離は2.2mである。床面では炭や焼土は見られなかった。出土遺物は、北東隅で押しつぶされた状態で出土した壺などの弥生土器片及び石鏸1点、黒曜石小剝片1点、安山岩小剝片4点がある。

12号住居跡（図版9-3、第20図）

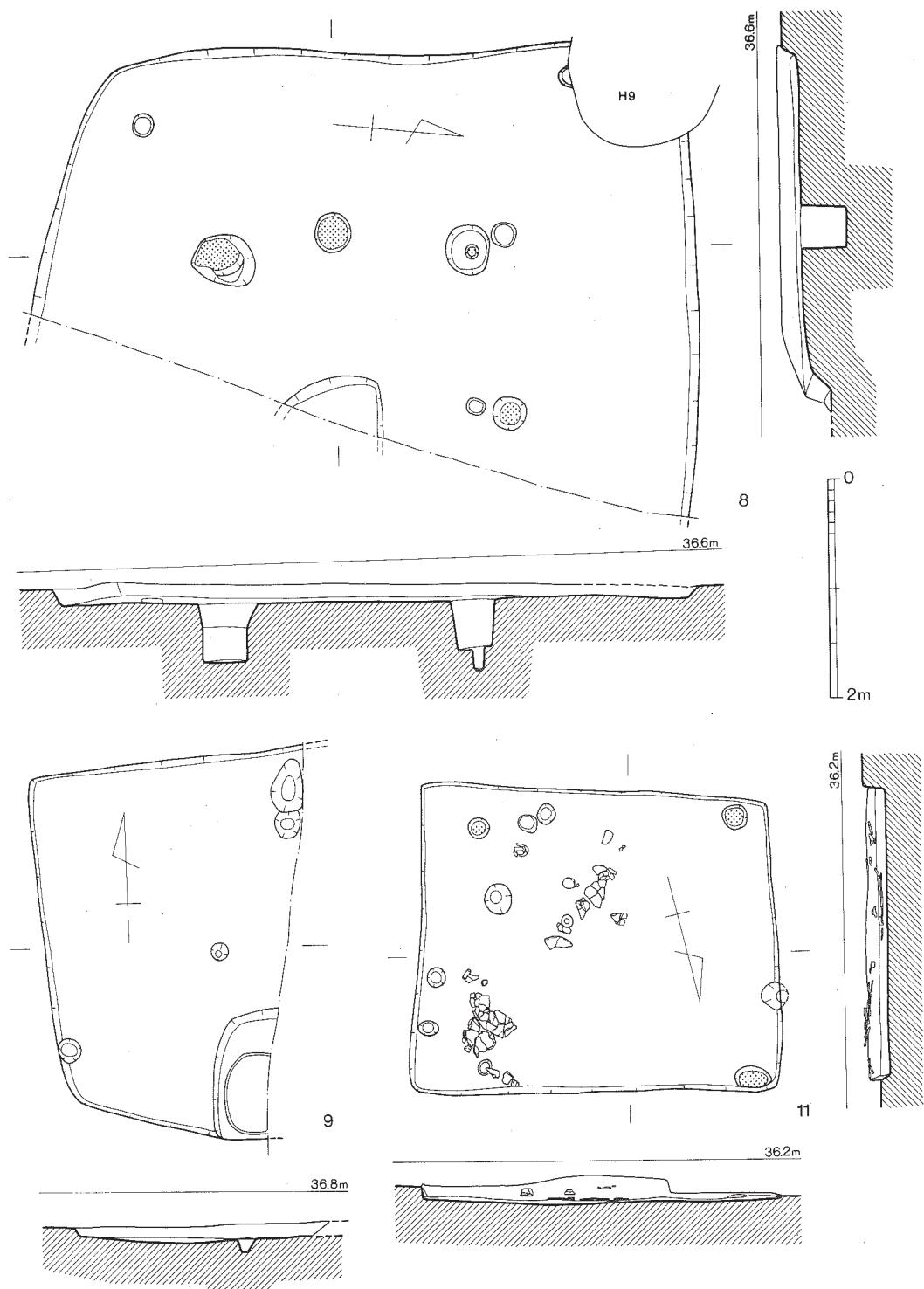
13号住居跡の北西側に隣接する長辺5.5m、短辺5.0mの長方形竪穴式住居跡である。長軸方向はN-56°-Eである。壁高は15cm前後だが、西壁はかなり削平されている。東、北壁沿いには、幅8cmの浅い溝がL字状に巡る。柱穴らしき小穴は多いが、規格性は窺えない。南壁近くには、一辺80cm~1.0m、深さ18cm程の土壙が設けられているが、床面では、炭や焼土は検出されなかった。遺物は覆土より、弥生土器片、及び石鏸、石剣片、砥石、水晶が各一点出土した。



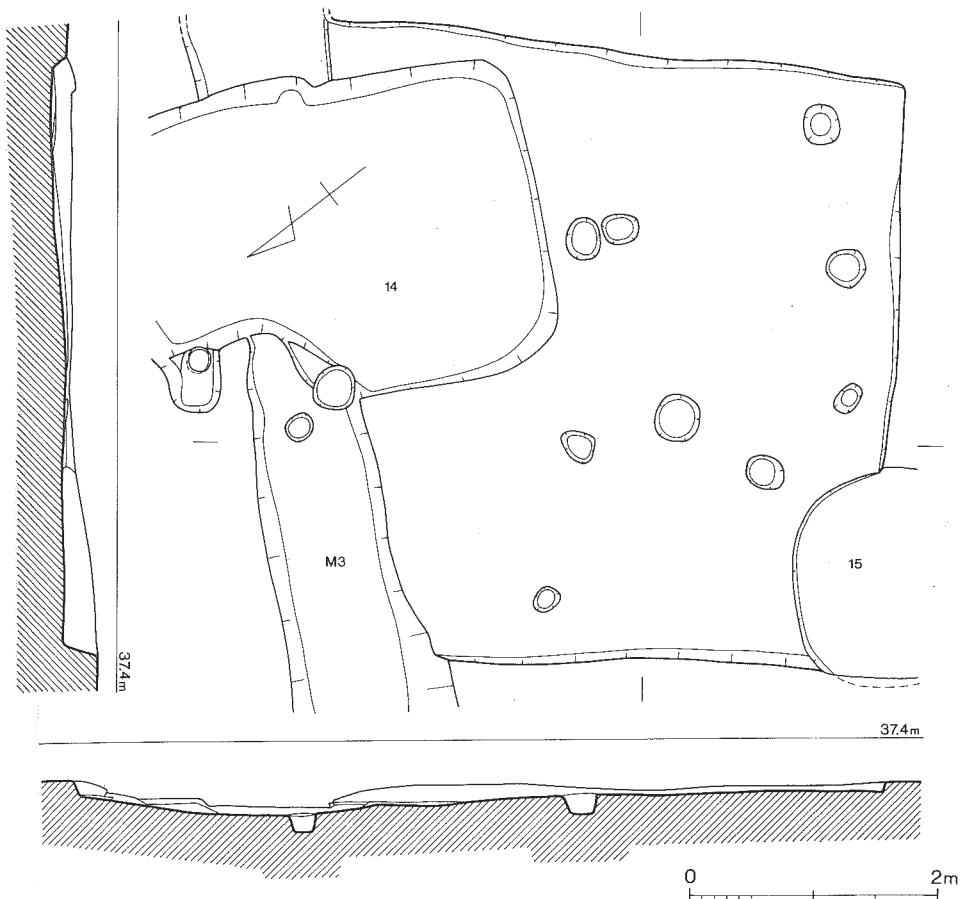
第16図 4,5号住居跡実測図 (1/60)



第17図 6,7号住居跡実測図 (1/60)



第18図 8,9,11号住居跡実測図 (1/60)



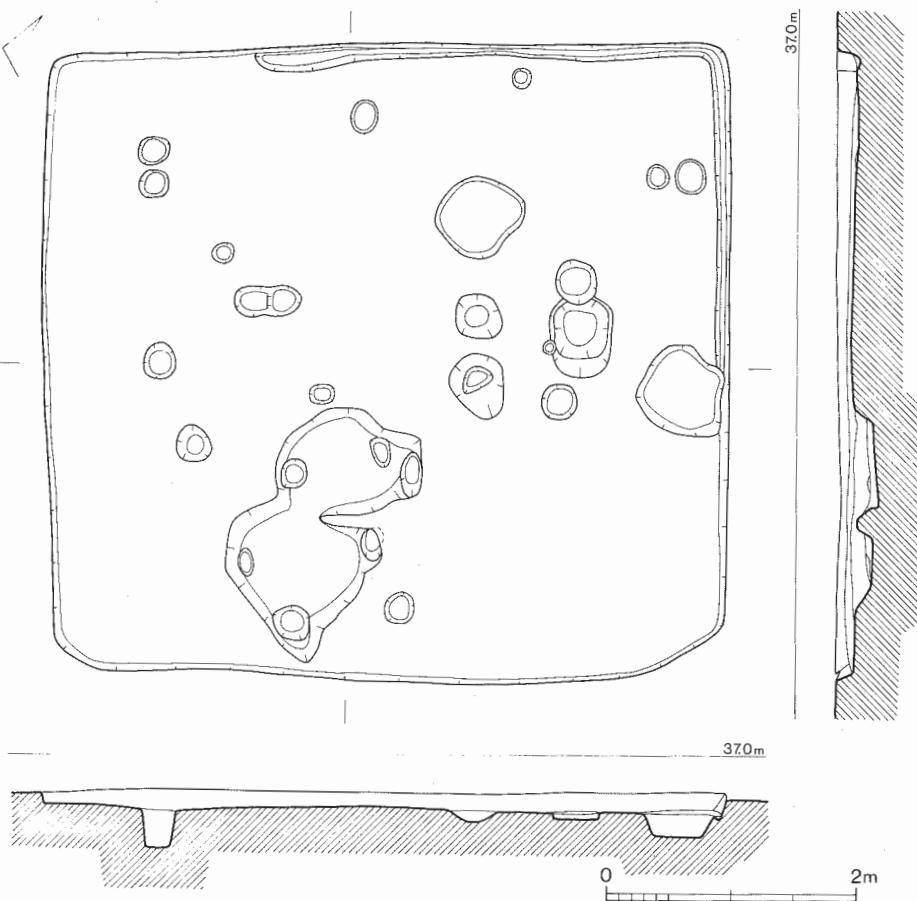
第19図 10号住居跡実測図(1/60)

13、14号住居跡（図版9-4、第21図）

調査区の南東隅で検出した竪穴式住居跡である。検出時は、1軒の楕円形住居跡としていたが、調査中に二つの住居跡が重複していることが判明した。しかし切り合い等は不明である。北側を13号、南側を14号住居跡とした。

13号住居跡は、長径7.6m、短径7.0m程の円形プランと思われる。壁高は10cm前後である。北側に幅15cm前後、高さ10cm程のベット状の段を有するが、西へ行くにしたがい不明瞭となり、止絶える。周溝は検出されなかった。主柱穴は、方形に並ぶ4本（1～4）と思われる。床面中央には、炭や焼土を伴う1.1m×0.8m、深さ70cm程の楕円形土壙がある。

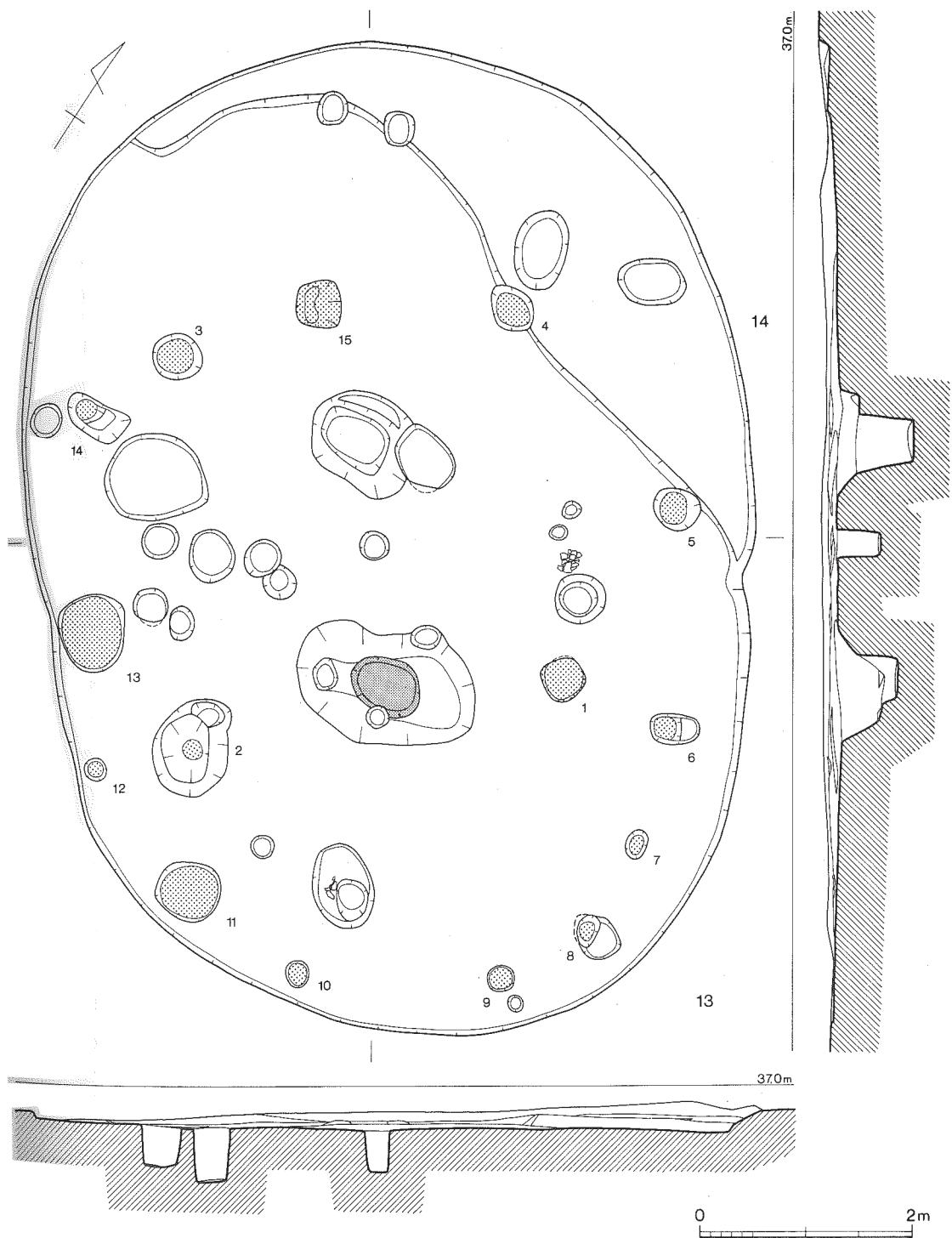
14号住居跡は、長径6.8m、短径6.6m程の円形プランと思われる。柱穴は、壁沿いに楕円状



第20図 12号住居跡実測図 (1/60)

に並ぶ12本（4～15）と思われる。床面中央には、1.7m×1.0m、深さ50cm程の楕円形土壙があるが、炭や焼土などは検出されなかった。

13、14号住居跡に伴う遺物としては、弥生土器片、覆土中より石庖丁片2点、紡錘車片1点、石鏃1点、石斧片1点、砥石1点が出土した。



第21図 13、14号住居跡実測図(1/60)

(3) 土 壤

調査を行った竪穴は、約120を数える。そのうち51基を貯蔵穴とした。残りの竪穴の中には浅いものや不明確なものが多く、平面形は、円形、長方形等がある。ここでは37基を土壤とした。出土遺物は少なく、性格は不明である。計測値は一覧表とした。

第3表 土 壤 一 覧 表

番号 (P)	主軸方向	平面形	上 面	底 面	深さ (cm)	出 土 遺 物		備 考	旧番号
			計測値(cm)	計測値(cm)		土 器	石器、その他		
1	N-60°-W	隅丸長方形	172×104	143× 88	30				P-66
2					179			P-4より新	P-84
3	N-17°-E	長 方 形	310×(158)	264×116	52	11	71、90	P-5、6より古	P-83
4	N-11°-E	長 方 形	×126	×100	64		71、119	P-6より古 P-4、8より新	P-85
5	N-2°-W	長 方 形	206×160	176×138	106	180	89	P-7より古 P-4、5より新	P-87
6	N-6°-W	長 方 形	110×(104)	82× 75	66	11		P-6より新	P-86
7	N-15°-E	隅丸長方形			27			P-5、9より古	P-76
8	N-14°-E	長 方 形	×136	×110	75			P-10より古 P-8より新	P-79
9	N-15°-E	不整長方形	242×210	214×168	78			P-9より新	P-78
10		円 形	145×138	119×116	34				P-51
11	N-41°-W	不整楕円形	132×110	104× 66	36		91、92		P-114
12	N-65°-W	長 方 形	225×116	203×106	13				P-65
13		不整長方形	186×184	130×115	34				P-75
14	N-15°-E	隅丸長方形	190× 61	168× 50	17				P-24
15	N-69°-W	不整長方形	178×100	152× 92	34	182	10		P-62
16	N-8°-E	楕 圓 形	147×112	95× 77	58				P-43
17	N-17°-E	長 方 形	166× 43	105× 97	76				P-34
18	N-67°-W	不 定 形	255×160	230×122	44				P-46
19		不 整 方 形	117×112	80× 78	74			P-21、22より新	P-26
20	N-45°-E	長 方 形	172×136	158×111	52	183		P-20より古	P-56
21		不 整 方 形	108×102	99× 96	47			P-20より古	P-68
22		不 定 形			57			P-24より古	P-49
23	N-70°-E	不整長方形	194×152	176×146	33			P-23より新	P-38 P-48
24	N-23°-E	長 方 形	148×142	132×122	64				P-22
25		不 整 圓 形	144×140	110×106	89				P-47
26		隅 丸 方 形	138×132	78× 66	76				P-33

27		楕円形	114×101	105× 81	69			貯31より新	P-36
28		不整円形	138×122	95× 91	67				P-37
29	N-20°-E	長方形	121×112	102× 97	45				P-54
30	N-80°-W	長方形	118×100	94× 79	44				P-55
31		楕円形	160×149	144×135	16				P-95
32	N-20°-W	長方形	192×108	178×100	29				P-39
33	N-75°-W	不整長方形	156×111	130× 87	46				P-25
34	N-71°-W	不整長方形	126×118	115× 96	37			貯37より古 貯38より新	P-89
35	N-67°-W	隅丸長方形	140×124	90× 92	41				P-14
36	N-18°-E	長方形	(133)× 90	(116)×67	28				P-97
37		楕円形	133×120	124×105	46			貯49より新	P-105

() 内は復原値

1号土壙(第22図)

隅丸長方形を呈し、深さ30cmと浅い、若干の弥生土器片が出土した。

15号土壙(第22図)

不整長方形プランを有す浅いものである。底面は東へやや傾斜し、北東隅には径45cm、深さ20cm程のピットがある。底面中央部に弥生土器の甕の大半が堆積していた。

35号土壙(第22図)

平面形は隅丸長方形を呈する。壁面はゆるやかに傾斜し、底面中央には径15cm、深さ20cm程のピットがある。出土遺物はない。

(4) 溝状遺構

1号溝(第22図)

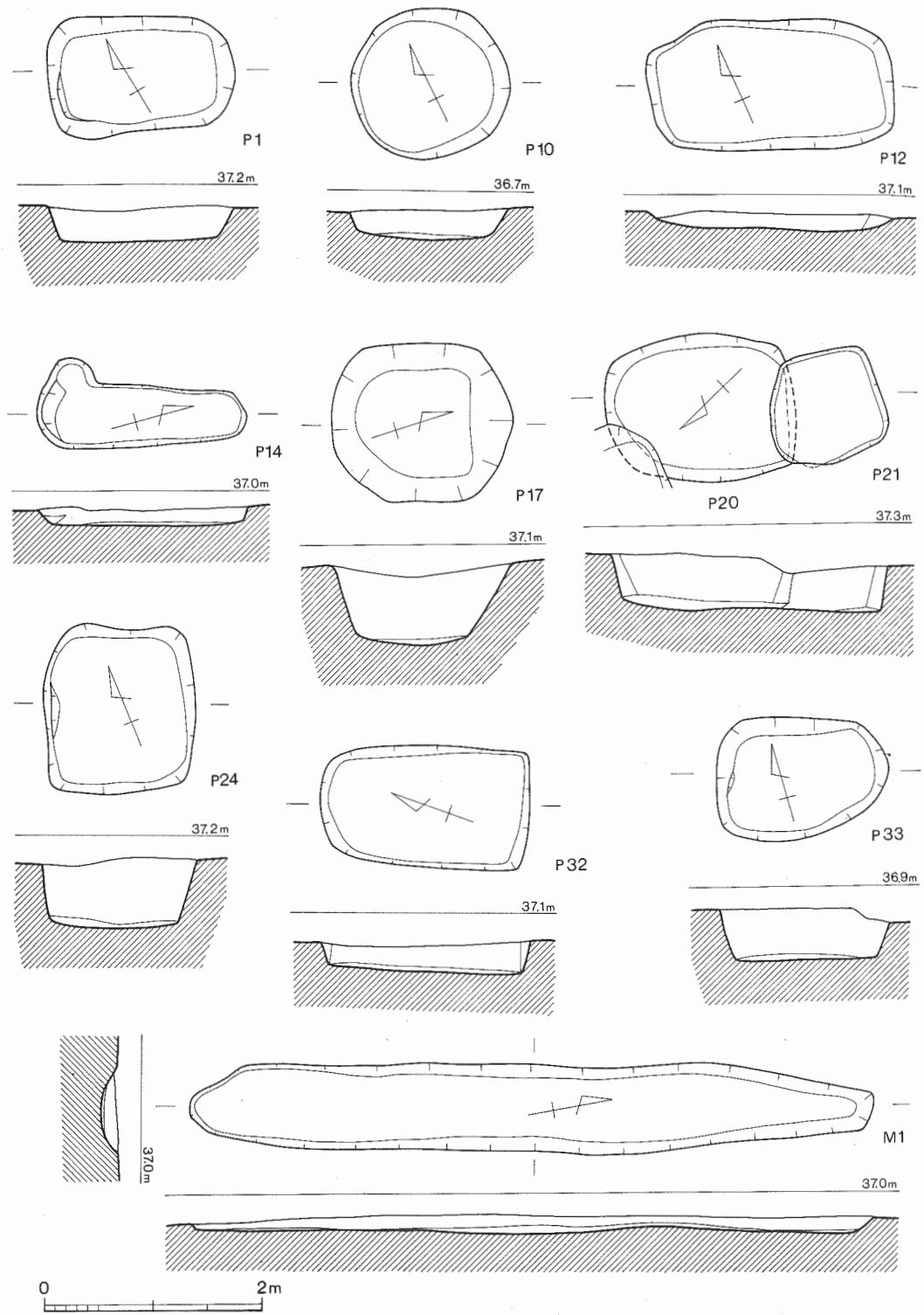
全長6.31m、上幅約0.8m、底幅約0.6m、深さ19cm前後を測る。底面は平らで、断面はU字状である。若干の弥生土器片が出土した。長軸方向はN-9°-Eである。

2号溝

全長4.37mで上幅1.24m、底幅1.0m、深さ18cm前後を測る。底面は南へやや傾斜し、長軸端はゆるやかに立ち上がる。断面は逆台形状を呈する。長軸方向はN-5°-Eである。

3号溝

一部未掘だが全長13m、上幅1.5m～0.8m、底面幅0.8m～0.5mを測る。底面は西から東へ傾斜しており、深さは西端で35cm、14号貯蔵穴との接点付近では50cm前後を測る。断面は逆台形状を呈する。遺物は、多くの弥生土器片や川原石、石斧片が出土した。長軸方向はN-60°-Wである。溝は、10号住居跡及び14号貯蔵穴に切られる。



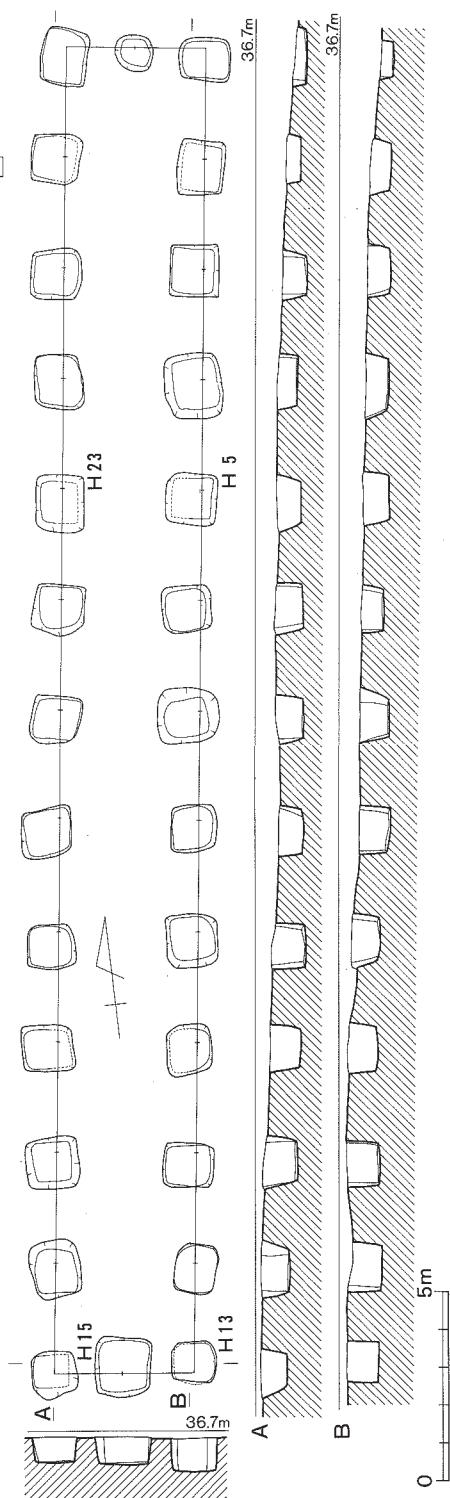
第22図 土壌・溝状遺構実測図 (1/60)

(5) 掘立状遺構

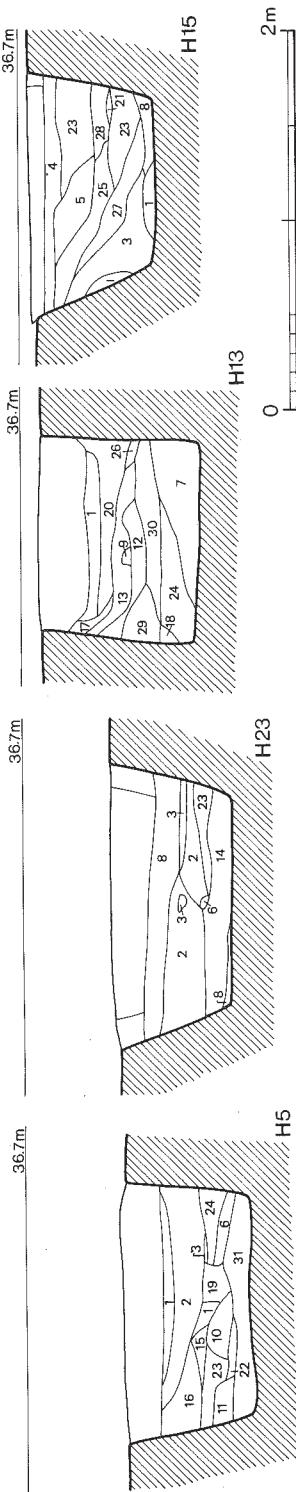
(図版2、第23・24図)

調査区の東端で検出された2間×12間の南北□に長い掘立状遺構である。主軸方向はN-7°-Eである。掘り方は大きいもので1.6m×1.5m、小さいもので1.2m×1.0m、平均すると1.3m×1.25mの方形形状となる。地形が傾斜しているため北側では浅いが、同一レベルからの深さは、80cm前後ではほぼ均一である。柱根や柱痕跡が明らかなものではなく柱間距離は不明である。均等割りによる心々間距離は、桁行2.9m、梁行1.82mとなる。埋土は固く締っており、攪乱は受けていない。

出土遺物としては弥生土器の小破片があるのみで、他の出土遺物は見られない。時期は不明だが弥生時代後期の住居跡を切っており、上限はそれ以降の時期に属するものと言える。



第23図 掘立状遺構実測図 (1/200)



1. 明褐色土
2. 暗褐色土
3. 黄褐色土
4. 暗褐色土 (土器片含む)
5. 明褐色土
6. 黄褐色土
7. 暗黄褐色土
8. 灰褐色土
9. 黄色土
10. 褐色土+黄褐色土 (土器片含む)
11. 褐色土+ブロック状明黄褐色土
12. 褐色土+ブロック状黄褐色土
13. 褐色土+灰褐色土+ブロック状黄褐色土
14. 暗褐色土+ブロック状黄褐色土 (土器片含む)
15. 明褐色土+褐色土
16. 明褐色土+黄褐色土
17. 明褐色土+灰褐色土
18. 明褐色土+灰褐色土+黄色土
19. 褐色土+黄褐色土
20. 褐色土+灰褐色土
21. 褐色土+黄土色
22. 暗褐色土+明黄褐色土+暗黄褐色土
23. 暗褐色土+明黄褐色土+暗黄褐色土
24. 灰褐色土+黄褐色土
25. 暗褐色土+暗黄褐色土
26. 暗褐色土+黄色土
27. 明黄褐色土+暗黄褐色土
28. 灰褐色土+暗黄褐色土
29. 暗黄褐色土+灰褐色土
30. 灰褐色土+黄色土
31. 明黄褐色土 (地山)

第24図 堀立状遺構土層断面図 (1/40)

3. 遺 物

(1) 土 器

(1) 貯蔵穴出土土器

1、2号貯蔵穴（図版10、第25図）

1は、口縁部が直角気味に屈折し、肥厚する甕口縁片である。胴部内面は磨き、口縁内外面はナデ、胴部外面はハケを丁寧に施す。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は茶褐色を呈する。2は、朝顔状に小さく外反する壺の口縁である。口径11.9cmを測る。頸部には、2条の沈線を廻らし、一部丹が残っていた。口縁部及び頸部内面はミガキ、胴部内面はナデを施す。口縁端部内外面はナデ調整で、外面には丹が塗られている。口縁及び頸部外面はナデ後ミガキ、胴部外面はミガキを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は褐色を呈する。

3号貯蔵穴（第25図）

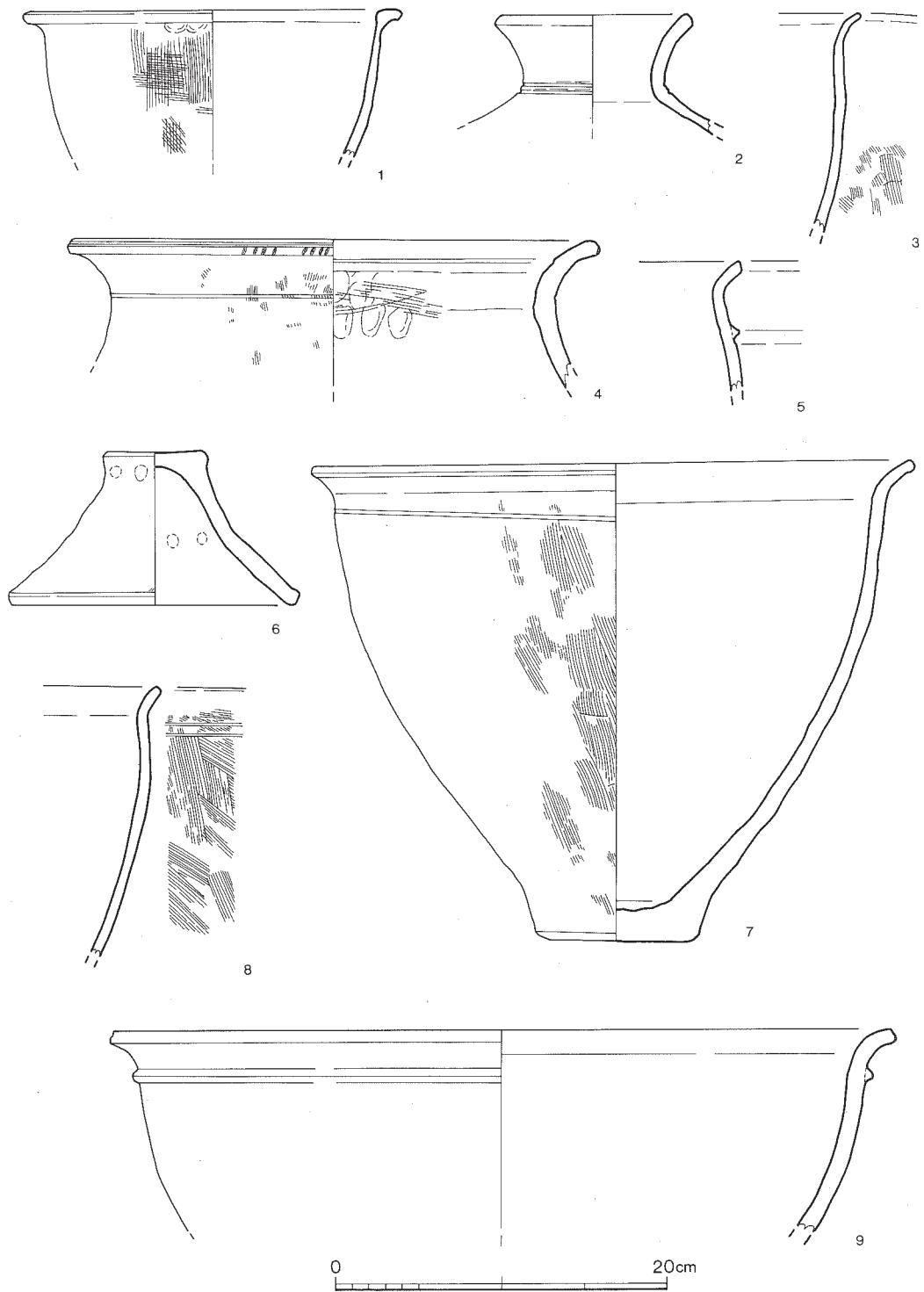
3は、ゆるやかに外反する甕の口縁片である。外面には、一部ハケ及び指圧痕が見られるが、器面は磨滅が著しい。胎土は粗砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は淡黄褐色、外面は黄褐色で、胴部が黒化している。4は、口縁内面に段を有する壺の口縁である。復原口径32.3cmを測り、頸部には1条の沈線を廻らす。口端部には刻目を施す。口縁部内外面はナデで、胴部は内面が荒いハケ後ミガキを施し、1部指圧痕が残る。外面はハケ後ミガキを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は黒褐色、外面は褐色を呈する。5は、ゆるく外反する甕口縁片で、三角凸帯を廻らす。器面は磨滅が著しく、調整は不明である。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は黄褐色を呈する。

4号貯蔵穴（図版10、第25図）

6は、器壁の厚い蓋で、裾は広がらない。裾部径17.6cm、つまみ部径6.4cm、器高9.25cmを測る。調整は内面がミガキ、つまみ部内側はナデで、一部指圧痕が見られる。外面は口縁端部がナデ、他はミガキで、つまみ部には指圧痕が残る。胎土は細砂粒を多く含む、焼成は良く、内面は橙褐色で、裾部は黒化している。外面は黄褐色で、一部赤変、黒化している。

6号貯蔵穴（図版10、第25図・26図）

7は強く外反する鉢の口縁片で、口縁下には一条の沈線が廻る。口径36.2cm、底径9.9cm、器高29cmを測る。内面はナデ、外面は胴部がハケ、底部はハケ後ミガキを施す。胎土は細砂を含む。焼成は良く、器面は黄褐色を呈する。8は、ゆるやかに外反する甕の口縁片で、口縁下には二条の沈線を施す。外面はハケ後一部ナデ、口縁部にはナデを施す。内面は口縁部がハケ後ミガキ、胴部にはミガキを施す。胎土は細砂粒を含む。焼成は良く、内面は橙褐色、外面は茶褐色で、一部煤が付着している。9は、短かく屈曲する甕口縁で、磨滅気味の凸帯が廻る。



第25図 貯蔵穴出土土器実測図 1 (1/4)

復原口径47.3cmを測る。内面は磨滅が著しい。外面は口縁部がナデで指圧痕が残る。胴部はミガキを施す。胎土は粗砂粒を含む。焼成は良く、内面は灰黄色、外面は橙褐色を呈する。10は、短かく外反する甕口縁片である。口縁下には沈線を廻らし、底部は穿孔されている。復原口径21.2cm、底径6.7cm、器高22.1cmを測る。内面はミガキ、外面はナデを施す。胎土は粗砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は淡褐色、外面は褐色で、内外面とも一部黒化している。

11は、短かく外反する甕口縁片で、3、6号土壙出土との接合資料である。口縁下には沈線を廻らす。復原口径29.0cmを測る。口縁部内外面はナデ、胴部はミガキを施す。胎土は細砂粒を含む。焼成は良く、内面は茶褐色、外面は橙褐色である。

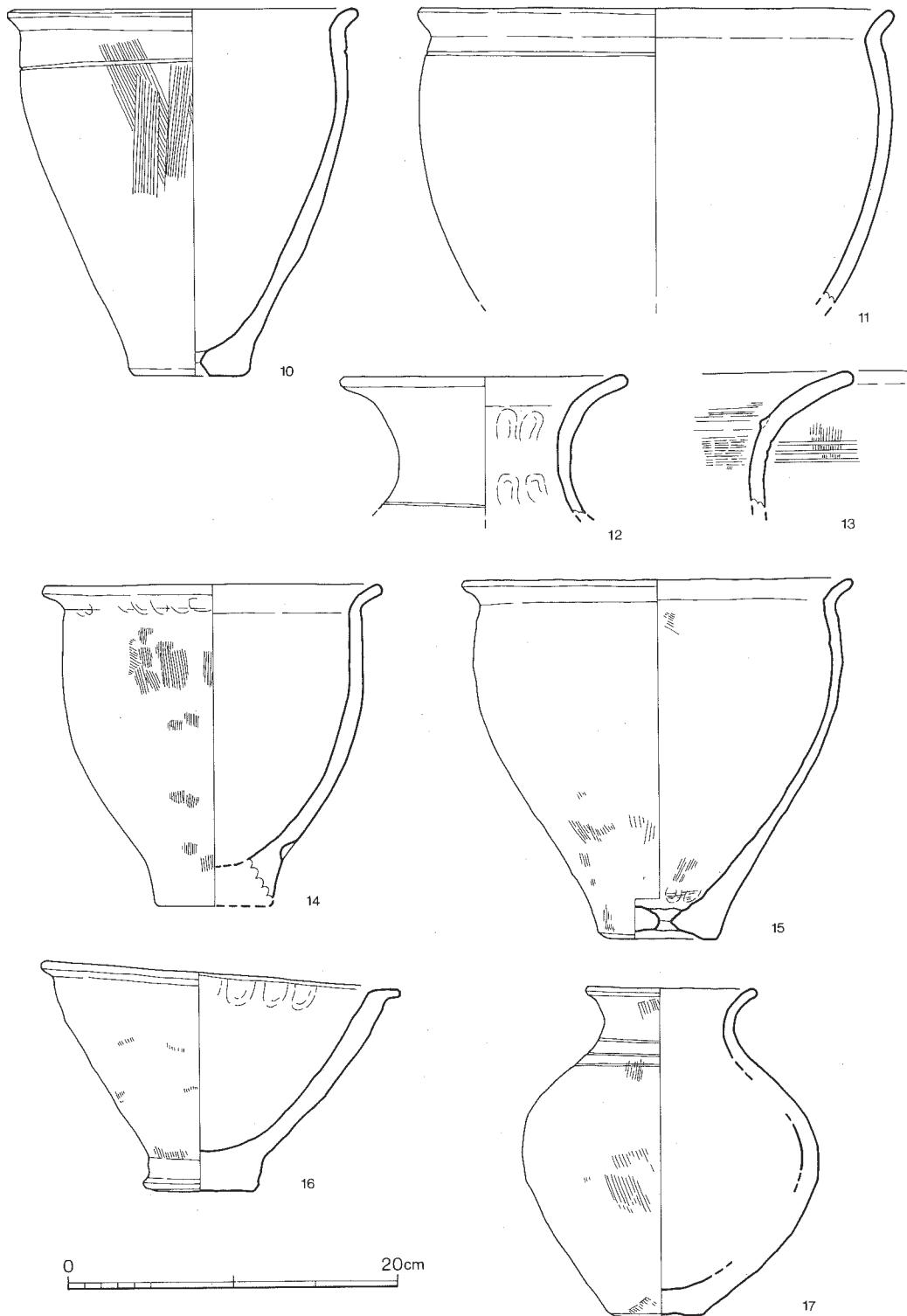
7号貯蔵穴（図版10、第26図）

12は、朝顔状に開く壺口縁で、頸部には沈線が廻る。復原口径17.4cmを測る。器面は磨滅が著しい。胎土は細砂粒を多く含む、焼成は良く、内面は橙褐色、外面は褐色を呈する。13は、朝顔状に開く壺口縁片である。頸部外面には三条の沈線、内面には凸帯を施す。内面は口縁部がミガキ、頸部はハケ後ミガキを、外面はハケ後ミガキを施す。胎土は粗砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は褐色である。14は、底部の厚い甕で、復原口径20.6cm、器高19.4cmを測る。内面はミガキ、外面はハケを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は橙褐色、外面は淡灰褐色である。底部側面には穿孔途中と思われる凹がある。15は、底部穿孔の甕である。復原口径23.7cm、底径7.6cm、器高21.9cmを測る。器面は磨滅が著しい。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は淡黄褐色で、外面は赤変している。16は、口縁が直角に屈曲する鉢である。復原口径21.9cm、底径7.1cm、器高14cmを測る。口縁部のナデ調整以外は、内外面ともミガキを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は橙褐色、外面は淡茶色である。

8号貯蔵穴（図版10、第26・27図）

17は、ほぼ完形の壺で、復原口径10.4cm、底径5.7cm、器高20cmを測る。胴部最大径は中位よりやや上にあり、19cmを測る。頸部下には三条の沈線を廻らす。器面は磨滅している。胎土は細砂粒を含む。焼成は良く、内面は灰褐色、外面は淡黄褐色で一部、赤変、黒化している。18は、強く外反する甕口縁片で、器面は著しく磨滅している。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は白黄褐色、外面は淡褐色を呈する。19は、ほぼ直角に屈曲する甕口縁片である。外面に一部ハケ及び指圧痕が見られるが、器面は磨滅が著しい。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は橙色を呈する。20は、ほぼ直角に屈曲する甕口縁片で、内側に稜を作る。器面は磨滅が著しい。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は黒灰色、外面は橙灰褐色である。21は、高杯の脚部で、杯部との間に凸帯を廻らす。杯部はナデ、脚部はミガキを施す。胎土は細砂粒を含む。焼成は良く、器面は褐色を呈する。22は、双耳状突起を有する蓋の完形品で、径10.6cm、器高1.9cmを測る。器面は磨滅が著しい。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良く、赤橙色を呈する。

10号貯蔵穴（図版11、第27・28図）

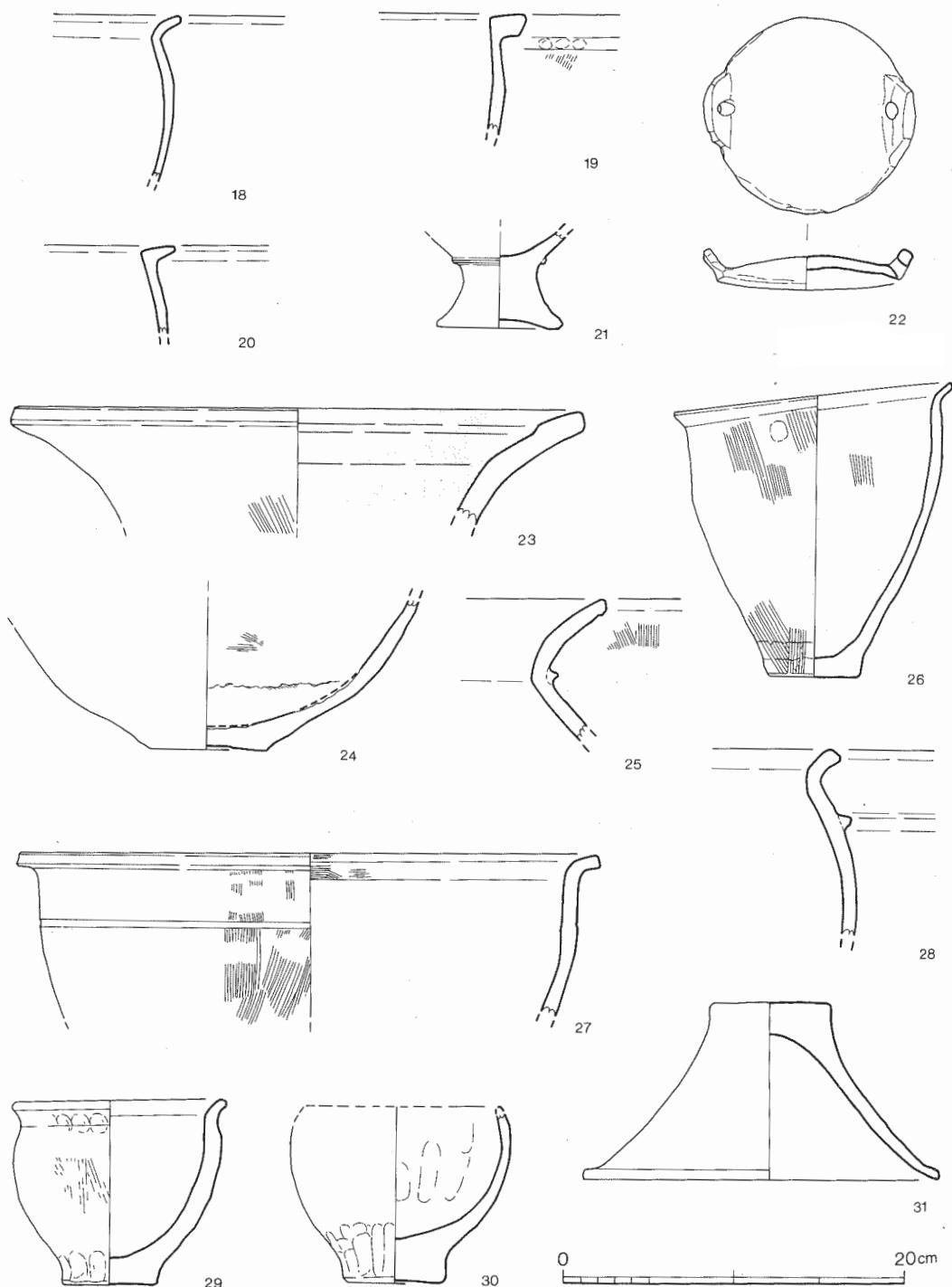


第26図 貯藏穴出土土器実測図 2 (1/4)

23は、口縁部の内側に段を有する壺口縁片である。口縁端部外面及び口縁部内面には、丹が塗布されている。復原口径34.0cmを測る。内面はミガキ、外面はハケを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は橙褐色を呈する。24は、平底の壺底部で、底径6.7cmを測る。内面は磨滅が著しい。外面はミガキで、指圧痕が残る。胎土は粗砂粒を含む。焼成は良く、内面は橙色、外面は黄白褐色で、底部付近は黒化している。25は、くの字形に開く壺口縁片で、頸部に三角凸帯を廻らす。内面はミガキ、外面は口縁端部はナデ、口縁はハケ後ナデ、胴部はミガキを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は褐色を呈する。26は、小形の甕片で、復原口径16.5cm、底径5.1cm、器高16.4cmを測る。器面はハケ、底部はナデを施す。胎土は細砂粒を含む。焼成は良く、内面は淡黄褐色、底付近は黒灰色、外面は褐色で、1部赤変している。27は、強く外反する甕口縁片で、沈線を廻らす。復原口径34.2cmを測る。口縁部はハケ後ナデ、胴部内面はミガキ、外面はハケで、一部ナデを施す。焼成は良く、器面は明褐色を呈する。28は、短かく外反する甕口縁片で、三角凸帯を廻らす。口縁部はナデ、胴部内面はミガキ、外面凸帯下はミガキを施す。胎土は細砂粒を含む。焼成は良く、内面は黄白褐色、外面は淡褐色を呈する。29は、ほぼ完形の小鉢である。口径12.6cm、底径5.6cm、器高11cmを測る。内面はナデ、外面はハケ後ナデを施す、口縁下・底部側面には、指圧痕が残る。胎土は細砂粒を含む。焼成は良く、内面は黄橙褐色、外面は茶褐色で、一部大きく黒化している。30は、口縁部を欠く小鉢で、底径6cm、現存器高10.2cmを測る。内面は磨滅が著しい。外面はハケ後ミガキで、底部側面に指圧痕が残る。胎土は砂粒を多く含む、焼成は良く、器面は白褐色を呈する。31は、裾のやや広がる蓋である。復原縦部径21cm、器高10.4cmを測る。つまみ部内面にハケ、ナデが見られるが、磨滅が著しい。胎土は粗砂粒を含む。焼成は良く、内面は橙褐色、外面は黄白褐色である。32は、やや上げ底を呈する甕で、底部は厚い。口径25.7cm、復原底径7.4cm、器高23.2cmを測る。外面に1部ハケが見られるが、磨滅が著しい。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は灰褐色、外面は橙褐色で、底付近は赤変している。

11号貯蔵穴（図版11、第28・29図）

33は、大形壺片で、著しく欠損している。口縁部内面に段を作り、頸部下に凸帯を廻らす。復原で、口径32.6cm、底径13.4cm、器高60.9cmを測る。内面は磨滅している。外面は口縁部がハケ後ミガキ、胴部はミガキを施すが、磨滅が著しい。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は茶褐色で、外面は赤変している。34は、小形壺の胴部片である。頸部下に凸帯を廻らし、沈線との間に羽状文、沈線下には鋸歯文を廻らす。胴部最大径は15.4cmを測る。内面はナデで、指圧痕が残る。外面はミガキを施す。胎土は細砂粒をやや含む。焼成は良く、器面は黒色を呈する。35は、口縁が短かく外反する甕で、沈線を廻らす。底部は厚手で、ややすぼり気味である。復原口径26.5cm、底径8.6cm、器高30cmを測る。内面はナデ、外面はハケを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は淡褐色、外面は褐色で、一部赤変している。



第27図 貯蔵穴出土土器実測図 3 (1/4)

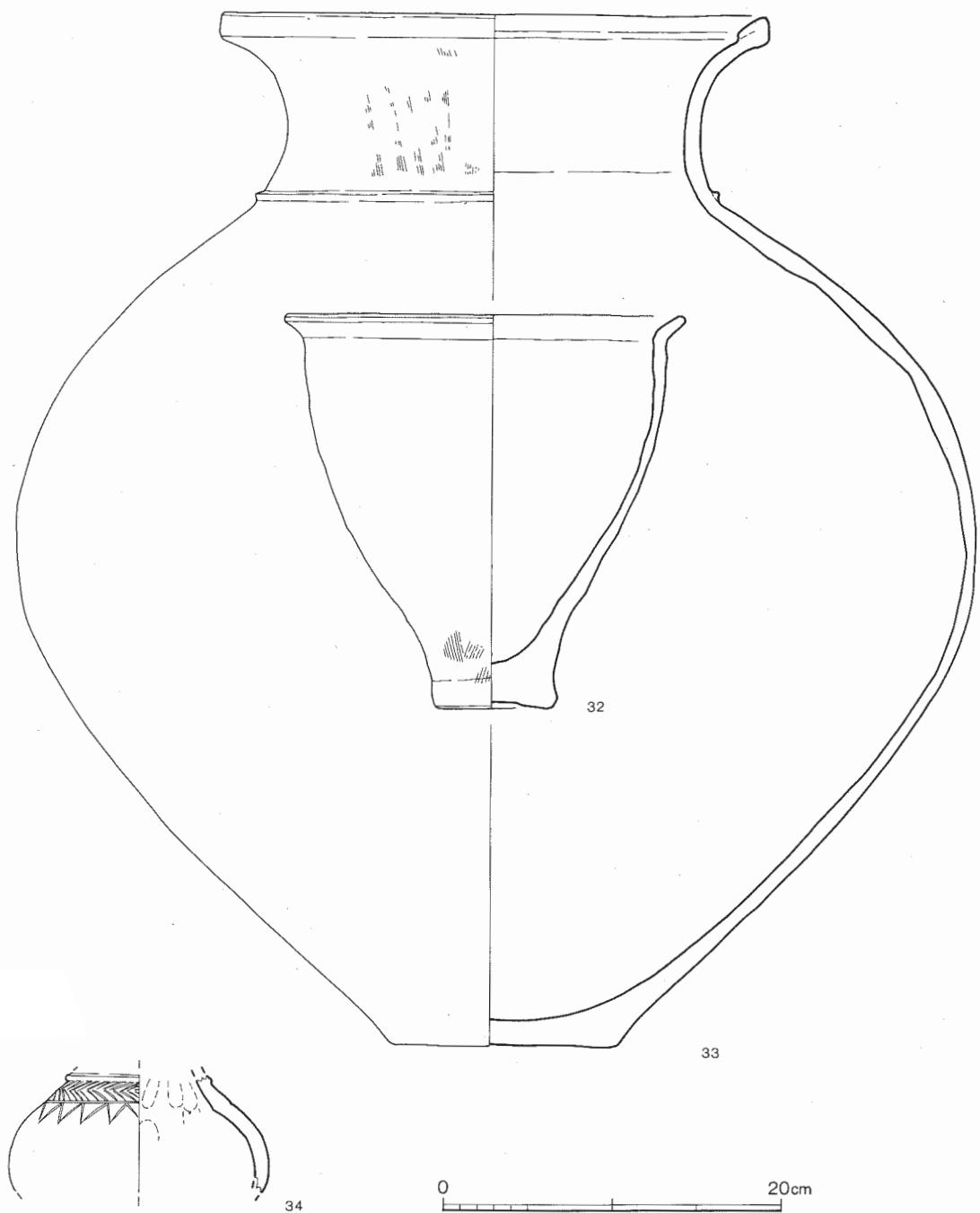
36は、ほぼ完形の甕で、口径23.9cm、底径8.1cm、器高26cmを測る。内面はミガキ、外面はハケ、口縁部はナデを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は黄褐色だが、外面同様赤変している。

14号貯蔵穴（図版11、第29図）

37は、朝顔状に開く壺口縁片で、口縁部は平坦化し、内側に段を作る。復原口径25.0cmを測る。器面はミガキを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は黄橙色、外面は黄褐色を呈する。38は、やや上げ底気味の壺底部で、底径7.7cmを測る。器面はミガキを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は茶褐色、外面は褐色を呈する。39は、完形に近い小壺で、頸部に三本の沈線を廻らし、その下に弧文を施すが、連続しない。口径11.4cm、復原底径6.6cm、器高17.4cmを測る。最大径は胴部中位付近にあり17.4cmを測る。内面はナデ、外面は一部ミガキが見られるが、磨滅が著しい。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は褐色、外面は黄褐色を呈する。40は、ゆるく外反する口縁部に刻目を施す甕口縁片である。口縁下には二条の沈線を廻らす。内面はナデ、外面は口縁部がナデ、胴部はハケを施す。胎土は砂粒をやや多く含む。焼成は良く、内面は黄褐色で、一部黒化している。外面は褐色で、部分的に煤が付着している。41は、小さく屈曲する甕口縁片である。内面は磨滅している。口縁部はナデ、胴部外面はハケを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は茶褐色、外面は灰褐色を呈する。42は、肥厚する甕口縁片で、内面に稜を作る。内面及び口縁下はナデ、胴部外面はハケを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は淡黄褐色を呈する。43は、平底の甕底部で、底径7.0cmを測る。内面はミガキ、外面はハケを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は赤橙褐色を呈する。44は、やや上げ底を呈す厚手の甕底部で、底径7.7cmを測る。内面はナデ、外面はハケを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は黒褐色、外面は橙褐色を呈する。45は、上げ底の甕底部で、底径6.2cmを測る。内面は磨滅している。外面はハケを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は淡黄白褐色、外面は黄橙色を呈する。

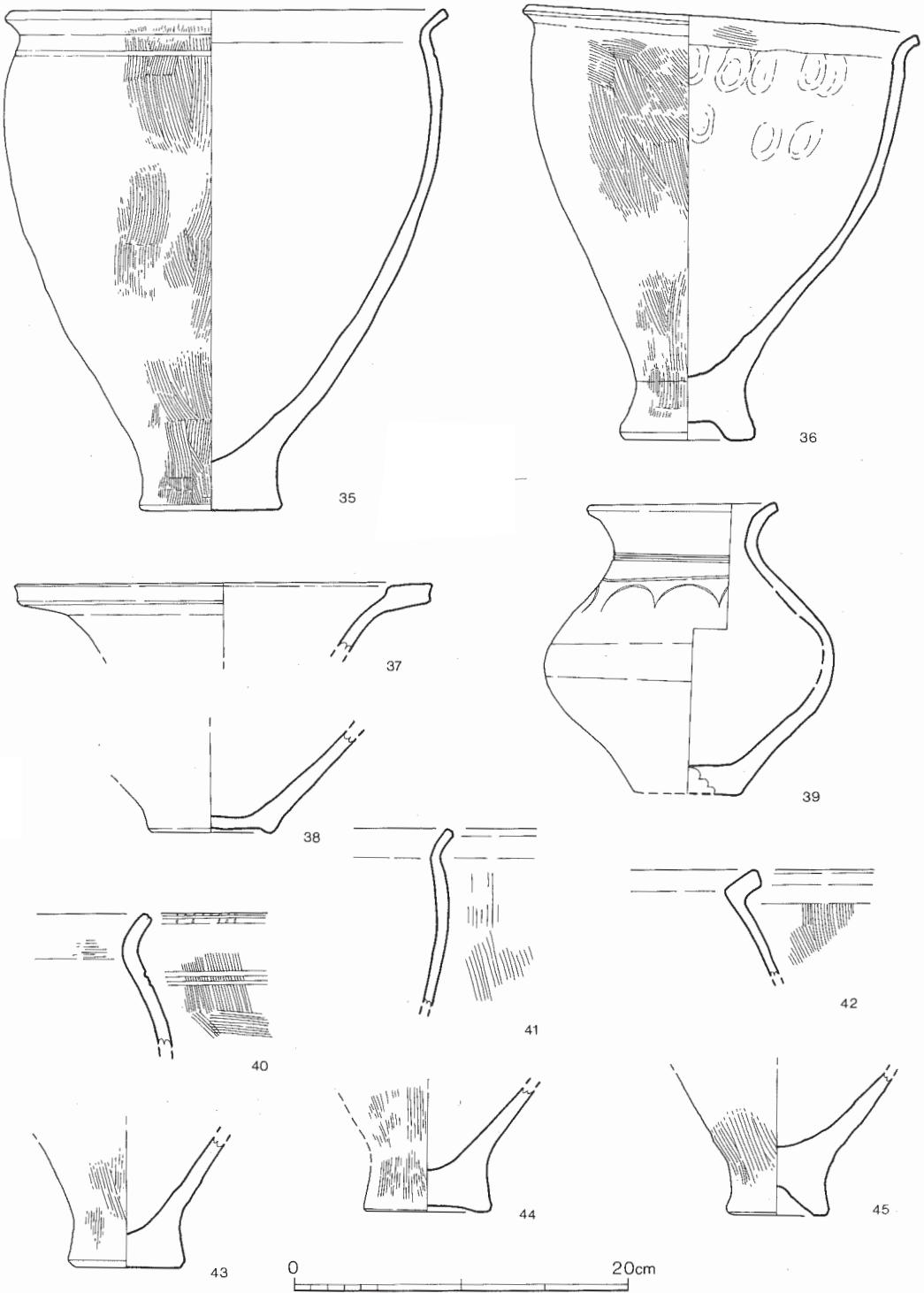
16号貯蔵穴（図版12、第30・31図）

46は、朝顔状に開く完形に近い壺で、口縁部は平坦面を作る。胴部には二条の凸帯を廻らす。口径22.4cm、底径8.2cm、器高34.2cmを測る。最大径は胴中位より上にあり23.4cmを測る。内面は磨滅している。外面は磨滅気味だが、一部ミガキが見られる。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は黄褐色で、底部側面は黒化している。47は、小形の広口壺である。口縁部は肥厚し、胴部より外へ広がる。胴部には三角凸帯を廻らす。復原で口径13.8cm、底径4.0cm、器高10.6cmを測る。胴部最大径は中位にあり、12.9cmを測る。口縁部はナデ、胴部はミガキを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は茶褐色、外面は暗褐色を呈する。48は、広口小壺の完形品である。口縁部は屈曲し内側に不明瞭な稜をつくる。胴部には不明瞭な凸帯を



第28図 貯蔵穴出土土器実測図 4 (1/4)

廻らす。調整はナデで、胴部内面には指圧痕が残る。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は褐色で、外面は一部黒化している。49は、口縁部を欠く広口小壺である。胴部はやや膨らみ、凸帯を廻らす。胴部最大径12.4cm、底径3.0cmを測る。内面はナデ、外面はミガキを施す。胎土は細砂粒を含む。焼成は良く、内面は橙褐色、外面は褐色で、一部黒化している。50は、ゆるやかに立ち上がる頸部に、平坦の口縁がつく壺である。胴部には二条の凸帯が廻る。復原で口径21.05cm、底径6.2cm、器高31.8cmを測る。胴部最大径は中位よりやや上にあり28.4cmを測る。器面は磨滅している。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は茶褐色を呈する。51は、朝顔状に開く壺口縁片で、頸部に三角凸帯を廻らす。復原口径25.6cmを測る。内面は口縁部にハケ、頸部はミガキ、外面は口縁部がナデ、頸部以下はミガキを施す。胎土は細砂粒をやや多く含む。焼成は良く、内面は橙褐色、外面は淡褐色を呈する。52は、口縁部が平坦面を作り、短かく内側へ突き出す壺口縁である。頸部には沈線、凸帯を廻らす。凸帯及び、口縁端部外面には丹が塗布されている。口縁部はナデ、頸部にはミガキを施す。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は淡褐色、外面は暗褐色を呈する。53は、朝顔状に開く壺口縁で、内側へ若干突き出す。口径29.2cmを測る。口縁部はナデ、頸部はミガキを施す。胎土は細砂粒を若干含む。焼成は良く、器面は褐色を呈する。54は、強く外反する甕口縁片で、三角凸帯を廻らす。復原口径46cmを測る。内面は磨滅している。外面は口縁がナデ、凸帯下はハケを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は黄褐色、外面は褐色で、一部黒化している。55は、直角に近く屈曲した甕で、底部を欠く。口径25.5cmを測る。内面はナデ、外面はハケを施す。胎土は粗砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は赤橙色、外面は赤橙色、黒褐色を呈する。56は、強く屈曲し、端部が肥厚する甕口縁片である。器壁は薄く、沈線を廻らす。内面はナデ、外面はハケを施す。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は暗褐色を呈し、外面には煤が付着している。57は、上げ底を呈する甕底部で、底径7.3cmを測る。内面はナデ、外面はハケを施す。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は淡茶褐色、外面は明黄白褐色を呈する。58は、やや上げ底を呈する甕底部で、底径7.2cmを測る。内面はナデ、外面はハケを施す。底部側面には穿孔を施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は褐色、外面は黄褐色を呈する。59は、やや上げ底を呈する甕底部で、中央に穿孔を施す。底径8cmを測る。内面は磨滅している。外面はハケを施す。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は黄橙色、外面は赤橙色を呈する。60は、高杯の脚部で、底径9.3cm、脚高5.4cmを測る。内面はナデ、外面は磨滅している。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、杯部は淡黄褐色、脚部は黄灰褐色を呈する。61は、脚台付短頸壺の口縁部と脚部である。復原口径10.2cm、底径7.2cm、胴部径8.3cmを測る。口縁部上面には小穴を4つ施す。壺部内面はナデ、外面はミガキ、脚部内面はナデ、外面はミガキを施す。胎土は細砂粒を若干含む。焼成は良く、内面は黒色、外面は橙色を呈する。



第29図 貯糞穴出土土器実測図 5 (1/4)

18号貯蔵穴（図版12、第31・32図）

62は、底部を欠く壺で、口縁部は朝顔状に開く、頸部から肩部にかけて沈線、羽状文、弧文を廻らす。器面は磨滅が著しい。胎土は粗砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は茶褐色で、外面は赤変している。63は、ほぼ直角に屈曲し、端部が肥厚する甕口縁で、器壁は薄い。口縁部はナデ、外面はハケを施す。胎土は細砂粒をやや多く含む。焼成は良く、器面は橙褐色を呈する。64は、短かく外反する甕口縁片で、凸帶が廻る。器面は磨滅が著しい。胎土は粗砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は明橙色を呈する。

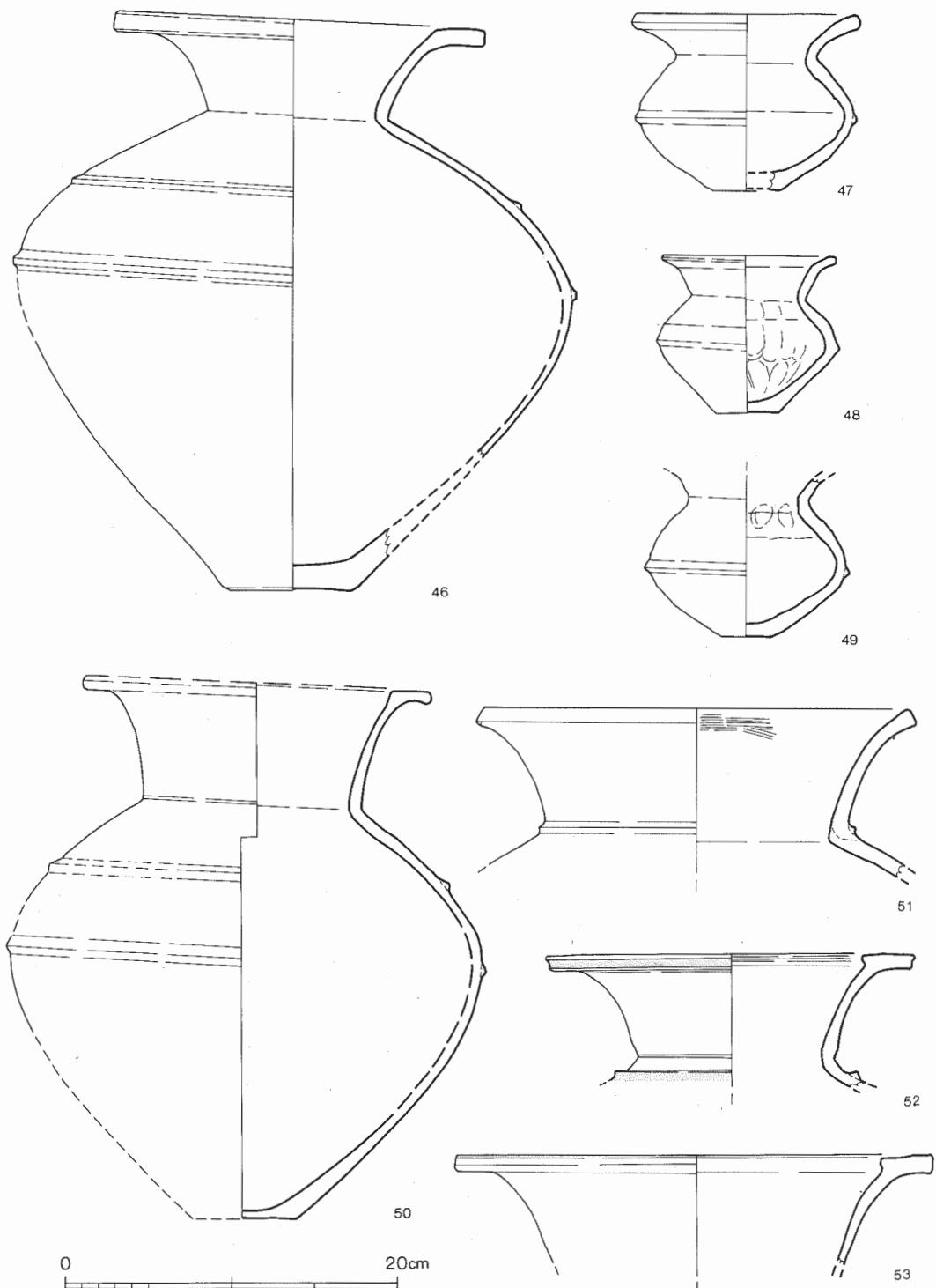
19号貯蔵穴（図版12・13、第32・33図）

65は、朝顔状に大きく開く壺口縁である。頸部には三角凸帶を廻らす。口縁端部外面には丹塗りの羽状文を施す。口径28.3cmを測る。器面は磨滅気味で、一部ミガキが見られる。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は白黄色を呈する。66は、朝顔状に開く壺口縁片で、頸部に沈線及び、丹塗りの凸帶を廻らす。復原口径24.4cmを測る。外面に一部ハケが見られるが、磨滅が著しい。胎土は粗砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は茶褐色を呈する。67は、壺の下半部で、肩部には沈線、羽状文、二重の弧文を廻らす。底径10.6cm、器高28.4cm、胴部最大径は上位にあり、34.8cmを測る。内面はナデ、外面はハケ後ミガキを施す。胎土は粗。細砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は淡茶褐色、外面は黄橙色で、一部大きく黒化している。68は、平底の甕底部で、底径5.4cmを測る。内面はナデ、外面はミガキを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は暗褐色を呈する。69は、やや上げ底を呈する甕底部で、底径7.4cmを測る。内面はミガキ、外面はハケを施す。胎土は粗砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は黒褐色、外面は赤橙色を呈する。70は、端部がやや肥厚し、やや下がり気味の甕口縁片で、三角凸帶を廻らす。復原口径30.2cmを測る。内面は磨滅している。口縁部はナデ、外面はハケを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は灰褐色、外面は橙褐色を呈する。71は、ゆるく屈曲する甕口縁片で、復原口径22cmを測る。器面は磨滅が著しい。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は黄橙褐色を呈する。72は、蓋のほぼ完形品である。裾部径21.6cm、つまみ部径6.8cm、器高12.2cmを測る。内面はミガキで、裾部にはハケを施す。外面は、つまみ部がナデ、裾部はハケ後ナデ、他はハケを施す。胎土は粗砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は褐色を呈し、外面は一部赤変している。73は、杯部を欠く高杯で、底径14.9cm、現存器高14.6cmを測る。杯部内面はナデ、外面はミガキ、脚部内面はナデで、指圧痕が残る。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は淡褐色を呈する。

21号B区貯蔵穴（第33図）

74は、短かく外反し、刻目を施す甕口縁片で、二条の沈線を廻らす。内面は磨滅している。外面は沈線下はハケを施す。胎土は粗砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は褐色を呈する。

22号貯蔵穴（図版13、第33図）



第30図 貯蔵穴出土土器実測図 6 (1/4)

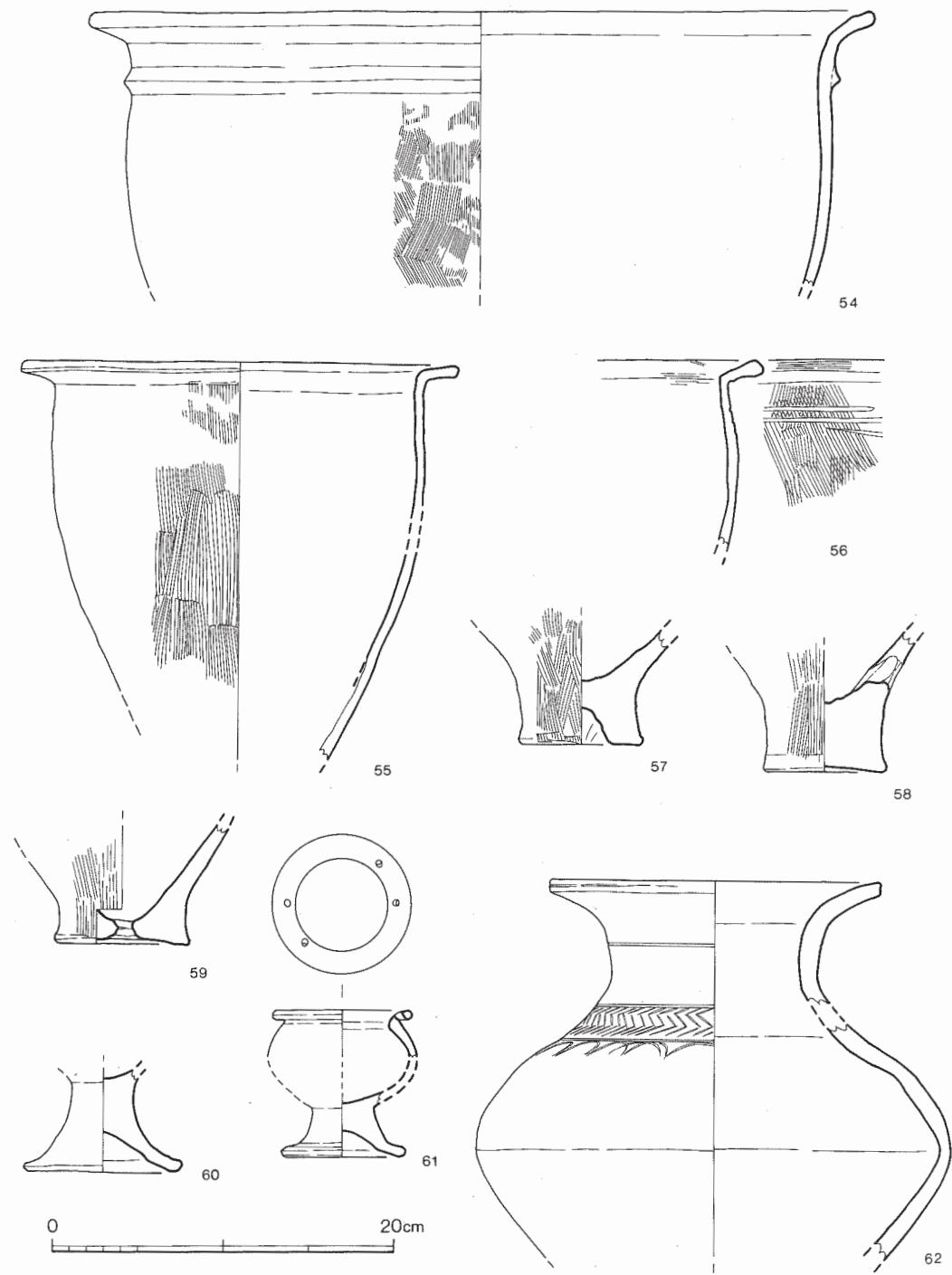
75は、口縁部に刻目を施す甕で、一条の沈線を廻らし、底部に穿孔を施す。復原口径23.3cm、底径7.9cm、器高24.3cmを測る。外面に一部ハケが見られるが、磨滅が著しい。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は暗茶褐色で、一部赤変している。76は、やや胴が張り気味の甕で、沈線を廻らす。底部には穿孔を施す。口径27.3cm、底径8.4cm、器高29.9cmを測る。内面はナデ、外面はハケを施す。胎土は粗砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は茶褐色、外面は褐色を呈する。77は、ゆるく屈曲する甕口縁片で、沈線を廻らす、磨滅が著しい。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は黄白色を呈する。78は、完形に近い鉢で、底部は大きく外へ広がる。復原口径17.5cm、底径7.9cm、器高12.8cmを測る。内面はミガキ、外面はハケ後ミガキを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は橙褐色、外面は淡褐色で、一部大きく黒化している。79は、上げ底の甕底部で、底径9cmを測る。内面はナデ、外面はハケを施す。胎土は粗砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は橙褐色を呈する。

23号貯蔵穴（図版13、第33・34図）

80は、朝顔状に広がる壺口縁で、二条の沈線を廻らす。口径22.2cmを測る。磨滅が著しい。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は黄橙色を呈する。81は、短かく外反する壺口縁で、三条の沈線を廻らす。口径13.8cmを測る。器面はミガキを施す。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は赤茶褐色を呈する。82は、直立気味に立ち上がる頸部からゆるく外反する壺口縁片である。復原口径25.6cmを測り、一条の凸帯を廻らす。口縁部はナデ、他はミガキを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は赤茶褐色を呈する。83は、口縁端部外面には、丹を塗布する。口縁部はナデ、他はミガキを施す。胎土は細砂粒を含む。焼成は良く、器面は褐色を呈する。84は、短かく外反する甕口縁片で、沈線を廻らす。口縁部はナデ、内面はミガキ、外面はハケを施す。胎土は粗砂粒を含む。焼成は良く、茶褐色を呈する。85は、平底の壺底部で、底径8.0cmを測る。器面はミガキを施す。胎土は粗、細砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は赤茶色、外面は橙褐色を呈する。86は、やや上げ底を呈する壺底部で、底径10.9cmを測る。内面は磨滅が著しい。外面はミガキを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は明黄褐色、外面は褐色を呈する。87は、短かく外反する甕口縁片である。外面に一部ハケが見られるが、磨滅が著しい。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は明黄橙色を呈する。88は、手捏ね風でほぼ完形品である。口縁は強く折れ、底部は外へ広がり上げ底を呈する。口径9.2cm、底径6.0cm、器高11.8cmを測る。内面はナデ、外面はハケを施す。胎土は粗砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は白橙色、外面は黄橙色を呈する。

24号貯蔵穴（図版13、第34図）

89は、ゆるく外反し、刻目を施す甕のほぼ完形品である。器壁は薄く、沈線を廻らす。口径21.8cm、底径8.1cm、器高22.7cm～24.85cmを測る。内面は磨滅が著しい。外面はハケを施す。胎土は粗砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は黄褐色～黒褐色、外面は暗褐色で、底付近は赤変



第31図 貯蔵穴出土土器実測図 7 (1/4)

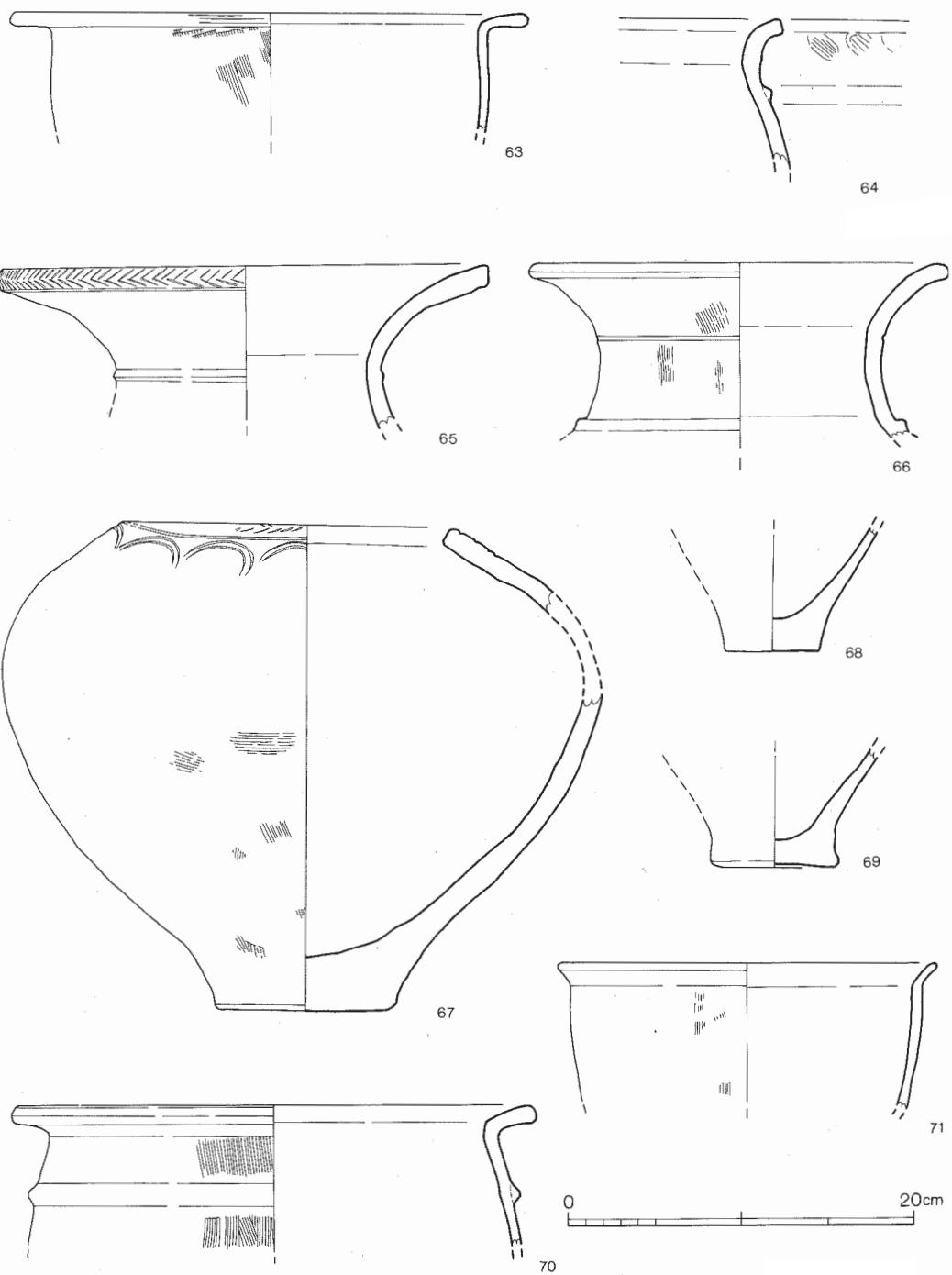
している。

26号貯蔵穴（図版13・14、第34・35・36図）

90は、大きく広がる壺口縁片で、二条の三角凸帯を廻らす。復原口径33.8cmを測る。磨滅が著しい。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良く、橙褐色、黒色を呈する。91は、直立する頸部からゆるやかに外反する壺口縁で、二条の沈線を廻らす。口径18.1cmを測る。磨滅が著しい。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は橙褐色を呈する。92は、強く外反し、内面に凸帯を廻らす壺口縁片である。頸部の二条の凸帯及びその下の羽状文には、口縁端部外面同様、丹が残っている。口縁部はナデ、頸部はミガキを施す。胎土は粗砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は黄橙褐色を呈する。93は、壺の肩部片で4本沈線を廻し、その下に弧文を施す。内面はミガキ、外面はハケ後ミガキを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は褐色、外面は黄褐色を呈する。94は、壺口縁で、沈線を廻らし、口縁端部外面同様、丹が残っている。口径21.9cmを測る。内面は磨滅が著しい。頸部外面はミガキを施す。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は黒褐色、外面は橙褐色を呈する。95は、短かく外反する壺口縁片で、復原口径20cmを測る。内面は口縁部がミガキ、胴部はナデで、外面は口縁部がナデ、胴部はミガキを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は赤茶色を呈する。96は、頸部より上を欠く壺で、現存器高14.2cm、底径5.6cmを測る。胴部最大径は、中位より上にあり19cmを測る。器面にはミガキを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は黒褐色を呈する。97は、頸部より上を欠く小壺で、弧文を施す。底径5.6cm、現存器高8.3cm、胴部最大径は上位にあり14.5cmを測る。内面はナデ、外面ミガキを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は褐色、外面は茶褐色で、一部赤変している。98は、やや上げ底気味の壺底部で底径11.4cmを測る。内面は磨滅が著しい。外面はミガキを施す。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は黄褐色、外面は黒褐色を呈する。99は、大形壺の底部で、底径13.9cmを測る。器面はミガキを施す。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は橙褐色、外面は黒褐色を呈する。100は、上げ底を呈する壺底部で、径10.9cmを測る。内面は磨滅している。外面はハケを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は赤茶色を呈する。101は、完形に近い甕で、口径19.5cm、底径6.5cm、器高23.6cmを測る。口縁部はナデ、内面はナデ、外面はハケを施す。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は淡黄橙色、外面は灰褐色で、一部赤変、黒化している。102は、完形に近い甕で、細くしまった底部は上げ底を呈する。口径20.1cm、底径5.8cm、器高24.7cmを測る。口縁部はナデ、内面はミガキ、外面はハケを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は茶褐色、外面は褐色で、底部付近は赤変している。

27号貯蔵穴（図版14、第36図）

103は、完形に近い短頸の小壺である。復原口径5.9cm、底径4.6cm、器高9.4cmを測る。胴部最大径は中位より上にあり10.4cmを測る。肩部には沈線、弧文を施す。内面はナデを施す。胎



第32図 貯蔵穴出土土器実測図 8 (1/4)

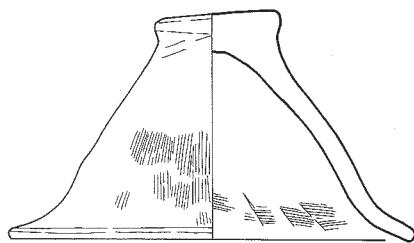
土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は茶褐色を呈する。104は、短かく外反する甕口縁で、沈線を廻らす。復原口径27.0cmを測る。内面は磨滅が著しい。外面はハケを施す。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は黄白色、外面は褐色を呈する。105は、ゆるく外反する甕口縁片で、磨滅が著しい。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く内面は橙色、外面は褐色を呈する。106は、蓋で、復原裾部径18.8cm、つまみ部径5.8cm、器高10.6cmを測る。内面はミガキ、外面はハケ後ナデ及びミガキを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は暗褐色、外面は橙褐色を呈する。

28号貯蔵穴 (図版13、第36・37図)

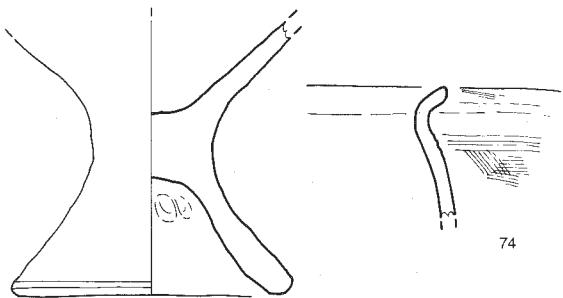
107は、壺底部で、底径6.2cmを測る。磨滅が著しい。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は悪く、内面は黒色、外面は白黄色を呈する。108は、平底の甕底部で、底径7.2cmを測る。内面はナデ、外面はハケを施す。胎土は粗砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は黒褐色、外面は赤変している。109は、短かく外反する甕口縁片である。口縁部はナデ、外面はハケを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は白茶褐色を呈する。110は、口縁部が平坦面をつくる甕口縁片である。口縁部及び内面はナデ、外面はハケを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は橙褐色を呈する。111は、甕底部で、底径6.2cmを測り、磨滅が著しい。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は淡茶褐色を呈する。112は、口縁部が強く外反する壺である。復原口径17.8cm、底径9.4cm、器高26.75cmを測る。胴部最大径は中位にあり、24.8cmを測る。内面はナデ、外面はハケを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は褐色、外面は暗褐色を呈する。113は、大形壺で、口縁部を欠く。底径12.6cm、現存器高63cm、胴部最大径53cmを測る。器面はミガキを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は黄褐色を呈するが、外面は一部赤変、黒化している。

29号貯蔵穴 (第37・38図)

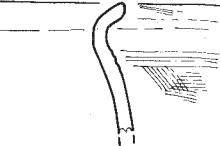
114は、口縁部が内傾し、内側に突出する甕口縁で、二条の三角凸帯を廻し、一部丹が残る。磨滅が著しい。胎土は細、粗砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は白黄色を呈する。115は、甕口縁片で、復原口径27cmを測り、三条の沈線を廻らす。口縁部、内面はナデ、外面はハケを施す。胎土は細砂粒を若干含む。焼成は良く、器面は灰褐色を呈する。116は、甕口縁片で、内側に不明瞭な沈線を施す。復原口径38cmで、三角凸帯を廻らす。口縁部及び内面はナデ、外面はハケを施す。胎土は細砂粒を若干含む。焼成は良く、器面は橙褐色を呈する。117は、跳ね上げ気味の甕口縁片で、三角凸帯を廻らす。復原口径36.4cmを測る。内面はナデ、外面は磨滅している。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は灰褐色、外面は褐色を呈する。118は、甕口縁片で、三角凸帯を廻らす。復原口径38cmを測る。口縁部及び内面はナデ、外面凸帯上はナデ、下はハケを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、黄灰褐色を呈する。119は、甕口縁で、内面に二条の沈線状の凹みを有する。外面に三角凸帯を廻らす。復原口径32cmを測る。はナ



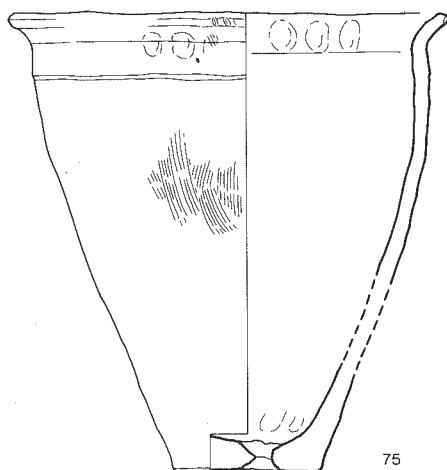
72



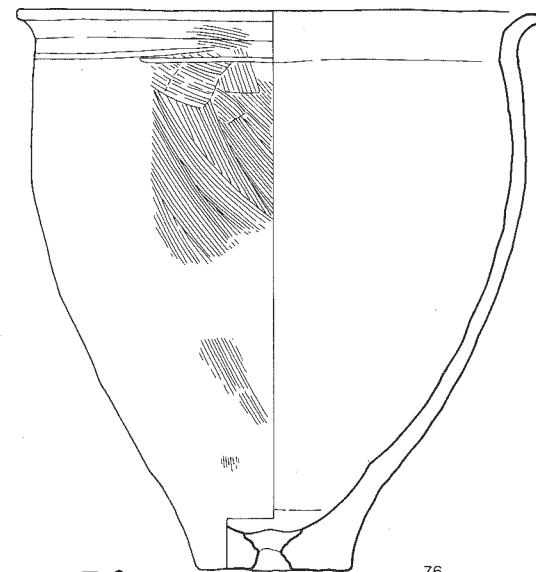
73



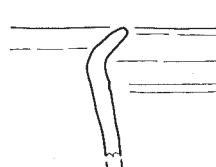
74



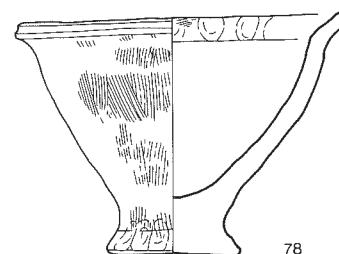
75



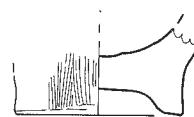
76



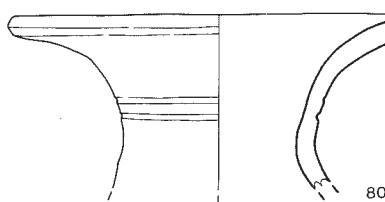
77



78



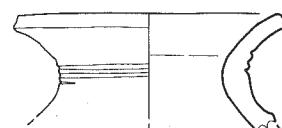
79



80

0

20cm



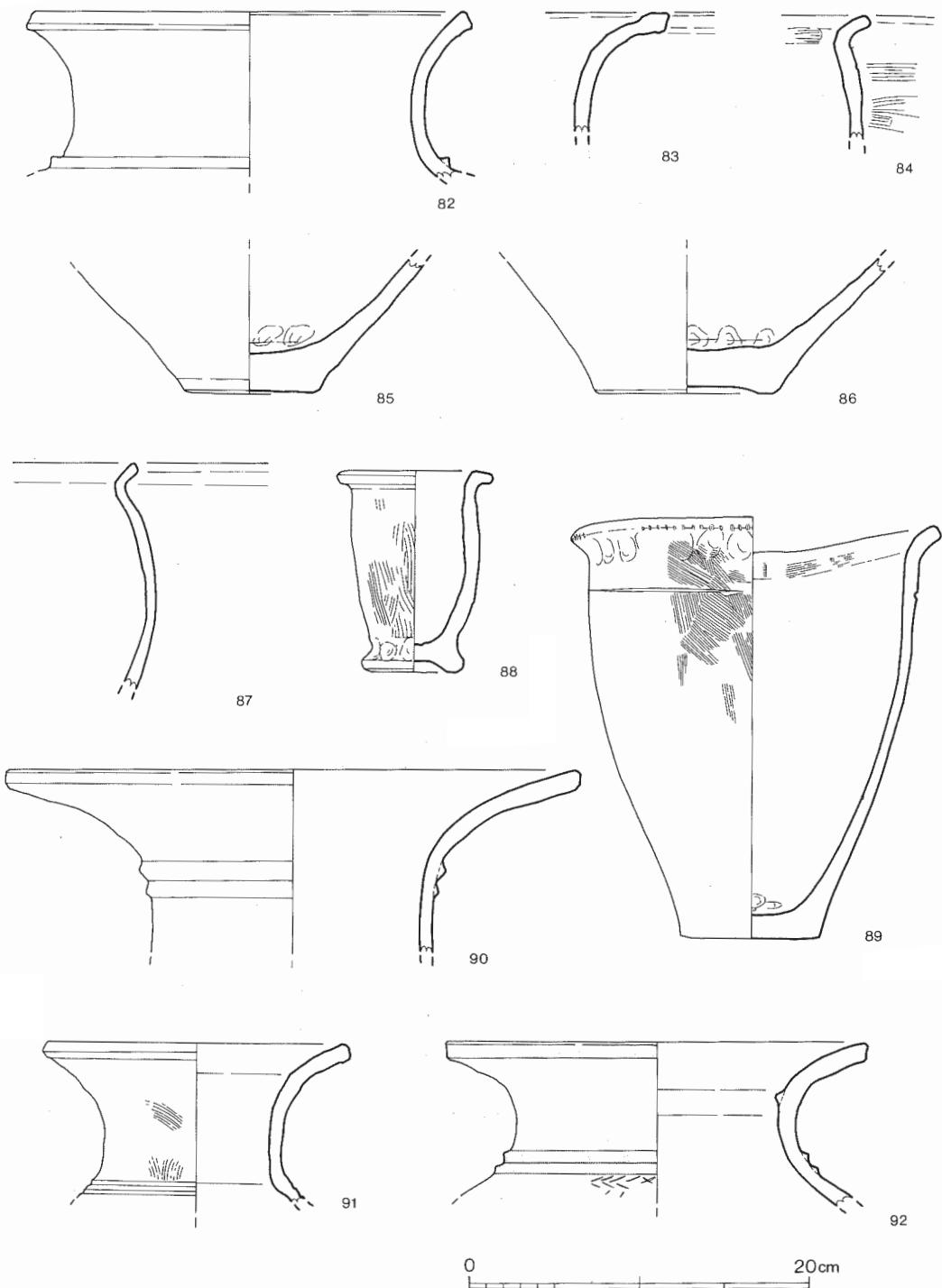
81

第33図 貯藏穴出土土器実測図 9 (1/4)

テ、外面はハケを施す。胎土は細砂粒を若干含む。焼成は良く、器面は白黄色を呈する。120は、ほぼ直角に屈曲し、下がり気味の甕口縁である。復原口径41.4cmで、三角凸帯を廻らす。磨滅が著しい。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は黄白色、外面は黄橙褐色を呈する。

30号貯蔵穴（図版14・15、第39・40図）

121は、口縁端部が内側に短く突出する壺口縁片である。口縁端部外面には丹が残る。内面はミガキ、口縁部及び外面はナデを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は茶褐色、外面は褐色を呈する。122は、広口壺口縁片で、頸部に沈線を廻らす。復原口径32cmを測り、丹を塗布する。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は褐色を呈する。123は、壺口縁片で、復原口径19cmを測る。磨滅が著しい。胎土は細砂粒を若干含む。焼成は良く、器面は、明黄褐色を呈する。124は、朝顔状に開く壺口縁片で、復原口径23cmを測る。内面はミガキ、外面は磨滅している。胎土は小砂粒を含む。焼成は良く、器面は橙褐色を呈する。125は、平底の壺底部で、底径6.75cmを測る。内面は磨滅している。外面はミガキを施す。胎土は粗砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は橙褐色、外面は茶褐色で一部黒化している。126は、上げ底を呈す壺底部で、底径12.4cmを測る。磨滅が著しい。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は白橙色で、外面は一部黒化している。127は、完形に近い広口壺である。復原口径28.1cm、底径6.4cm、器高36.6cm、胴部最大径は33.6cmを測る。器面は磨滅気味で、内面はナデを施す。胎土は粗、細砂粒を含む。焼成は良く、器面は茶褐色を呈する。128は、直角気味に屈曲する甕口縁片である。口縁部及び内面はナデ、外面はハケを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は橙褐色を呈する。129は底部穿孔の小形の鉢である。復原口径10.2cm、底径5.2cm、器高7.05cmを測る。内面はナデ後一部ミガキ、外面は一部ミガキを施す。胎土は小細砂粒を含む。焼成は良く、器面は白褐色を呈する。130は、内側に稜をつくりくの字をなす甕口縁片で、三角凸帯を廻らす。復原口径53.6cmを測る。器面は磨滅が著しい。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は白黄色、外面は黄褐色を呈する。131は、甕口縁で、復原口径28.2cmを測る。内面は磨滅が著しい。外面はハケを施す。胎土は細砂粒を含む。焼成は良く、内面は明黄褐色、外面は褐色を呈する。132は、甕口縁片で、復原口径30cmを測る。内面はナデ、外面はハケを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は橙褐色を呈する。133は、高杯の脚部で、現存器高16cmを測る。器面は磨滅が著しい。脚部内側にはしづり痕が見られる。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は明黄橙色を呈する。134も、高杯の脚部片である。外面はミガキ、内面にはしづり痕が見られる。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は暗褐色を呈する。135は、器台の完形品である。口径8.55cm、底径9.45cm、器高15.0cm～15.55cmを測る。外面はハケ、内面はナデを痕す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は白黄褐色を呈すが、大きく赤変している。136も、器台片で、底径8.6cm、現存器高11cmを測る。内面はナデ、外面はハケを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は白黄褐色を呈すが、赤変している。



第34図 貯蔵穴出土土器実測図10(1/4)

32号貯蔵穴（第40図）

137は、短く屈曲する甕口縁片である。内面はナデ、外面はミガキを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は灰褐色を呈する。

34号貯蔵穴（第40図）

138は、外へ張り出し、やや上げ底をなす甕底部で、底径5.8cmを測る。器面は丁寧なミガキを施す。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は黒色を呈する。

37号貯蔵穴（第40図）

139は、平底の壺で、頸部から上を欠く。底径9.2cm、胴部最大径28.2cmを測る。内面は磨滅している。外面はミガキを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は暗褐色を呈すが、大きく赤変している。140は、甕底部で、底径7.1cmを測る。器面は磨滅が著しい。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は明黄褐色を呈し、一部赤変している。141は、やや上げ底を呈す壺底部で、底径6.8cmを測る。内面はナデ、外面はミガキを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は茶褐色、外面は黄茶褐色で、底部は黒化している。

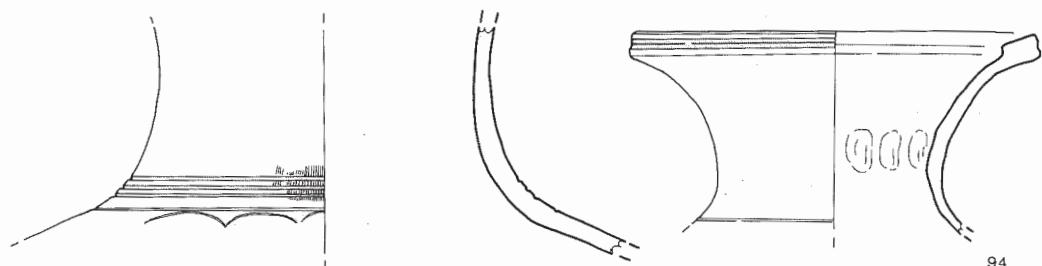
39号貯蔵穴（図版15、第41図）

142は、朝顔状に開く壺口縁片である。三条の沈線と一条の凸帯を廻らし、口縁端部外面同様、丹が残る。内面はミガキ、外面はハケで、沈線下はミガキを施す。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は明褐色、外面は褐色を呈する。143は、完形に近い壺である。復原口径16.1cm、底径7.7cm、器高28.2cmで、胴部最大径は24.2cmを測る。口縁部はナデ、内面はミガキ、外面は磨滅気味だが、一部ハケが見られる。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良く、赤橙褐色を呈する。144は、壺口縁片で、口縁と頸部の境に沈線を廻らす、復原口径22.2cmを測る。口縁部はナデ、内面はミガキ、外面はハケ後ミガキを施す。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は大きく黒化している。外面は褐色を呈する。

40号貯蔵穴（図版15、第41図）

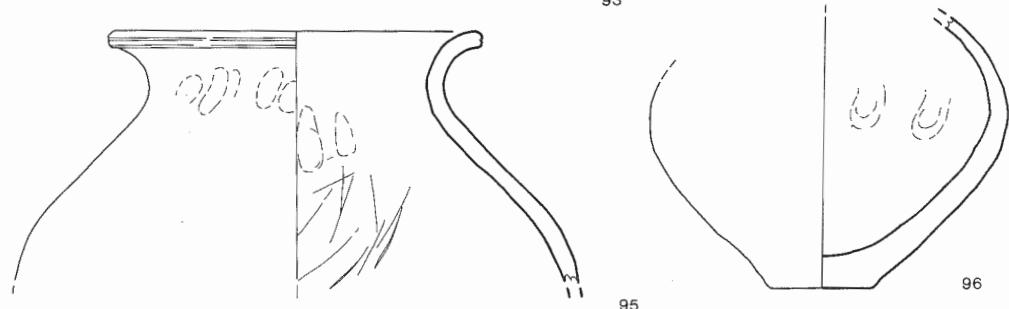
145は、頸部から上を欠く壺である。底径7.7cm胴部最大径16.3cmを測る。器面は磨滅が著しい。胎土は粗砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は黄褐色を呈する。146は、短頸壺で、口縁は短く外反する。口径10.9cm、底径7.2cm、器高は18.3cm、胴部最大径16.0cmを測る。口縁部はナデ、内面はハケ後ミガキ、外面はハケ後ミガキを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は黒褐色、外面は明褐色で、一部黒化している。147は、一条の沈線を廻らす甕で、底部は厚い。復原口径22.0cm、底径6.9cm、器高23.9cmを測る。内面は磨滅している。外面はハケを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は黄茶褐色、外面は褐色で、底部は赤変している。148は、ゆるやかに外反する甕口縁片である。内面は磨滅気味である。外面はハケを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は橙褐色、外面は褐色を呈する。

41号貯蔵穴（図版15、第41・42図）



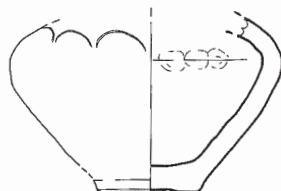
93

94

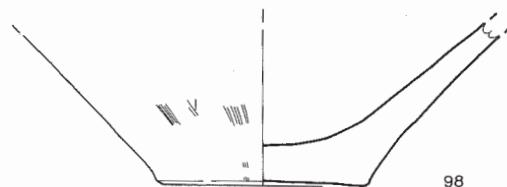


95

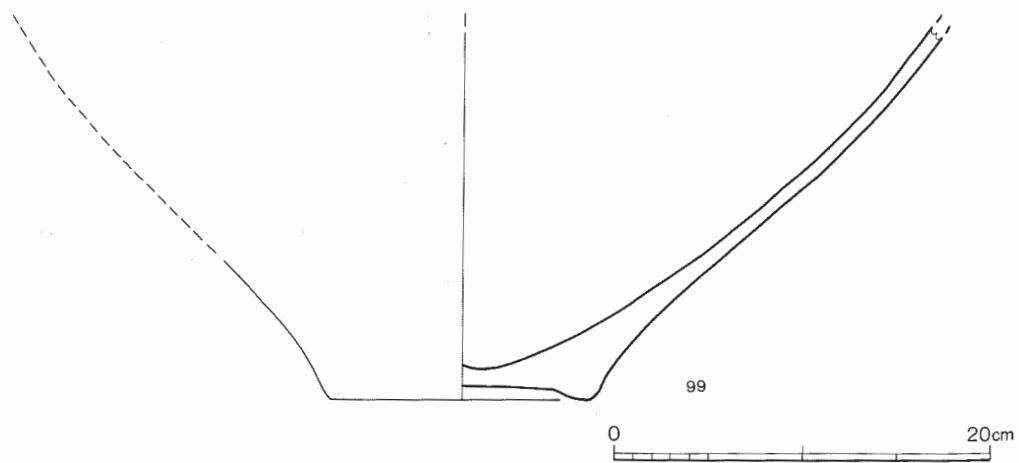
96



97



98



99

0 20cm

第35図 貯蔵穴出土土器実測図II (1/4)

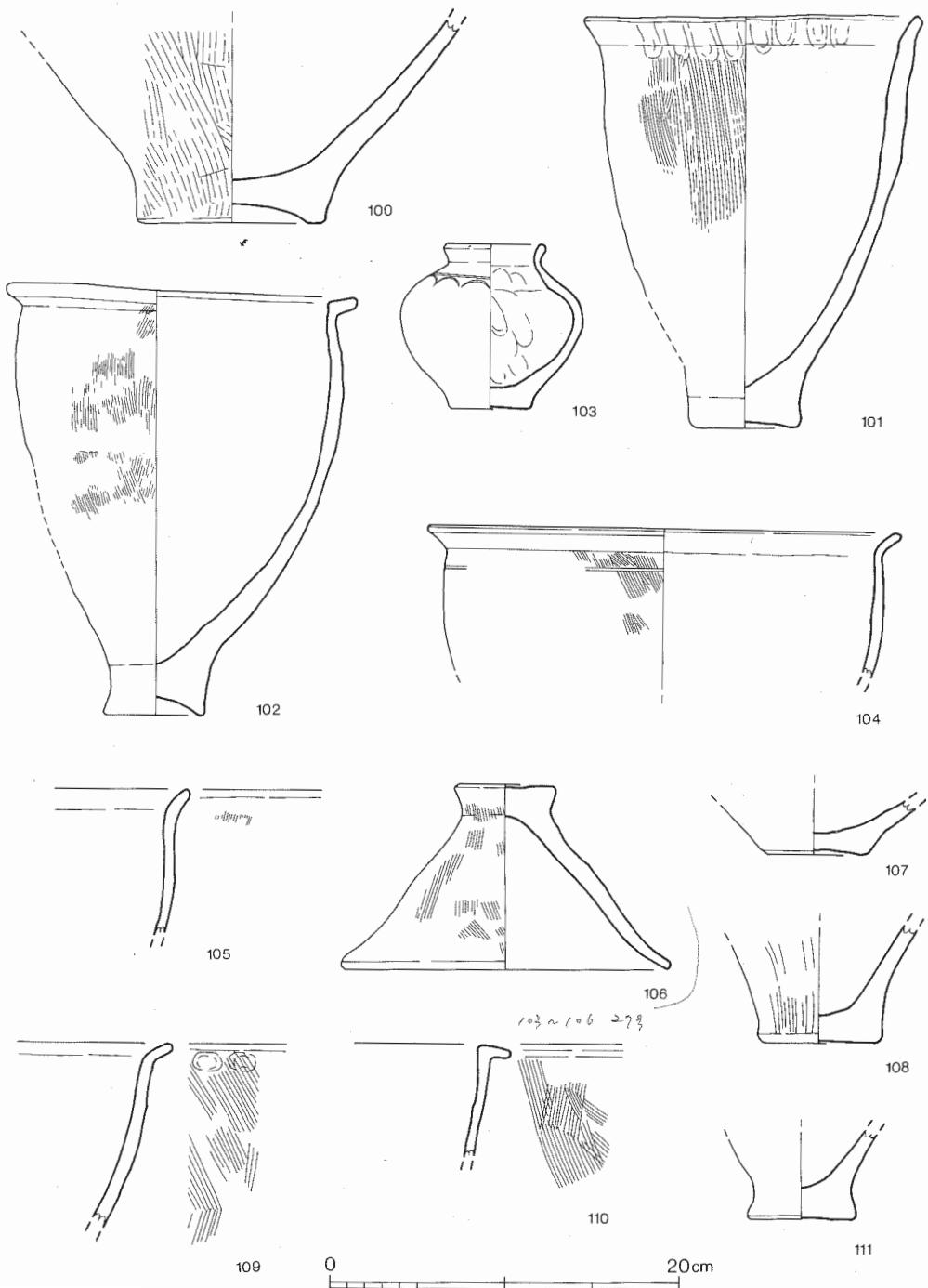
149は、高杯あるいは脚付鉢の脚部分である。復原底径6.3cm、脚高5.2cmを測る。器面は磨滅氣味で、外面に一部ナデ、ミガキが見られる。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は茶褐色を呈する。150は、胴が伸び氣味の甕である。口径31.2cm、底径6.9cm、器高37.3cmを測る。口縁部はナデ、外面はハケを施すが、磨滅氣味である。胎土は粗、細砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は赤茶色、外面は褐色で、一部黒化している。

43号貯蔵穴（図版15、第42・43図）

151は、朝顔状に開く壺口縁片で、三角凸帯を廻らす。内面はミガキ、外面はナデを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は明灰褐色を呈する。152は、壺底部で、底径11.8cmを測る。内面はナデ、外面はハケを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は明黄色、外面は灰黄褐色で、一部黒化している。153は、口縁端部が肥厚する甕口縁である。復原口径24.5cmを測る。内面はナデ、外面はハケを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は褐色を呈する。154は、胴部が伸び氣味の甕で、底部はすぼまる。口縁部はハケ後ナデ、内面はナデ、外面はハケを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は茶褐色、黒褐色、外面は茶褐色で、一部黒化、赤変している。155は、甕口縁片で、復原口径25.6cmを測る。内面は磨滅している。外面はハケを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は淡橙白色、外面は橙褐色を呈する。156は、甕口縁片で、三角凸帯を廻らす。復原口径32.7cmを測る。器面は磨滅氣味である。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は灰褐色、外面は黄褐色を呈する。157は、甕口縁片で、口縁部内面に稜線を作る。外面には三角凸帯を廻らす。復原口径41.2cmを測る。内面はナデ、外面はハケ後ナデを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は黄橙褐色を呈する。158は、甕底部で、底径8.5cmを測る。内面はナデ、外面はハケ、底部付近はミガキを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は橙褐色を呈する。159は、甕底部で、底径9.6cmを測る。内面は磨滅が著しい。外面はハケを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は黒灰色、外面は黄褐色を呈する。

44号貯蔵穴（図版16、第43図）

160は、平底で、穿孔を施す甕底部である。底径7.2cmを測る。器面は磨滅が著しい。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は黄褐色、外面は橙色で、一部赤変している。161は、口縁下太い2条の沈線を廻らす甕で口縁部にも沈線状のものが廻る。復原口径25.6cm、底径7.5cm、器高24.4cmを測る。内面はナデ、外面はハケを施す。胎土は線砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は白褐色、外面は褐色を呈する。162は、完形に近い甕で、沈線を廻らす。口径23.6cm、底径7.4cm、器高22.6cmを測る。内面はミガキ、外面はハケを施す。胎土は粗砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は橙色、外面は明褐色を呈する。163は、甕口縁片である。内面はナデ、外面はハケを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は明橙褐色を呈する。164は、底部の厚い小形鉢である。復原口径15.8cm、底径6.4cm、器高11.9cmを測る。器面は磨滅している。胎



第36図 貯蔵穴出土土器実測図12(1/4)

土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は明黄色、外面は赤変している。165は、裾の広がる蓋で、つまみ部上面は凹む。復原裾部径22.0cm、つまみ部径6.7cm、器高9.25cmを測る。内面はハケ後ミガキ、外面はハケ後ナデを、つまみ部はミガキで、凹みはナデを施す。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は赤橙色で裾部は黒化し、外面は赤橙色を呈する。

46号貯蔵穴（第44図）

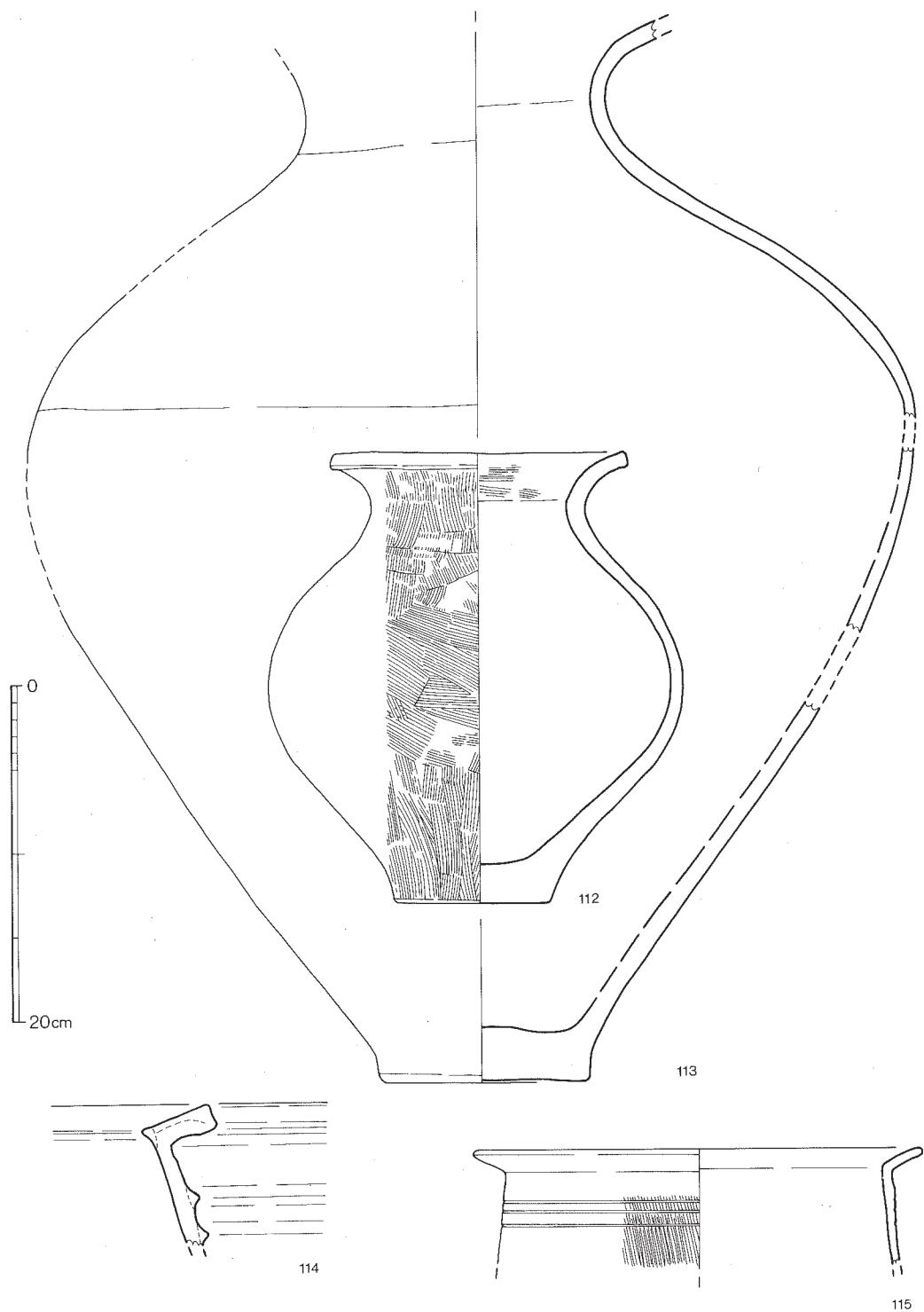
166は、底部はくびれ、上げ底をなす甕である。復原口径23.8cm、底径7.3cm、器高25.9cmを測る。内面はミガキ、外面はハケを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は橙黄色、外面は黄白褐色で、一部黒化する。167は、ゆるく外反する甕口縁片で、二条の沈線を廻らす。復口径14.6cmを測る。外面にハケが見られるが、磨滅が著しい。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は黒褐色、外面は白褐色を呈する。168は、甕で、口径26.0cm底径8.1cm、器高27.3cmを測る。内面は磨滅している。外面はハケを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は灰褐色、外面は褐色で、一部赤変、黒化している。

47号貯蔵穴（図版16・17、第44・45図）

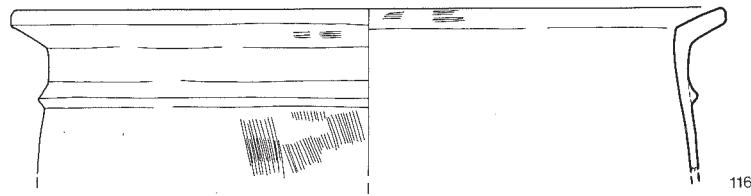
169は、短頸で胴の張る壺で底は厚い。復原口径18.4cm、底径10.2cm、器高37.0cm、胴部最大径は32.2cmを測る。内面はミガキ、外面はハケ後、一部ミガキを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は赤茶褐色で、底部側面は一部黒化している。170は、底部に穿孔を施し、一条の沈線を廻らす甕である。復原口径24.0cm、底径6.9cm、器高24.4cmを測る。口縁部及び内面はナデ、外面はハケを施す。胎土は粗砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は赤橙色、外面は赤紫色で、一部黒化している。171は、鉢で、復原口径27.7cm、底径9.0cm、器高17.8cmを測る。内面はミガキ、外面はハケ後ミガキを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、白褐色で、一部黒化している。172は、ゆるやかに外反する甕口縁片で、復原口径28.6cmを測る。口縁部はナデ、外面はハケを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は黄褐色、外面は褐色で、一部黒化している。173は、壺で、口径17.1cm、底径9.2cm、器高33.3～33.7cmを測り、胴部最大径は31.2cmを測る。器面は、磨滅が著しい。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は橙褐色で、外面は一部黒化している。

50号貯蔵穴（図版17、第45図）

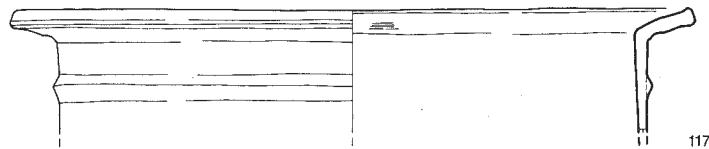
174は、鉢で、底部は分厚く端部は強く外へ張り出す。口径18.2cm、復原底径7.2cm、器高15.2cm～15.9cmを測る。口縁部内側には沈線状の凹みを有する。器面は磨滅が著しい。胎土は粗砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は褐色、外面は褐色で、底部付近は大きく赤変している。175は、底部が厚く、平底をなす甕である。復原口径20.0cm、底径5.85cm、器高21.25を測る。内面はミガキ、口縁部はナデ、外面はハケを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は暗茶褐色、外面は暗褐色、白橙褐色を呈する。176は、口縁部が直角気味に屈曲する甕口縁片で、三角凸帯を廻らす。器面は磨滅が著しい。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は明黄褐色、外面は橙色を呈する。



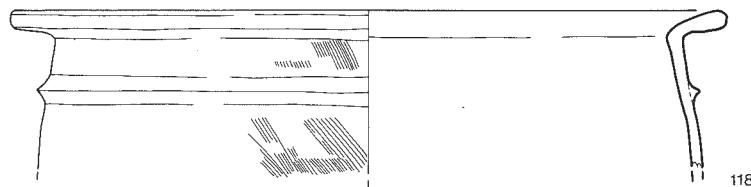
第37図 貯蔵穴出土土器実測図13(1/4)



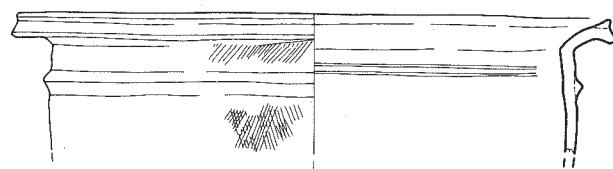
116



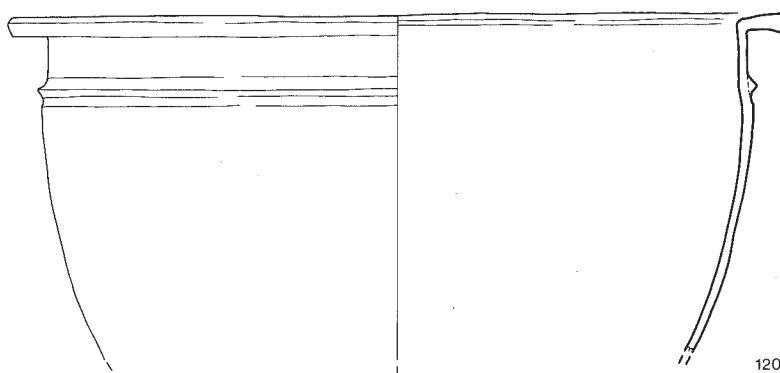
117



118



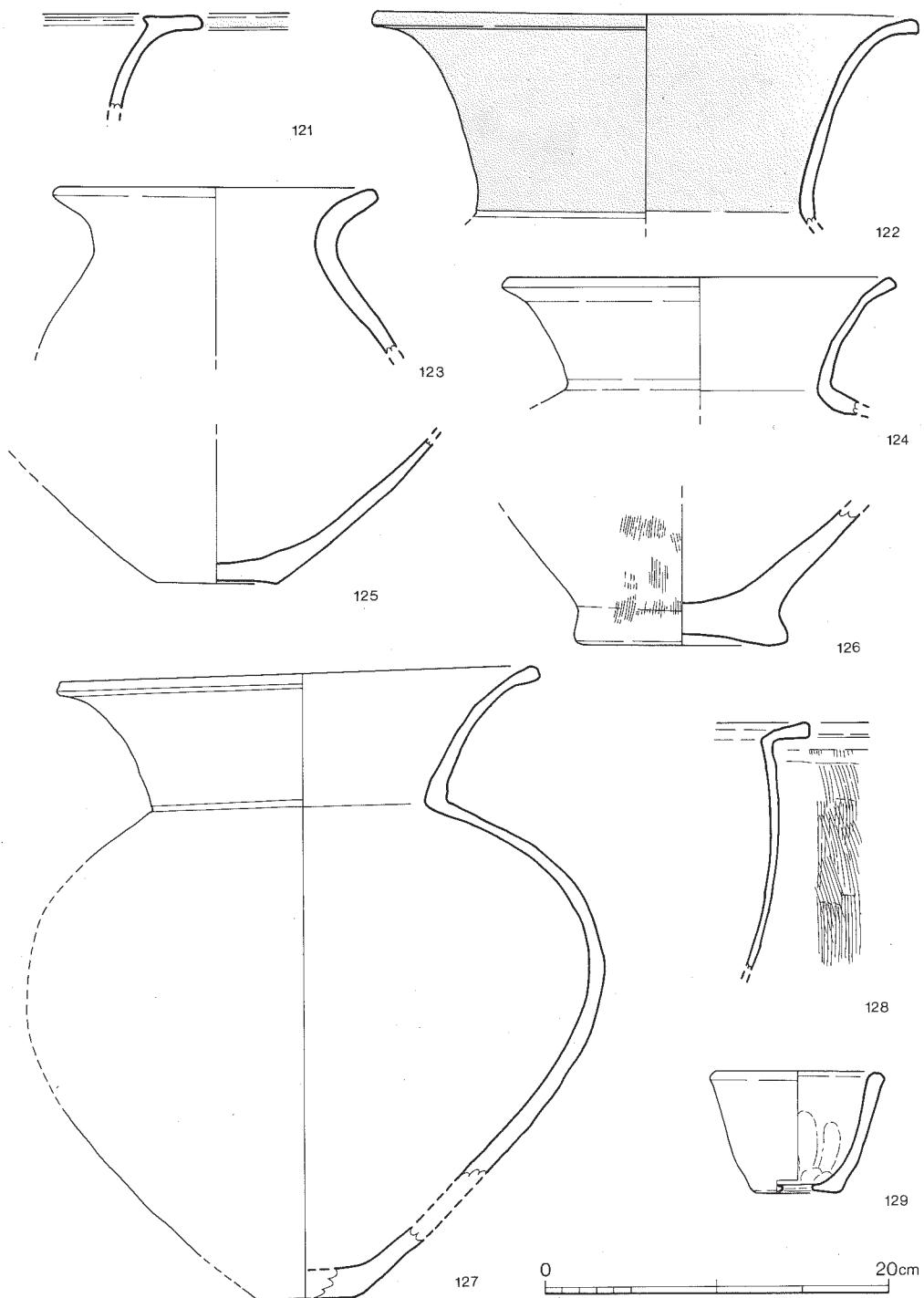
119



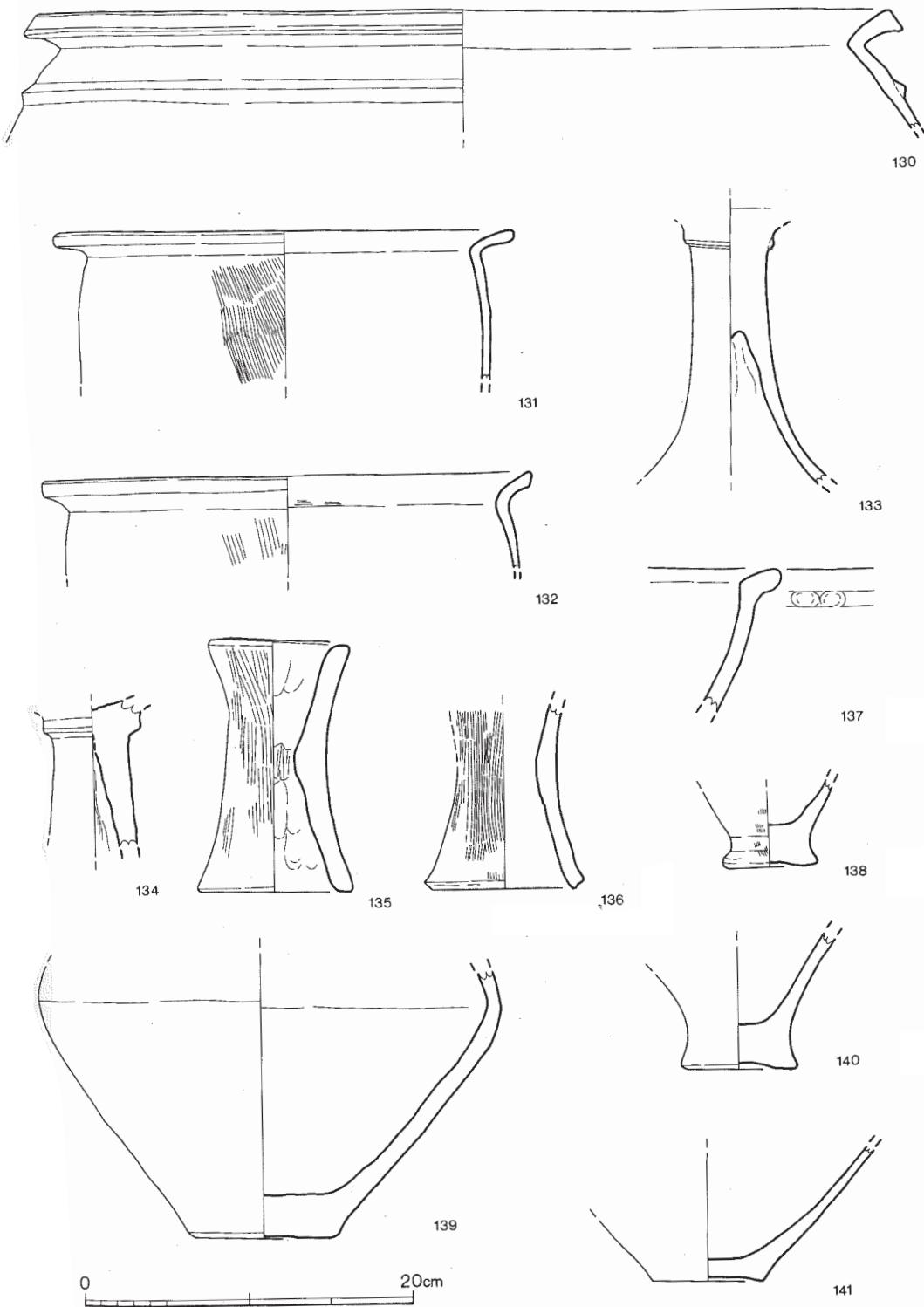
120

0 20cm

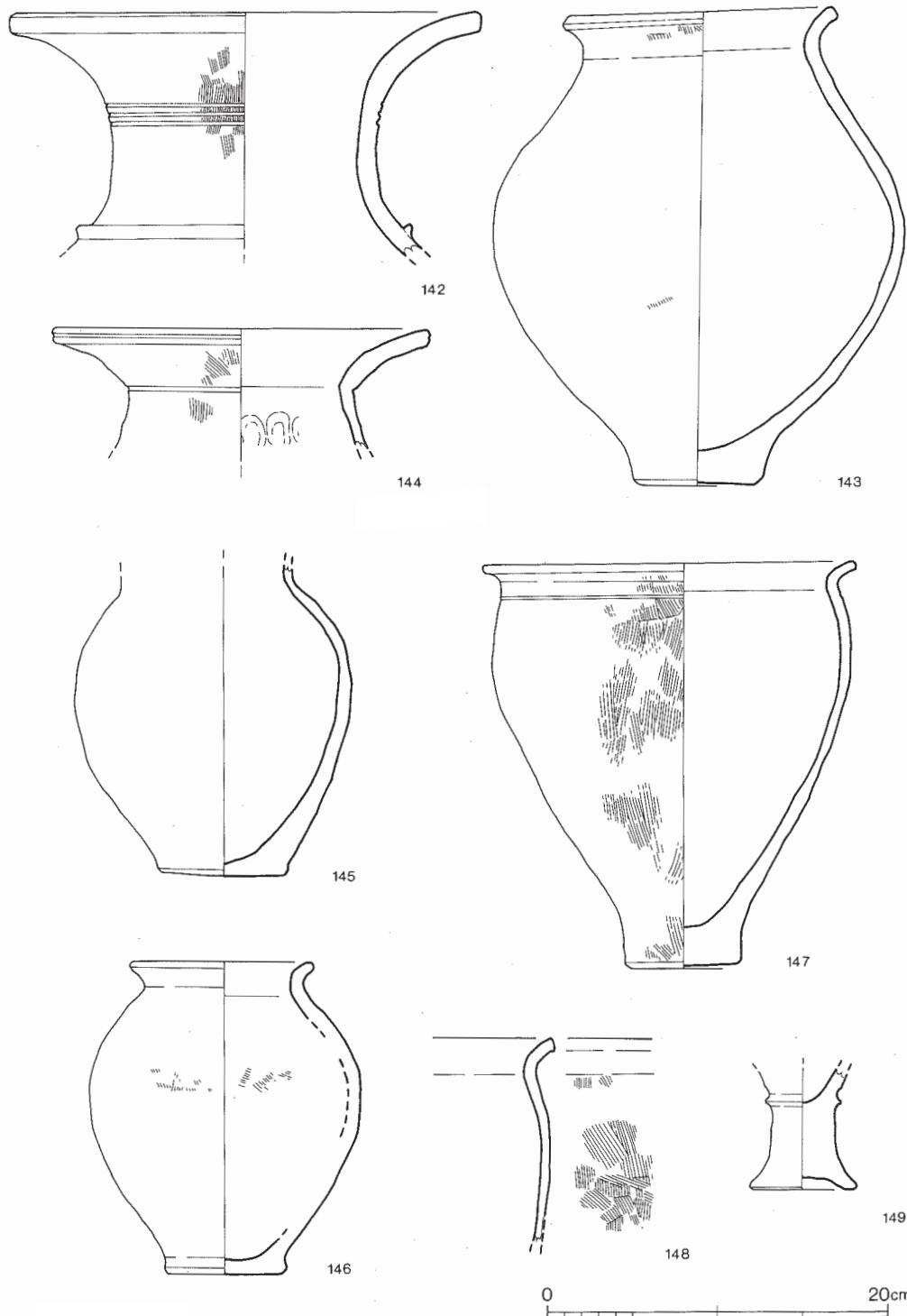
第38図 貯蔵穴出土土器実測図14(1/4)



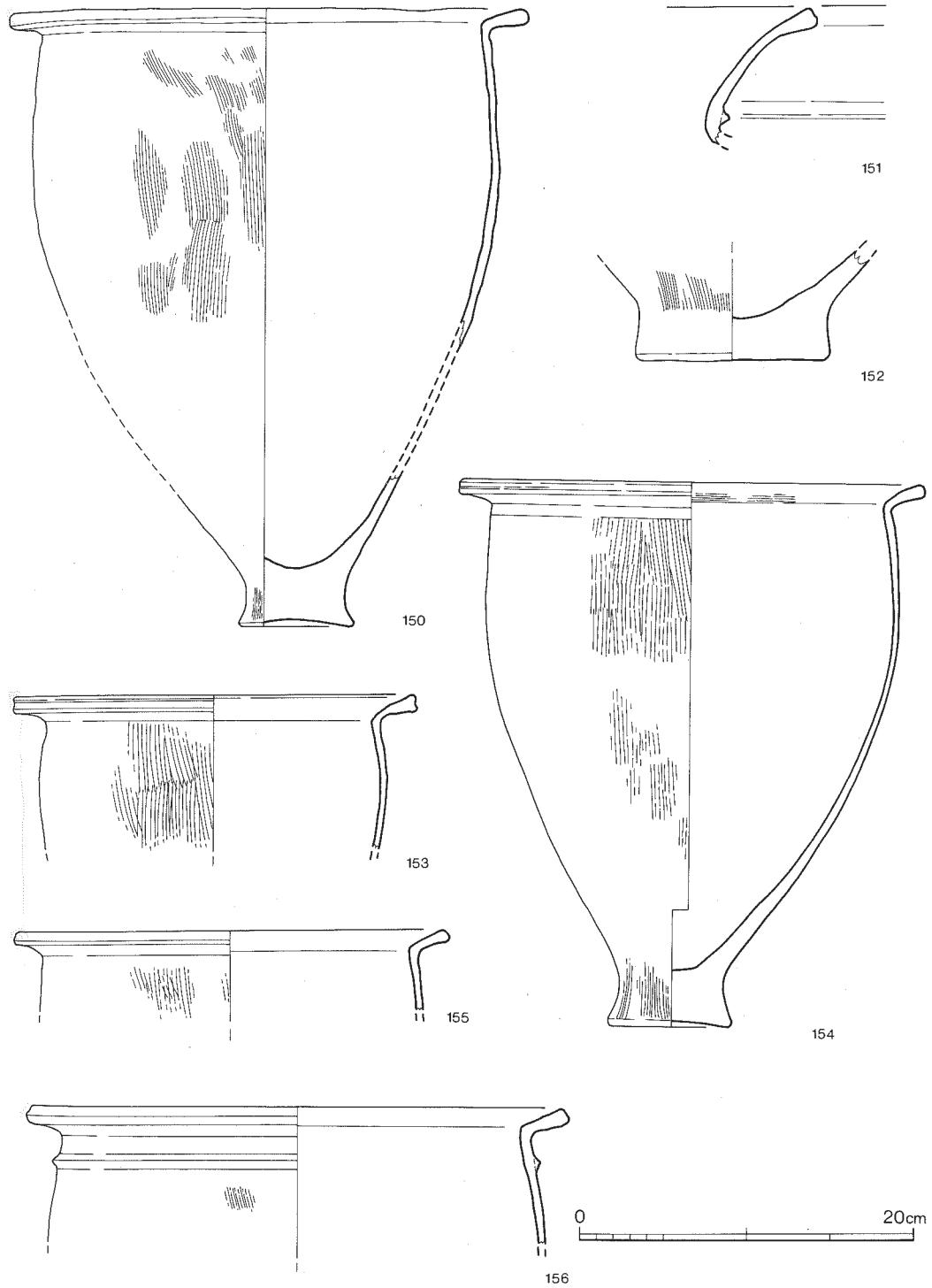
第39図 貯蔵室出土土器実測図15(1/4)



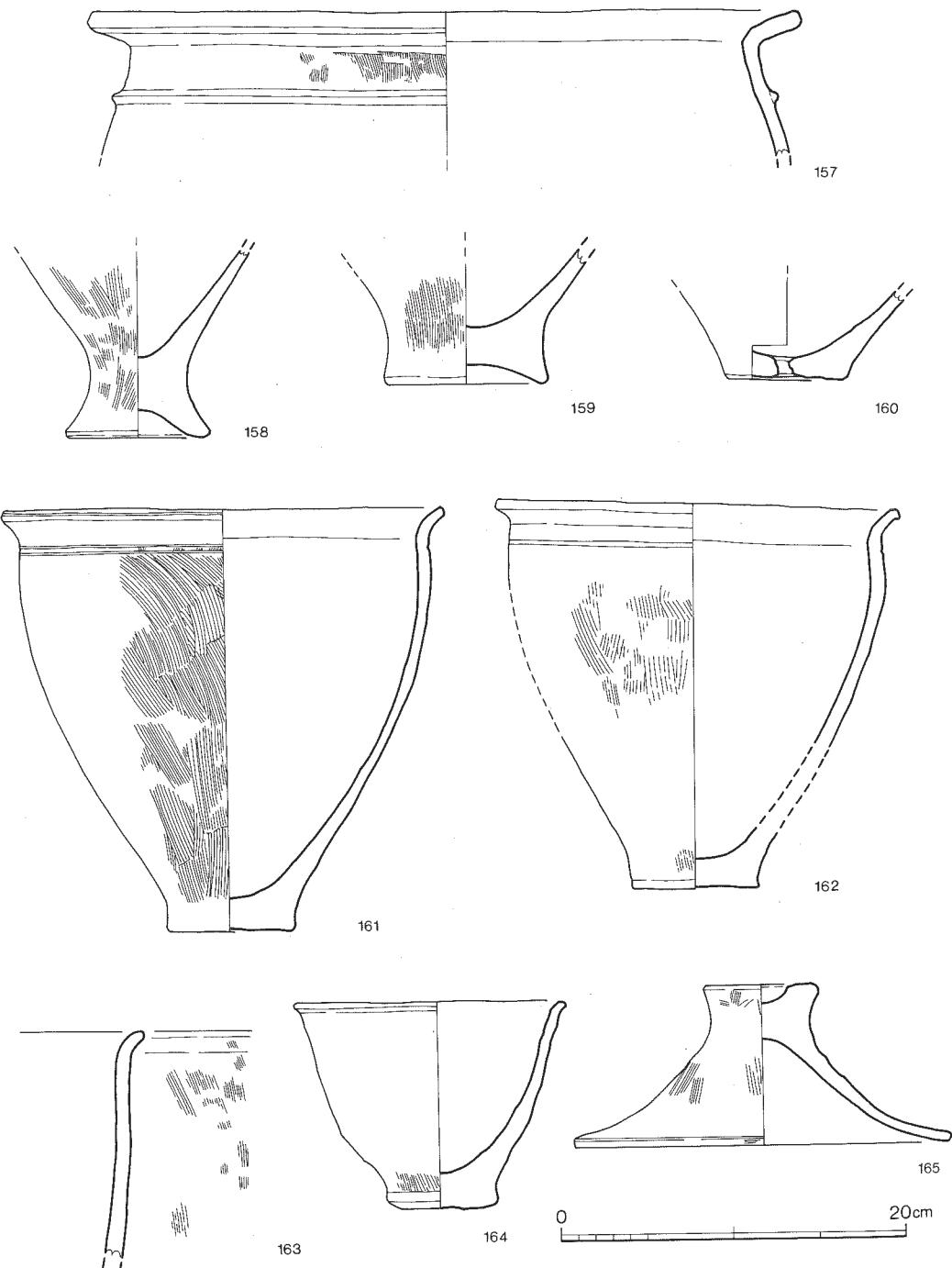
第40図 貯藏穴出土土器実測図16(1/4)



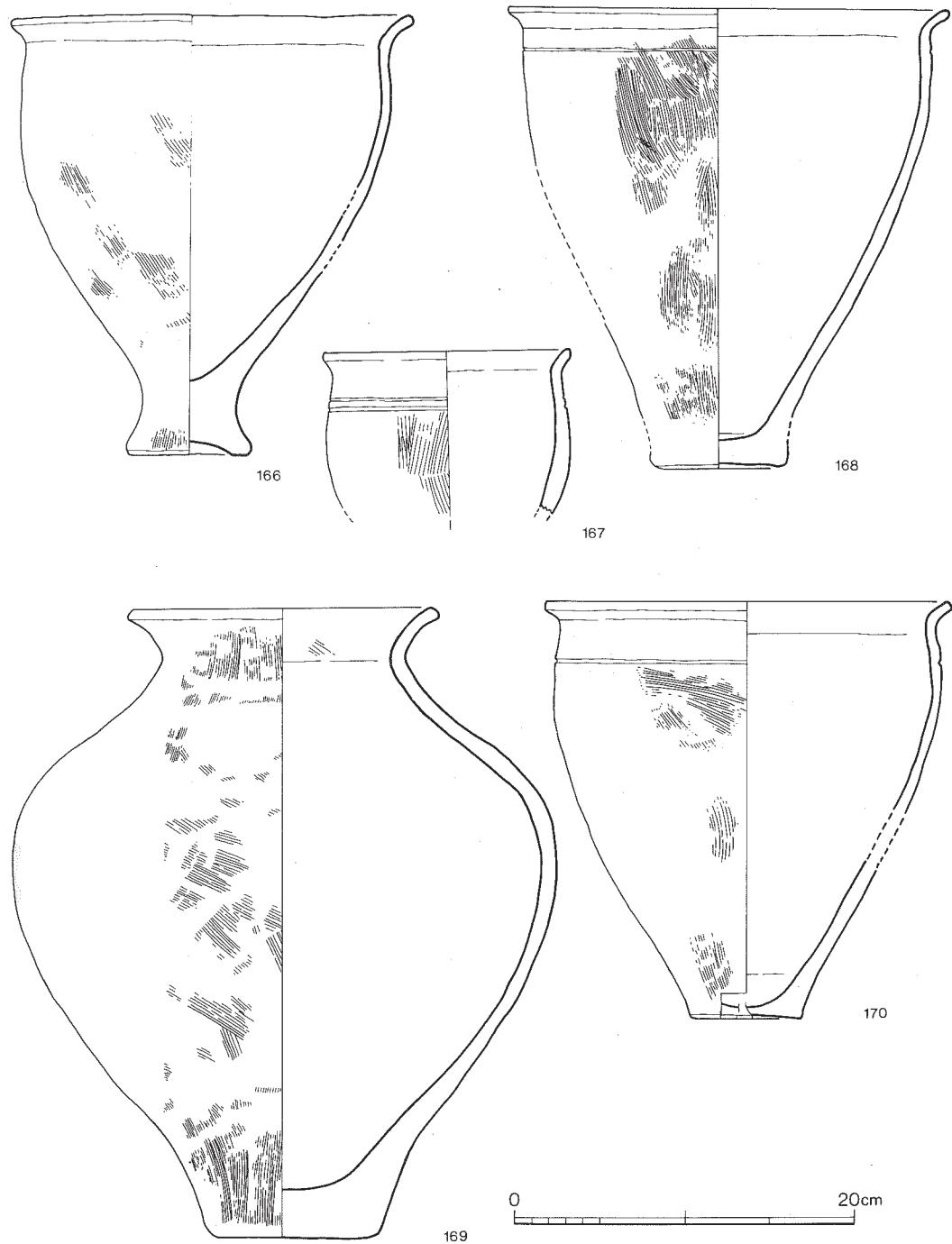
第41図 貯蔵穴出土土器実測図17(1/4)



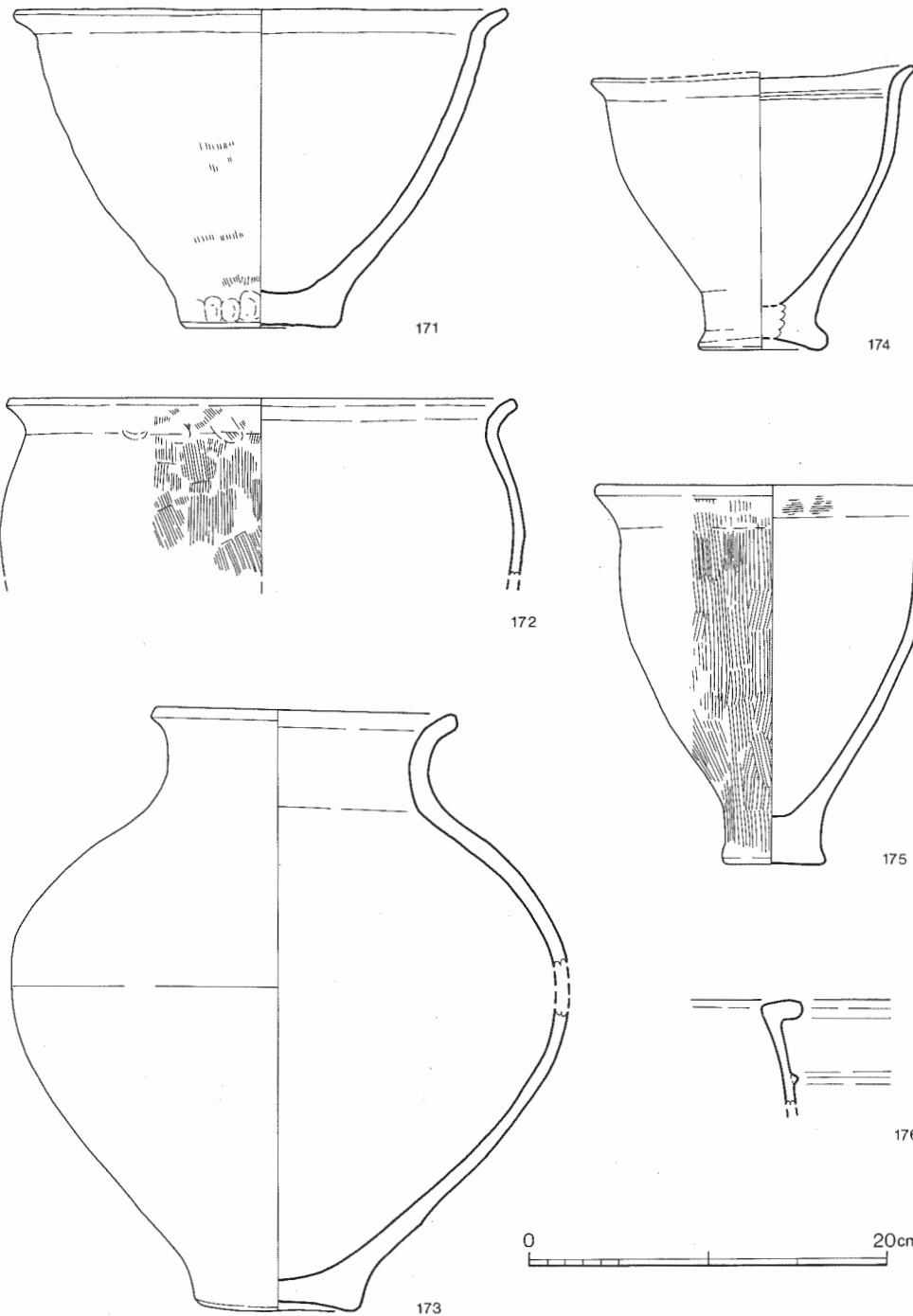
第42図 貯蔵穴出土土器実測図18(1/4)



第43図 貯蔵穴出土土器実測図19(1/4)



第44図 貯蔵穴出土土器実測図20(1/4)



第45図 貯蔵穴出土土器実測図21(1/4)

(2) 溝状遺構出土土器

3号溝状遺構 (図版17 第46図)

177は、完形に近い壺である。内傾気味に立ち上がる頸部に沈線を廻らし、口縁部は朝顔状に広がる。肩部の二条の沈線の間に、丹塗りの羽状文を施し、沈線下には鋸歯文を廻らす。復原口径10.7cm、底径5.0cm、器高16cm、胴部最大径14.7cmを測る。口縁部は内面は磨滅気味で、外面はミガキを、内面はナデ、外面はミガキで頸部に一部ハケが残る。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は、淡白褐色を呈する。178は、完形に近い甕で、口縁部に刻目を施し、二条の沈線を廻らす。口縁部はナデ、内面はミガキ、外面はハケを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は灰黄褐色、外面は黄白褐色を呈する。

(3) 土壙出土土器

2号土壙 (第46図)

179は、頸部内外面に沈線を廻らす、大形壺の破片である。頸部凸帯下に三段の羽状文、沈線下には弧文を廻らし、丹を塗布する。内面はハケ後ミガキ、外面はハケ後ミガキを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は褐色、外面は黒褐色を呈する。

3号土壙 (第46図)

180は、壺片で、胴部最大径36.4cmを測る。頸部に沈線を施し肩部に段を作り、その下に羽状文、沈線に二重の弧文を廻らし一部丹が残る。内面はミガキ、外面は磨滅気味である。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は明黄色を呈する。

15号土壙 (図版17 第47図)

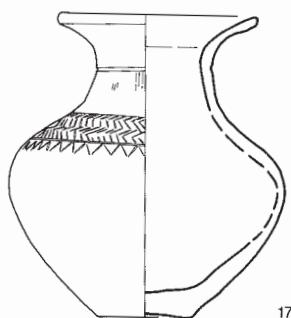
182は、ほぼ完形の甕で、二条の沈線を廻らす。口径31.6cm、底径9.3cm、器高36.5cmを測る。内面は磨滅している。外面はハケを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は橙茶褐色、外面は褐色で、一部赤変、黒化する。

18号土壙横 (図版17 第46図)

181は、18号土壙横出土の小壺の胴部で、羽状文、二重の弧文を廻らす。胴部最大径は16.4cmを測る。器面は磨滅が著しい。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は明黄褐色を呈する。

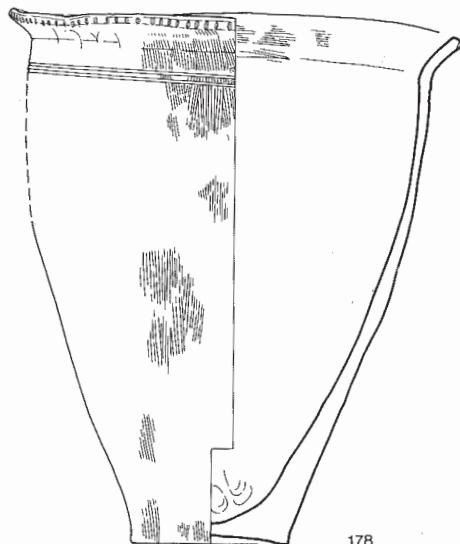
20号土壙 (図版18 第47図)

183は、頸部外面に4条の沈線、内面に凸帯を、肩部にも凸帯を廻らす壺の破片である。口縁部は朝顔状に開き、口径29.0cm、胴部最大径42.0cmを測る。頸部外面にハケが見られるが、磨滅が著しい。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は黄褐色を呈する。

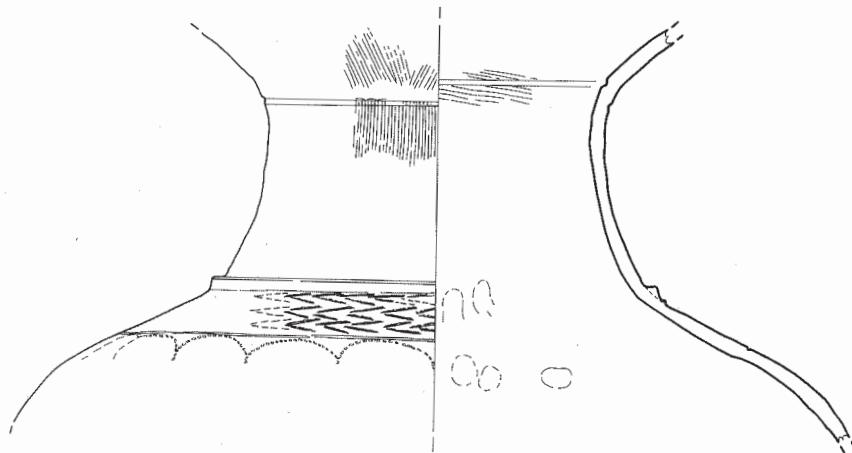


177

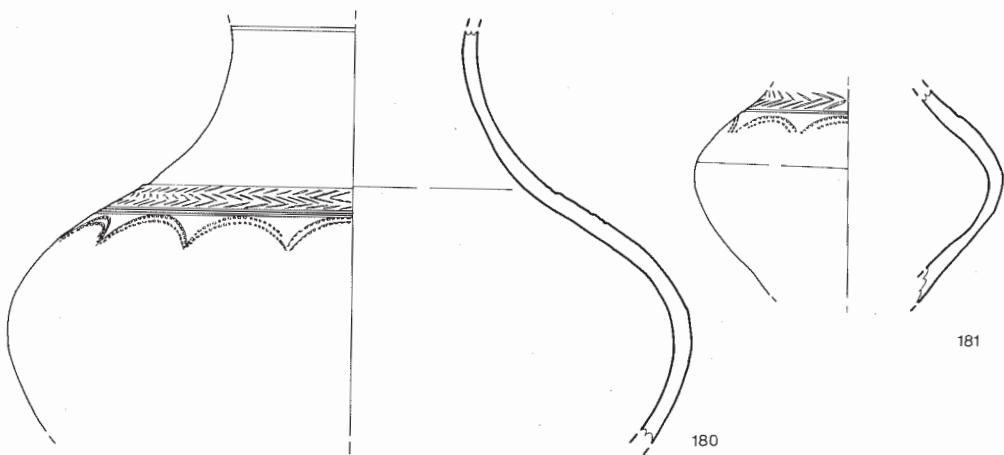
0 20cm



178



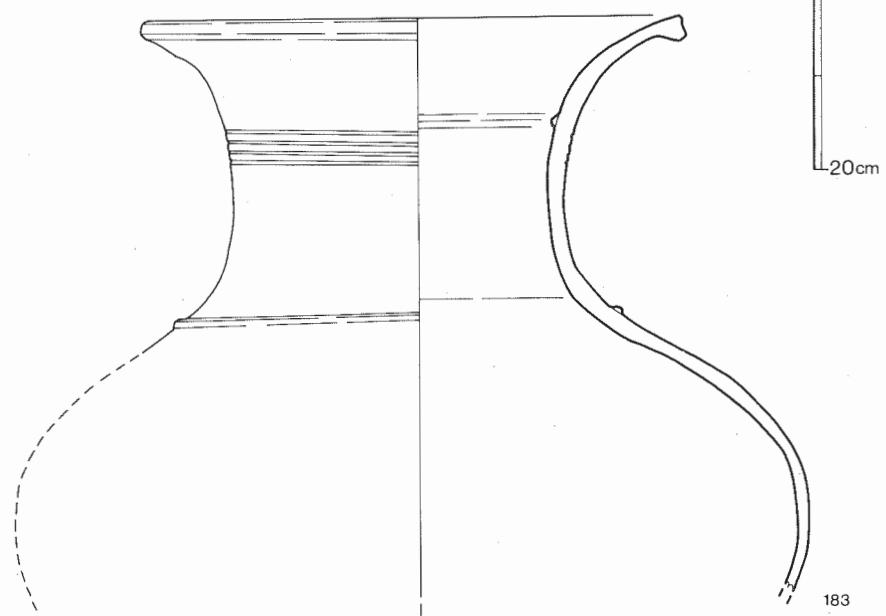
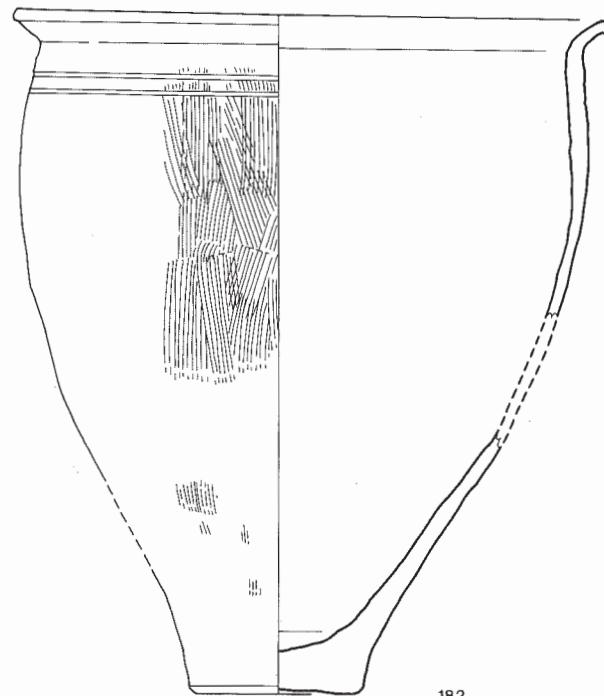
179



180

181

第46図 溝状遺構・土壙出土土器実測図(1/4)



第47図 土壙出土土器実測図 (1/4)

(4) 住居跡出土土器

1号住居跡（第48図）

184は、手捏ね風の底部片である。器面は磨滅している。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は、暗褐色を呈する。

2号住居跡（第48図）

185は、甕底部で、底径7.4cmを測る。器面は磨滅している。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は暗茶褐色で底部は黒化し、外面は黒褐色で、一部赤変している。186は、平底の甕底部で、底径7.5cmを測る。側面には穿孔が施され、底部にも穿孔途中と思われる凹みがある。内面ナデ、外面はハケを施す。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は褐色、外面は赤変している。187は、甕底部で、底径7.2cmを測る。器面は磨滅が著しい。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は黄褐色で、一部黒化している。188は、跳ね上げ気味の甕口縁片で、復原口径24.3cmを測る。器面は磨滅している。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は悪く、器面は黒色を呈する。189は、やや跳ね上げ気味の甕口縁片である。内面に一部ナデが見られるが、磨滅が著しい。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は淡黄褐色を呈する。190は、甕口縁片で、三角凸帯を廻らす。器面は磨滅が著しい。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は白黄褐色を呈する。191は、丹塗りの高杯の杯部片で、復原口径22.4cmを測る。丹の剥落が著しく、外面にハケが残る。胎土は細砂粒を含み、緻密である。焼成は悪く、器面は白黄褐色を呈する。192は、直口する。甕口縁片で、三角凸帯を廻らす。器面は磨滅が著しい。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は暗茶褐色、外面は灰黄褐色を呈する。

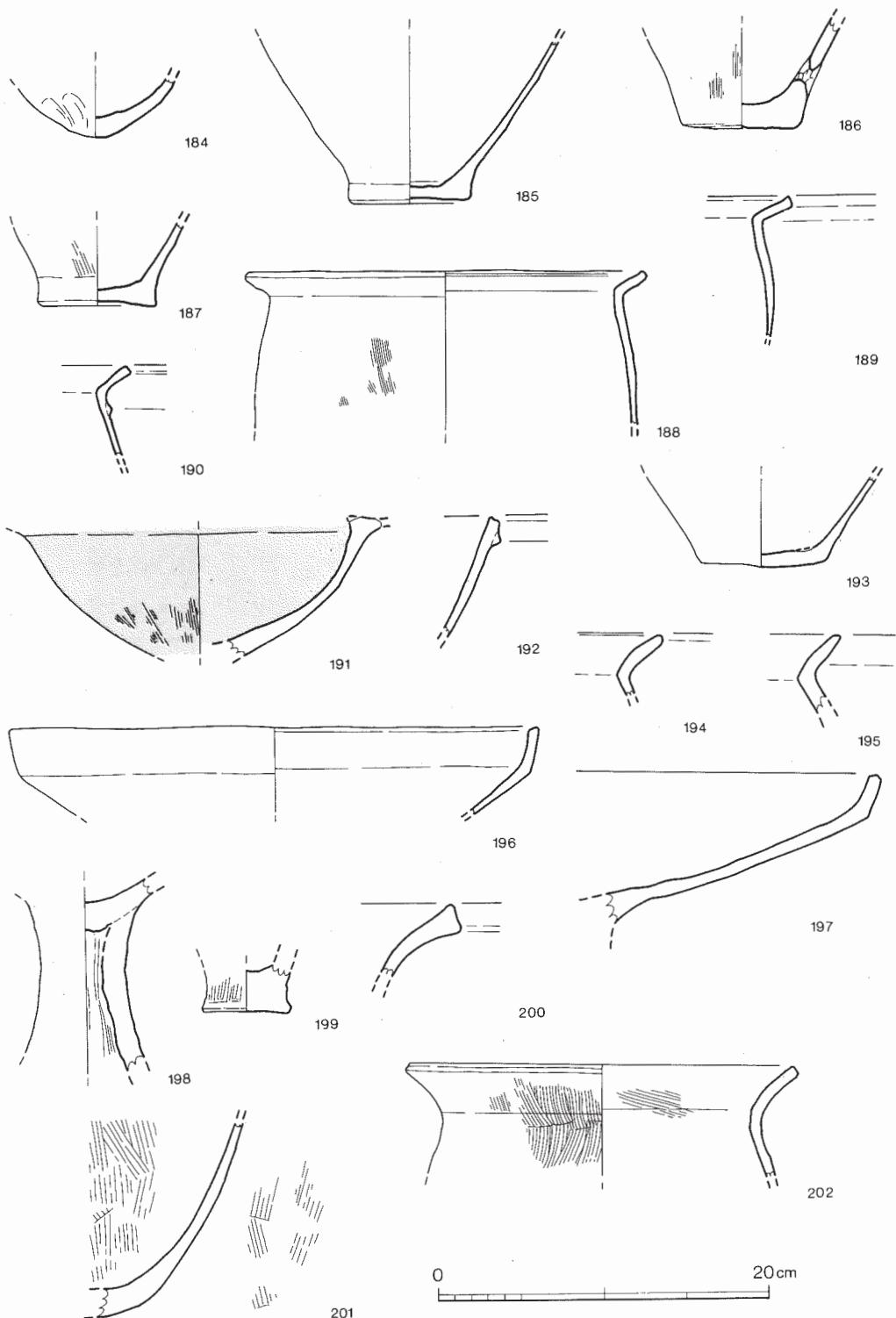
3号住居跡（第48図）

193は、壺底部で、底径8.0cmを測る。器面は磨滅している。胎土は細砂粒を含み、緻密である。焼成は良く、器面は淡黄白褐色で、外面は一部黒化している。194は、甕口縁片で、磨滅が著しい。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は黄褐色を呈する。195は、くの字を呈す、壺口縁片である。器面はナデを施す。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は褐色を呈する。196は、高杯の杯部片で、復原口径約32cmを測る。器面は磨滅している。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は黄橙色を呈する。197は、高杯の杯部片で、器面は磨滅している。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は黄橙色を呈する。

4号住居跡（図版18 第48図）

198は、高杯の脚部片で、丹を塗布する。器面は磨滅が著しい。内面にしづり痕が残る。胎土は細砂粒を含み、緻密である。焼成は良く、器面は淡黄白褐色を呈する。199は、裾広がりで端部の張る甕の底部である。内部はナデ、外面はハケを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は暗褐色を呈する。

5号住居跡（第48図）



第48図 住居跡出土土器実測図 I (1/4)

200は、壺口縁片で、端部は肥厚する。器面は磨滅している。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良く器面は白黄褐色を呈する。

6号住居跡（第48図）

201は、甕底部である。器面はハケ後一部ナデを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は黄褐色、外面は明黄褐色で、一部黒化する。202は、甕口縁片で、復原口径23.8cmを測る。内面はナデ、外面はハケを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は明黄褐色、外面は黄褐色で、一部黒化している。

7号住居跡（第49図）

203は、壺底部で、底径6.8cmを測る。器面は磨滅が著しい。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は明黄橙色、外面は黄橙色で、一部黒化する。204は、壺底部で、磨滅気味である。外面に一部ハケ、ナデが見られる。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は黄橙色を呈する。205は、甕口縁片で、復原口径23.0cmを測る。器面は磨滅が著しい。焼成は良く、器面は黄褐色を呈する。206は、甕口縁片で、口縁端部は肥厚する。復原口径29.7cmで、磨滅が著しい。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は、黄褐色を呈する。207は、跳ね上げを呈す、甕口縁片である。器面は磨滅が著しい。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は黄橙色を呈する。208は、口縁部内側に稜を作り口縁部が肥厚する甕口縁片で、三角凸帯を廻らす。器面は磨滅している。胎土は粗、細砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は明橙褐色を呈する。

8号住居跡（第49図）

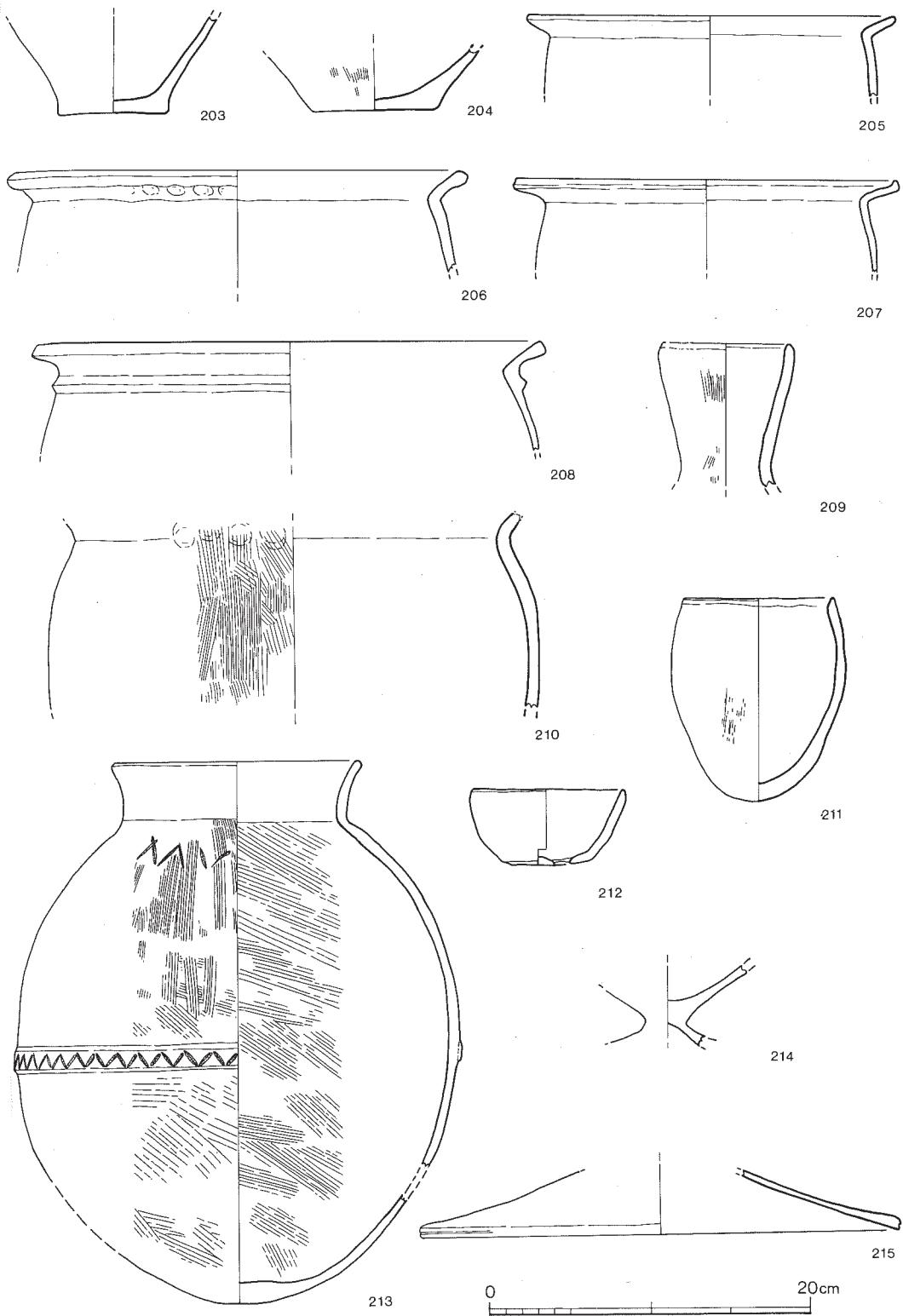
209は、直立する壺口縁片で、復原口径4.4cmを測る。内面はナデ、外面はハケを施す。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は明黄白褐色を呈する。

10号住居跡（第49図）

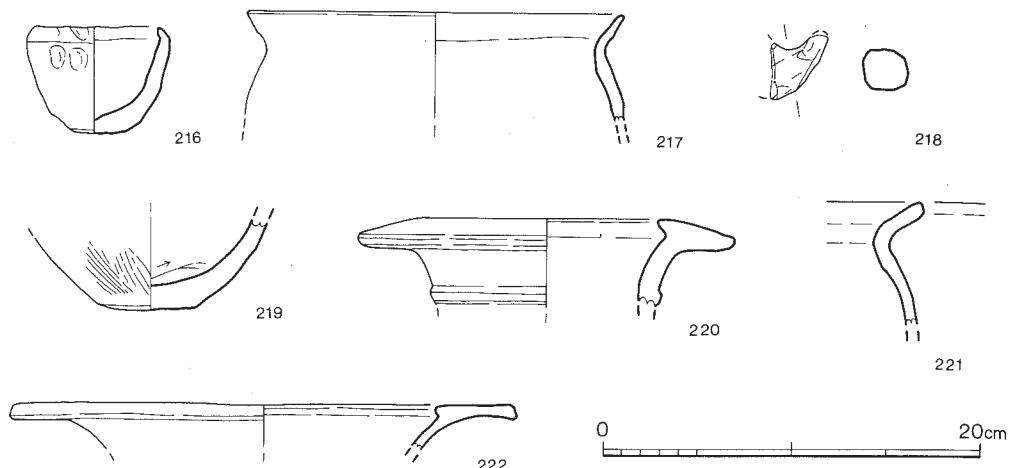
210は、口縁がゆるく外反する甕口縁片である。内面は磨滅している。外面はハケを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は明褐色を呈する。

11号住居跡（図版18、第49図）

211は、丸底の鉢で、復原口径9.5cm、器高12.8cm、胴部最大径11cmを測る。外面はハケを施す。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は談黄褐色、外面は胴黄褐色で、底付近は赤変している。212は、小形の杯で、口径9.6cm、底径5.7cm、器高4.8cmを測る。器面は磨滅している。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は褐色、外面は淡褐色で、底部は一部黒化している。213は、長胴の壺である。胴部には台形状の凸帯が廻り、頸部下同様の八字の刻目を施す。口径15.6cm、器高33.7cm、胴部最大径27.6cmを測る。内面はハケ、外面はハケ後ミガキを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は褐色で、一部赤変し、外面は橙褐色で、部分的に赤変、黒化する。214は、短脚の高杯片で、器面は磨滅している。胎土は砂粒を若干含む。焼成は良く、器面は赤茶褐色を呈する。215は、蓋の裾部片で、復原裾部径30cmを測



第49図 住居跡出土土器実測図 2 (1/4)



第50図 住居跡出土土器実測図 3 (1/4)

る。器面は磨滅している。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は、淡橙褐色を呈する。

12号住居跡（図版18、第50図）

216は、手捏ね土器で、復原口径7.5cm、底径3.0cm、器高5.7cmを測る。器面は磨滅している。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は淡茶白色を呈する。217は、甕口縁片で、器面は磨滅している。胎土は細、粗砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は黄橙色を呈する。218は餌取手の部分で、磨滅気味である。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、白黄褐色を呈する。

13、14号住居跡（第50図）

219は、壺底部で、底径5.3cmを測る。内面はヘラ削り、外面はハケを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は褐色、外面は淡黄白色を呈する。220は、壺口縁片で口縁端部は内側へ大きく突出する。復原口径20cmで、端部は下がり気味である。器面は磨滅している。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は橙褐色を呈する。221は、甕口縁片で、磨滅が著しい。胎土は砂粒を多く含む、焼成は良く、器面は白黄色を呈する。222は、平坦で、やや鋤先を呈す壺口縁片で、磨滅が著しい。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良く、器面は橙褐色を呈する。

(2) 石製品、土製品

(1) 石 鏁 (図版19-1、第51図 1~18)

石鎁は20点が出土しており、そのうち磨製石鎁はわずか4点である。打製石鎁のうち7点は黒曜石製である。打製石鎁の中には石鎁かどうか不明なものも含まれている。小破片を除き18点を図示した。

1は、12号住居跡覆土中出土の打製石鎁の完形品である。長さ19mm、幅16.5mm、厚さ2.6mm、重さ0.6gを測り、二等辺三角形を呈する。凹基式で、基部の抉りは深く三角形をなす。両面より調整剝離が行なわれており、周縁は鋸歯状を呈する。石材は黒色で半透明の黒曜石である。

2は、表土中出土の打製石鎁で先端と脚部片端を欠く。現存長17.5mm、幅16.5mm、厚さ4mm、重さ0.65gを測り、縦長の二等辺三角形を呈す。凹基式で、抉りは浅く弧状を呈する。石材は黒色の黒曜石である。

3は、13、14号住居跡覆土中出土の打製石鎁の完形品である。長さ16mm、幅16mm、厚さ4mm重さ0.6gを測り、正三角形を呈す。凹基式で、抉りは三角形を呈す。両面とも調整が行なわれている。表面はかなり風化しており、剝離面は丸味を帯びている。石材は黒灰色の不透明の黒曜石で艶がない。

4は、表土中出土の打製石鎁で、両基部を欠損する。現存長14mm、幅12mm、厚さ4mm、重さ0.5gを測る。両面とも大きく調整剝離が呈されている。石材は灰白色の黒曜石である。

5は、表土中出土の打製石鎁で、脚部片端を欠く。現存長15.5mm、幅12.5mm、厚さ4mm、重さ0.55gを測る。縦長の三角形で、背部は若干張りぎみである。凹基式で、抉りは浅く、円弧状を呈する。両面とも調整は雑である。石質は灰白色でやや半透明の黒曜石である。

6は、表土中出土の打製石鎁の完形品で、ハート形を呈する。長さ35.5mm、幅23mm、厚さ5mm、重さ3.5gを測る。最大幅は基部より8mmの所にある。凹基式で、抉りは浅く弧を描く。基部は大きい。両面とも丁寧に調整剝離がされている。石材は灰白色の黒曜石である。

7は、表土中出土の打製石鎁で、脚部片端及び先端を欠く。現存長48mm、幅13.5mm、厚さ4.5mm、重さ2.7gを測る。最大幅は先端より25mmの突起部にある。基部には突起状の短脚を有し、浅い抉りは台形状を呈する。断面は先端付近で丸みをもつ菱形を呈し、基部付近は平坦面を作る。両面とも大きく調整剝離がされている。石材は灰白色の黒曜石である。

8は、4号貯蔵穴出土である。長さ32mm、幅19mm、厚さ3mm、重さ1.7gを測り、平面形は縦長の三角形だが、周縁はやや弧を描く。表面は大きな剝離後、周縁を雑に調整剝離を行なっている。裏面は主要剝離面である。基部は、浅い凹みを呈している。剝片鎁のようなものとして加えたが、石鎁とすべきでないかもしれない。石材は灰白色で半透明の黒曜石である。

9は、表採品で、先端及び脚部片端を欠く打製石鎁である。現存長16.5mm、幅16.5mm、厚さ

4 mm、重さ1.0 gを測る。凹基式で抉りは浅い。両面とも調整剥離が行なわれているが、風化のため丸味を帶びている。石材は灰色のサヌカイトである。

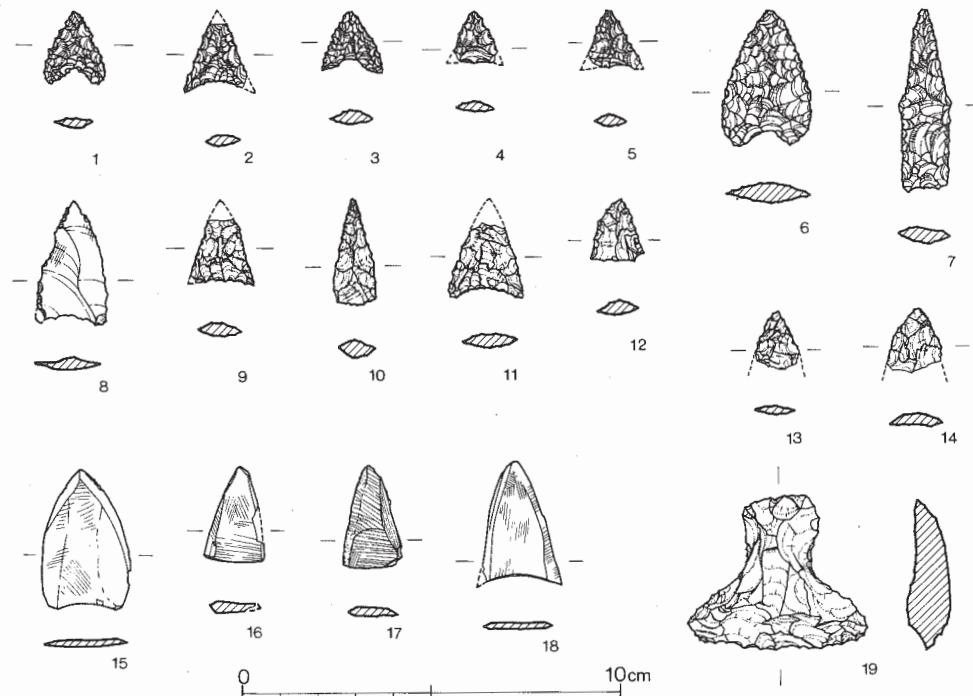
10は、15号土壌出土の打製石鎌の完形品である。平面形は柳葉状を呈し、長さ27.5 mm、幅11.2 mm、厚さ5 mm、重さ1.5 gを測る。基部は丸味を帶び、円基式である。中央部が膨らみ、断面は菱形状を呈す。石材は黒灰色の安山岩である。

11は、表採品で、先端を欠く打製石鎌である。現存長19 mm、幅20 mm、厚さ4 mm、重さ1.2 gを測る。凹基式で、抉りは弧状を呈する。両面とも調整剥離が行なわれているか、表面は風化のため丸味を帶びている。石材は明灰色の安山岩である。

12は、表採品で基部は欠損している。現存長16 mm、幅14 mm、厚さ4 mm、重さ0.75 gを測る。両面とも調整は粗雑である。石材は黒灰色の安山岩である。

13は、11号住居跡出土の打製石鎌で、両脚部を欠く。現存長15 mm、幅12 mm、厚さ3 mm、重さ0.4 gを測り、縦長の三角形を呈する。両面とも調整は粗雑である。石材は灰色の安山岩である。

14は、表土中出土の打製石鎌で、両脚部を欠く。現存長16.5 mm、幅1.5 mm、厚さ3 mm、重さ0.7 gを測り、形は整っていない。表面は調整が行なわれているが、裏面は凹んでおりほとんど調整が行なわれていない。石材は黄灰色のサヌカイトである。



第51図 石製品実測図 I (1/2)

15は、2号住居跡の床面付近で出土した磨製石鏃の完形品で、ハート形を呈する。長さ36mm、幅23.5mm、厚さ2mm、重さ2.8gを測る。最大幅は基部から10mmの所にある。凹基式で、抉りは浅く弧状を呈する。平扁で、刃部は丁寧に研ぎ出されている。両面とも丁寧に研磨されている。

16は、7号住居跡出土の磨製石鏃で、側縁は一部欠損している。現存長24.5mm、幅15.5mm、厚さ3mm、重さ1.1gを測る。扁平で、側縁には両面から刃が研ぎ出されている。全面、良く研磨されている。石材は縁灰色の粘板岩である。

17は、表土中出土の磨製石鏃で基部は一部欠損している。長さ27mm、幅15.6mm、厚さ3mm、重さ1.2gを測る。平基式で、両面とも荒研磨されており、擦痕が著しい。石材は縁灰白の粘板岩である。

18は、表採品で脚部片端を欠く。長さ32mm、幅22mm、厚さ1.5gを測る。扁平で刃は両側より研ぎ出されている。凹基式で、抉りは浅く弧状を呈する。石材は淡緑色の粘板岩である。

(2) 石匙 (図版19-1、第51図19)

19は、8号貯蔵穴出土の横型石匙の完形品である。長さ45mm、幅47.5mm、厚さ12mm、重さ17.9gを測るT字状である。つまみ部は長さ21mm、幅20mmを測る。風化を受け表面は丸味を帶びている。石材は黒灰色の安山岩である。

(3) 石戈 (図版19-2、第52図20~22)

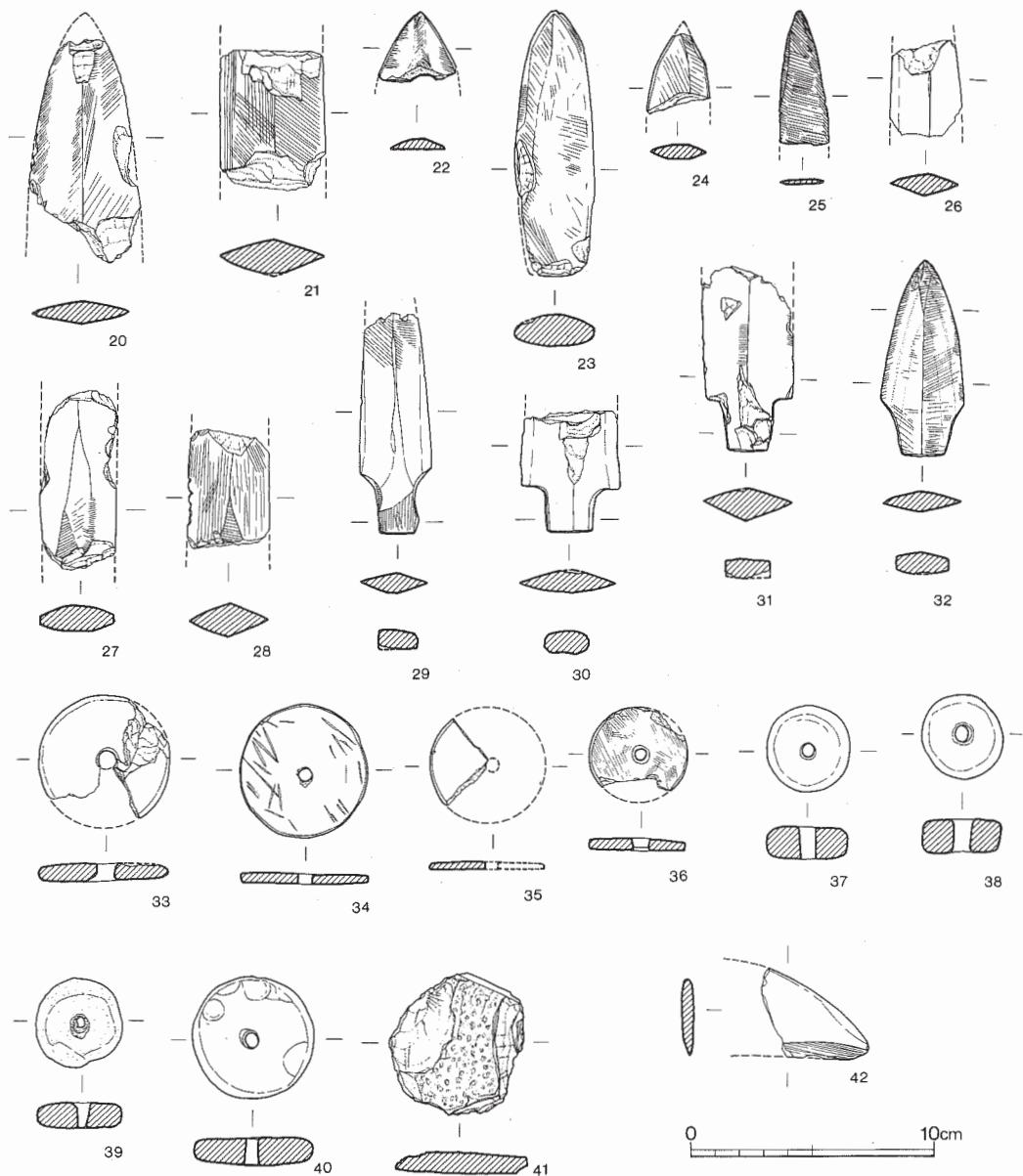
石戈は、4点出土している。すべて破損品で完形品が無いため、全体の大きさは不明である。ここでは遺存度のよい3点を図示した。

20は、45号貯蔵穴から出土した。4点中、一番残りの良いもので、先端及び基部を欠く。現存全長90mm、最大幅47mm、最大厚10mmを測る。刃こぼれが著しい。鎬稜及び刃端より基部方向へ、斜めに擦痕が明瞭に残る。全面、丁寧に研磨されている。石材は、青灰色の砂岩である。

21は、14号貯蔵穴から出土した。切先と基部との中間部分である。形状より戈として分類した。現存全長56.5mm、幅43.5mm、厚さ14mm、重さ45.9gを測る。擦痕は鎬稜より斜方向と刃部に沿って残っており、全面良く研磨されている。刃部端は刃潰しが行われたらしく、研ぎ出されていない。材質は暗緑色の砂岩である。

22は、遺構検出中に覆土より出土した切先部分で、現存全長28mm、最大幅32mm、厚さ5mmを測る。鎬稜の部分は不明瞭で、荒い擦痕が残っている。裏面は平坦で、断面は丸味をもった台形状を呈する。刃部は両面より研ぎ出されている。三角形の底辺に当る部分は、研磨され弧状の抉りが施されており、石鏃としての二次的使用が考えられる。材質は縁灰色の砂岩である。

(4) 石剣 (図版19-2、第52図23~31)



第52図 石製品・土製品実測図 2 (1/3)

小破片を加えると合計17点が出土した。ここでは遺存度の良い8点を図示した。大部分が欠損品である。

23は、16号貯蔵穴からの出土品である。全長107mm、幅33mm、厚さ13.5mm、重さ55.0gを測る。

基部付近は欠損、剥離が著しいが、一部研磨部分が残っており、唯一の完形品と言える。槍先とすべきかもしれない。全体的に丸味を帯びる。表面の切先部には、若干鎬稜が見られるが不明瞭で、裏面には全く見られない。切先部はやや尖るが、側縁部は研ぎ出されていない。表面は研磨されている。石材は黒灰褐色の砂岩である。

24は、6号住居跡出土の切先部の残欠品で、先端も欠損している。現存長33mm、幅26mm、厚さ6.5mm、重さ5.6gを測る。鎬稜は見られず平坦面を呈す。石材は青灰色の砂岩である。

25は、5号貯蔵穴出土の切先部である。現存長54mm、幅19.5mm、厚さ2mm、重さ3.1gを測る。鎬稜はなく薄く板状を呈し、両面とも荒い研磨痕が残る。刃部は研ぎ出されてない面が多い。石材は淡灰緑色の砂岩である。石剣としたが石鎧の可能性が大きい。

26は、12号住居跡出土の欠損品で、切先と基部の中間の部分である。現存長39.5mm、幅29.5mm、厚さ9.5mm、重さ9.5gを測る。中央部には明瞭な鎬稜を有し、断面は菱形を呈す。刃部は研ぎ出されていない。両面とも良く研磨されている。石材は明青灰色の砂岩である。

27は、6号貯蔵穴出土の基部付近の残欠品である。現存長73mm、幅31mm、厚さ11mm、重さ31.85gを測る。側縁には抉り状の欠損部がある。鎬稜は2本に分かれており平坦面をなし、荒い擦痕が見られる。先端の一部に鎬稜が残っている。両面は良く研磨されている。石材は明緑灰色の砂岩である。

28は、6号住居跡出土で、基部付近の残欠品である。現存長47.5mm、幅33.5mm、厚さ14mm、重さ27.1gを測る。刃部は大、小の刃こぼれが見られるが、鋭く研ぎ出されている。鎬稜は明瞭で、途中より分岐し平坦面を呈する。両面とも良く研磨されている。石材は明青灰色の砂岩である。

29は、表採品で、先端部を欠損している。現存長90mm、幅29.5mm、厚さ8.5mm、重さ32.5gを測る。有茎式で、茎部はわずかに丸みをもつ。長さ25mm、幅16mmを測り、肩の部分はゆるやかに剣身部に続く。鎬稜は基部付近では不明瞭となり、分岐して茎部へつながる。両面とも丁寧に研磨されている。石材は緑灰色の砂岩である。

30は、18号貯蔵穴出土の基部の残欠品である。現存長50mm、幅41mm、厚さ10mm、重さ26.65gを測る。有茎式で長さ17mm、幅19mmを測り、不明瞭な鎬稜が見られる。石材は白灰色の砂岩である。

31は、表土出土の基部残欠品である。現存長75.5mm、幅36.5mm、厚さ14mm、重さ36.4gを測る。有茎式で、茎部は長さ21mm、幅22mmを測る。剣身中央には明瞭な鎬稜があり、茎部端まで続くものと思われる。石材は暗灰色で黄白色の斑点をもつ凝灰岩である。

(5) 石 槍 (図版19-2、第52図32)

32は、25号貯蔵穴出土の完形品である。全長79.0mm、幅34mm、厚さ9mmを測る。有茎式で肩

ははらず、幅広い茎部中央にはやや不明瞭な鎧稜が走る。鎧稜は切先部で分岐しているが、不明瞭である。表面茎部端は黒斑を有す。両面は丁寧に研磨されているが、刃部周縁は荒い擦痕が見られる。石材は明緑灰色の砂岩である。

(6) 紡錘車 (図版19-3、第52図33~41)

紡錘車は未製品1点を加えると、9点出土している。そのうち石製は4点で他は土製である。直径でみると大形 (4.8cm~5.45cm)、中形 (4.1cm)、小形 (3.35cm~3.65cm) に分類でき、小形はすべて土製品である。大形品の中には1点土製品が含まれる。重量順に並べるならば、大形、小形、中形となる。

33は、17号貯蔵穴底面の壁際より出土した石製で、全体の約1/4を欠損している。直径54.5mm、孔径7.5mm、厚さ7mm、重さ23.7gを測る。石製の中では厚手で、表面は荒れており、粗製である。中心孔部が最も厚く、端が若干薄くなっている。稜線は不明瞭で、周縁は丸味を帯びている。穿孔は両面穿孔である。緑色を呈す滑石製で部分的に白斑がある。風化のため白っぽくなっている。

34は、7号住居跡の南西側屋内土壌より出土した石製の完形品である。直径は52mm~54mm、孔径7mm、厚さ4.5mm、重さ27.2gを測る。両面ともほぼ水平だが端が若干薄くなっている感がある。稜線は明瞭で、周縁側面には整形時の痕跡が稜として観られる。周縁付近には、荒い擦痕が残るが孔周囲は丁寧に磨かれている。穿孔は片面からである。材質は33と同じ色調の滑石で、全体的に白っぽい。

35は、13、14号住居跡の覆土より出土した石製の残欠品である。復原で直径48mm、厚さ3.5mmで、孔径は不明だが、他の孔径と大差ないものと思われる。石製では、薄手で良く磨かれた精製である。裏面はほぼ平らだが、表は端が若干薄くなっている、周縁断面は台形状をなす。材質は滑石で明緑灰色を呈する。

36は、掘立状遺構のH-16の底面付近の壁際より出土した石製の中形品である。直径41mm、孔径は表面で7.5mm、裏面で5mm、重さ11.2gと軽量である。表裏とも良く磨かれた精製で、研磨時の擦痕が残る。裏面はほぼ平坦だが表面は孔部分が厚く、端は薄くなっている、台形状をなす。穿孔は両面穿孔である。小豆色の輝緑凝灰岩製である。

37は、17号貯蔵穴から出土した土製である。小形の完形品で、直径34.5mm~35mm、孔径は表面で7mm、裏面で6mm、厚さ13mm、重さ18gを測る。表面の1/2及び裏面はススけており黒灰色を呈する。胎土に細かい砂粒を含み、焼成は良く、淡黄白色をなす。

38は、遺構検出中に出土したもので、土製である。小形の完形品で、直径33.5mm、孔径は表面で8mm、裏面で7mm、厚さ13.5mm、重さ17.5gを測る。風化のため表面は荒れている。胎土に3mm前後の砂粒を多く含む。焼成は良好で、淡黄白色をなし、部分的に淡茶色をなす。

39は、38同様、遺構検出中に出土した。土製である。ほぼ完形品で、直径35mm、厚さ11.5mm、重さ16.1gを測る。全体的に風化が著しい。孔は不明瞭で、円形を成しておらず、虫食いのようである。胎土に粗砂粒を多く含む。焼成は良好で、表面は淡黄白色、裏面は黄橙色で、一部灰色を呈する。

40は、22号貯蔵穴より出土した。土製である。完形の大形品で、直径50mm、孔径6mm、重さ32.5gを測る。表面半分及び裏面はススけており黒灰色を呈する。裏面孔部分は若干窪んでいる。胎土に粗砂粒を多く含む。焼成は良好で、黄灰色を呈する。表面には指圧痕が著しい。周縁断面は他と比べて面をなさず丸っぽい。

41は、40号貯蔵穴上方より出土した未製品である。現存長54mm、幅58mm、厚さ9mm、重さ39.7gを測る。表面は原材の自然面を残している。周辺を打ち欠き、円形状に整形している。一部欠損しており、途中で廃棄されたのであろう。石材は暗青灰色で部分的に淡緑色を呈す滑石である。

(7) 石 鎌 (図版19-3、第52図42)

石鎌は1点のみである。

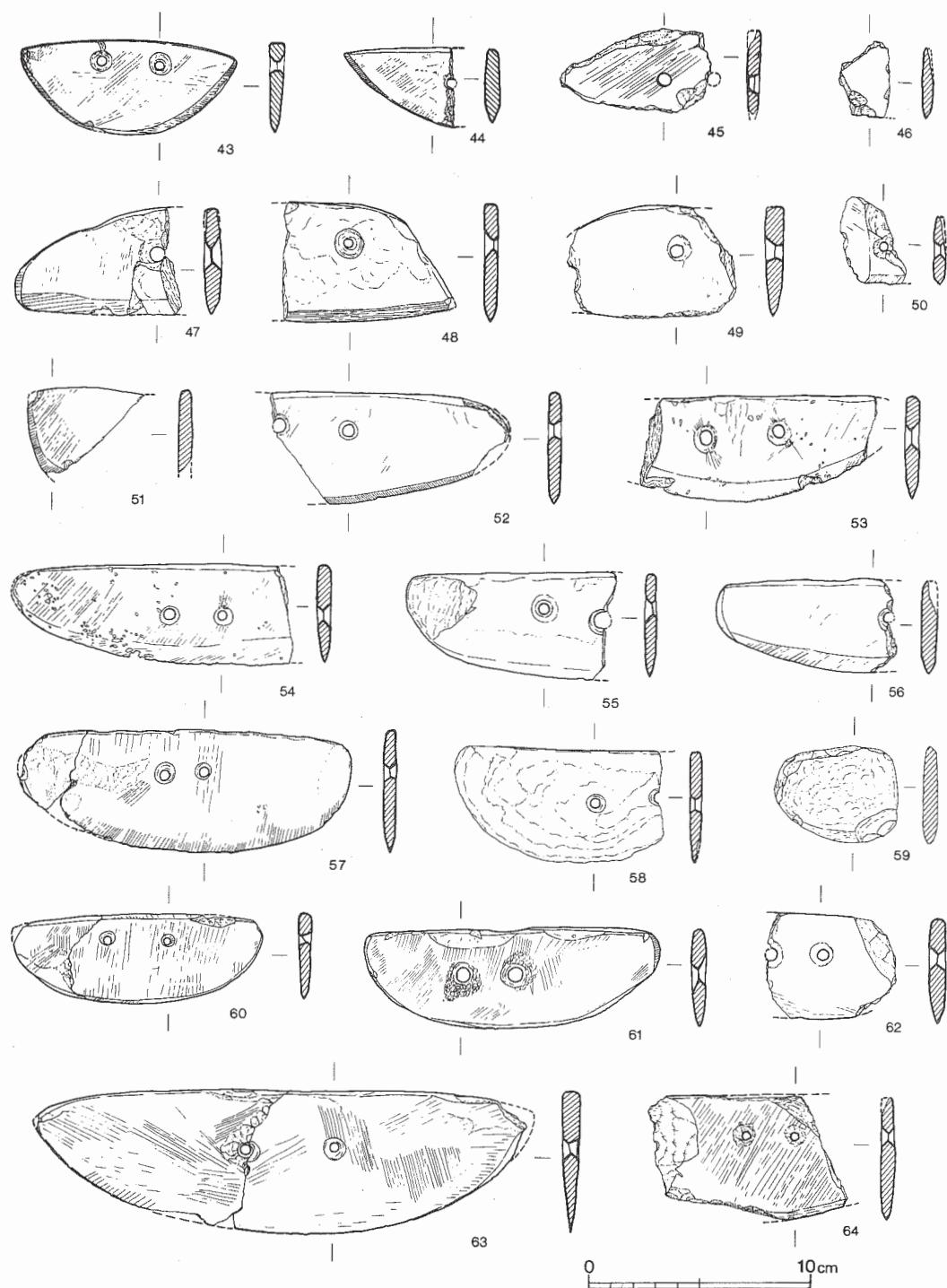
42は、10号住居跡出土の鎌の先端部で、現存長44.5mm、幅37.5mm、厚さ5mm、重さ9.1gを測る。幅6mmを測る刃部は片刃で、丸味を帯び、両面ともよく研磨されている。石材は茶色の凝灰岩である。

(8) 石 庵 丁 (図版19-4、20-1・2・3、第53・54図43~74)

小破片を加えると54点が出土した。数量としては石器の中で一番多く、砥石を除くと全体の約3割弱を占める。形態分類を行うならば、刃部外彎式、刃部直線式、刃部内彎式の三類となる。当遺跡からの出土品は、刃部外彎式が大部分を占める。石庵丁の中には、4点の大型石庵丁が含まれる。この他に未製品と考えられるもの9点が出土した。ここでは遺存状態の良いものを中心に、計32点を図示した。

43は、3号住居跡東壁寄りの床面近くより出土した。小形の刃部外彎式のほぼ完形品で、長さに対して幅広である。全長97mm、幅41.5mm、厚さ6mm、重さ41gを測る。背部はやや丸味をもち、平坦に近い。刃部は両面から研ぎ出されてるが厚く、鈍い。孔は背部より5mmの所にあり、孔径4mm、孔上面径9~10mmを測る。孔間隔は22mmで、孔は両面穿孔によるもので、やや内側に傾く、全面良く研磨されており、擦痕が見られる。石材は、小豆色の輝緑凝灰岩である。

44は、19号貯蔵穴出土の石庵丁の半欠品である。現存長49mm、幅35mm、厚さ75mm、重さ15gを測る小形品である。背部は直線で丸味を持ち、端部は突る。刃部は両面より研ぎ出しが、厚



第53図 石製品実測図 3 (1/3)

く鈍い。擦痕が著しい。孔は、背部より14mmの所にあり、両面穿孔によるもので、孔径4.5mmを測る。石材は灰茶褐色の凝灰岩である。

45は、37号貯蔵穴からの出土品で、周縁は著しく欠損しており、全体の形は知り得ない。現存長67.5mm、幅37mm、厚さ6mm、重さ16gを測る。孔径6.5mm、孔間隔11mmを測る。孔は両面穿孔によるものだが、主に裏面から行われており、孔上面径は10mmを測る。孔下辺より刃部研ぎ出しが行われており、小形の石庖丁であったと思われる。両面とも荒研磨が行われている。石材は緑灰色に暗緑色の横しまが入る砂岩である。

46は、3号住居跡出土の刃部付近の残欠品である。両面とも良く研磨されており、明瞭な稜を呈する。石材は緑灰色の砂岩である。

47は、30号貯蔵穴出土の刃部直線式の半欠品である。現存長74.5mm、幅48mm、厚さ8.0mm、重さ38gを測る。背部は外彎し、端部付近は、やや弧を描く。背面は孔付近では平坦面を呈すが、他は丸味をもち、端部付近では中央に稜を有する。刃部は両面より研ぎ出されており、刃こぼれ及び斜め方向への擦痕が著しい。孔は背部より17mmの所にあり、両面穿孔によるもので、敲打痕が残っている。孔径6.5mm、孔上面径1.4mmを測る。両面とも良く研磨されている。石材は緑色の砂岩である。

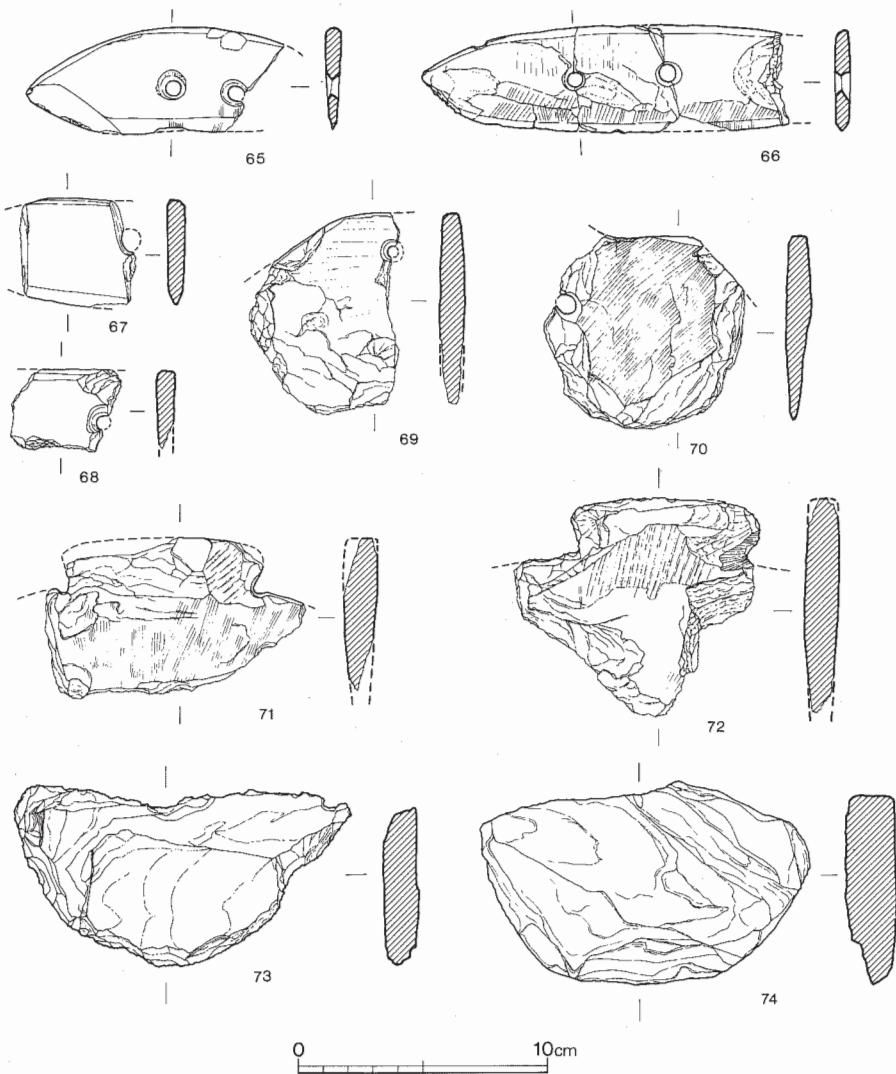
48は、23号貯蔵穴出土の刃部直線式の半欠品である。現存長76mm、幅52.5mm、厚さ6.5mm、重さ48gを測る。背部は隅丸台形状で、平坦面を呈する。刃部端はやや外彎する。刃部には横方向への擦痕が著しい。孔は背部より15.5mmの所にあり、両面穿孔によるもので、主に表面から行われている。孔径4mm、孔径上面径は表13mm、裏8mmを測り、表面には回転痕が著しい。両面とも良く研磨されているが、風化がみられる。石材は黒灰色の粘板岩である。

49は、44号貯蔵穴出土の残欠品で、刃部直線式と思われる。現存長76mm、幅50.5mm、厚さ8mm、重さ48gを測る。背部は幅が広く、平坦面を有す。端部が欠損しているため形状は不明だが、現状ではなめらかな台形状を呈する。刃部は両面より鋭く研ぎ出されている。孔は背部より1.7mmの所にあり、両面穿孔で、主に表面から行われている。孔径6mm、孔上面径は表で11mm、裏面で6.5mmを測る。表面は風化のため荒れている。石材は小豆色の凝灰岩で、白い不純物を多く含んでいる。

50は、23号貯蔵穴出土の残欠品である。表裏とも、欠損部に研磨が加えられており、二次的な使用が考えられる。石庖丁の刃部には擦痕が見られる。孔は両面穿孔で、孔径は4mmである。石材は緑灰色の砂岩である。

51は、1号住居跡出土の端部の残欠品である。背部は直線に近く、端部はやや下り気味となる。両面とも良く研磨されている。石材は明小豆色の凝灰岩で、不純物を多く含む。

52は、16号貯蔵穴出土の刃部外彎式の半欠品である。現存長107mm、幅49.5mm、厚さ6mm、重さ37gを測る。背部は直線的で、端部は下り気味となる。断面は丸味を帯びる。刃部は直線に



第54図 石製品実測図4 (1/3)

近く、両面より鈍く研ぎ出されており、明瞭な稜を有する。孔は平行でなく、右側のは背部より14mm、左側は12mmの所にある。孔径5.5mm、孔上面径は8~9mm、孔間隔25mmを測る。表面は風化がみられる。石材は淡小豆色の凝灰岩で、軽い。

53は、16号貯蔵穴出土の刃部外彎式で、両端部付近を欠損する。現存長106mm、幅47mm、厚さ7mm、重さ55gを測る。背部はほぼ直線で、中央に稜を有する。刃部はやや不明瞭だが稜が見

られ鋭い。孔は平行に並ばず、右側は背部より13mm、左側は15mmの所にある。橢円形で、孔径5~6.5mm、孔上面径13mm、孔間隔27mmを測る。背部と刃部に向って放射状の擦過痕が見られる。石材は小豆色の輝緑凝灰岩で、質が悪い。

54は、37号貯蔵穴出土の刃部外彎式で、端部付近を欠損する。現存長124.5mm、幅45mm、厚さ7mm、重さ62gを測る。刃部には不明瞭だが稜が見られ、鋭い。刃こぼれが著しい。孔は平行に施され、背部より20mmの所にある。孔径5mm、孔上面径は表で9mm、裏で11.5mmを測る。孔は両面穿孔である。石材は、暗茶褐色の凝灰岩である。

55は、41号貯蔵穴出土の刃部外彎式の半欠品である。現存長94mm、幅47mm、厚さ6mm、重さ41gを測る。背部は直線で、端部はやや下がり気味となる。背面は平坦でなく、中央はやや稜を作る。刃部は明瞭な稜は有さないが、鋭い。孔は平行でなく、右側は背部より13.5mm、左側は18mmの所にある。両面穿孔によるもので孔径5mm、孔上面径は表で12mm、裏で8mmを測り、孔間隔は20mmを測る。石材は茶褐色の砂岩である。風化が著しい。

56は、2号住居跡床面出土の刃部外彎式の残欠品である。現存長81.5mm、幅42mm、厚み8mm、重さ32gを測る。背部は直線だが端部はやや下がり、平坦面をなさない。刃部は厚く、表面に明瞭な稜を有する。刃部には明瞭な擦痕を有する。孔は背部より14mmの所にあり、両面穿孔によるものである。石材は青灰色の砂岩である。

57は、1,2号貯蔵穴覆土中出土の刃部外彎式の完形である。全長147.5mm、幅54.5mm、厚さ6mm、重さ76gを測る。背部はやや弧を描き、平坦となる。右壁はゆるやかに波をうち、つるつるしている。刃部は両面から鋭く研ぎ出されているが、稜は不明瞭である。刃部両端は薄くなっている。縦方向への擦痕が著しい。孔は右側は背部より16mm、左側は17.5mmの所にある。孔は両面穿孔によるもので、孔径4.5mm、孔上面径7.5mm~9mm、孔間隔は狭く12.5mmを測る。石材は緑灰色の砂岩である。

58は、51号貯蔵穴出土の刃部外彎式の半欠品である。現存長93.5mm、幅50mm、厚さ6mm、重さ45gを測る。背部は直線で平坦面をなす。刃部は風化しており欠損が著しい。孔は平行ではなく、右側で背部より21mm、左側で17.5mmの所にある。孔径4mm、孔上面径は8mm、孔間隔は24mmを測る。全面風化が著しい。石材は灰白色の砂岩でもろい。

59は、13号住居跡出土の刃部外彎式の端部付近の残欠品である。現存長54.5mm、幅43.5mm、厚さ6mmを測る。全体的に風化が著しい。石材は灰白色の砂岩でもろい。

60は、7号住居跡出土の刃部外彎式の完形品である。全長112mm、幅39.5mm、厚さ6.5mm、重さ40gを測る小形品である。背部はやや弧を描き平坦面を有する。刃部は端部のみを両面より鈍く研ぎ出しており、端部はやや薄くなっている。孔はほぼ平行で、背部より10mm~9mmの所にある。孔は両面穿孔によるもので、くい違っている。孔径は3mm~4mm、孔上面径6mm、孔間隔は23.5mmを測る。全面、荒研磨痕が残る。石材は緑灰色の砂岩である。

61は、43号貯蔵穴出土の刃部外彎式の完形品である。全長13.2mm、幅43mm、厚さ8mm、重さ63gを測る。背部は直線で丸みを有し、端部は下がり気味である。中央部は凹んでおり丸味を帯びる。刃部は両面より鋭く研ぎ出されているが、稜はやや不明瞭である。孔は平行で、背部より17mmの所にある。孔は一方へ片寄って呈されている。両面穿孔によるもので、敲打痕が著しく残る。孔径6mm、孔上面径14mmを測る。全面良く研磨されており、剥離面も丸味を帯びている。石材は灰色の砂岩である。

62は、21号貯蔵穴のA区より出土した刃部外彎式の残欠品である。現存長58.5mm、幅45.5mm、厚さ8mmを測る。背部は直線で平坦に近い。刃部の稜は不明瞭である。孔は平行で、背部より15mmの所にある。両面穿孔によるもので、孔径4.5mm、孔上面径10mm、孔間隔は18.5mmを測る。全面良く研磨されている。石材は青灰色の砂岩で黄白色のしまがみられる。

63は、10号貯蔵穴出土である。刃部外彎式の大形品で、全長217mm、幅65mm、厚さ8mm、重さ136gを測り、大型石庖丁に属すると考えられる。背部は直線だが両端部は下がり気味で、丸味を帯びる。刃部は薄く、下半全体から鋭角的に研ぎ出されている。孔は平行で、背部より23mmの所にある。孔は両面穿孔によるもので、孔径4mm、孔上面径10mm、孔間隔35.5mmを測る。石材は緑灰色の砂岩である。

64は、43号貯蔵穴から出土した。刃部外彎式の残欠品である。現存長89mm、幅54.5mm、厚さ6.5mm、重さ45gを測る。背部は直線で、平坦面を有す。刃部はやや不明瞭な稜を有し、主に表面から鋭く研ぎ出されている。孔は平行で、背部より16mmの所にある。孔は両面からの敲打による穿孔のみで、孔は不整円形を呈する。孔径約4mm、孔上面径9mm、孔間隔18mmを測る。全面、荒研磨痕が著しい。石材は青灰色の凝灰岩である。

65は、30号貯蔵穴出土の半欠品である。現存長103.5mm、幅41.5mm、厚さ7mm、重さ43gを測る。背部は外彎し、丸味を帯びる。端部は尖り気味となる。刃部は内彎気味で、端部はくの字状となる。刃部は丸味を有する。孔は平行で、背部より21mmの所にある。両面穿孔によるもので、孔径6mm、孔上面径11mm、孔間隔19mmを測る。石材は灰緑色の砂岩である。

66は、29、30号貯蔵穴出土の端部欠損品である。現存長146.5mm、幅42.5mm、厚さ6.5mm、重さ55gを測る。背部は外彎を呈し、丸味を有する。刃部はやや外彎を呈し、刃部はやや不明瞭だが稜を有する。孔はほぼ平行で、背部より17.5mmの所にある。孔は両面穿孔によるもので主に裏面から行われている。孔径5mm、孔上面径は表で8.5mm、裏で12mmを測る。裏面は炭の附着が著しい。石材は茶色の砂岩で脆い。

67は、4号住居跡出土の残欠品である。現存長46.5mm、幅43.5mm、厚さ7.5mmを測る。背部は丸味を帯びる。刃部は明瞭な稜を有する。孔は背部より11mmの所に呈されている。石材は青灰色の砂岩である。

68は、鋤先に共伴すると考えられる器台下より検出された残欠品である。現存長44mm、幅32.5

mm、厚さ8mmを測る。背部は直線で、平坦に近い。孔は背部より18mmの所にあり、両面から穿孔されている。石材は青灰色の凝灰岩である。

69は、7号貯蔵穴覆土より出土した大型石庖丁の残欠品である。現存長60.5mm、幅80.5mm、厚さ11mm、重さ58gを測る。背面は断面台形状を呈している。孔は背部より13mmの所にある。両面穿孔によるもので、主に裏面より行われている。石材は小豆色の輝緑凝灰岩である。表面は薄く剥離することから火を受けた可能性が考えられる。

70は、19号貯蔵穴下層出土の大型石庖丁の残欠品である。現存長80.5mm、幅76.5mm、厚さ11mmを測る。背部は台形状を呈している。左端には立ち上がりが見られ、つまみ状の突起を有するものと思われる。孔は両面穿孔によるもので、孔径7.5mmを測る。表面には研磨痕が著しい。裏面は大きく剥離している。周縁は再加工され円板形となっている。石材は、暗緑灰色の粘板岩で脆い。

71は、3、4号土壙覆土出土の大型石庖丁のつまみ状突起部分の残欠品である。現存長105mm、幅6.3mm、厚さ13.5mm、重さ92gを測る。背部は平坦で、側縁部との間に半円形の抉りを施す。そこから長さ約81mm、幅22mm程のつまみ状突起が呈されている。石材は淡茶色の粘板岩で、脆い。

72は、7号住居跡出土の大型石庖丁のつまみ状突起部分の残欠品である。現存長96.5mm、幅87mm、厚さ1.35mm、重さ136gを測る。背部にはつまみ状突起を有する。右側は側縁部との間に明瞭な半円状の抉りを施すが、左側は打ち欠いたままである。つまみ部は長さ75mm、幅23mmを測る。石材は赤小豆色の凝灰岩である。

73は、10号住居跡出土の未製品である。現存長135mm、幅71mm、厚さ14mm、重さ186gを測る。両面とも背部より主要剥離が行われ、周囲も整形が行われている。粗割整形の段階と思われる。右側の裏面は大きく欠損している。表面左端部付近は丁寧に剥離調整が行われている。石材は緑灰色の砂岩である。

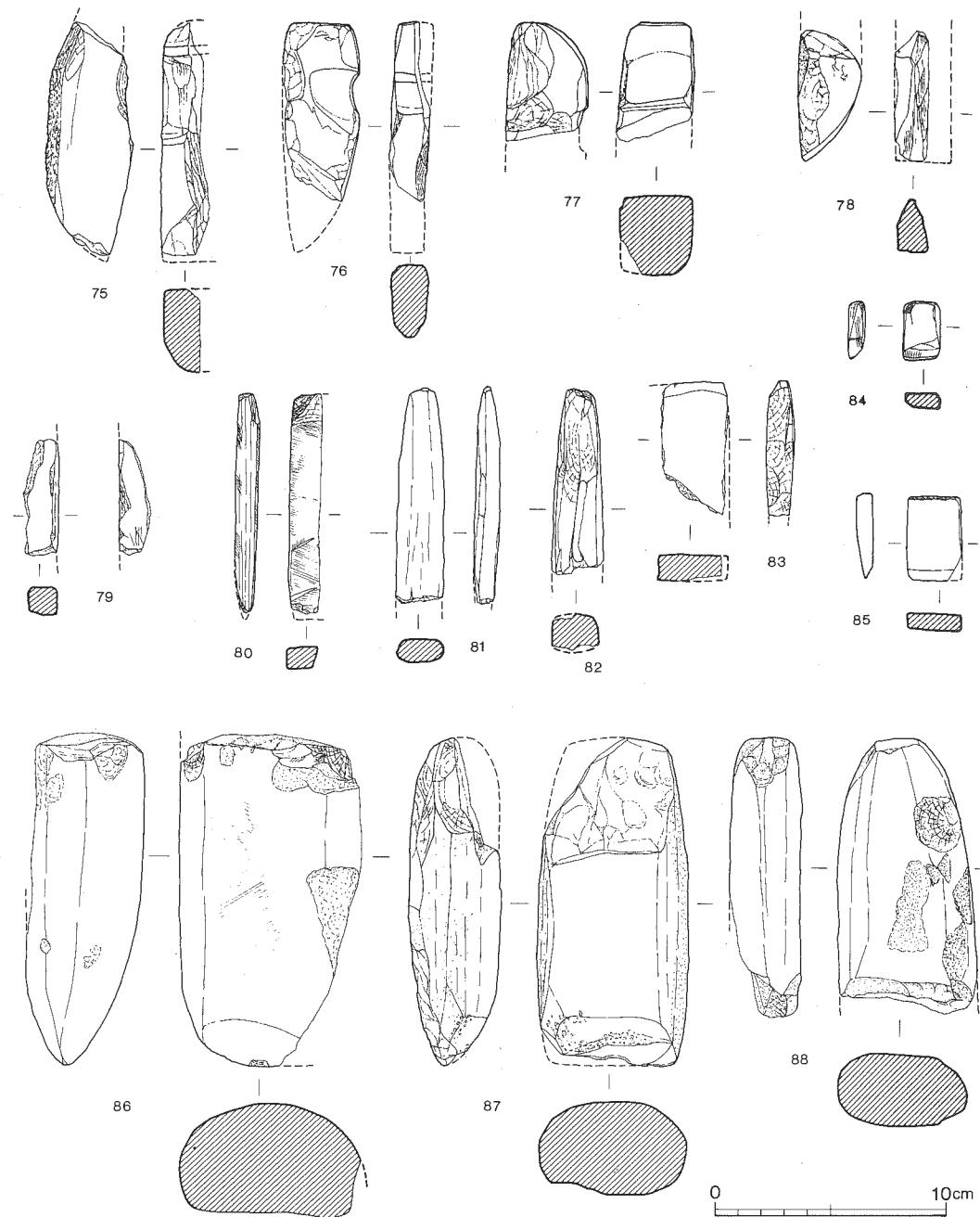
74は、3号住居跡から出土したもので、逆台形状を呈する。現存長132mm、幅79mm、厚さ21mm、重さ369gを測る。裏面の大部分は自然面である。石庖丁の未製品としたが、そうでないかもしれない。石材は緑灰色の片岩である。

(9) 石斧

磨製49点、打製18点、未製品7点、合計で74点が出土したが小さな破片及び、遺存状態の悪いものが多い。そのうち29点を図示した。

(a) 磨製石斧 (図版20-4、21-1・2、第55図75~88、第56図89~97)

磨製石斧は、小片も含めて49点出土している。酸性土壙のため表面が荒れているものが多い。完形品は少なく、ほとんど欠損品で、抉入石斧6点、柱状及び扁平石斧9点が含まれる。その



第55図 石製品実測図 5 (1/3)

うちの残りの良い23点を図示した。

75は、28号貯蔵穴出土の抉入石斧で欠損が著しい。現存長101mm、幅20mm、厚さ38mm、重さ116gを測る。抉部は雑に割り込まれている。表面は荒研磨されており、抉部と反対側は自然面で凸凹が激しい。刃部及び頭部は欠損しており、側面は大きく剥離している。石材は黒灰色の砂岩である。

76は、3号溝出土の抉入石斧で、刃部は大きく欠損している。現存長78mm、幅32.5mm、厚さ31.5mm、重さ65gを測る。頭部端から21mmの所より幅16mm、深さ3mm程の抉部が丁寧に割込まれている。側面はかなり剥離している。原形を留めてる部分は丁寧に研磨されている。推定で全長は100mm前後と思われる。石材は黄白色の粘板岩である。

77は、40号貯蔵穴出土の抉入石斧の頭部の残欠品である。現存長51.5mm、幅32.5mm、厚さ35mm、重さ96gを測る。頭部端より37mmの所に深さ2mm程の抉部が割り込まれている。全体的に丁寧に研磨されている。石材は白灰色の粘板岩である。

78は、19号貯蔵穴出土の抉入石斧の刃部の残欠品である。表面は剥離している。現存長56.5mm、幅15mm、厚さ27mm、重さ27.5gを測る。石材は白黄色の粘板岩である。

79は、3号住居跡出土の抉入石斧の残欠品である。現存長50mm、幅15mm、厚さ13mmを測る。石材は白色の粘板岩である。

80は、表土から出土した柱状片刃石斧の半欠品である。現存長94.5mm、幅13.5mm、厚さ10mm、重さ20.2gを測る。刃部端は欠損している。推定で全長98mm前後と思われる。全面良く研磨されている。石材は灰色の砂岩である。

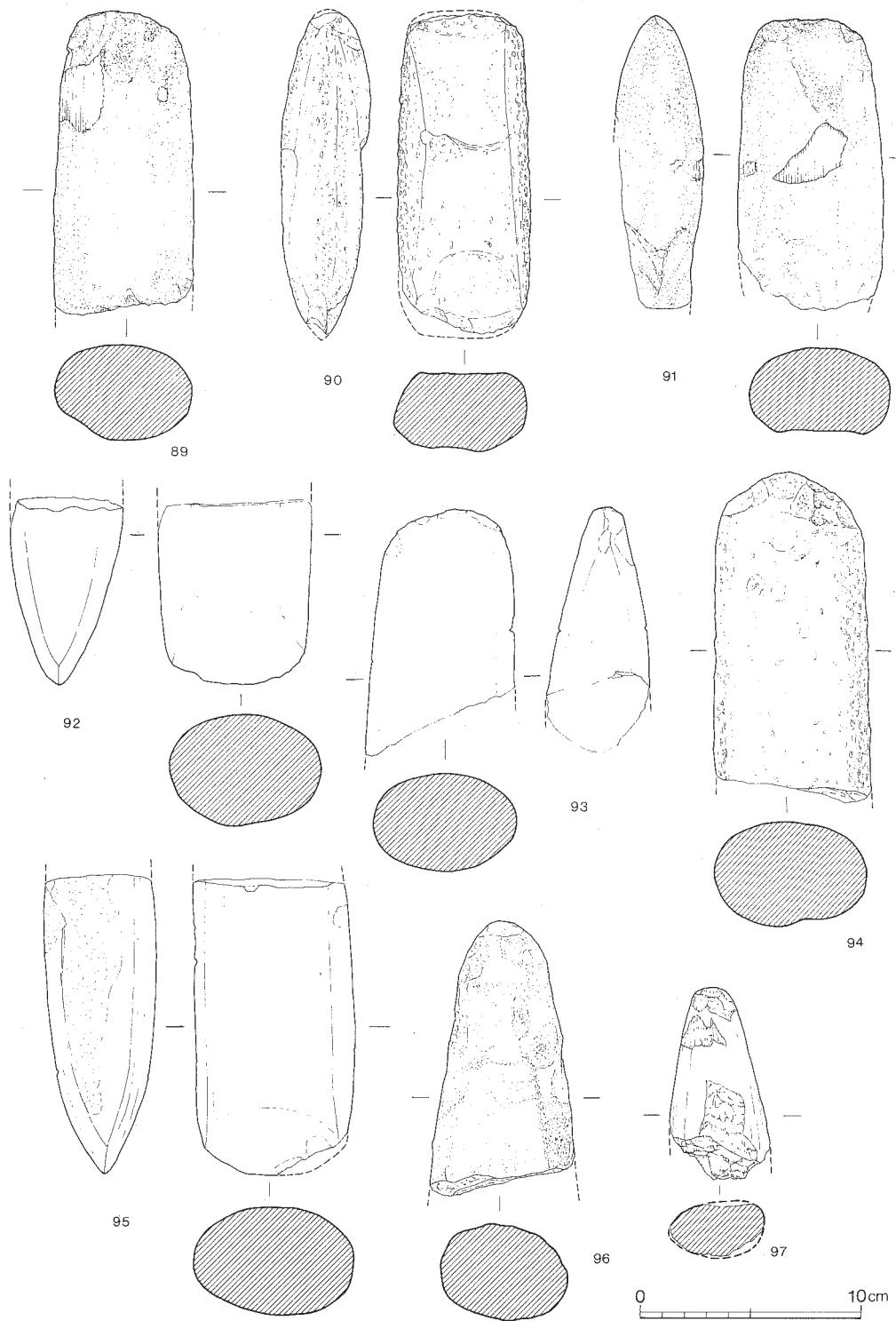
81は、26号貯蔵穴出土の石斧である。下端部は欠損している。現存長91.5mm、幅21mm、厚さ11mm、重さ35gを測る。表面は研磨されている。石材は蛇文岩である。

82は、表採品で両端部は欠損している。現存長77mm、幅22.5mm、厚さ16.5mm、重さ41gを測る。両面とも大きく剥離しており原形を留めていない。全面丁寧に研磨されている。石材は黒灰色の砂岩である。

83は、23号貯蔵穴出土の扁平片刃石斧基部の残欠品で、両側面も欠損している。現存長56.5mm、幅29.5mm、厚さ11mm、重さ31gを測る。裏面は一部剥離しているが、両面とも丁寧に研磨されている。石材は白黄色の粘板岩である。

84は、13号、14号住居跡出土の小形の扁平片刃石斧の完形品である。全長26mm、幅15.3mm、厚さ7mm、重さ5gを測る。端部は丸味をもち、全面研磨面が残っている。石材は青灰色の砂岩である。

85は、14号貯蔵穴の下層出土の扁平片刃石斧の完形品である。全長36mm、幅24mm、厚さ7.5mm、重さ12.5gを測る。頭部は研磨されており直線を呈する。全面、丁寧に研磨されている。石材は白黄色の粘板岩である。



第56図 石製品実測図 6 (1/3)

86は、17号貯蔵穴出土の大形蛤刃石斧で、基部及び側縁は欠損している。現存長142.5mm、幅79mm、厚さ46.5mm、重さ900gを測る。刃部は波打っている。裏面は刃部より40mmの所で平坦面を作るが、大きく剝離している。原形を留めている面は若干凹凸及び、剝離してはいるが、良く研磨されている。また一部擦痕が見られる。石材は明青灰色の玄武岩である。

87は、3号溝出土の石斧で、頭部及び刃部を欠損する。現存長140.5mm、幅66mm、厚さ40mm、重さ560gを測る。裏面は剝離が多く、遺存状態は悪い。断面は楕円形を呈する。石材は明灰色の玄武岩である。

88は、51号貯蔵穴出土の石斧で、刃部を欠損する。現存長119mm、幅61.5mm、厚さ31mm、重さ375gを測る。両面とも側縁付近にはやや不明瞭な稜が走る。断面は楕円形で、表面は平坦面を作る。全面、良く研磨されている。石材は茶灰色の玄武岩である。

89は、5号土壙出土の石斧で、刃部を欠損する。現存長135mm、幅63mm、厚さ43.5mm、重さ580gを測る。断面は楕円形を呈する。全面、風化のため荒れているが、一部研磨面が残る。石材は緑灰色の砂岩で白い斑点が見られる。

90は、3号土壙出土の石斧で、刃部端を欠損している。現存長142.5mm、幅61mm、厚さ36mm、重さ580gを測る。風化のため器面は荒れており、白っぽくなっている。断面は楕円形を呈する。石材は緑灰色の砂岩である。

91は、11号土壙出土の石斧で、刃部を欠損する。現存長130.5mm、幅66mm、厚さ38mm、重さ520gを測る。断面は楕円形を呈する。一部研磨面が残るが、全体的に風化のため白っぽく、荒れている。石材は緑灰色の砂岩で白い斑点が見られる。

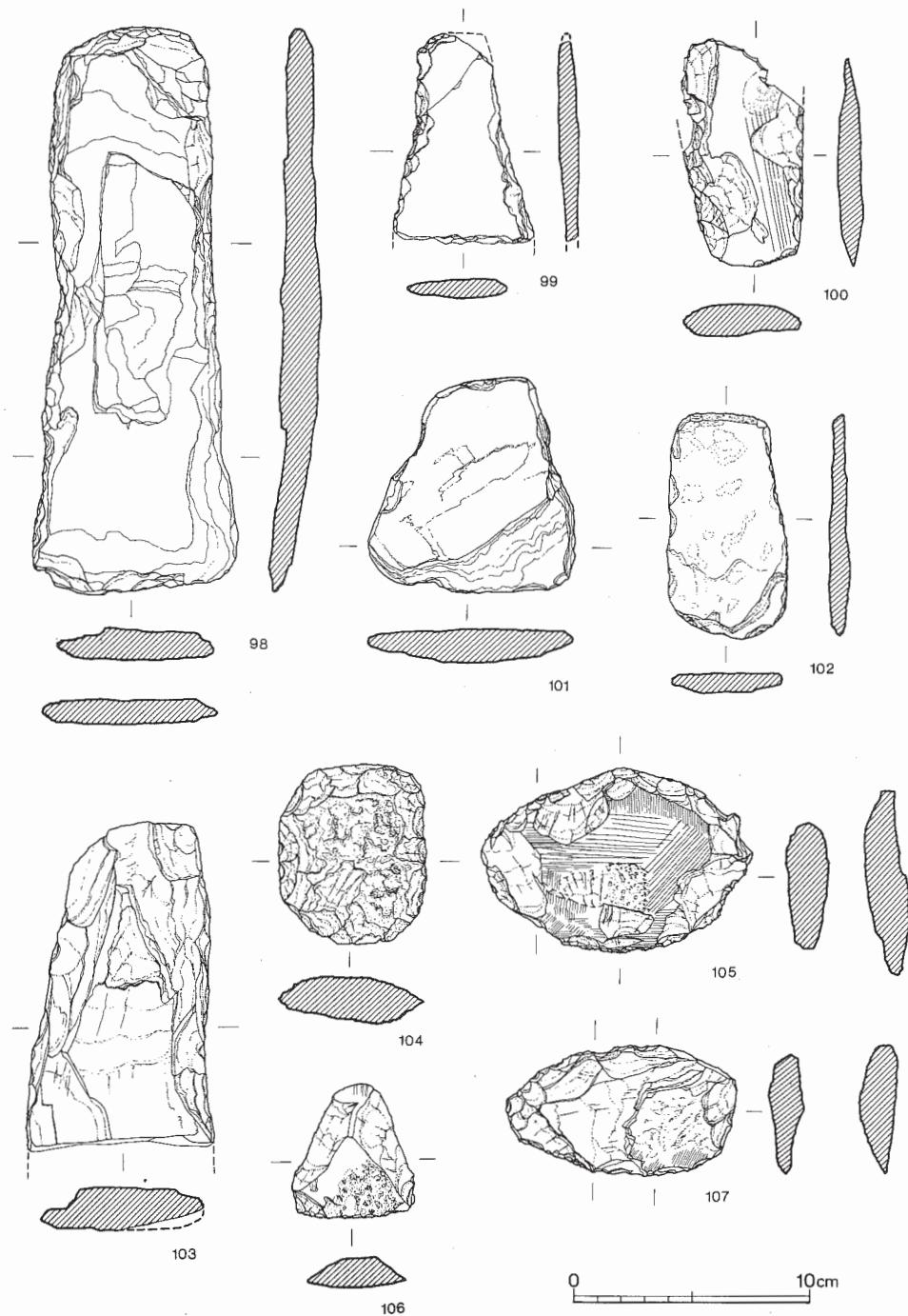
92は、11号土壙出土の石斧で、下端部を欠損する。刃部端は一部欠損している。現存長83.5mm、幅69mm、厚さ50mm、重さ405gを測る。器面は風化により、荒れている。石材は緑灰色の砂岩で、白い斑点がある。

93は、46号貯蔵穴出土及び、21号貯蔵穴A区出土の石斧破片との接合品で、刃部を欠損している。現存長109.5mm、幅68.5mm、厚さ46mm、重さ370gを測る。46号貯蔵穴出土の部分は風化が見られるが、21号貯蔵穴出土の部分は器面の残りは良く、表面は黒緑色を呈する。石材は緑灰色の砂岩で白斑がある。

94は、16号貯蔵穴出土の石斧で、刃部を欠損する。現存長147mm、幅69.5mm、厚さ50mm、重さ920gを測る。断面は楕円形を呈する。器面は風化のため荒れている。石材は暗緑色の砂岩である。

95は、10号貯蔵穴及び、19号貯蔵穴出土の石斧破片との接合品で、頭部を欠損する。現存長132.5mm、幅73mm、厚さ47mm、重さ800gを測る。断面は楕円形を呈す。器面は良く研磨されている。石材は緑灰色の砂岩で白い斑点を伴う。

96は、19号貯蔵穴出土の石斧で、刃部を欠損する。現存長123.5mm、幅64mm、厚さ42mm、重さ



第57図 石製品実測図 7 (1/3)

456 g を測る。紡錘状を呈し、表面は風化のため凹凸が著しい。石材は白斑を有す緑灰色の砂岩で、赤茶色の鉄分が附着している。

97は、40号貯蔵穴出土の石斧で、刃部を欠損する。現存長は86.5mm、幅45.5mm、厚さ25mm、重さ125 g を測る。表面は良く研磨されているが裏面は著しく剥離しており、原形を留めていない。石材は蛇文岩で、縄文時代のものと思われる。

(b) 打製石斧 (図版21-3・4、第57図98~103)

打製石斧としているが、扁平なものばかりである。計18点出土しており、短冊状のものが9点ある。これらは長さ90mm×40mm、厚さ6mm前後のものである。ここでは、6点を図示した。

98は、21号貯蔵穴A区下層から出土した完形品である。長さ239.5mm、幅86mm、厚さ17mm、重さ494 g を測る。中央部分は自然面を残している。周縁部及び刃部は荒い調整剥離を両面から行っている。断面は弓状を呈する。石材は青緑色の泥質片岩である。

99は、17号貯蔵穴出土の刃部欠損品である。現存長89mm、幅59mm、厚さ8mm、重さ57.5 g を測る。周縁部は両面から調整剥離が行われており、断面は板状である。石材は淡青灰色の泥質片岩である。

100は、26号貯蔵穴出土の刃部残欠品である。現存長94.5mm、幅50mm、厚さ13mm、重さ73 g を測る。裏面は大きく剥離欠損しているが、表面は一部研磨面が見られる。石材は黄褐色の砂岩である。

101は、表土からの出土品で、つまみ状突起を有する。長さ91mm、幅87mm、厚さ17mm、重さ156 g を測る。表面はなだらかな凹凸を呈するが、裏面は大きく剥離している。つまみ部は、幅50mm前後を測る。石材は、淡青竹色の泥質片岩である。

102は、7号貯蔵穴出土の短冊状を呈するものである。長さ94mm、幅50mm、厚さ7~10mmを測り、扁平状である。石材は、青灰色の片岩である。

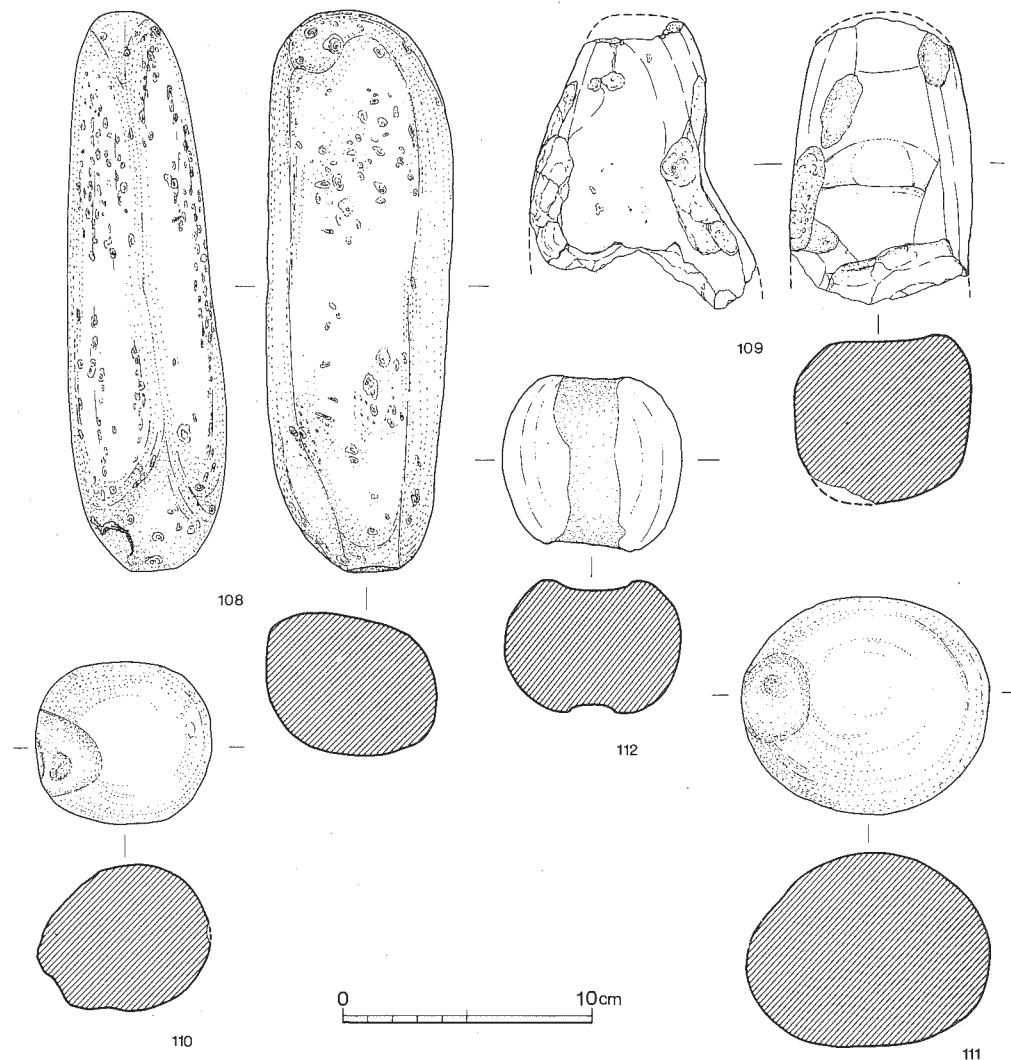
103は、26号貯蔵穴出土の刃部欠損品である。現存長135mm、幅78mm、厚さ19mm、重さ334 g を測る。作りは粗雑である。石材は、青緑色の泥質片岩である。

(10) スクレイパー (図版21-4、第57図104~107)

104は、表採品である。六角形状の完形品で、長さ76mm、幅62mm、厚さ21mm、重さ136 g を測る。周縁は両面より調整剥離が行われ、刃部を形成している。両面とも中央よりやや上方の部分は敲打による凹みを有する。石材は緑色の砂岩である。

105は、17号貯蔵穴から出土した他の石器からの転用品である。現存長114mm、幅78mm、厚さ19mm、重さ211 g を測る。表面には研磨面が残り、中央よりや上方には敲打痕が見られる。裏面は大きく剥離しているが、一部研磨面が見られる。刃部は下端の中央周縁から右端にかけて両面より作り出されている。石材は黒灰色のサヌカイトである。

106は、28号貯蔵穴出土で、現存長55.5mm、幅50.5mm、厚さ12.5mm、重さ40 g を測る。先端付



第58図 石製品実測図 8 (1/3)

近より左右方向へ大きく剥離し、刃部を形成している。表面先端、及び中央付近、裏面先端には研磨が行われている。

107は、2号住居跡の炉と考えられる炭土より出土したものである。長さ965mm、幅55.5mm、厚さ15mm、重さ97.5gを測る。別の石器の転用で、表面の周縁右下に一部研磨面が残っている。裏面は大きく剥離している。周縁は主に表面から調整を行っている。刃部は下側にあり、両面より調整剥離を行っている。

(11) 敲 打 器 (磨石) (図版22-1、第58図109~111)

108は、39号貯蔵穴出土の完形品で、長さ224mm、幅72mm、厚さ61mm、重さ1,640gを測る。丸みをもった自然石で、両端部に使用痕が伺える。

109は、47号貯蔵穴出土の敲打器(磨石)の握り部分の残欠品で、敲打部は欠損しており、全様は知り得ない。現存長114mm、幅73mm、厚さ72mm、重さ820gを測る。残存部も剥離が著しい。全表面及び割れ口にまで赤褐色の顔料らしきものが附着している。

110は、26号貯蔵穴からの出土品である。自然石をそのまま使用しており、敲打痕と思われる凹みが見られる。重さ362gを測る。

111は、19号貯蔵穴下層からの出土品である。径80~100mm程の丸石である。敲打痕や磨り痕が見られる。重さは980gを測る。

(12) 石 錘 (図版22-1、第58図112)

112は、表土中出土の石錘である。長さ69.5mm、幅72mm、厚さ53mm、重さ334gを測る。中央には幅20mm~30mmの浅い溝が全周する。表面は茶褐色、溝部は暗褐色で、表面は風化のため荒れている。

(13) 砥 石 (図版22-2、第59図113~121)

砥石は、52点が出土しており、川原石を転用したもの6点を含む。遺構別に見ると大部分が貯蔵穴からの出土で、住居跡出土のものはわずか8点である。欠損品が多く、完形品は少ない。

ここでは9点を図示した。

113は、19号貯蔵穴出土の残欠品である。欠損が著しいが、三面使用されている。表面には刃跡が著しい。石材は暗黄褐色の砂岩である。

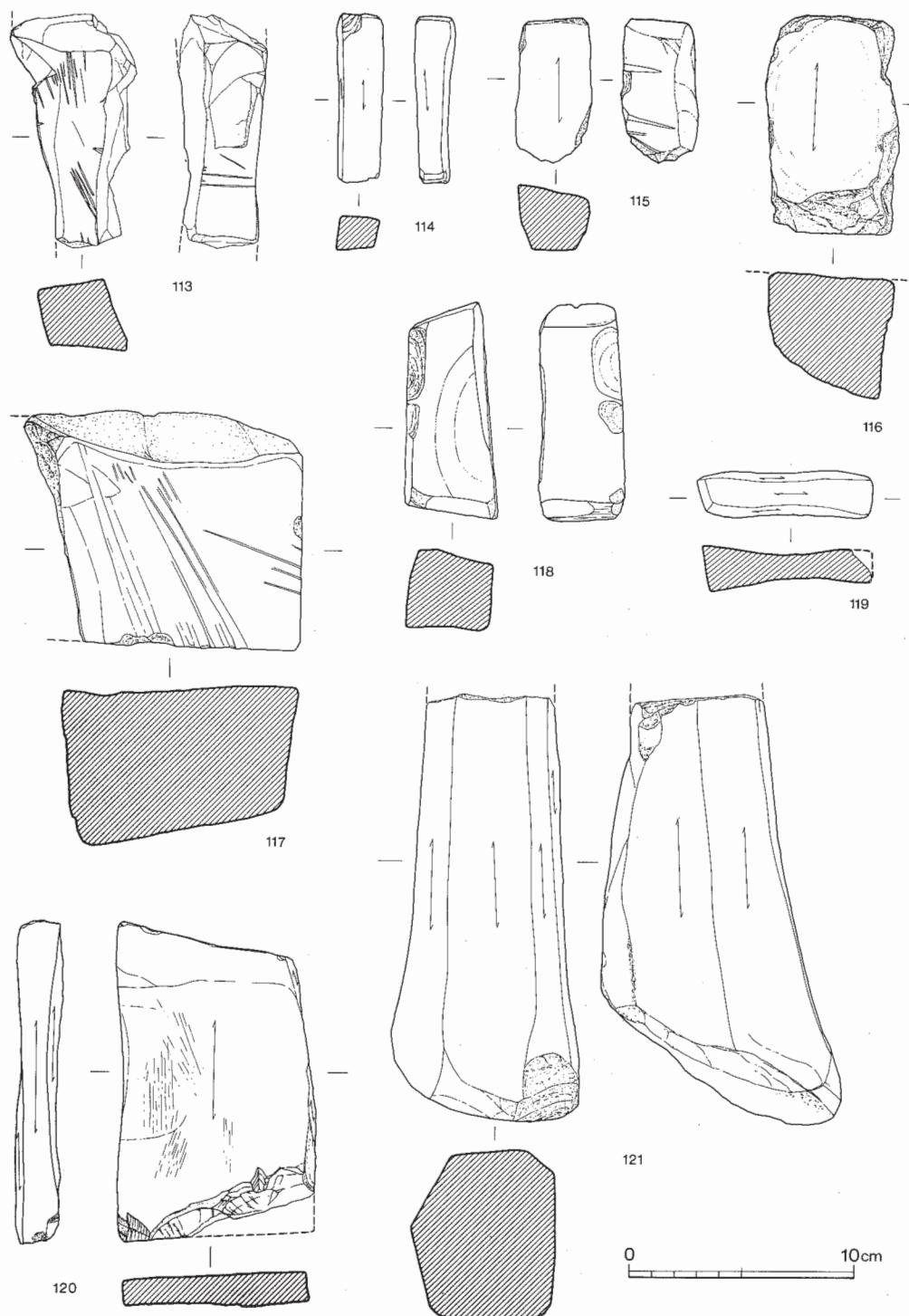
114は、2号溝状遺構出土の砥石で、ほぼ完形である。現存長735mm、幅20mm、厚さ15mm、重さ41gを測る。下端は欠損している。五面研磨されている。石材は緑白色の粘板岩である。

115は、16号貯蔵穴から出土した残欠品で、二面の使用面が残る。一面には長さ20mm、幅3mm、深さ3mm程の刃跡が明瞭に残っている。石材は黄褐色の砂岩である。

116は、3号住居跡出土の残欠品である。欠損が著しく、使用面は一面だけ残る。石材は茶灰色の砂岩で荒い。

117は、7号貯蔵穴からの出土品で、下端を欠く。一面にはやや不明瞭だが、著しい刃跡が残る。また、左側面には50cm方形くらいの浅い凹みがある。石材は明灰色の砂岩である。この他にも刃痕を有するものは6点ある。

118は、13号住居跡出土の完形品である。長さ94.5mm、幅41mm、厚さ38.5mm、重さ228gを測る。六面とも研磨されている。表面には縦67mm、幅20mm程の浅い弓状の凹みを有する。石材は



第59図 石製品実測図 9 (1/3)

黄褐色の砂岩である。

119は、4号土壙からの出土品で、下端を欠損している。長さ77mm、幅20.5mm、厚さ20mm、重さ39gを測る。五面とも良く使用されており、断面は弓状を呈する。石材は茶褐色の砂岩である。

120は、3号住居跡出土の仕上げ砥である。下端を一部欠損するが、ほぼ完形品で、長さ141mm、幅85.5mm、厚さ16mm、重さ388gを測る。扁平で六面とも研磨面が見られるが、特に表面と左側面が良く使用されており、断面は弓状を呈する。石材は緑灰色の粘板岩である。

121は、表採品で上端は欠損している。現存長189.5mm、幅10.6mm、最大幅92mm、重さ1,901gを測る。断面は六角形を呈する。五面は一様に使用されており、面を呈する。表面は鉄分附着により茶褐色である。

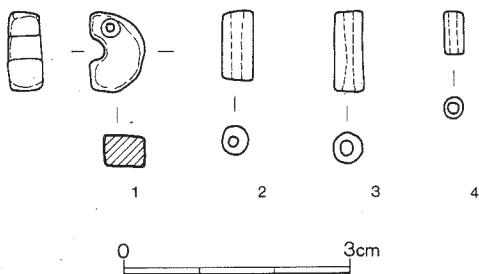
(3) 装身具 (図版22-3、第60図)

1は表採による半抉状勾玉である。長さ10.5mm、孔径は表面2.5mm、裏面1.5mm、胴中央部幅5mm、厚さ4mm、重さ0.6gを測る。両端は平坦面をもつが、周縁と背は丸味を帶びている。穿孔は、一方向から行われている。材質は淡緑色で白い部分が多い硬玉である。

2は、14号貯蔵穴の上方より出土した管玉である。長さ8.5mm、直径3.0mm、孔径1.5mm、重さ0.2gを測る。穿孔は、両面から行われている。表面は風化のため白っぽく、荒れている。材質は、淡緑白色の碧玉である。

3は、1号住居跡から出土した管玉である。長さ11.0mm、直径4.0mm、孔径2.5mm、0.15mm、重さ0.3gを測る。穿孔は、両面から行われている。材質は緑色の碧玉で、艶がある。

4は、3と同一場所より出土した管玉である。長さ6mm、直径3mm、孔径1.5mm、重さ0.1gを測る。穿孔は、両面から行われている。材質は、淡緑灰色の碧玉である。



第60図 装身具実測図 (1/1)

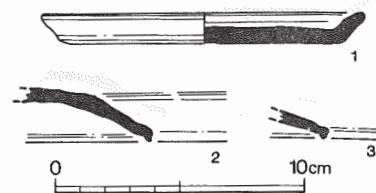
(4) 須恵器 (図版18、第61図)

1～3は、遺構に伴うものではないが、参考資料として図示した。

1は、34号貯蔵穴の検出面より出土した完形の皿形品である。口径12.9cm、底径11.5cm、器高1.9cmを測る。口縁部及び体部はヨコナデ、底部内面はナデ、底部外縁はヘラ切り後難ナデを施す。胎土は細砂粒を多く、粗砂粒をやや多く含む。焼成は良く、灰色を呈し、一部黒色の自然釉がみられる。

2は、表採の杯蓋片である。口縁部及び体部はヨコナデ、天井部外面は未調整で、不明瞭であるが天井部周縁に一条の回転ヘラ削り調整が見られる。内面はナデを施す。胎土は細砂粒を若干含む。焼成は良く、灰色を呈する。

3は、表採の杯蓋片である。口縁部は断面三角形を呈し、体部との間に明瞭な境を成す。胎土は細砂粒を若干含む。焼成は良く、明灰色を呈する。



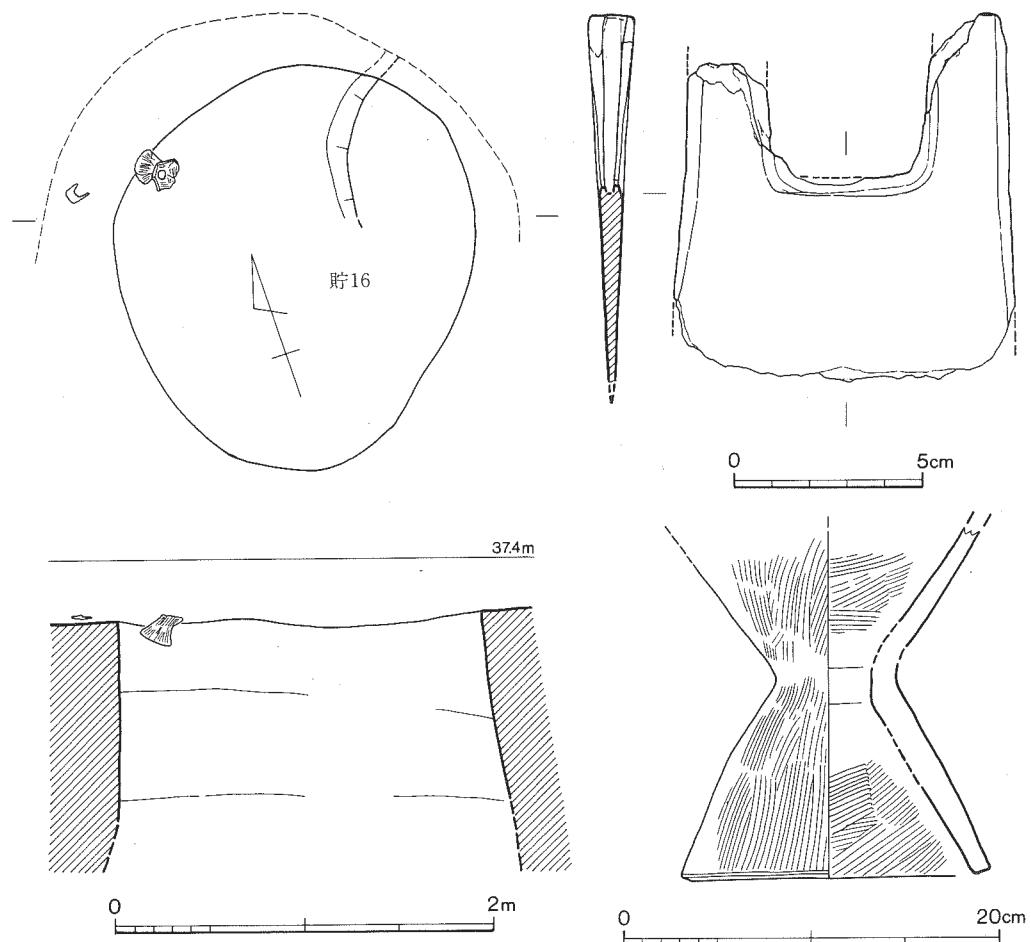
第61図 須恵器実測図(1/3)

(5) 青銅製鋤先 (図版 6-3・4、22-4、第62・63図)

遺構検出中に発見されたものである。出土地点は、16号貯蔵穴の口辺部西側付近にあたるが、遺構検出面より上方に位置しており、遺構に直接伴うものではない。すぐ東側より鼓形の器台が出土しており、鋤先との共伴関係が考えられる。鋤先は、袋部や刃部の一部を欠損するが、比較的遺存度の良いものである。保存処理が間に合わず、表面や袋部には土が附着したままである。現存長97mm、重さ160g、刃部幅91mm、刃部長約50mm、刃部厚6mm、袋基部幅83mm、袋基部厚12.5mm、袋部内法長47.5mm、袋部内法幅72mm、袋部内法厚6.5mmを測る。色調は青白色でとても脆い。表面の刃部端の中央付近には、使用痕と思われる凹みがある。

器台 (図版 6-3・4、18、第63図)

青銅製鋤先のすぐ横から出土した鼓形を呈する器台で、口辺を欠く。底径16.8cm、現存器高18cmを測る。内外面とも荒いハケを施す。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良く、褐色を呈し、裾部が一部赤変している。



第62図 青銅製鋤先出土状態(1/40)

第63図 青銅製鋤先及び共伴土器実測図

IV おわりに

今回、調査を実施した地点は、彦山川に西面して突出する舌状丘陵の先端付近北側部分に当る。丘陵下には現在、水田が広がっており、当時は彦山川の氾濫原で水稻耕作に適していたものと思われる。これまでにも丘陵上では、土木工事等により、遺構の存在が知られてはいるが、未確認のまま破壊、消滅したものも多々あると考えられる。今回の調査により、多くの竪穴や住居跡等を検出することができ、大変貴重な数々の資料を得ることができた。しかし、報告書作成の時間的関係等より、調査成果を十分検討することができなかつた。ここでは、遺構、遺物について簡単に触れることにしたい。

貯蔵穴

貯蔵穴としたものには円形の他に長方形がある。長方形のものは、断面が逆台形状を呈しており円形のものとは様相を異にしている。これらは調査区の南側に集中しており、また、長軸方向を東西にとるものが多い。これらを貯蔵穴としたが、形態等より貯蔵穴かどうかは疑問が残る。遺物は、円形、長方形を問わず、廃棄された状態で出土した。今後、これらの竪穴を検討することにより、幾つかの群に分けることが可能であろう。

住居跡

住居跡は、14軒が検出された。10号住居跡を除く13軒は、調査区の東側に集中しており、さらに東側へ延びるものと考えられる。住居跡は円形と長方形に大別できる。長方形のうち1、3号はベットを有していた。ベット状遺構を有する住居跡は、田川郡川崎町の冥加塚遺跡でも^{註1}検出されている。住居跡の時期は、円形が弥生時代中期、長方形が後期に比定できよう。

掘立状遺構

掘立状遺構は、掘り方の形状や配列に規格性が伺われることや、埋土の状況等より、最近のものとは考えにくく、12間×2間の南北方向の掘立柱建物跡の可能性も考えられる。掘立状遺構の時期を直接提示する遺物はないが、参考資料として第61図の須恵器が数点付近より出土しており、大旨八世紀頃のものであろうと思われる。周辺の歴史時代の建物跡としては、ここより南東約2.5kmの所に天台寺跡がある。また、古代の官道として太宰府から豊前国府へ至る「田河道」が通っていたとされている。「田河道」は、嘉穂郡筑穂町の米ノ山峠を越え、伏見駅（嘉穂郡穂波町高田付近^{註2}）、綱別駅（嘉穂郡庄内町綱分付近）に至り、田川郡と嘉穂郡との境である関ノ山を越え、田川駅に至ることが『延喜式』に記されている。田河駅の所在については、香春町高野付近、あるいは、田川市伊田か楠付近とする説等がある。現在、その場所は特定されていないが、今回検出した掘立状遺構が駅に關係するものとすれば、大変興味深いものである。なお、遺構は北へ延びないことは確認したが、東側へ延びる可能性も考えられる。また、

掘立状遺構とした並びの北側の方形小竪穴もこれに伴うものかもしれない。

弥生土器

弥生土器は、その大部分が貯蔵穴から廃棄された状態で出土した。器種には、壺、甕、鉢、高杯、器台等があり、特に甕の出土が多い。これまで遠賀川上流域に於ける土器編年については、立岩遺蹟、八王寺遺跡の中でなされているが、いずれも嘉穂盆地での型式設定である。遠賀川支流である彦山川流域に位置する田川盆地は、筑前と豊前との接点である。しかし基礎資料が少なく、松ヶ迫遺跡の中で、編年がなされているにすぎない。当伊田遺跡は、一時、遠賀川系土器の細別、編年試案の中で、前期末とされた「下伊田式土器」の標式遺跡であるが、^{註3}^{註4} 今回の報告では「下伊田式」の実態を明らかにすることはできなかったが、弥生時代前期末から中期前半を中心とした良好な資料を得ることができた。甕形土器は、在地性、地域性の強いタイプが強いようであるが、壺形土器に関しては、他の地域からの影響を受けたものが含まれており、地域間の交流が伺われる。今回、報告した資料は、時間の都合により、遺構を限定し、^{註5}^{註6} 選出したものであり、未整理資料も多い。また、筆者の不勉強のため十分な検討を加えることができなかった。今後も漸次整理を続けて行きたい。

石製品

石製品は、破片を含めると約300点出土した。数では石庖丁が最も多い。形態としては、刃部外彎式が大部分で、3点刃部直線式が含まれていた。石材は砂岩系が主である。数点、立岩製も含まれていた。また、馬鹿庖丁と称される大型のものが5点出土している。大型石庖丁の形態には、通常の石庖丁を大型化したものと体部の上につまみをつけ縄文時代の横型スクレイパーを肥大化させたようなものがありその分布は、遠賀川を境に西と東では異なるとされている。^{註7} 当遺跡からは後者に属する遠賀川以東型の出土が多い。石剣は、全て鉄剣型に属するものである。石斧の出土量も多く、今山産のものも含まれていた。石器についても土器同様、多くの問題点を含んでおり、今後の検討を要する。

青銅製鋤先

青銅製鋤先の出土は、福岡平野に集中している。これまでに筑豊地方での出土例としては、鞍手郡若宮町の柳ヶ谷遺跡から袋部小片の出土があるのみで、今回で二列目となり、内陸部からの出土は珍しい。また、完形に近い形で出土しており、損傷した形で発見されることが多い銅鋤先の今後の研究に貴重な資料となりうるであろう。鋤先の時期については、確実な遺構からの出土でないため決め手を欠くが、鋤先に共伴すると思われる器台より、弥生時代後期後半に比定できよう。

註1 「冥加塚遺跡」『国道322号線バイパス関係埋蔵文化財調査報告』II 福岡県教育委員会 1987

註2 『田川市史』上巻 田川市史編纂委員会 1974

註3 『立岩遺蹟』 立岩遺蹟調査委員会 1977

- 註4 「八王寺遺跡群II」『碓井町文化財調査報告書』第2集 碓井町教育委員会 1987
- 註5 「松ヶ迫遺跡」『糸田町文化財調査報告書』第1集 糸田町教育委員会 1980
- 註6 森貞次郎 「古期弥生式文化に於ける立岩文化期の意義」『古代文化』13-7 1942
- 註7 「下稗田遺跡」『行橋市文化財調査報告書』第17集 行橋市教育委員会 1985
- 註8 下条信行 「九州における大陸系磨製石器の生成と展開」『史淵』第114輯 1977
- 註9 柳田康雄 「青銅製鋤先」『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』 1980
- 註10 『九州縦貫道自動車道関係埋蔵文化財調査報告』VIII 福岡県教育委員会 1977

図 版

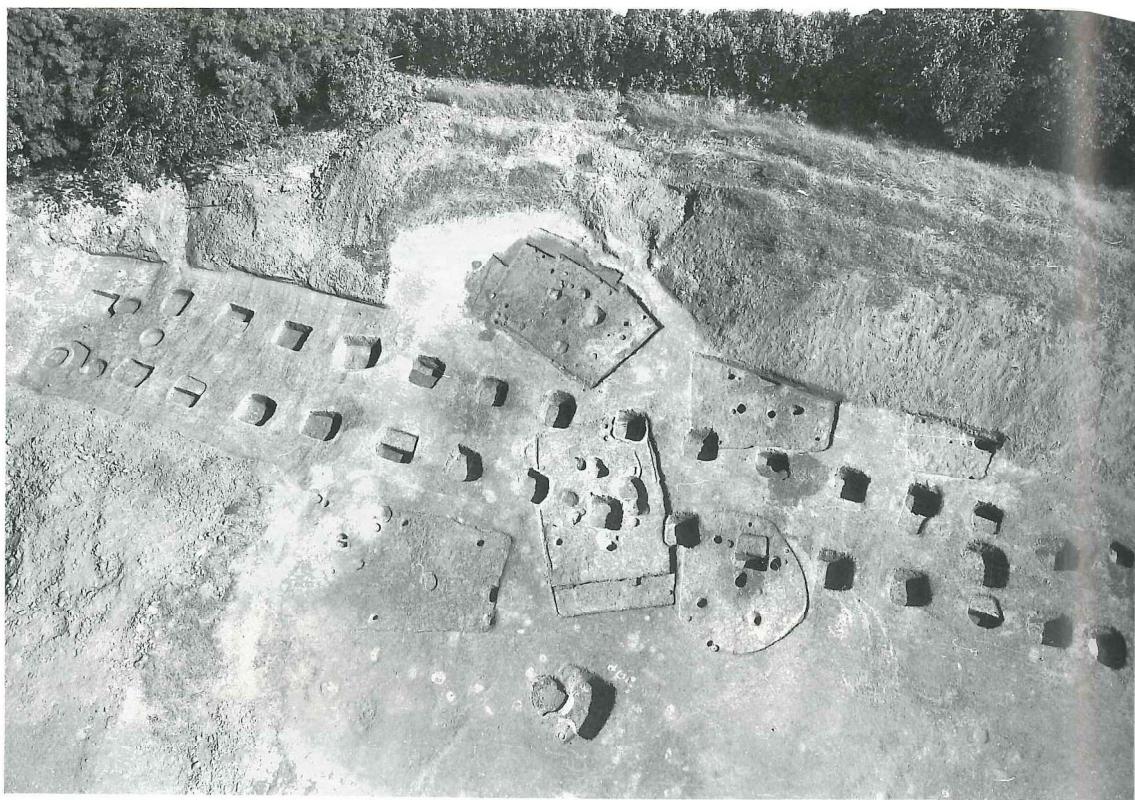


1. 遺跡遠景(西から)



2. 遺跡全景(気球写真)

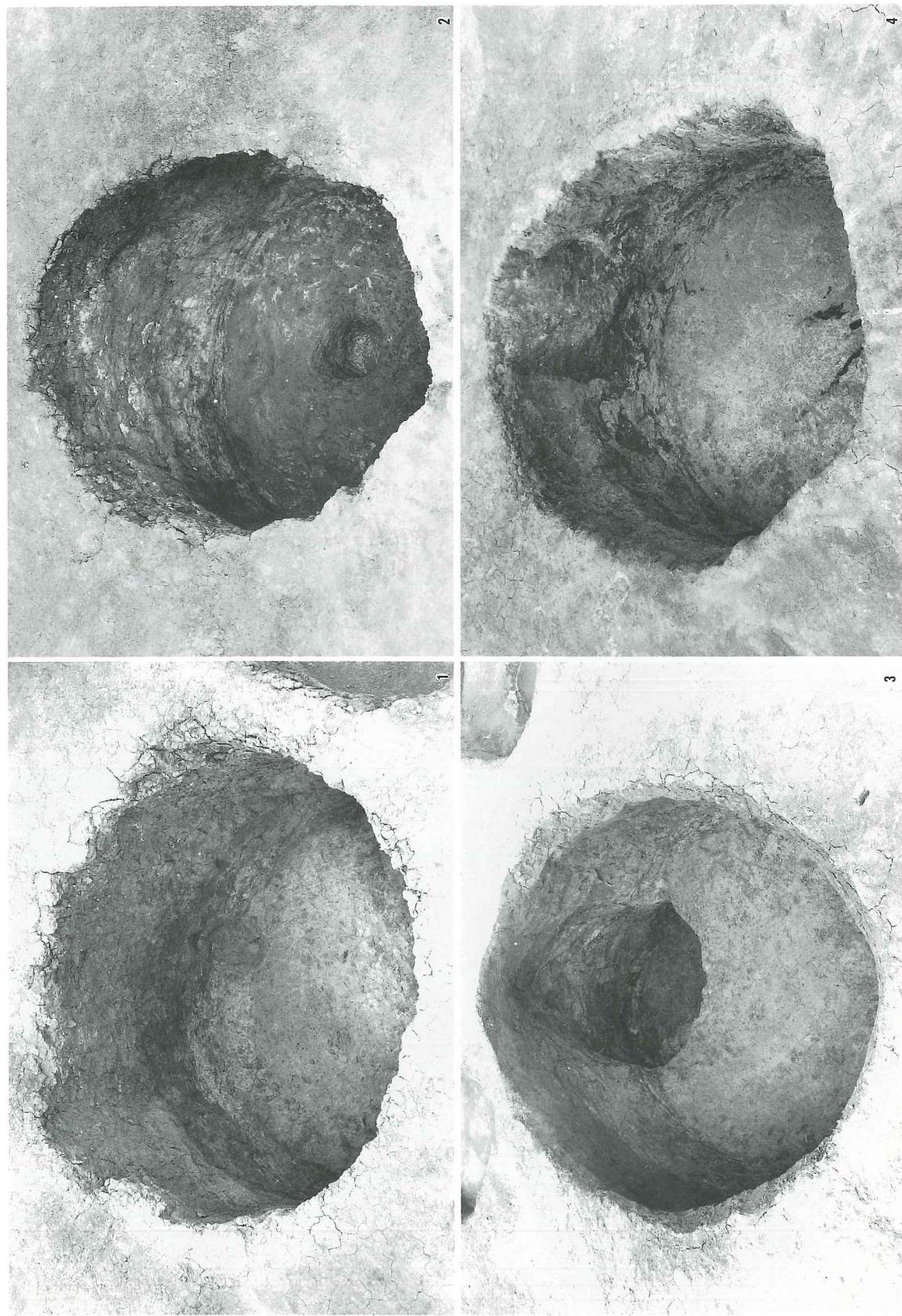
図版 2



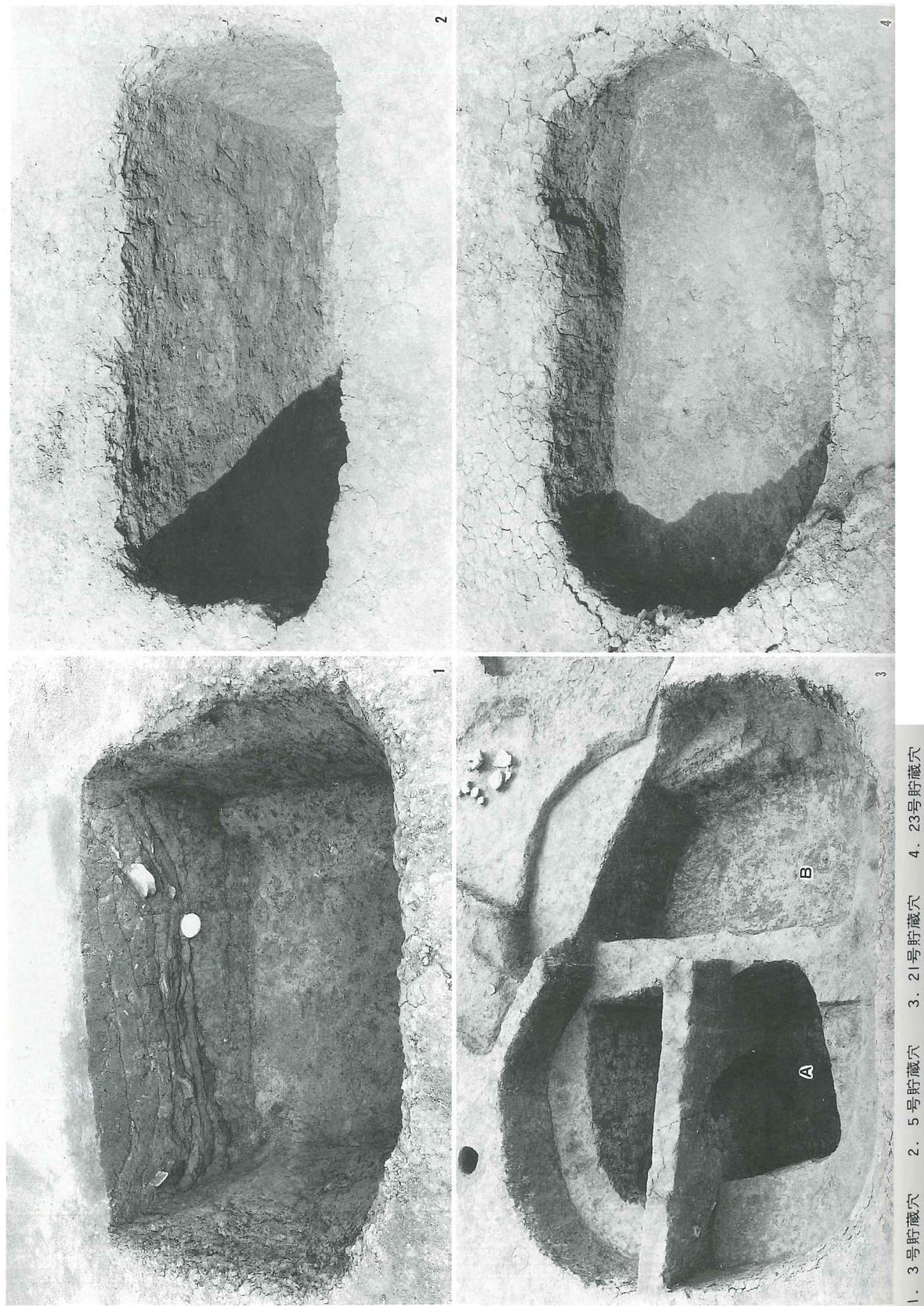
1. 掘出状遺構全景(西より)

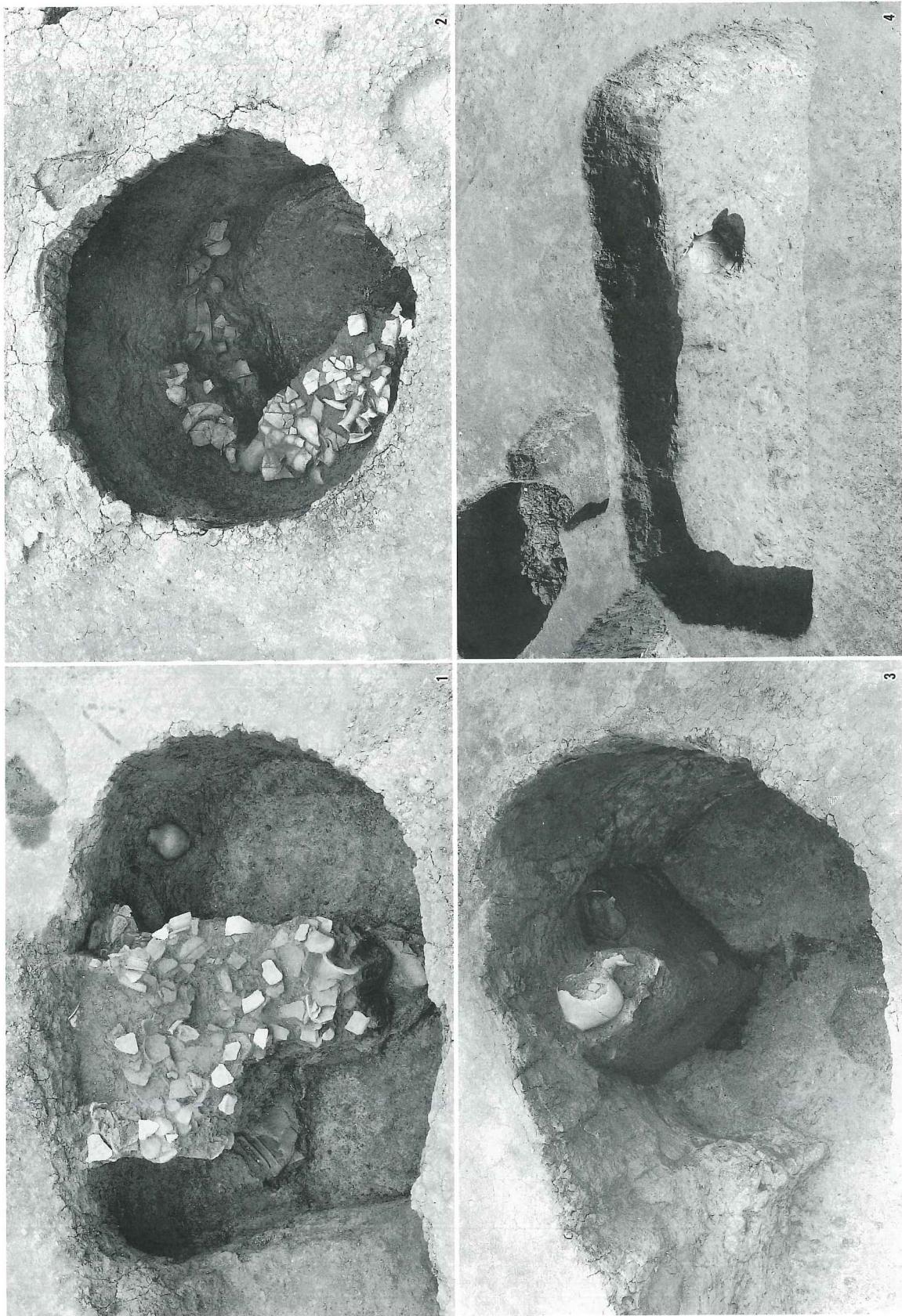


2. 掘立状遺構(北西より)



図版 4

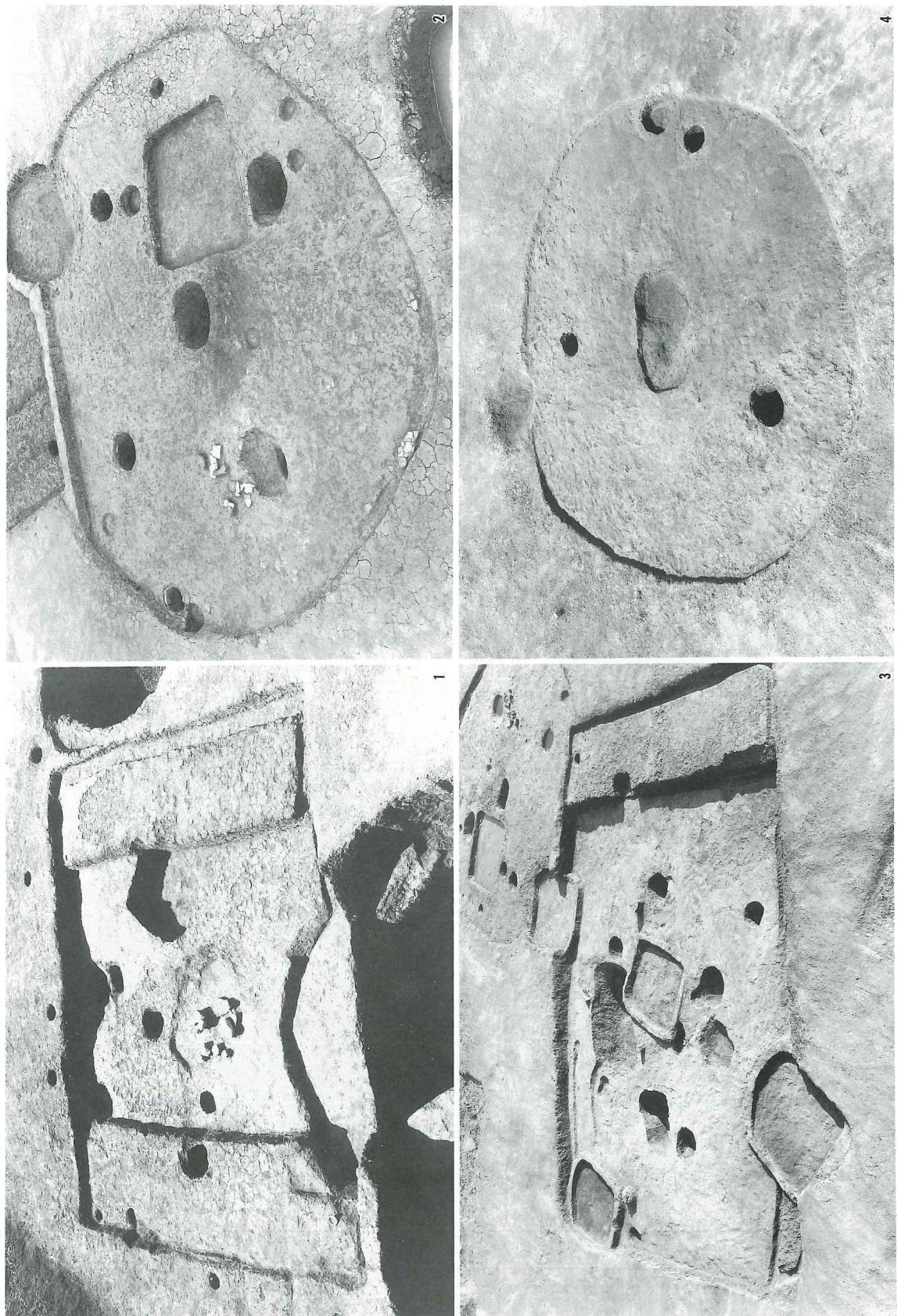




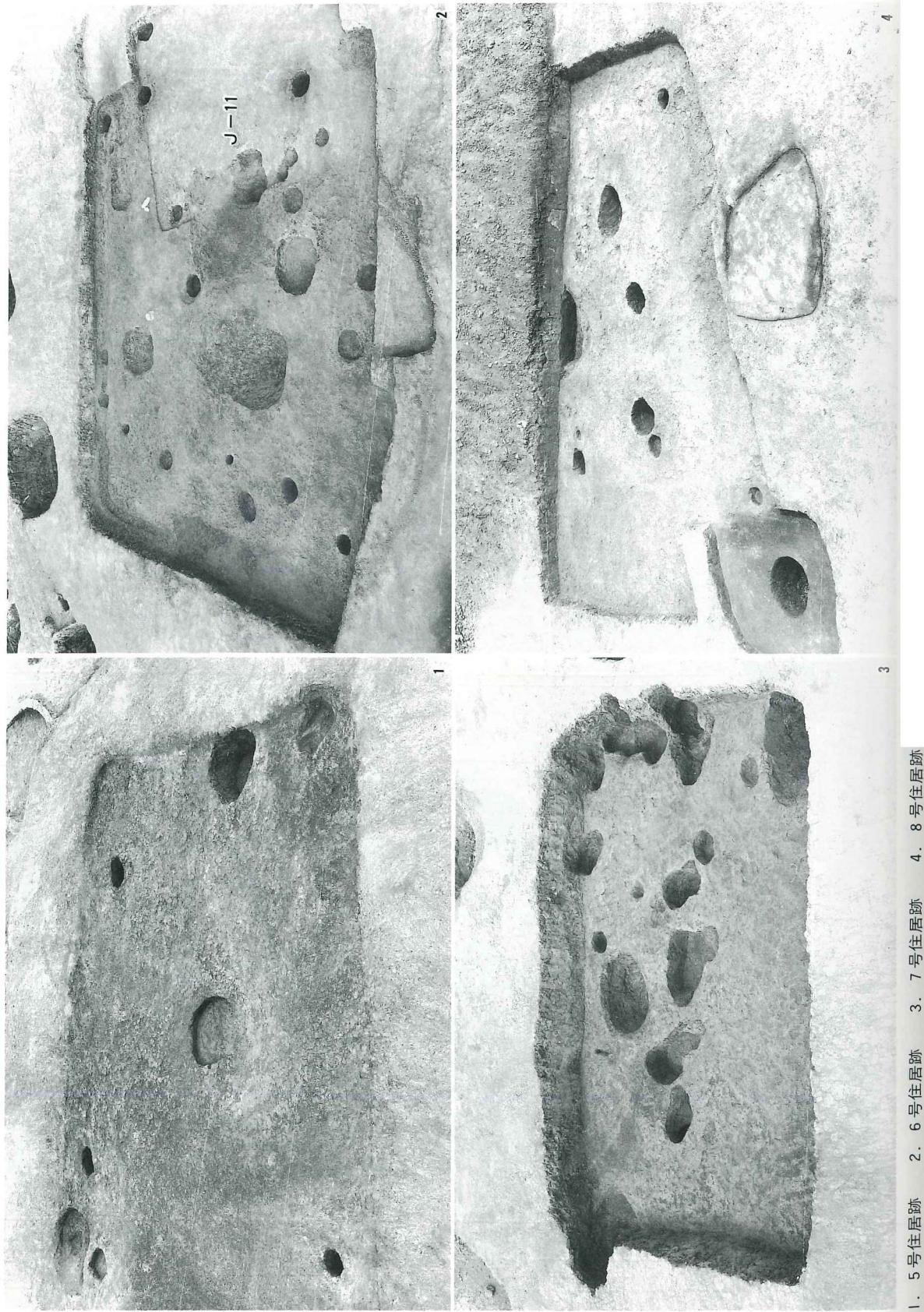
図版 6



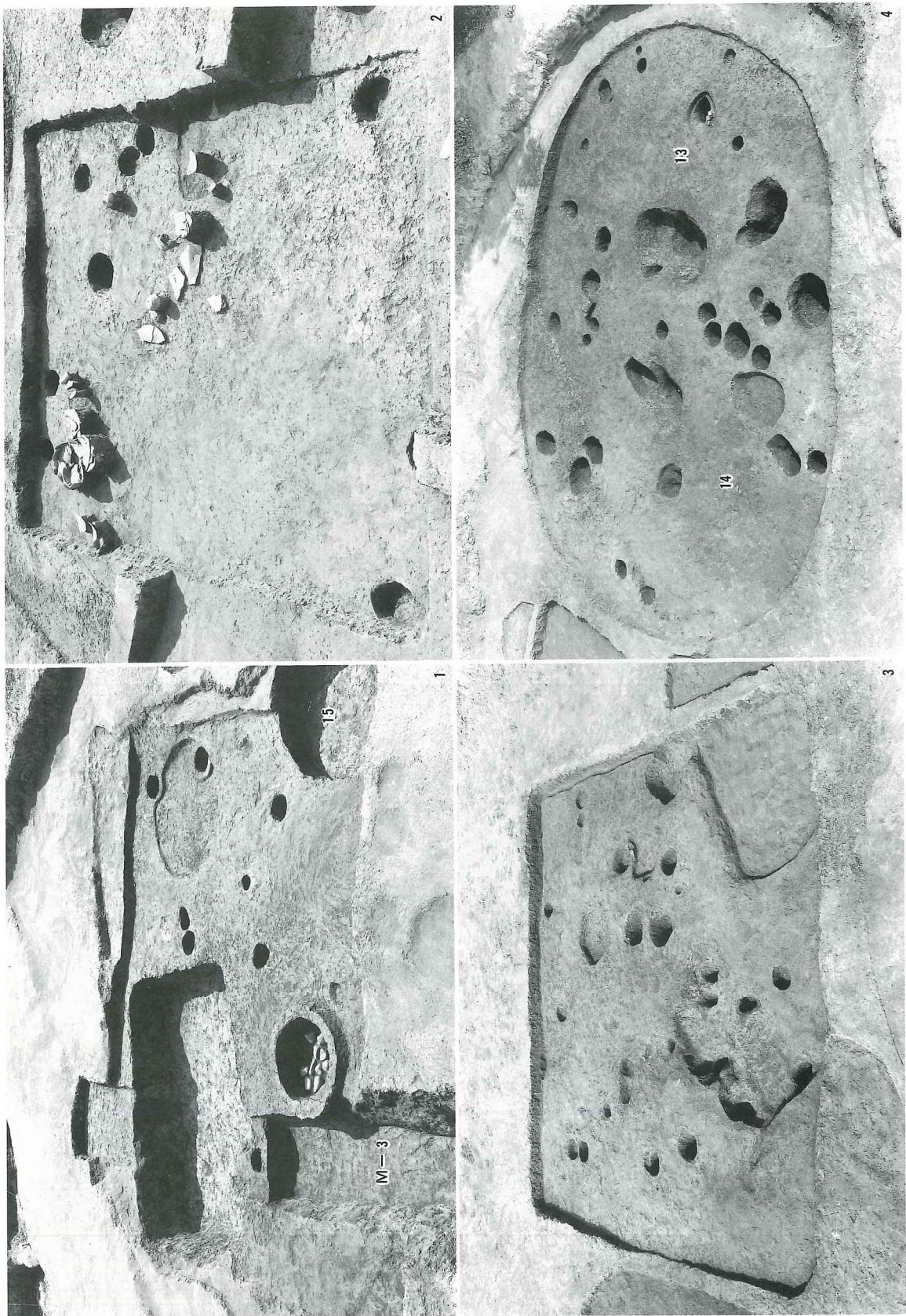
1. 26号貯蔵穴 2. 39号貯蔵穴 3. 青銅製鋤先出土状態 4. 青銅製鋤先と器台



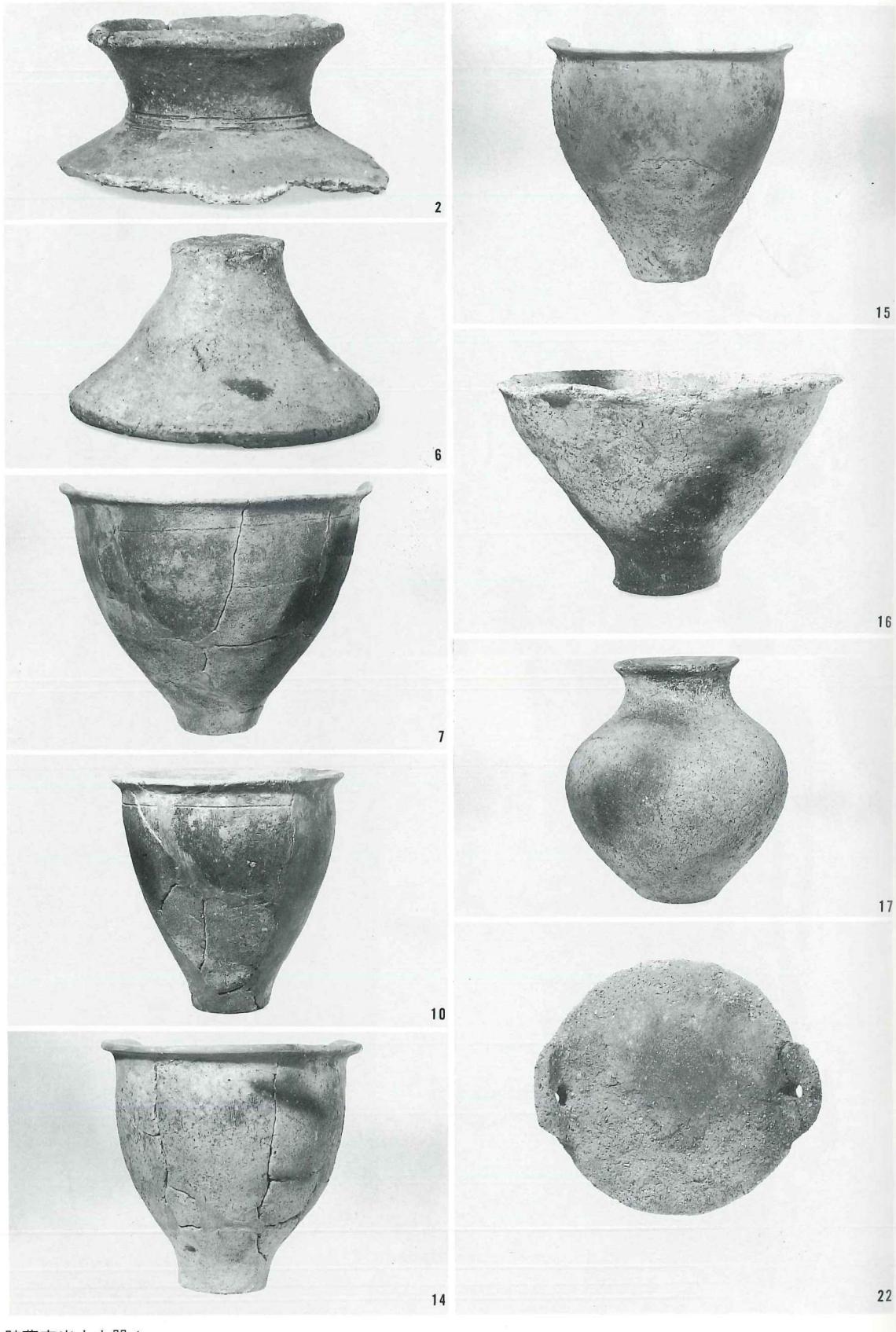
1. 1号住居跡 2. 2号住居跡 3. 3号住居跡 4. 4号住居跡



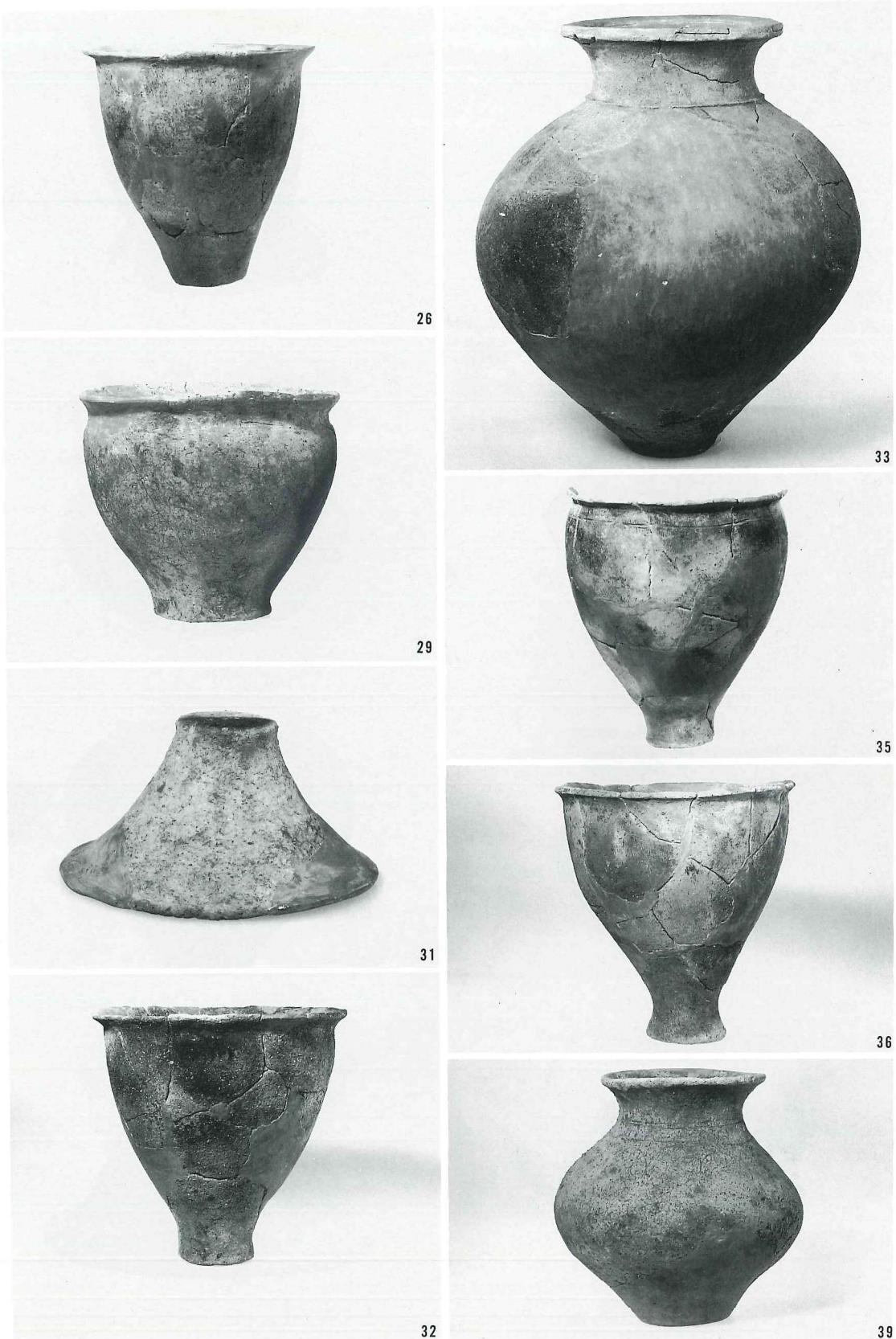
1. 5号住居跡 2. 6号住居跡 3. 7号住居跡 4. 8号住居跡



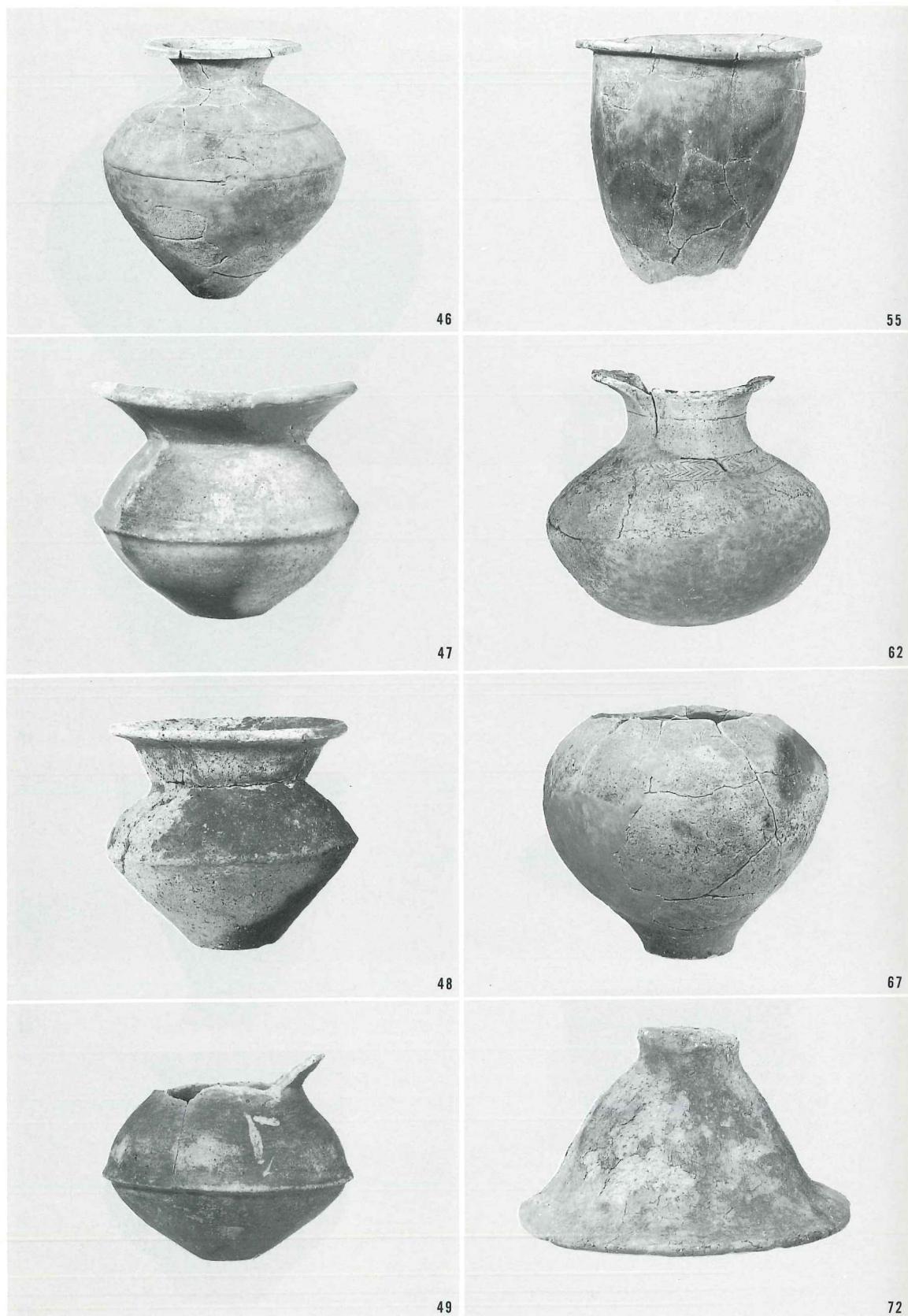
図版 10



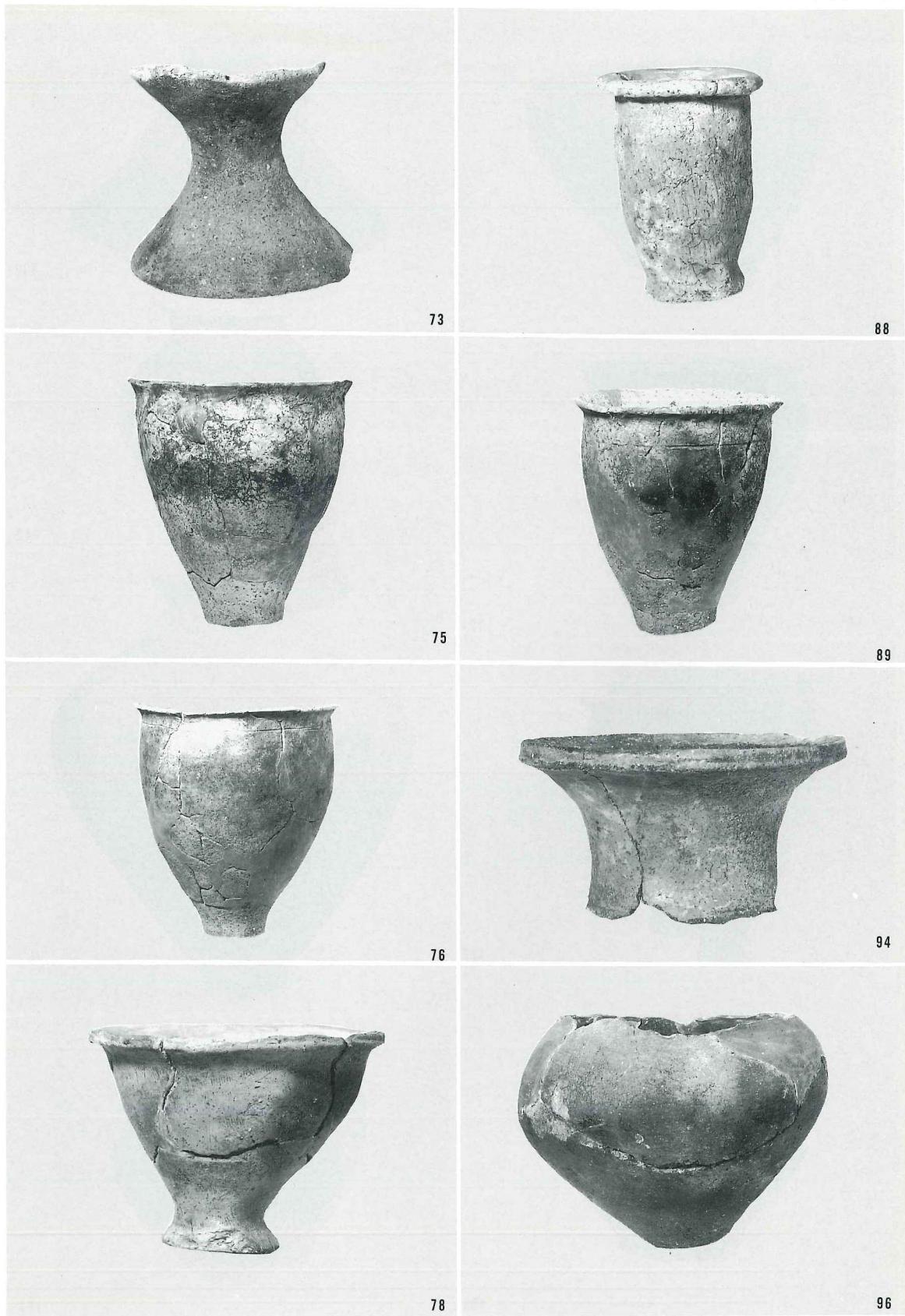
貯蔵穴出土土器 1



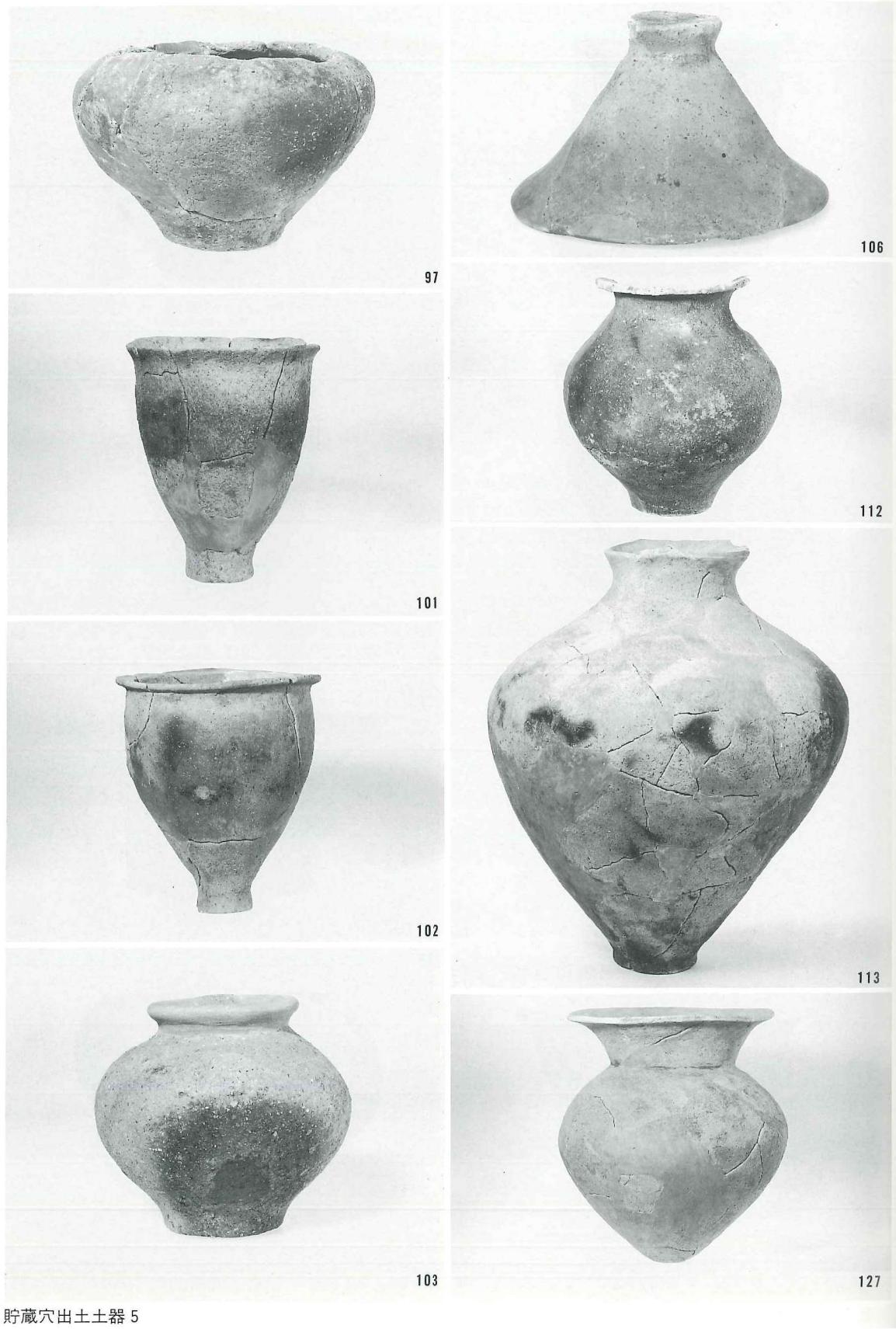
図版 12



貯蔵穴出土土器 3



図版 14



貯蔵穴出土土器 5



135



146



136



147



143



150

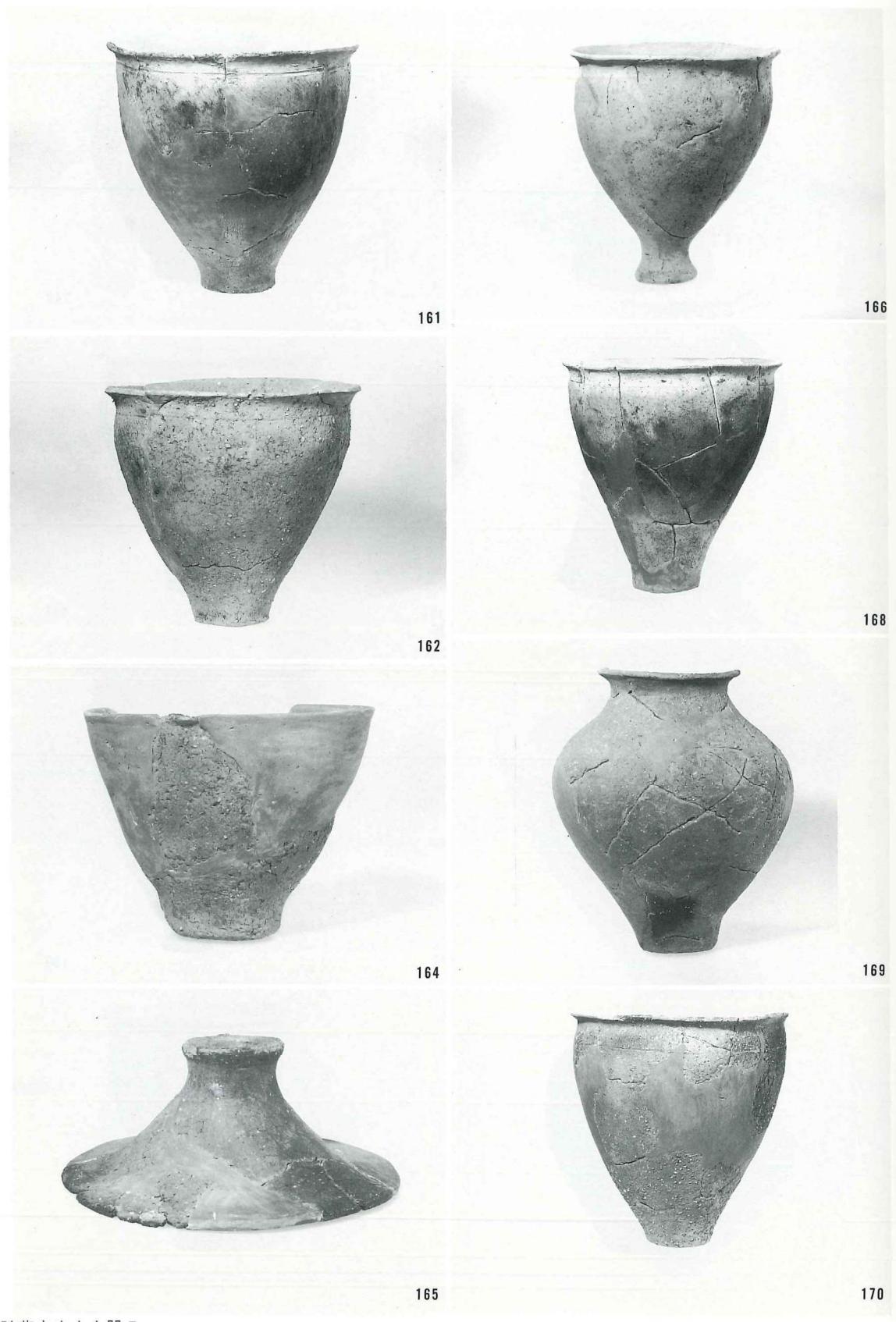


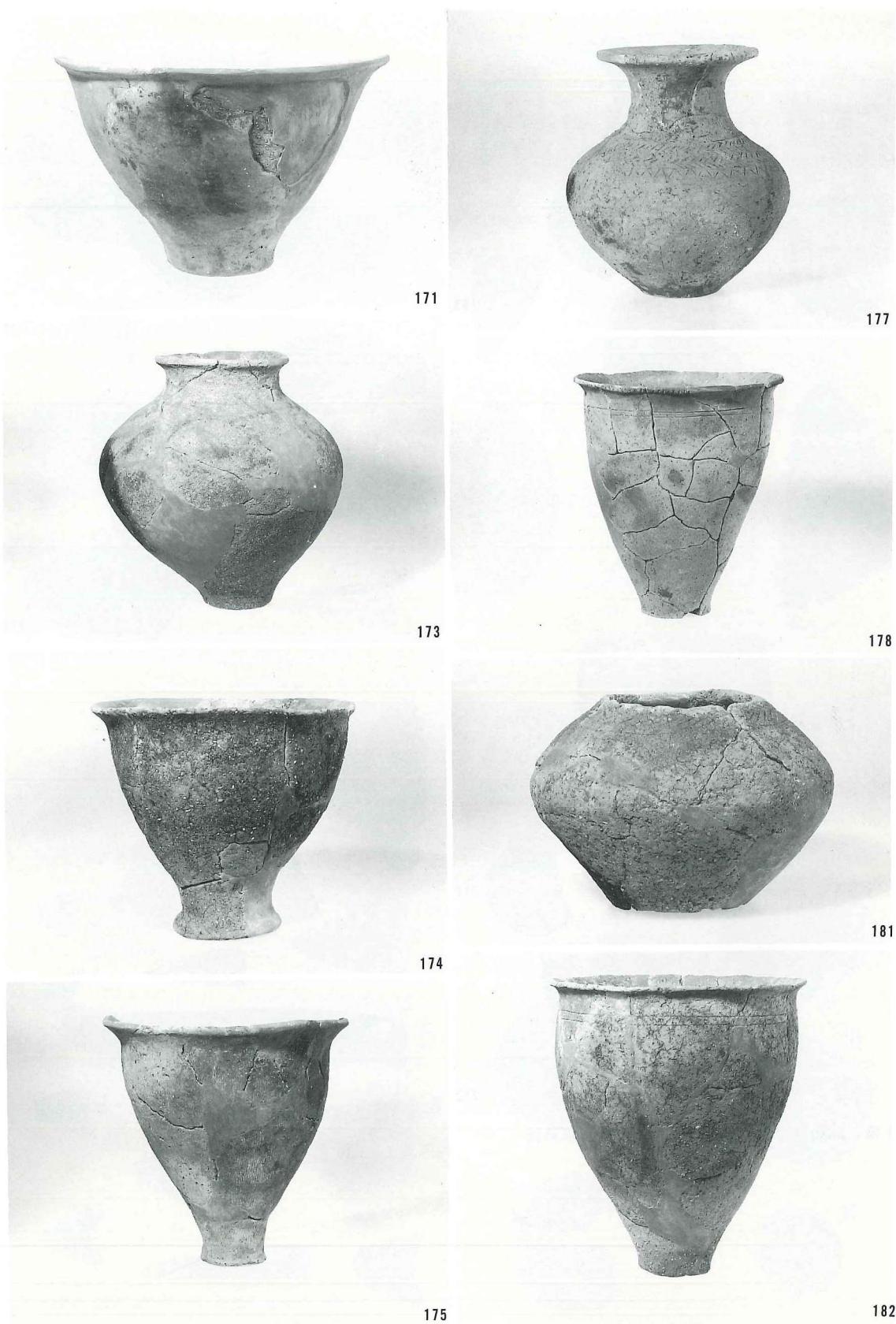
145



154

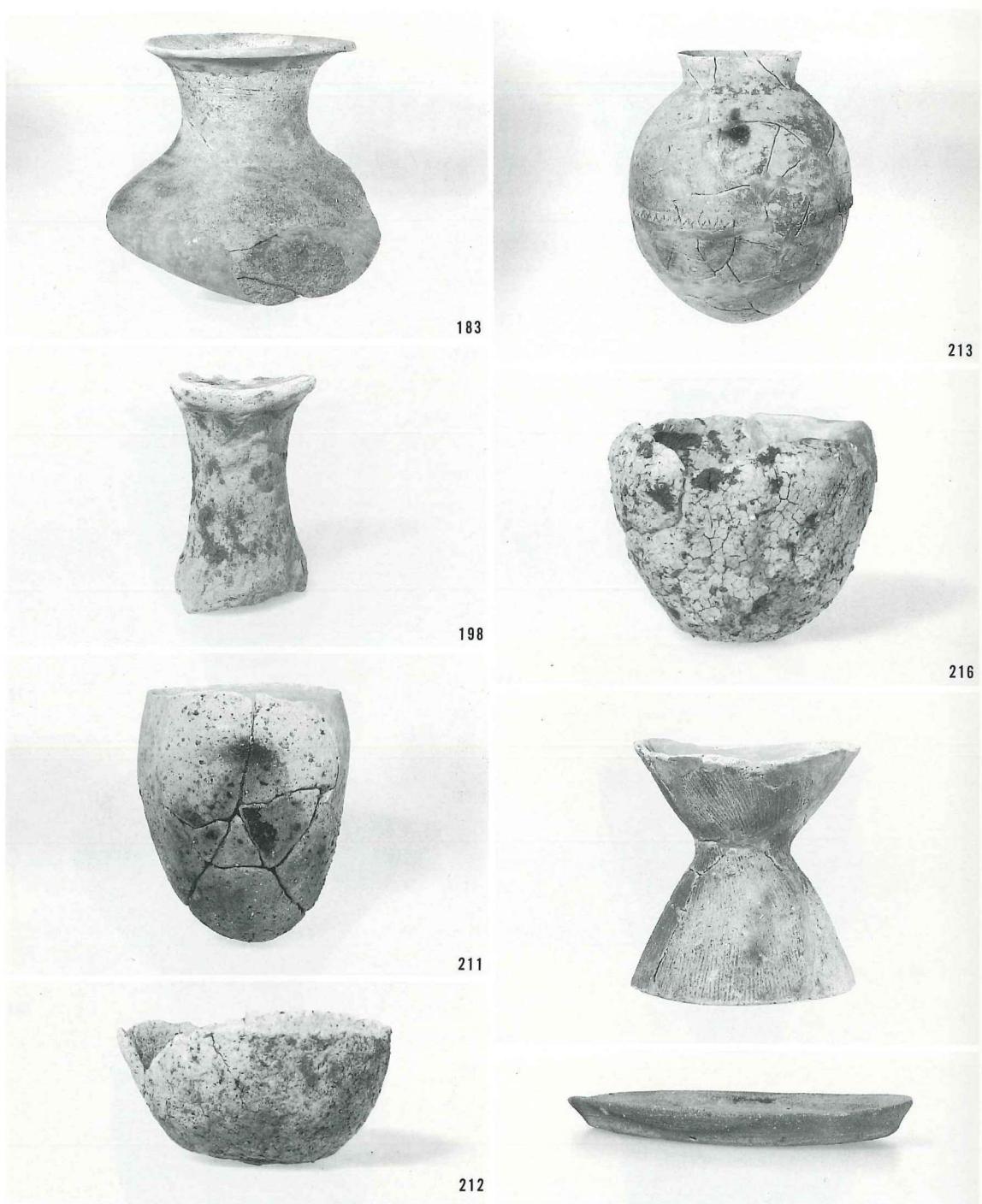
図版 16



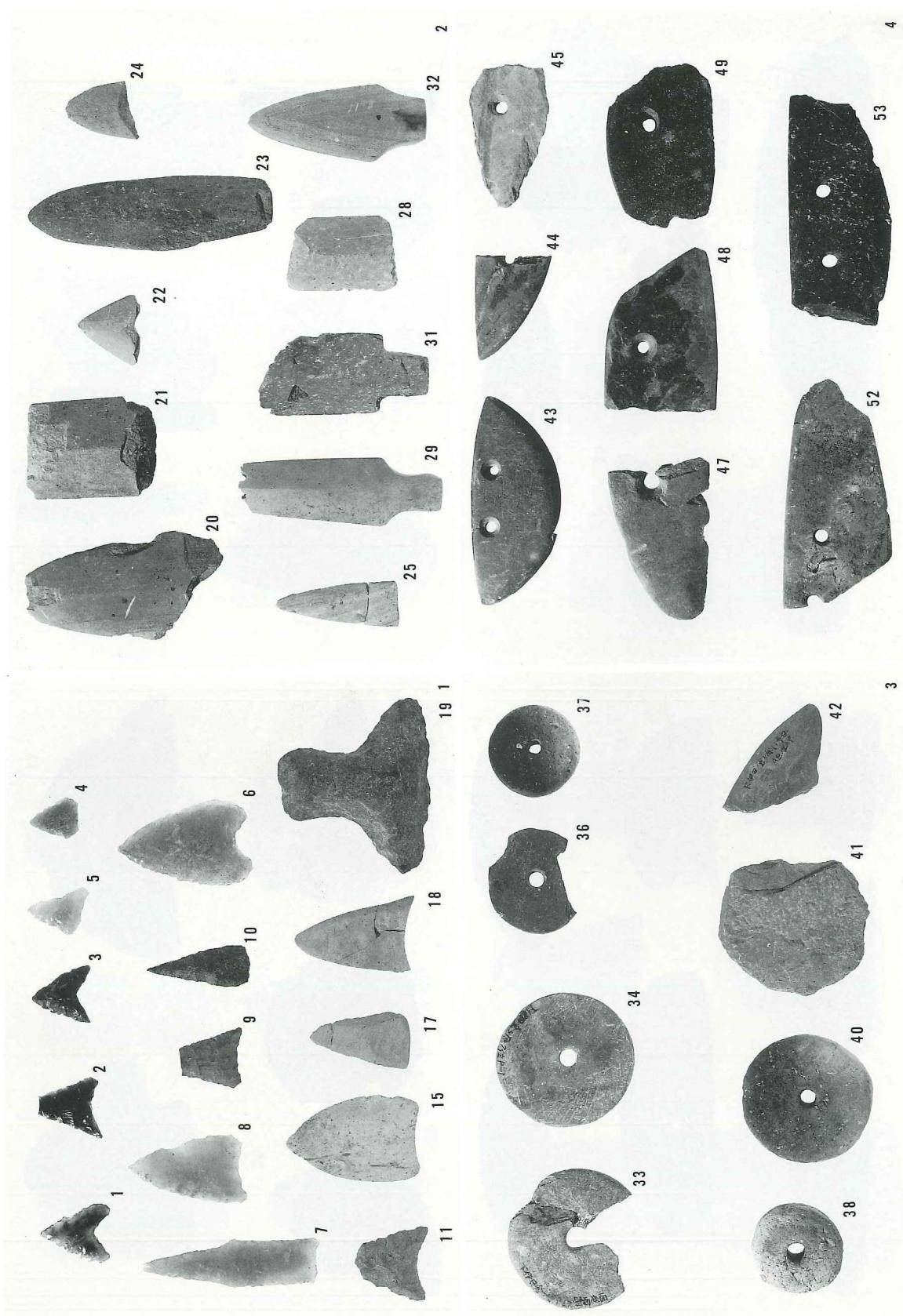


貯蔵穴、溝状遺構、土壙出土土器

図版 18

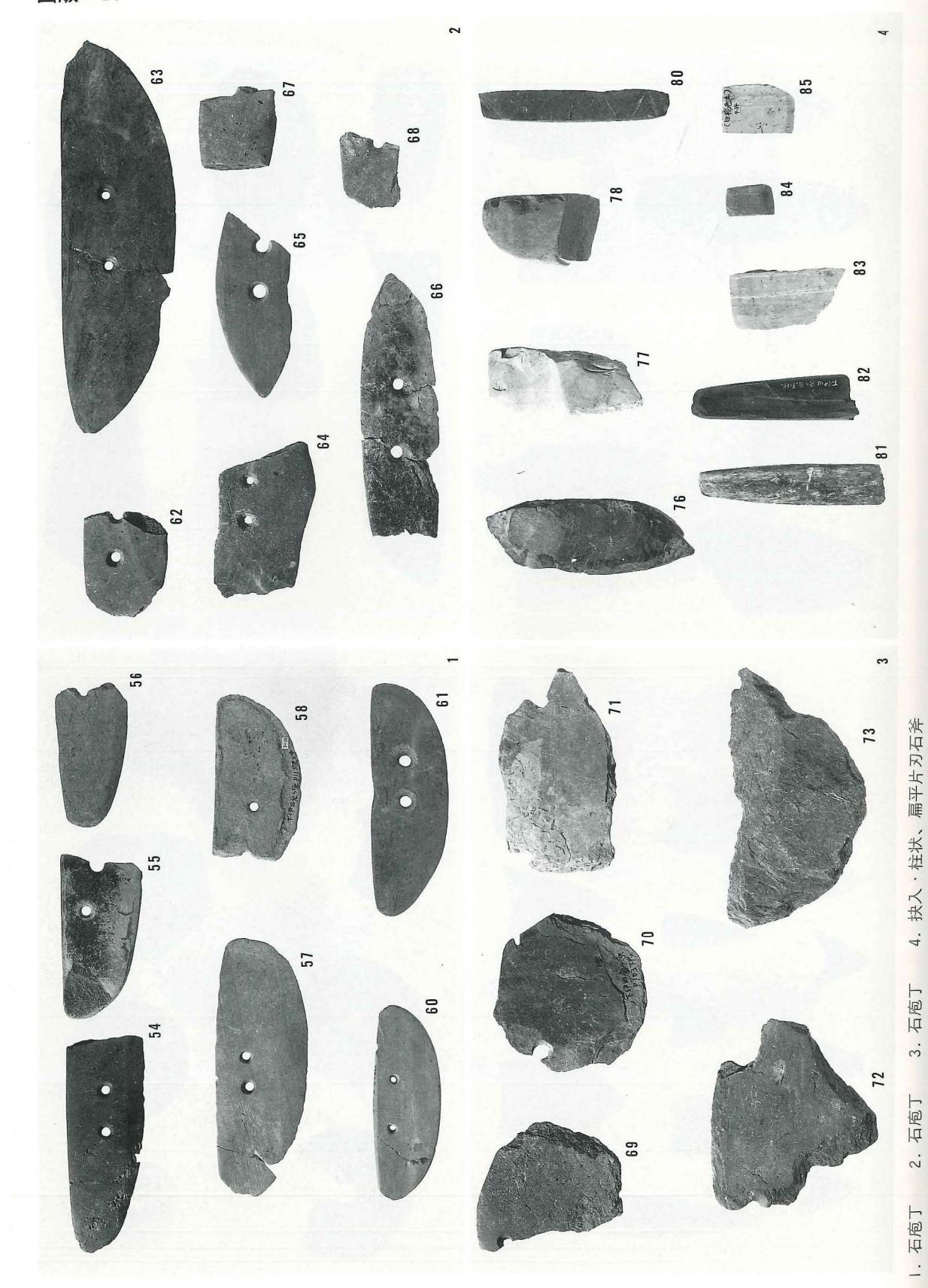


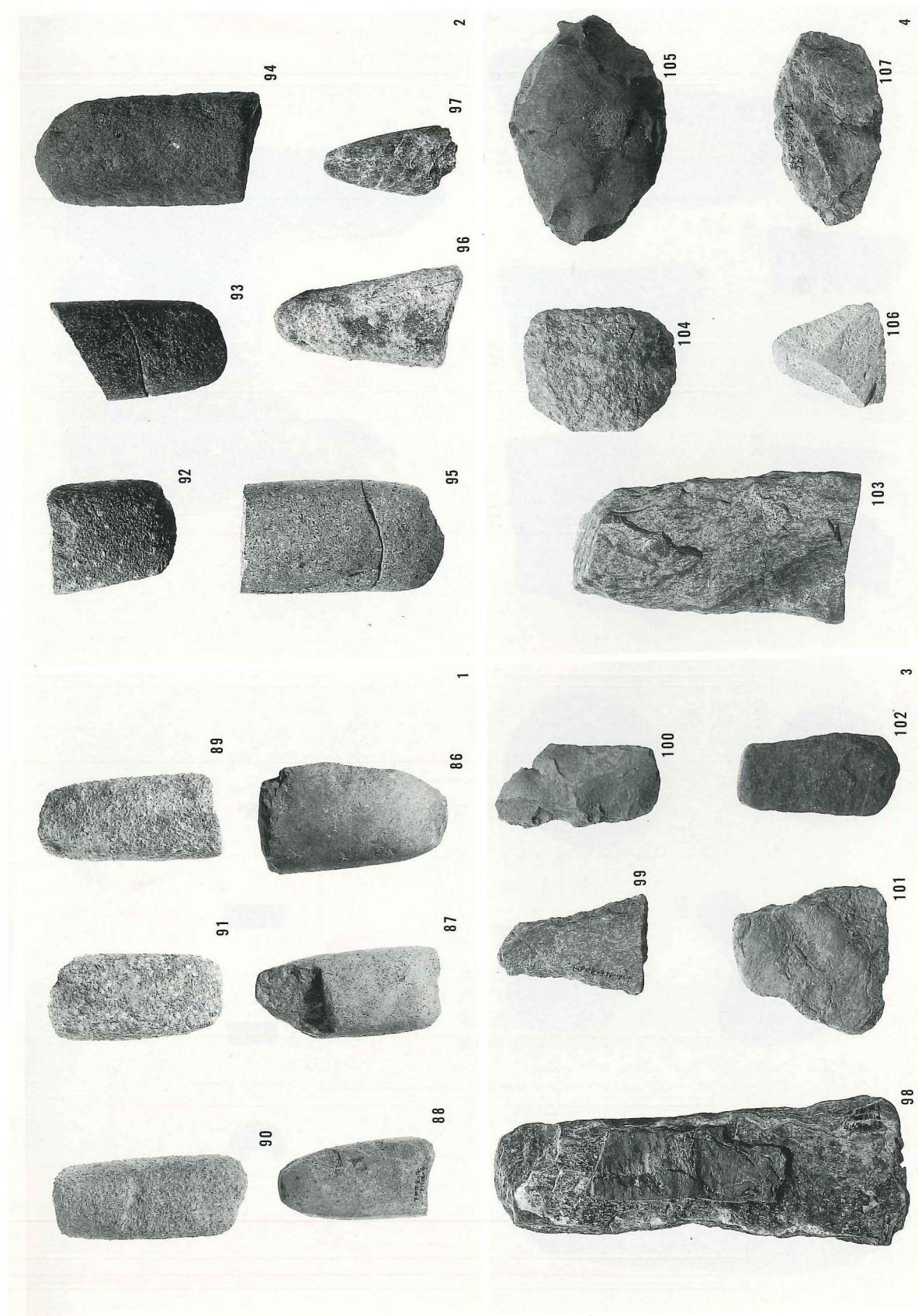
土壙、住居跡出土土器、鋤先共伴土器、須恵器



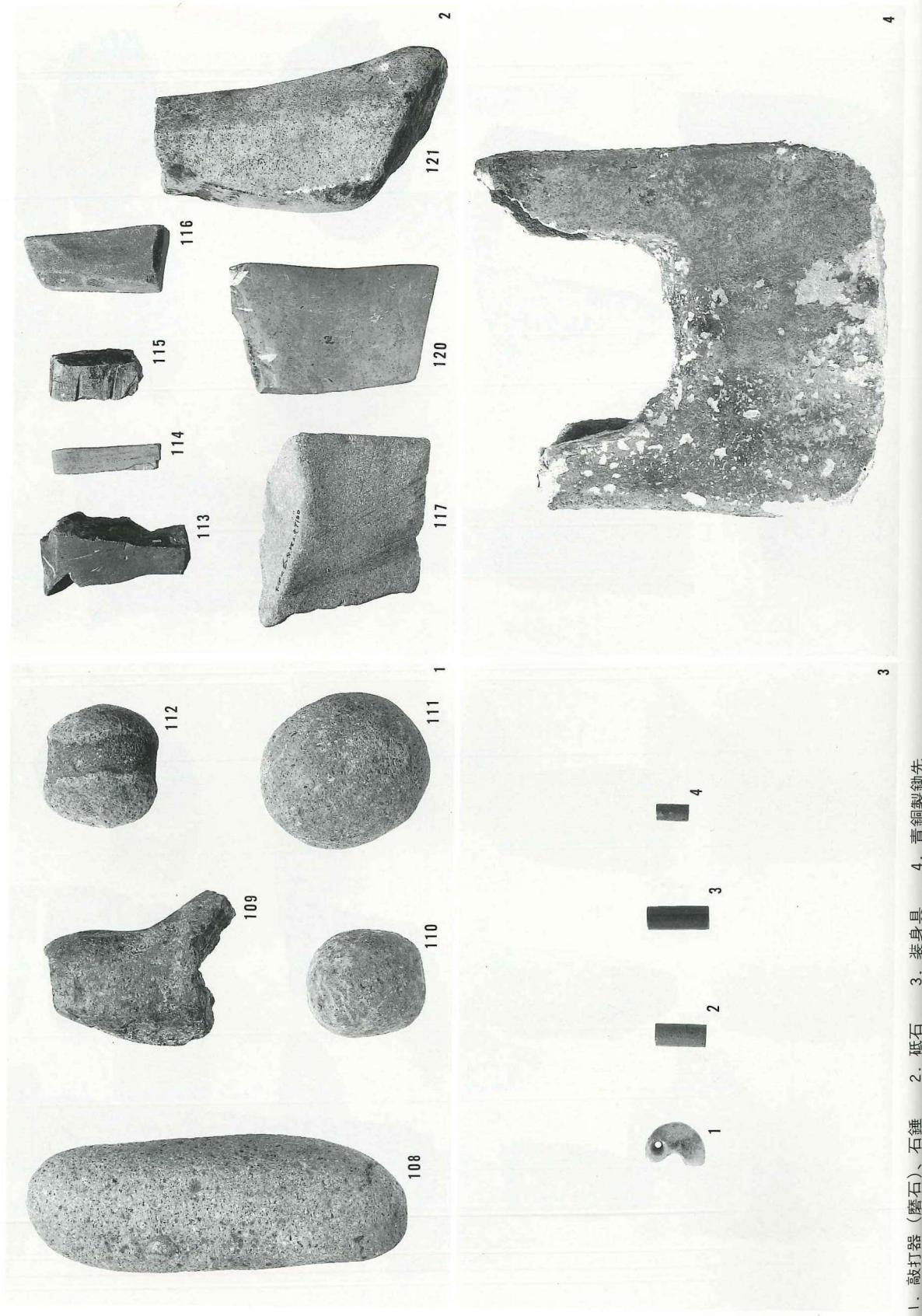
1. 石鎌、石匙 2. 石戈、石剣、石槍 3. 紡錘車、石槍 4. 石庖丁

図版 20





図版 22



下伊田遺跡群

田川市文化財調査報告書
第 4 集

昭和63年3月31日

発行 田川市教育委員会
田川市中央町1番1号
印刷 青柳工業株式会社
福岡市中央区渡辺通2丁目9の31

正 誤 表

頁	行	誤	正
3	4	玄海灘	玄界灘
5	21	床面徑	底面徑
9	26	大形石庵丁	大型石庵丁
11	7	出土は少ない――	10号住居跡を切るを加える。
19	2	一段低くなり、	一段低くなる。
37	5	甕の大半	甕の大半
39	3	南北口	口を取る
41	5	磨き	ミガキ
43	3	――短かく外反する甕口縁片	口縁が短かく外反する甕
45	7	小形の甕片	片を取る
	9	1部	一部
	21	1部	一部
57	8	(図版13、	(図版14、
61	2	甕口縁片	鉢口縁片
87	26	有基式で――	基部はを加える
89	21	4点	5点
103	22	研磨	使用
	27	下端を欠く	左端を欠く
105	2	下端を	右端を
108	25	太宰府	大宰府
109	11	タイプが強い	タイプが多い
	26	二列目	二例目
図版21	1	磨製石器	磨製石斧

